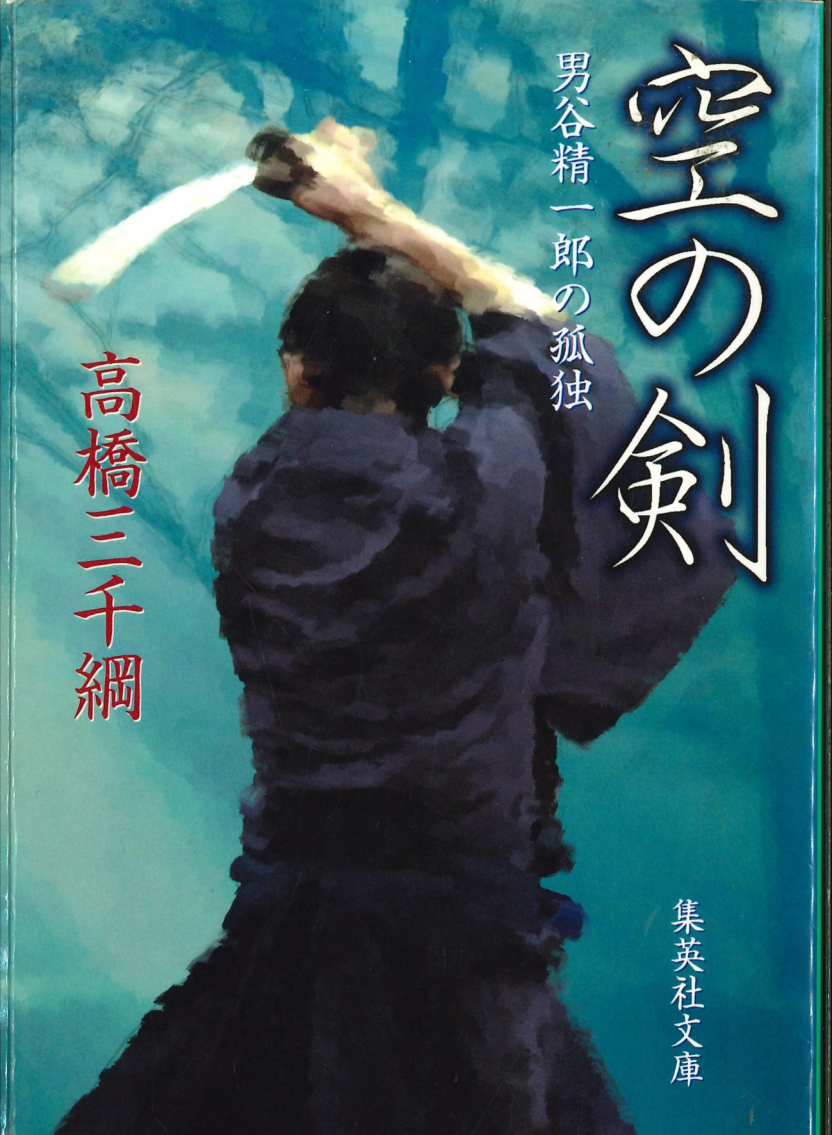
空の剣

男谷精一郎の孤独



高橋三千綱

集英社文庫

高橋三千綱
たかはし・みちつな

1948年１月大阪府生まれ。サンフランシスコ州立大学、早稲田大学中退。74年「退屈しのぎ」で第17回群像新人賞、78年「九月の空」で第79回芥川賞を受賞。青春小説や時代小説、またゴルフに関する著作も多数ある。著書に『お江戸の用心棒』『明日のブルドッグ』他。

カバーデザイン／諏訪部博之

空の剣

男谷精一郎の孤独

高橋三千綱

集英社文庫

高橋三千綱 た16 8 空の剣 男谷精一郎の孤独

集英社文庫

9784087462357

1920193008197

ISBN978-4-08-746235-7
C0193 ¥819E

定価 本体819円＋税

解説／細谷正充

文化十年、春。鬼の住み処と謳われた平山子龍の「平原草廬」が閉鎖された。子龍から破門を言い渡され、自暴自棄になりかけた男谷精一郎は、兄弟子の下斗米秀之進に諭され、武者修行の旅に出る。目指すは実母の里・秩父だが、武芸には秀でても世間にうとい精一郎の行く手には、幾多の試練が待ち受けていた——。直心影流十三代目当主。剣聖と称された男の幻の青春を描いた痛快時代小説。

集英社文庫 高橋三千綱 作品

少年期「九月の空」その後
霊感淑女
空の剣 男谷精一郎の孤独

た-16-8

空の剣
男谷精一郎の孤独

高橋三千綱

集英社文庫

空の剣
男谷精一郎の孤独
高橋三千綱
集英社文庫

空の剣
男谷精一郎の孤独

高橋三千綱

集英社文庫

序

辞世の句

うけゑたる心のかゝみ影きよく
けふ大空にかへるうれしさ

「幕末に、剣術の達人といわれる人は多く輩出したが、剣聖と呼べるのは男谷精一郎(おたにせいいちろう)ただ一人である」

剣豪、剣客と呼ばれる人物の評伝を、私は中学生の頃から好んでいた。小説も多く読んだ。ただ、自分が剣道をやりだしたのは、名剣士に感化されたからではなかった。

小学六年生も終りに近いある日、杉並区内を歩いていて、一つの掲示板に目をとめた私は、区報の傍の絵を見て、雷光に打たれたような神妙な衝撃を受けた。

そこには防具をつけて竹刀(しない)を振るう二人の剣士が描かれており、何月何日に剣道大会が開催されるので是非見学に来られたし、とあった。

絵はあまり上手とはいえず、ポスターも半ば取れかかって風にそよいでいて、何かしら侘(わび)しい風情(ふぜい)ではあったが、ある感銘を一瞬にして受けた私は、その掲示板の前から立ち去ることが出来ず、全身に痺(しび)れを感じたまま佇(たたず)んでいた。

その感動は一口にいえば、剣を持って戦う者たちへの強烈な郷愁だった。

侍の世界は映画の中だけのものであったし、剣道などとっくに失くなっているものだと思い込んでいた私は、かたくなに剣の道を守り、地味ながらひっそりと精進している

人たちがいるということを知ってたまらない気持になったのである。

そのたまらない気持には切迫感が伴っており、どうあってもこの世界に飛び込まなければならない、といった使命感を、子供ながら勝手に抱いてしまったのだった。

中学生になって勇躍剣道部に入った私は、しかし言いようのない失望感を味わうことになった。

ある種の緊張感と神聖さを求めていた私に突きつけられたのは、先輩への礼儀と規則の順守と形どおりの稽古への参加命令であった。

友愛と剣への精進に憧れていた私は、急に自分が古びた茶だんすになってしまったように感じ、部内ではいつも他人に気を遣って、びくびくしなければならなくなった。

ある日の稽古で、私は右足に激痛を感じ、とても構えていられなくなって先輩に少し休ませてほしいと申し入れた。だが、先輩は休ませてはくれず、数十秒後に、十二歳だった私は痛みに耐えきれず失神した。

保健室に運び込まれた私は、そこで初めて右足の裏に五センチもある釘を刺して稽古をしていたことを知らされた。治療をしてくれた保健担当の女性は、そのあと気分を悪くして休んでしまった。だが、先輩は私にあやまることすらしなかった。それどころか「失神するなんて根性のない奴だ」と部員に喋ったという。

剣をする人たちの心が、皆必ずしも澄んではいないことを、このとき私は知った。

しかし、剣道は八年間続けた。段は三段までしか授与されなかったが、警察や町道場にも通って稽古をし、真剣をとっての居合い抜きにも励み、段も受けた。道場でことに楽しかったのは剣舞の練習だった。残念ながらアメリカ留学が長引き、剣道を断念することになってしまったが、物語の中の剣士と出会うことは、なくなることはなかった。サンフランシスコの空の下で読む剣豪伝は私を江戸の時代に運んでくれたばかりか、大男のアメリカ人たちに混ってともすれば卑屈になりそうになる私に勇気を与えてくれたものだった。面白いことに、ときには自分がアメリカ側の通訳になって、咸臨丸でやってきたコチコチの幕臣と応対する場面まで想像することもあった。

日本に戻ってきて、一時読書から離れることになったが、三十四歳で胃を切って二ヶ月間入院した頃から剣術物をまた読むようになった。時代小説を書いていた父が平成元年に他界してからは、父の書斎に残された資料や古武道書の類にも目を向けるようになった。

ありとあらゆる剣豪が私の目の前を通り過ぎていった。

香取神道流の飯篠伊賀守家直、陰流の愛洲移香斎、新当流の塚原卜伝、新陰流の上泉伊勢守信綱。

みな剣の道の達人であり有名人であったが、私には神話の世界の人たちにも思えたものだった。小説にしろ評伝にしろ、書き手の文章がみんないかめしく、威厳を持って書

かなくてはうまく表現できないといった堅苦しさを感じることもあった。

私は寛政年間以降に生まれた幕末の剣士に、いつしか興味を持つようになった。時折彼等に、生身の人間らしさを見出すことがあったからだ。

中西忠太、戸賀崎熊太郎、岡田十松、秋山要助、千葉周作、桃井春蔵、斎藤弥九郎、白井亨、高柳又四郎、大石進、島田虎之助、伊庭八郎、鈴木大学、海保帆平、沖田総司、山岡鉄舟、等の剣客が、時には眉間に皺を寄せて、時にはとっくりをぶら下げて、時には真剣を抜いて私の前に現われ、おれにはこんな凄い話があった、とひとくさり喋って立ち去っていくのであった。

そうした全員が、「日本一」と誉めそやされてもよいような剣客の中で、私の脳裏に二人の人物の名が残った。

中村一心斎と男谷精一郎である。

二人に共通しているのは、残されているエピソードが極めて少ないことであった。だから、どの作家、評伝家が書いても同じ話がくり返し出てくることになる。

中村一心斎については、肥前出身であることと、あらゆる修業を積んだあと富士山に籠もり、ある夜霊夢を見て不二心流を開設したということと、七十歳を過ぎて水戸の徳川斉昭の前で御前試合をしたということくらいしか残っていない。このときの試合相手は海保帆平だとも、水戸藩士十五人が相手だったともいう。『日本剣道史』を書いた山田次朗吉は、この中村一心斎が日本一の剣客だったと語っている。

だが彼の得体の知れなさは一流で、闇から闇へと漂っている様子がある。中村一心斎の名前は、余程の時代物通でないと知らないはずだ。その正体不明なところが気に入って、私は先年、中村一心斎を主人公にした小説を上梓した。小説の中で、この人の名前が一番初めに登場したのが中里介山の『大菩薩峠』で、机竜之助と宇津木文之丞が御岳神社で試合をした際の審判役を務めている。もっとも、その後、中村一心斎の名前を小説中に見出すことはなかった。

その中里介山が、『日本武術神妙記』という本の中で、男谷精一郎について説明している。

「近代の剣客では講武所の男谷下総守信友が最も評判がよい、この人は直心影で人格も頭脳もよくその弟子のうちから諸大名家の師範役になったもの二十余人を出している、……品行が正しく、文事に通じ絵を巧みにして綽々たる余裕を持っていた、勝海舟とは親類筋に当っていて、勝を玉成するのに大いに与って力があったという、初め百俵高の小十人から進んで……禄高三千石までに出世したのであるが、平時にあって、これ程の出頭を示す人だから容易ならぬ達人であったことは間違いなく……」

この記述は最も平均した書き方で、もう少し詳しいものになると、男谷は他流試合を奨励し、どのような者が相手でも、自ら立ち合い、三本に一本は相手に必ず譲り、それ

が逆転されることはなかったということが書き加えられる。つまり負けたことがなかったのだ。

加えて必ず出るのが九州一を自負する島田虎之助との一戦である。道場破りに来た島田が、初めに男谷に軽い当たりの籠手を一本取られ、あれが一本とは軽すぎる、と猛然と怒って強烈な胴を喰らわせる。そして三本目になると、また、なんとも頼りない面打ちを取られる。

なんだ大したことないやつだ、何が江戸一番だ、と慢心して井上伝兵衛のところに行くと、コロリとやられる。そこで島田は井上に弟子入りを願う。すると井上は「拙者などよりもっと強い人がこの江戸にはいる。男谷先生だ」という。島田が「もう立ち合ってきた。大したことなかった」と答えると、井上はニヤリと笑って「紹介状を書くからもう一度訪ねてみろ」という。

再び男谷道場に行って男谷と立ち合った島田は、小柄な男谷になすすべなく羽目板まで追いつめられ、ついに苦しくなって床に這いつくばる。そして、その場で弟子入りをし、一年後に見事皆伝を得る。

そういう展開が評伝の中に紹介される。この時の男谷の相手は、書き手によっては島田ではなく大石進のこともある。

この前文の冒頭に戻ろう。男谷精一郎に関するいくつかの評伝をそれとなく私は読んでいて、ある時、ふと気がつくと、どの人も私が冒頭に書いた二行の言葉に集約されることしかいっていないのが分ったのだ。

温厚であり、家人を叱ったことがなく、剣、槍、弓、砲術の達人であり、大変な読書家で兵法のみならず蘭学にも通じ、日本の将来を予見しつつ、元治元年（一八六四）、満六十六歳で大往生したという人なのだ。

だが、それ程の人なのに、男谷精一郎を主人公にした小説はほとんどなかった。あっても評伝とも小説ともつかない短編が主で、出てくる逸話は前述したものの他には、勝小吉の『夢酔独言』に喧嘩の相棒としての面影が描かれている程度だった。

つまり、幕臣であることと、それ故自己宣伝をすることもなかったので斬ったハッタのエピソードが残されていないこと、それに非の打ちどころのない性格と生活ぶりを知れば、誰だって書き進めるのをためらうことになる。優等生の人生など、書く方も読まされる方も退屈極まりないものに決っている。

流泉小史という人が昭和四年発刊の『文藝春秋』に書いたものに、森鷗外が男谷精一郎のことに興味を持ち、古本屋巡りをしながら資料を集めていたという一文がある。流泉小史の本名は小原敏丸といって明治二十二年に現在の北上市で生まれ、昭和十五年に五十一歳で亡くなっている。この人は新選組の研究者でもあって著書も残している。その流泉小史が古本屋を回っているときにいつしか森鷗外と顔見知りになり、その内話

すようになって、鷗外の口から「男谷精一郎」の名を聞くようになったというエピソードを披露している。

その時鷗外は、友人の家にあった男谷静斎（精一郎の号の一つ）自画の花鳥の一軸を見たことから興味をひかれ、男谷のいう「読書撃剣」の四文字を知ってただの剣術遣いではないと知り、その人となりを調べようと思い立ったと流泉小史に語ったという。鷗外は、男谷を「斯道の神」だというようにも表現していたようだが、残念だが森鷗外の筆による、男谷精一郎を主人公にした小説はついに書かれることはなかった。私としては、せめて、森鷗外の集めた資料がどれくらいあったのかということだけでも知りたく思っている。しかし、流泉小史はそのことには答えていない。

「直木賞」にその名を残す直木三十五も男谷精一郎のことを精力的に調べていたことがあるという。子母澤寛の『全歴史エッセイ集』の二巻目、「幕末の群像」の中に書かれていることで、直木三十五は男谷家から下総守の愛刀を預ったというのである。

それは青江の恒次という刀で、預って間もなく直木三十五は病気が重くなり、東大病院に入院したが亡くなってしまった。だがこの刀のことはずっと気になっていたと見えて、昏睡の間に、「刀の金の四千両（ママ）まだ差し上げていない」と菊池寛に洩らし、それを聞いた菊池寛が、刀屋から貰ったものだと思い違いをして、「直木は男谷下総守の刀を買った金を刀屋に払わないのを苦にして死んだ」と何かに書いた。

それを読んだ男谷家がびっくりして菊池寛に連絡を取り、刀屋ではなかったことは分ったが、肝心の恒次は、今日なお何人の手にあるか分からないでいる、惜しいことをしたものだ、と子母澤寛は綴っている。

この刀のことは、数年前、大田区西嶺町にある男谷家を訪ねたときにも話題に出た。当時の男谷家には精一郎から数えて四代目にあたる精一氏がご存命で、直木三十五が刀を見に来たとき家は小石川にあったのだと話してくれた。

明治四十四年八月二十九日生まれの精一氏はその年八十四歳、心臓にペースメーカーを入れているのだとにこやかに話されていたが、その風貌はまことに情緒があり、温厚でかつ上品な風情をたたえておられた。私などは、さすがに剣聖と呼ばれたお人の血筋は違うな、と精一氏を前に身を竦ませていたが、その精一氏が一度だけ顔を曇らされたことがあった。

直木三十五の話が出たときだった。

「刀だけでなく、直木さんには男谷精一郎自身が書いた日誌や剣術に関する文書をほとんど全てお預けしたのです」

直木三十五が死んだのは昭和九年二月二十四日。当時精一さんは二十二歳だったが、直木三十五には直接会っておらず、お父さんの初太郎さんが直木との交渉に当っていたのだという。

だがそのお父上も直木が死んだ翌々年の十一月二十日に五十二歳の若さで亡くなり、その後も直木家からは精一郎の日誌やその他の資料が戻ることはなかったという。

「その内戦災があってみんな焼けてしまったのだと思います。うちにはかろうじてこれだけが残りました」

そういって精一さんが広げて見せてくれたのが、男谷精一郎が描いた絵だった。それは写真で見たものより、数十倍素晴らしかった。いや、比べることのできない本物の美しさがあった。悠然とあたりを眺める鵜の気高さと光に映える草花の表情に、真剣勝負を見るような緊密な引き合いがあった。

私はしばしの間陶然として百四十年前に描かれた、男谷精一郎自画の絵に眺め入っていた。

その折、精一郎が晩年の頃に用いた足袋と鎖の手袋も見せてもらった。それだけでなく、私は実際に足袋の裏を自分の足に当て、鎖の手袋には手を差し入れてみた。驚いたことに両方ともぴったりだったのだ。

私の足は二十五センチ、手は二十一センチと小さめで、背は小柄の方であったという男谷精一郎に、百数十年の時を越えて、魂の触れ合いを求めて受け容れられたような安らかな思いに浸ることができたのだった。

その後精一氏とまた話す機会があり、もう一度直木三十五が預っていったという青江

の恒次のことを訊いてみた。直木は男谷精一郎のことを「日本で一番強い剣豪だ」とことあるごとに語っていたというから、その刀に対する惚れ込み方も一様ではなかったと思われるのだ。

「実は直木さんには一本ではなく、刀を二本預けたんです。もう一本の刀の銘はシズサブロウといったと思うが、その鞘が青くとてもきれいだったのを覚えています」

少し調べてみたが、シズサブロウという刀匠のことは分からなかった。もしかしたら精一氏の思い違いかもしれない。ともあれ、お父上の初太郎さんは、直木三十五とどのような約束を交わしたのか詳らかではないが、刀を二振り彼に預けたのは確かだったようだ。

そして、直木三十五が亡くなったことを新聞で知り、「刀を返してもらおうとお宅に伺ったら」借金取りが大ぜい集っていてぶん捕り合戦みたいなことをやっており、そのすさまじさに圧倒されて、初太郎さんと精一氏はすごすごと小石川に戻ってきたのだという。二振りの男谷精一郎の刀は、それきり行方不明になった。

司馬遼太郎氏にも、男谷精一郎について触れている文章がある。『街道をゆく』の「本所深川散歩」の中で、「勝海舟と本所」の項があり、

「男谷彦四郎はどうもりっぱな人物だったらしい。その子で、やがて当主になる精一郎（一七九八〜一八六四）にいたっては文武両道に秀で、幕臣の鑑のようにいわれた。幕

末、幕府が官設の武道大学というべき講武所を設けると、精一郎は八万騎のなかからえらばれて頭取になり、従五位下下総守という大名なみに叙任され、西丸留守居格に班せられた。邸内に剣術道場をもち、『本所の男谷道場』といえば、格式の高さで聞えたものであった」

私は司馬文学の大ファンであり、司馬さんの博識には敬服していて、その考証で得た知識をさり気なく小説の中に溶かし込む筆力に憧れてもいる。だが、その司馬氏が男谷精一郎について記述したものが、これだけなのかと思うとやはりさみしい。司馬さんにとって、男谷はそれ程魅力的な人物ではなかったのか。

ともあれ、司馬氏の書かれた「本所の男谷道場」は現在は両国公園になっている。京葉道路と清澄通りが交差する西側になり、回向院の裏手、東側にあたる。この回向院には鼠小僧次郎吉の泥棒にしては恐ろしく立派な墓がある。男谷精一郎が生きていた頃には乞食がここに多く住んでいたという。ちなみに、鼠小僧が捕って小塚原で処刑されたのが天保三年（一八三二）八月で、精一郎は満三十四歳、当時亀沢町といわれていたこの屋敷に住んでいた。この前の年、精一郎は百俵高二人扶持から、二百俵高御書院御番に出世した。

この亀沢町の屋敷は、精一郎にとっては実父の従弟にあたる男谷彦四郎が住んでいたもので、彦四郎の養子となって一度狸穴に小道場を構えた後、ここに移り住んできた。

当時は五百坪程の広さであったという。

それは二十歳になったばかりの頃で、それまでは番場町の実父の屋敷にいた。現在の本所二丁目と東駒形二丁目が接するあたりで、三ツ目通りからは隅田川に向った西側に位置する。

私は何度かこのあたりを歩いたが、当然昔日の面影はない。亀沢町から番場町までは二キロ足らずでゆっくり歩いても三十分程だ。精一郎が出たあとも、この屋敷には実父の忠之丞と異母弟の忠次郎が住んでいた。

屋敷からまっすぐに大川（隅田川）に向かい、堤に立って対岸を眺めると、右手正面に駒形堂が望める。当時、駒形堂の石段下の川べりには釣り船や屋形船が係留されていて、渡し船もあった。左手一面には米を貯蔵する御蔵がおよそ六百メートルほども連なっていた。駒形堂は今とそれほど変わらないところに建っていたようだが、現在は横手から駒形橋が延びている。

大川を隔てて眺める景観は現在では想像もつかないが、板葺きの屋根に混って黒い瓦や藁葺きの家が点在する景色は、高い空を背景にして、こぢんまりと黒い影を落していたのだと思う。御蔵の白壁と鮮やかなコントラストを映し出していたに違いない。

精一郎は新太郎といわれていた幼少期には、このあたりの堤に出て、よく父親と釣りをしていたらしい。二十歳前に、勝小吉と共に御蔵で働く小者や鳶職の者数十名を相

手に喧嘩をした、俗にいう「蔵前の八幡様」は、堤に立って駒形堂を望む左手、黒舩町のすぐ裏手にある。当時は二千二百余坪もあったという八幡様は現在では蔵前神社となって敷地もわずか百五十坪足らずで、氏子の数も六十人程になってしまった。

この境内で故意に喧嘩をふっかけた精一郎ら四人は、あまりの多勢に驚いて、ここから北へ向って必死で逃げた。だが、並木町の「砂場」蕎麦の前で鳶口を持った者三十名に囲まれ、刀を抜いて応戦するはめになったという。

これは勝小吉が語っていることで、蔵前神社から現在営業している藪蕎麦のあたりまで、袴の裾を蹴たてて必死の形相で走っていく若き日の男谷精一郎の姿を想像するのは楽しい。彼は細面色白で、貴公子のようであったという。

この物語は、男谷新太郎が平山子龍（行蔵）の弟子となって平山塾、その名も高き「兵原草廬」に住み込み、そこで元服式を迎え、精一郎という名を授かって数年のちの、文化十年（一八一三）初春から始められる。時代小説では全てかぞえ年で年齢を数えるが、私自身戦後生まれでかぞえ年をいわれてもピンとこないので、満にしてある。文化十年は精一郎、十五歳の年である。

この平山塾は凄絶の一語で、平山子龍という人は一口にいうと、二百年遅く生まれてしまった武人である。武芸十八般に長け、塾生には鍛錬と勉学を厳しく教えつけた。この塾で住み込み弟子となって半年ももつ者は稀だといわれたという。彼は弟子から月謝

その他、一切の献金を受けなかった。

精一郎がこの平山塾に何年いたか不明だが、研究家のいう一年足らず、という臆測は当っていない。それだけの短い期間にしては、精一郎が平山子龍から受けた影響があまりに大き過ぎるからである。

先に名をあげた考証家の流泉小史の手元には、細井萱次郎の名のある『孫子解』という平山所講のいわゆる教科書が保存されていて、そこには文化八年（一八一一）初冬の日付が記されているそうである。彼はのち細井一風軒知機と名のり、『俗つれづれ』という本を著わしているが、文中に、彼が平山塾に入門したのは男谷精一郎のあとだという記述があり、男谷に色々とやさしくしてもらえなかったら、到底あの塾にはいられなかったと述懐している。つまり、文化八年より以前に、男谷少年は平山塾にいたことになる。平山塾の閉鎖は文化十年春である。私は男谷少年は足かけ四年、この塾にいたのではないかと考えている。

彼が生涯水ごり、荒縄磨きではじまるすさまじい早朝鍛錬を怠たらず、また武士道をまっとうするその思想を保ち得たのは、平山子龍の強烈な感化があったからだと信ずるからである。

後年、男谷精一郎が講武所で定めたといわれている三尺八寸は、師がつねに傍から離さなかった関兼永の名刀を思い描いてのことだと思われるのも、その理由の一つである。

序 3
第一章 破門 24
第二章 孤剣 58
第三章 無頼 108
第四章 旅空 149
第五章 盗賊 204
第六章 撃剣 237
第七章 報復 285
第八章 郷愁 322
第九章 孤立 351
第十章 燭光 377
第十一章 夢幻 429
第十二章 勇猛 467
解説・細谷正充 528

空の剣

男谷精一郎の孤独

第一章 破門

一

素振りを終えて、精一郎は息を整えた。胸一杯に吸い込んだ冷気を、静かに、ゆっくりと吐き出す。数回繰り返すと腰の中心部にぽっかりと拳大の穴が開き、そこから胸に向って空洞ができて胸までつながったように感じられる。

すると精一郎は、鳥になった自分を思い描くことができるのだ。毎朝明け七ツ（午前四時）に起きて冷水を浴び、自分の腕より太い木刀で一千回の素振りをするのは苦しかったが、空を舞う鳥を自分の中に感じるようになってからは、早朝の鍛錬を終えるのが楽しみになった。

息が鎮まると精一郎は腰の手拭いを抜いて汗を拭った。足元は踏み荒らした霜柱でぬかるむ程だったが、冷たさは少しも感じない。

汗を拭い終えると、手拭いの端をもって冷気を掻き回すように振り回した。幼い頃、菖蒲の葉を地面に打ちつけて遊んでいたことを思い出した。

その手拭いは、正月に真新しい下帯と共に実家から届けられたものである。十数名いる内弟子の多くは正月だけは家に帰ったが、精一郎は戻らなかった。

家を出るとき、どんなことがあっても三年間は家に戻るな、と父の忠之丞にいわれた。いつでもやさしく、慈愛をたくさん含んだ眼差しで、新太郎と呼ばれていた自分を見つめてくれていた父だったが、そのときだけは獲物を捕えた大鷹のように厳しい目をしていた。

父にいわれるまでもなく、四谷の地獄道場といわれていた兵原草廬に内弟子として住み込むのだと決めたときから、修業を全うするまで実家には顔を出すまいと精一郎は自分の胸に誓ったのだ。

その三年はとうに過ぎ、桜の咲く頃には四年を迎える。だがまだ父に向って誇れるような兵学と剣術を習得しているとはとても思えなかった。自分の未熟さは、精一郎自身が一番よく知っていた。

今朝も起きてすぐ、荒縄で身体を摩擦した。

庭に出てきたときはまだ暗く、風に追われた雲間から覗いた星が眩しい程だったが、今は墨汁を薄めて流した位に空には色が滲み出している。

上空は風が強いらしく、鼠色の雲が南西の方にどんどん飛ばされていく。雲が消えた空には、まだ星が映っていて、頼りなげな輝きを見せている。

——あの空の向こうを歩いてみたい。

いつだったか夕暮の空を見上げながら、一つ年下の細井萱次郎にそういったことがあった。すると庭に出ていた兄弟子の妻木弁之進が偶然精一郎の呟きを耳にして、笑いながら、おい、男谷と呼んだ。

「空を歩くのはおまえが死んだときだ」

すでに少し酒が入っていたらしく、妻木は上機嫌だったが、精一郎は兄弟子に合わせて笑いとばすことができなかった。自分が思わず口にした、空を歩く、という言葉は、祈りから出た思いであるような気がしたのだった。

木刀を左手に下げて庭に佇んでいる精一郎に、上空から吹き下ろしてきた寒風がぶつかってきた。上気した肌に、それは心地良かった。あてがはずれた寒風は、急に意欲を失くしたように、枯木を越えて隣の伊賀衆の住む長屋に流れていった。

精一郎は長屋の屋根のはるか彼方に重く垂れている、黒い雲に目を向けていた。下方では、はじめに青い一筋の光が走り、雲を別な色に染め上げようと青い幅を徐々に広げ出した。

ところが鉛色に変色した雲は弄ぶかのように、青い光の帯を踏みつけだした。青い

空の幅は再び狭まり、いまにも地中に埋められそうになった。

東の空が一瞬、真っ黒く塗り潰された。中から、数羽の鳥の影が引きちぎられたように滲み出てきた。

そのとき、不意に朱色に輝く光が射した。それはみるみる内に脹れ上がり、巨大な陽光となって黒い雲を押し上げていく。光の中から鳥の編隊が現われ、清流の中を泳ぐ小魚のように、水色の空を気持良さそうに飛び回り出した。

鳥たちに目を奪われたほんのわずかの間に、朝日はその丸く燃えた姿を、遠くの家々の屋根の上に現わしていた。日の出だ。

夜と朝日の壮絶なまでに美しい戦いに目を奪われて、精一郎は庭に立ち尽していた。

「精一郎」

そう呼ばれるまで、人が庭に入ってきたことに気付かなかった。振り返ると、小袖の上に羽織を着た下斗米秀之進の姿があった。その広い肩幅が霜柱を踏みしめて近づいてきた。

「素振りは終えたのか」

「はい」

「他の者はどうした」

下斗米の強い目が上から精一郎を射してきた。いつの間にか、空には一面に光が広が

り、軒先からは雀の鳴き声も聞こえてくる。

「そうか、元旦に家に帰ったきりまだ戻って来ない者もいるのだな」

精一郎が返事ができずにいると、下斗米は助け舟を出すように、自ら答えて頷いた。

「妻木や松村はどうした？」

「妻木さんは昨夜は出かけたきりお戻りになりませんでした。松村さんはまだお休みだと思います」

「吉里や小田もおらんのだろう。兵原草廬の四天王といわれた連中が何と情ないことだ」

下斗米は玄関を振り返り、声を荒らげた。その口の端が歪んで窪みを作った。

「萱次郎の様子はどうだ？　まだ熱があるのか」

「そのようです」

「先生は何といわれておる？」

「麻疹かもしれないので家に帰って養生するようにといわれたのですが、細井が聞きません」

「遅麻疹か。そいつはやっかいだぞ」

怒りの浮いていた下斗米の目に、十歳年下の弟弟子を気づかう思いやりが浮いた。

「今朝はどうされたのですか」

何か特別な御用事ですか、という後に続く言葉を精一郎は飲み込んだのだが、下斗米は精一郎の思いを理解したようだった。

「うむ。チト気になることがあってな」

指先で顎を引っ掻いて眉間に皺を寄せた。下斗米秀之進は南部藩の藩士で、その上屋敷は外桜田にあった。そこからだと四谷北伊賀町の兵原草廬までは四半刻もあれば来られるが、近頃、下斗米は理由があって三田寺町の中屋敷に移ったという話も聞いている。すると夜明け前に屋敷を出てきたことになる。

もう一つ分からないのは、下斗米はここでは通いの弟子に対しては中山門蔵と名乗っていることだ。平山子龍の門弟だと大声で名乗れない風潮が、南部藩内にあるのかもしれないと精一郎は漠然と思っているが、あえて尋ねるようなことはしなかった。

「どれ、萱次郎を見舞ってやるとするか。精一郎も足を洗って部屋に戻れ」

下斗米はそういって広い背中を揺すって玄関に向った。精一郎は井戸端で水を汲み、泥のついた足を洗った。そうしながら、こんなに朝早く、下斗米がやってきた理由を考えていた。

下斗米は兵原草廬の師範代首座にある人で、平山子龍に代って講義をし、剣術を教えることが多い。先生不在の今日は当然下斗米が演武場に立つことになるのだろう。だが、下斗米が朝早く来た目的は別にあるに違いなかった。

細井萱次郎が熱を出したのは二日前で、その頃から下斗米の様子がおかしくなった。萱次郎は下斗米を兄のように慕っていて、下斗米も一本気で何事にも妥協を許さず、ムキになって突進していく萱次郎のことが心配らしく、何かと細かい助言を与えている。

精一郎は二人の仲を時折羨しいと思うことがあった。兄弟子たちに自分がうとまれているとは感じてはいないが、ことさら親しみをこめて接してきてくれる人もまたいなかった。人によっては、初対面のときから敵意を潜めていることもあった。その理由を思い浮かべるたびに、精一郎は言いしれぬ孤独感を抱いて凍りついてしまうのだった。

「精一郎、馬場十左衛門の姿が見えぬが、どこにいるか存じておるか」

勝手口から道場に入りかけた精一郎は、そこでまた下斗米に声をかけられた。朝の光に横顔をあてられた下斗米の目玉は、仁王様のように脹れ上って見える。

「今朝早く、出ていかれました」

精一郎は落ちついて答えた。下斗米の不安が分ったように思えた。

「今朝？　何時頃だ？」

「八ツ半頃でした」

「おぬしは起きていたのか」

「気配で起きました」

「まっ暗な中でよく馬場だと分ったな」

「あの方は臭いがありますから」

馬場は髷を結うとき、女がつける鬢付油を使うようで、夜になると、兵聖閣にいやな臭いがこもる。ここでは昼は講義が行われるが、夜は内弟子たちの寝間になるのだ。

「どこへ行ったか分かるか」

「分かりませんが、もうここには戻らないと思います」

「何故そう思う」

下斗米の顔が庇の陰に入ってきた。すると両目の白い部分が重く沈んで、喰いつくように精一郎を睨みつけてきた。

「荷物を全て持って出ていかれましたから」

「全て？　つまり、逃げたということだな」

「そうです」

「それが分っていて、おぬしはどうして馬場をとがめなかったのだ」

「それは……」

精一郎は口ごもった。詰問されているのは分ったが、それは筋違いではないかという思いがあった。馬場十左衛門は昨年の暮近くになって弟子入りしてきた男で、まだひと月も経っていなかった。先生から他の弟子への紹介もなく、兄弟子たちも何ともいわないので、その男のことは気にかけずにいた。年齢も精一郎より大分上なので話をするこ

ともなかった。

「ま、馬場に限らず、夜逃げする奴はたくさんいるからな」

黙り込んでしまった精一郎に対して、下斗米は語調を変えて溜息をつき、土間に入って水瓶から柄杓で水をすくって飲んだ。

下斗米のいう通りで、仮に月に五人、内弟子として入門してくる者があれば、月の内に三人は姿を消した。一年経てば残っているのは数名という有り様だった。通いの弟子ともなれば、道場内に所狭しと並べられた鉄砲や槍、長刀などを見ただけで、その異様な雰囲気に圧倒されて怖じ気づく者もいるし、それに耐えた者でも、平山塾の厳しい規則を聞いて入門をやめてしまうことがある。規則の中には、弁当にお菜や煮物のような贅沢品を持ってきてはいけないという条項もあった。

「馬場という男を、どう思う」

下斗米は濡れた口元を手の甲で拭った。

「どうとも思いませんでした」

「何か気が付いたところはないか」

「剣術は不得手のようでしたが、講義は熱心に聴いておられました」

「あやつに何か尋ねられたことはあるか」

「一度だけございます」

「何だ？」

「一貫目玉大砲のことです。他の一貫目玉大砲と比べて口径も小さく、砲身も一尺近く短いが、これでどれくらい飛ぶのかと訊かれました」

「何と答えたのだ」

「砲身の角度、火薬の量によって異なると申しましたら、三町はいくかと訊かれましたので、それくらいはいくでしょうとお答えしておきました」

うん、と下斗米は頷き、暗い土間の隅に目を据えた。顔を上げたとき、精一郎の全身に緊張が走った。下斗米の目に明らかにそれと分かる殺気が走っていた。

「あいつは幕府のイヌだ。御書院番頭の部屋住みが殊勝にも平山塾に入ってきおって、兵学を学ぶふりをしてここを探っておったのだ。先生は構うなといわれたが、おれは最初からあいつのツラが気に喰わなかったのだ。くそ、何故昨日の内にあやつを捕えておかなかったのか」

下斗米は握りしめた拳を震わせて歯を食いしばった。精一郎は何もいえずに立ち竦んでいた。幕府のイヌという意味が精一郎には理解できず、それはこの国を外敵から守ろうとする先生の意志を、よく思わない人たちがいるということなのだろうか、とぼんやりと考えていた。

雨戸を開ける音がしたので、精一郎は下斗米に頭を下げて奥に入った。下斗米の身体

中からは青い炎が立って見えた。

二

その日、平山子龍は夕刻になって戻ってきた。五尺三寸（百六十センチ）に満たない身体だったが、武者草鞋を素足に履き、地面に接するような長刀をさして、八角の鉄棒をついて歩く姿は鍾馗様のようだった。鉄棒が地面につきたてられるたびに地響きが起き、町の者たちは恐れ入ったような、あきれ返ったような目で平山子龍を振り返るのだ。精一郎も何度か先生の伴をして町に出たが、慣れてからはともかく、初めの内はやはり恥しくて仕方がなかった。

その精一郎も、今では肘の出た木綿の袷に裾の短い黒袴をつけ、朴歯の下駄を履く兄弟子たちに従って、何喰わぬ顔で町を歩いている。

「昨夜、先生はどこにお泊まりになったのだろう」

平山子龍はめったに外泊はしない。今は小普請という無役で、幕府からもらっている禄も三十俵二人扶持というわずかなものだが、禄を与えられている以上、組頭に無断で組屋敷以外の所で泊まることはできない。

弟子たちは先生不在と知って、講義のあい間にそれぞれの想像を働かせて囁き合った。

小普請支配頭に呼び出されて、その後夏目信平の屋敷に行ったのではないか。あるいは、学問の総取締役、林大学頭の所へ先年上書した「海防建白書」をさらに吟味されるよう談判に行ったのではないか、などと色々という者もあったが、

「越中守様の所からおつかいの者があったようだ」

という者があって、一同、それだと頷いた。陸奥白河十一万石の藩主であった松平定信は、昨年の文化九年（一八一二）四月にとうとう隠居してしまい、楽翁と称して悠々自適の生活を送るようになった。

平山子龍にとっては、幕府内にまだ隠然たる勢力を持っていた最大の理解者を失うことになったのだ。それ以降、平山塾の塾生は目に見えて減っていった。

その日、平山子龍は自著『唐宋臆断』の三巻目を一刻（二時間）程講義して、自室に入った。下斗米秀之進と城から下ってきた小田武右衛門が子龍の部屋に呼ばれていったが、二人とも夜がふけても部屋から出てこなかった。

「何かよくないことが先生の身に起ったんではないかな。心配だ」

細井萱次郎が微熱で潤んだ目を精一郎に向けてしきりに心配していたが、精一郎は灯りを引き寄せて、黙って『兵経』を読んでいた。それも先生の書かれたものだった。

翌日も平山子龍は朝早い内から、松村伊三郎と大釜紋三郎の二人を伴って出掛けていった。塾生への剣術指南は妻木弁之進と吉里藤右衛門が担当し、兵聖閣での講義は、下

斗米秀之進が当った。

吉里藤右衛門は平山譲りの大島流槍術の名人で、六尺の長身からくり出す槍の凄みは、戦国の武将を思わせた。吉里は竹内流柔術も先生に代って指導をする。普段はのんびりしていてやさしい男なのだが、なまける者には容赦をしない。一ヶ月足らずで平山塾を逃げ出した馬場十左衛門という男は、なんのかんのと理由をつけて稽古をさぼっていたのだが、正月三日の稽古始めの日に、吉里から指名を受け、羽目板まで飛ばされた上に首を締められて気を失った。馬場がいなくなったのは、もしかしたらそのせいではないのかと精一郎はひそかに思っていた。吉里の強さには、下斗米も一目置いている。

その日、午後から来客が三人あった。

誰かを訪ねてきたのではなく、一手指南願いたいと申し入れてきたのだった。

丁度昼食のあとで、塾生は思い思いにくつろいでいた。昼食後、一刻程、塾生はそれぞれ横になったり、好きな本を読んだりする時間が与えられる。吉里は塾生相手にひと汗かいたあと、四谷大番町の屋敷に戻っていた。

「お頼み申す」

と玄関口で大声を出す者がいて、教場の一番近いところで書物を広げていた細井萱次郎がすぐに立ち上って応じた。精一郎は『兵経』の二巻目に目を通していたのだが、応対に出た萱次郎に向って声を荒らげる者がいたので軽い気持で立ち上った。相手が年若い軽輩だと見ると、やたらと大声を出して挑発する侍がいるのを知っていた。

藩主の参勤交代に付いて江戸にやってきた地方の藩士の中には、江戸に滞在するのが半年とか一年とかいう気安さも手伝って、江戸見物の傍ら、文化の時代の戦国武者で名高い平山子龍の武術、実用流の地獄道場をひと目見てやろうとやってくる者もいる。

「兵原草廬を見学に参った者でござる。ひとつご案内を」

と西国訛りの侍から臆面もなくいわれたこともあった。

「いや、それはですね……」

玄関の式台に佇んだ精一郎も、そのときばかりは困惑した。

兵原草廬とは道場のある建物全体を指す言葉なのだが、それは平山子龍が塾生のみを相手に兵学と儒学を講義する兵聖閣と、武術を教える板敷の演武場に分かれていて、どちらも神聖な教場なのである。気安く、「ご案内を」といわれても困るのだ。兵原草廬の中には当然平山子龍の居室も含まれている。そのとき、細井萱次郎に続いて精一郎が玄関に立ったのは、またぞろ、おかしな連中がやってきて中を見せろと難癖をつけているのだろうと思ったからだ。

「先生のご高名を承り、是非一手御指南頂きたいと罷り越したのじゃ。紹介状のない者にはお目通りかなわんとは、何という言い草じゃ」

「ですから、今申し上げたようにそれは当道場の規則ですので……」

「ではここに書かれているものは何だ。おい矢島、読んでみろ」
精一郎が覗いたとき、真ん中に佇んで背を反り返らせている侍に促された、色黒の焦げた芋のような顔をした男が、おう、といって玄関脇に掛けられている札に目を向けた。
「他流試合、勝手次第。飛道具その外矢玉にても苦しからず」
「そうじゃ。矢でも鉄砲でも持って掛かってこいというからには余程の自信がある証拠じゃ。それをわしらの風体を見たとたん、紹介状を出せとは片腹痛い。紹介状持参の道場破りなど聞いたことがないわい。そんな連中は婦女子の腐ったような者と相場が決っておる。おぬしのような未熟者でも勝てるだろうて」
「おうよ。強そうな者には規則をたてに立ち合いを断り、へなちょこ侍だけを選んで試合を致しておれば、いやがおうでも連戦連勝、平山行蔵の名も上がることだろうて」
色黒の皮膚の中から青白く光る目を、顔を出したばかりの精一郎に向けて、芋に似た侍は居丈高に吠えた。平山行蔵というのは子龍の呼び名だったが、師の名を呼び捨てにされた精一郎は、さすがに身体が熱くなった。
「失礼ですが、どちらのご家中のお方でございますか」
精一郎は泡立つ気持を抑えてそう静かに訊いた。真ん中にいた赤ら顔の侍は、厚い胸に片手を入れ、水戸だ、と傲慢に言い放った。
え、と呟いたのは萱次郎で、精一郎を怯えた目で見つめた。その目が充血しているのは、やはり麻疹のせいだろう、と精一郎は思いながら、自分が意外に落ちついているのを感じていた。
「なに？　播磨守様のご家中の方とな」
そういって出てきたのは妻木弁之進である。気の短い妻木は、今まで柱の陰で、腸を煮えくり返らせながら問答を聞いていたのだろう。だが、先生が不在の折に無茶もできないと自重していたようだった。
「水戸ではご不満かな」
赤ら顔の男はにやりとした。精一郎の背後に立った妻木の息が、にわかに乱れた。
「そういうわけではござらん。だが、折悪く師平山子龍は不在なのでござる」
三人の者はいきなり笑い出した。
「紹介状の次は居留守か。こりゃいい、これでは平山に勝つ者など誰もおらんわ」
右端にいた青白いひょろりとした男は、黄ばんだ歯を剝き出して笑いながら、鉄扇で玄関に掲げられた額を叩いた。それは平山子龍自筆の額で「韜略書院」と書かれてある。精一郎の胸の中に怒りの粒が浮いた。
「嘘ではない。先生は御用があって今朝より小石川まで出掛けられておるのだ」
「師は不在ですが、たってのお望みとあれば私がお相手つかまつりますが」
「おぬしが？」

三人は一様に笑いを鎮めて間の抜けた面で精一郎を見返した。驚いたのは妻木も同様だった。

「おい、男谷。勝手なことをしてはならん。ならんぞ」

背後からつついてくる妻木に向き直って、精一郎は普通の調子でいった。

「師が辱めを受けたら弟子が晴らすのが武士です。この者たちは、平山先生や妻木さんが相手にする程の達人ではありません。ですが、私がムキになって戦うには格好の下衆野郎どもです」

「う……」

妻木が絶句するのにかまわず、精一郎は三人に向って丁寧にいった。

「どうぞ裏にお回り下さい。道場は裏口を入ってすぐのところにあるのです」

三人の姿が玄関口から消えると、精一郎は茫然としている萱次郎と妻木弁之進を置いて、さっさと演武場へと向っていった。

三

妻木から事情を知らされたにもかかわらず、下斗米秀之進の態度は普段と変わらなかった。騒いだのは塾生たちで、いつもは物静かでおとなしい精一郎のどこに、それほどの闘志が潜んでいたのかと囁き合った。

それも下斗米のひと睨みで鎮まった。塾生たちはそれぞれ、稽古中の精一郎が時折見せる、鬼が乗り移ったような気迫を思い出していた。妻木でさえ羽目板まで追いつめられることがあった。下斗米は、足を洗って板敷の床に立った水戸藩の三藩士に対して、

「中山門蔵と申す者です」と名を名乗り、

「それがしが審判つかまつります。御用意のできた方からどなたでもどうぞ」

と簡潔にいって神棚を背にすっと佇んだ。

精一郎はすでに他の塾生と共に壁際に正座をして相手が出てくるのを待っていた。他流の者と試合をするのは初めてだったが、不思議に高ぶりはなかった。ただ自分の身体の底の方に、冷たく青い炎が燃えているのを、奇妙な陶酔感を抱いて見つめていた。

「番場が出る程のことはない。わしがやろう」

三人の首長格だった赤ら顔の男を制して、最初に中央に進んできたのは矢島と呼ばれた芋顔の侍だった。

「それではお好きな得物をお選び下さい」

下斗米は壁にかけられた竹刀、木刀、槍を指し示した。拙者はこれにて、といって矢島が手にしたのは五尺五寸の長竹刀だった。塾生たちの間から小さなどよめきが起った。柄の部分も入れると竹刀の長さは六尺を超える。平山子龍の高弟ならいざしらず、他流

派の者で、それだけの長竹刀を使いこなせる者がいるというのは驚きだった。

子龍の教える実用流では、通常三尺三寸の竹刀を使った。

「男谷精一郎、前へ」

いわれて精一郎は二尺三寸の短い竹刀を持って立ち上がり、前に進み出て一礼した。

「用意」

しんと静まり返った演武場に威厳のある下斗米の声が重く響いた。

「待った」

といったのは矢島である。彼は長竹刀を左手に持て余すように携えて、腰を引き加減に右腕を突き出した。

「防具はつけないのでござるか。つ、つまり、面や胴はどうされたのじゃ？」

矢島の言葉に、壁際に並んだ十数名の塾生たちの間から失笑が洩れた。

「当実用流は、素面素籠手にて勝負をすることになっております」

武者窓から射し込んでくる光が斜めに下斗米の表情を照らした。彼の目は射るように矢島を見つめ直した。

「当流儀の本意は、戦場にて潔く討死する精神を養うことにある。それは稽古においても同じこと。防具をつけての打ちつ打たれつは無意味のことと、師平山子龍の教えでござる」

下斗米の言葉に矢島は明らかな動揺を見せた。髷に手をやった姿は、おどけた猿のようだった。

下斗米の目は矢島から精一郎に向けられた。冷えた空気の中で、二人の視線が往き合った。そのとき討死、といった下斗米の言葉が精一郎の胸の中で凛と響き渡った。

「いかがなされた。お引きになるのもご随意でござるが」

「いや、このままで結構。素面素籠手にての勝負こそ、それがしの望むところでござる」

肩を怒らせ、目を大きく剝き出して矢島は言い放った。その口から白い息が吐き出されるのを、精一郎は心静かに見つめていた。彼ヲ知リ己ヲ知ル。『孫子』の謀攻篇でまずまっ先に師から習った一節が脳裏に浮いた。精一郎は今、相手の胸の内が手に取るように見えていた。

「始め」

下斗米の合図で二人は向かい合った。矢島は右足を引いて竹刀を右斜め上方に高く差し上げた。一刀流でいう八双の構えで、下段からくる相手に対して効果があるとされていた。矢島の長竹刀は、彼を異様に大きく見せていた。

「キエーッ！」

気合いを放って矢島は右足を前に詰めてきた。精一郎はふわりと佇んだまま、一歩も

引かずに正眼に構えて、矢島の気合いを受けた。

二人の竹刀の長さは三尺の違いがあったが、精一郎には気にならなかった。入門当時から、三尺三寸の竹刀を持った相手に対して、わずか一尺三寸の短い竹刀しか師から持たせてもらえなかったからである。

「よいか新太郎。普段の稽古でも、真剣をとっての試合と心得ろ。この短い竹刀は柄を加えてもわずか一尺三寸しかない。つまり、肘から先のおぬしの腕の長さしかない。敵は三尺三寸と長い。その長い竹刀で敵は打ちつ、突きつ、払いつするであろう。だが、あわてるでない。敵のそのような動きに惑わされず、おぬしはただ一点、ここぞと狙いをつけた所に、一刀必殺の意気込みで打ち込むのだ。その気迫を常に維持しておれば、敵がどんな得物を持とうが、どのような大男であろうが、何も恐れることはなくなる」

まだ元服前の、前髪を垂らしていた十二歳の精一郎に、師平山子龍はおだやかな口調でいって、一尺三寸の竹刀を差し出してきた。以来三年間、精一郎は師の言葉通り、精魂こめて稽古に励んできた。矢島と向かい合った今も、気後れなど少しもなかった。手にした竹刀は、稽古竹刀より一尺も長いのである。

「キエーッ！」

矢島は顎をはずさんばかりに大口を開いて気合いを放った。肩に力がみなぎり、目は血走っている。敵は恐怖心を振り払おうと必死なのだ、そう精一郎は思った。

――次に敵がとる手は、竹刀を上段に振り上げ、一気呵成に打ち込むことだけだ。その呼吸を盗んで、敵が竹刀を振り上げようと決意した瞬間に踏み込むのだ。動き出したときでは遅い。動け、と敵の意志が命じた刹那に打ち込むのだ。

立ち合いながら、理路整然とそう考えていたわけではない。それらの思いもまた、一瞬だった。

柄を握った矢島の指に、力がこめられたと居並ぶ塾生たちに見えたのは、武者窓から射し込む光の中に、小鳥が飛ぶ影が入ったからかもしれない。

「トウッ！」

先に塾生たちの目に映ったのは、小柄な男谷精一郎が鋭く踏み込んで、相手の胸板に二尺三寸の短い竹刀を突き立てた光景だった。気合いはそのあとに耳に響いてきた。

「ぐえっ！」

矢島の口から胃が潰されたような悲鳴が洩れた。彼の身体は六尺後方に吹き飛んで床に落ちた。

「誰か手当てをしてさしあげろ」

下斗米がそういうと、新参の塾生二人がすかさず立ち上って矢島を抱え起こした。矢島の両目は開かれていたが、意識は失せていた。口の端からどろりとした液体が垂れていた。水戸藩士の二人は中腰になって矢島の様子を探ろうとしたが、結局立ち上がらず

に、矢島の具合を確かめている精一郎に目を注いでいた。二人の目は噴き上がるような憤怒に満ちていた。まだ若い塾生の放った剣に対する恐れより、憤りの方が先に立っているようだった。

「男谷、おぬしは元の位置に戻れ」

勝負あり、の判定を下すことなく、下斗米は矢島を気遣う精一郎に声をかけた。精一郎は頷いて所定の位置に戻った。

「お次はどなたかな」

下斗米に促された二人は、暗い隅で顔を見合わせた。すぐに返事がなかったのは、そのときになって初めて、若年の、まだ少年ともいっていい端整な顔立ちの剣士に、恐怖心を湧き起こしたせいだったのだろう。

「わしがやる」

覆いかぶさっていた重い空気の層を吹き払うかのように、大声を出して赤ら顔の侍が立ち上った。それから床をドスンと大きな音をたてて踏みしめ、壁の上段に掛けてあった稽古用の槍をとった。柄の長さだけでもゆうに八尺あった。穂先には綿布が巻きつけられていたが、まともに喉を突かれたならば、即死することもありえた。

「これにて勝負をつかまつる。年少の者が相手とて容赦はせぬが、よいか」

「未熟ながら、お受けします」

「よい覚悟じゃ」

そういって股立ちをとり、槍を大きく三度くるくると回して構えに入った男の顔は、さらに赤味を増して熟した柿のようになっていた。

「待たれよ。勝負の前にご貴殿の姓名をお訊きしたいのだが」

下斗米が男の気勢を殺ぐようなゆるんだ声で訊いた。

「番場源三郎でござる」

男は両目を剝き出し、下唇を突き出して吠えた。下斗米は頷いてから、

「番場殿、勝負は時の運とも申します。どのような結果になろうが、今後の怨恨は無用に願いたい。それは当方にても同様でござる」

といった。番場はおうと応じた。

「その願い、しかと聞き容れた。では、参るぞ」

番場はびゅんと音をたてて穂先を払った。二尺三寸の竹刀を下げていた精一郎は一礼して構えに入った。そのとき、演武場の入口から野太い声が放たれてきた。

「番場殿とやら、相手は木偶ではありませんぞ。決死の覚悟でやらねば大怪我をしますぞ」

「いらざる斟酌」

番場は憎々しげに声の主を睨みつけ、床に唾を吐いた。声の主は吉里藤右衛門だった。

たぶん、昼飯から戻ってきたのだろう。精一郎にはその声が吉里だと振り向かなくとも分っていた。精一郎が気がかりだったのは、番場が床に唾を吐くのを見た下斗米の表情が、にわかに険しくなったことである。演武場の床は日に三度、塾生が一団となって磨きをかけている所だった。表面は黒いが鏡のように光ってもいた。

「勝負一本、始め」

厳粛な下斗米の声が響いた。

すかさず、うおーっという獣の呻き声のような気合いが番場の口から吐かれた。その腕から繰り出される槍の穂先は、白蛇の鎌首のように素早く不気味に伸び縮みをした。

「こわっぱめが！」

番場の形相が一変して蛙のように脹れ上った。身体は岩のように丸く縮まり、それが弾かれて前に出てきた。槍の穂先が、斜めに射し込んだ光の下をかいくぐって、氷柱のように鋭く伸びてきた。

その上を影が走った。

「ぐっ！」

呻いた番場は手にした槍で一回空を掻き、次いで槍を床に落すと背中を反らせ、黒い花弁のように身体を反転させて仰向けに倒れた。振動が塾生の腰にまで伝わってきた。彼等は茫然として演武場に一人残っている剣士の残心の姿を見ていた。

精一郎の上体は、打ち込んだ勢いのまま凍りついていた。背筋の伸びた上体は、道場の屋根を突き抜けて天にまで向っていくようだった。

力強い腕に筋が幾重にも浮き上がり、二尺三寸の竹刀は微動だにせずに宙に留っている。

「男谷、勝負はついた、竹刀を引け」

下斗米はそういって精一郎の肩に手を置いた。そのとき精一郎は初めて我に返った。下斗米に触れられた肩の一点から温もりが五体に広がり、生気を取り戻すのが感じられたのだった。

精一郎は床に大の字になって倒れている敵を見た。頭の中は空白になっていた。自分が何をしたのか思い出せなかった。

「おぬしも立ち合いが望みかな」

下斗米は痩せた長身の侍に声をかけた。男は棒を呑み込んだように直立し、こわれた張り子の虎のように、口をだらしなく開いている。

「そうであろう。実用流の稽古は、おぬしたち本多髷の部屋住み侍にはちと厳し過ぎたであろう」

下斗米は男の前に佇み口元に笑みを浮かべていった。その表情が鬼瓦のようになったのは、若い塾生が気絶した番場を介抱しようとその腕に手をかけたときだった。

「触るな。水戸家の家臣を名乗る騙り者などすておけ」

見ずにそういわれて、若い塾生は縮み上った。下斗米は残った男を上から見下ろした。

「水戸様の弘道館の侍は撃剣家ぞろいだ。おぬしらのようにこけ威しの気合いはかけん。何を探りにきたのかしらんが、とっとと失せろ」

下斗米秀之進は兵原草廬の一人武者、と呼ばれる程の強者である。暴れ者ぞろいの塾生の上に吉里、松村、小田、大釜の四天王がおり、下斗米はさらに別格扱いとされていた。

その気迫が演武場内にみなぎり、塾生たちをも震え上がらせた。

「おい、仲間を連れてとっとと帰れといっているんだよ」

暗い隅からぬっと立ち上った妻木弁之進が、腰を抜かして動けずにいる男に無情にいって腕を取った。やっと壁の前から上体を起こした男は、両膝をついて、番場のところまで這っていった。少し前にようやく息を吹き返した矢島が、塾生に促されて、これもそのそのと仲間のところに寄っていった。

「あっ」

番場を起こしにかかった二人は、そのとき同時に声をあげた。なんだ？　といって番場を覗き込んだ妻木は、故意に道場内に響き渡るようなカン高い声をたてていった。

「ほう、喉仏さんが隣に引越したか。ここではよくあることなんだよ、まぁ、気にするな」

妻木は下斗米に向って首を竦めてみせた。それから、いつの間にか壁際に下っている精一郎を見つけて、あきれたというように頭を振った。

妻木の表情を見て、精一郎の隣にいた細井萱次郎がくすくすと笑った。唇を尖らせた妻木の顔は、ひょっとこの面にそっくりだった。

四

翌日から平山子龍は外出することが少なくなり、故郷で正月を祝った塾生たちもだんだんに戻ってきて、兵原草廬は通常の厳しい生活に還った。

早朝の精一郎の素振り稽古にも、追従する新参の内弟子が何人か出てきた。皆、凍るような一月の、星の降る暗い内から起きて井戸端に行き、下帯一枚になってまず水をかぶり、荒縄で身体をごしごしとしごくことから始められた。その後、気合いをかけて木刀、槍、そして十六貫（六十キロ）の重さのある石砲の素溜めをした。全て平山の七ツ時計といわれていた師の若い頃の鍛錬法を追従していた。

雨戸を開ける音が隣の組屋敷から聞こえてくる頃には、兵原草廬では全ての掃除が終えられている。師の平山子龍は、どれ程丹念に掃除がなされているかじっくりと見て回

る。床に曇りでもあれば、三十畳全てがやり直しとなった。

その後やっと朝食になる。玄米と粟を混ぜたものを炊き、それを木桶につけて水でふやけさせる。それを椀に盛り、少量の味噌をおかずにして食べた。湯茶は飲まず、食後は冷水を飲む。ここでも戦場にいるのと同じ心構えが要求されるのだった。

玄関を入ってすぐの兵聖閣は坊主畳の三十畳敷で、上には籐の簀の子が敷かれていた。座敷の正面の二間床には諸葛孔明の画像が掛けられていて、師はその前に一段高い床を敷き、机を置き、陣羽織を着込んで講義をする。

師の左右には妻木と大釜紋三郎が坐る。下斗米が一人で補佐することもある。塾生たちは、師から見て、丁度扇の骨のように末広がりに坐らされる。講義中の質問は許されず、態度の悪い者は兵聖閣から放り出される。講義が終ったあとも、弟子たちは政治に関することや、軍備のことなどを論じるのは禁止されていた。それは武士の生き様とは合致しないというのが師の信条だった。

「武士道などというが、大方の武士はお上の顔色をうかがって、己れの保身ばかりを図っている情ない者どもばかりだ。その者たちにとっての武士道とは、家臣道のことだ。はき違えてはいけない。本物の武士は民衆を守るために生き、忠孝を掲げて戦場で戦って死ぬのだ」

師は弟子たちに向ってたびたびそういった。その胸のすく言い様に戸惑った新入生は、

俯き、顔を赤らめた。藩主をいただく陪臣であるその人たちは、いつでも主君を思って過ごしていたし、上司の顔色を窺って生きることに慣らされてきた。戦さのない時代に、戦死こそ忠孝と論じる師の言葉に、違和感を覚えたのだろうと精一郎は思っていた。

一月の終りに近い二十八日の夕方、精一郎は師に呼ばれた。昼間、男谷家の遠縁に当たる夏目信平が師に会いにきていたが、いつもは気さくにどうだ元気か、と声をかけてくれる夏目が、今日に限ってはひどく深刻な様子で黙って帰っていったことが、精一郎の気にかかっていた。夏目信平はかつて箱館奉行を務めたこともある二千七百石の大身の旗本で、現在は本丸御留守居役を務めている。二年前の菖蒲節句のとき、精一郎はここで元服式を兼ねた鎧の着ぞめ式というのを行った。そのときの烏帽子親は師の平山子龍で、冑親は夏目信平だった。そして名を新太郎から精一郎信友と改められた。信の一字は信平から与えられたものだった。

「精一郎、おぬしの精進ぶりには感心しておる。体力もないのにこれまで本当によく耐えた。おぬしはわしの誉れだ」

精一郎を自らの居室に呼び寄せた師は、唐突にそんなことを口にした。すでに五十三歳になる師の胸板は厚く、鋼のようで、腕の太さは女の胴回り以上あった。だが、表情に、今日に限って老いの影が垣間見えているのが気がかりだった。

「皆の者には明日伝えるつもりでおるのだが、その前に、おぬしにだけ言い伝えておきたいことがあるのじゃ」

師の双眸がいつくしむように精一郎をとらえていた。隣に坐った下斗米秀之進は、じっと腕組みをして俯いており、さっきから精一郎を見ようとはしなかった。下斗米は元服式の折、前髪を落す剪剃の役を務めてくれた人だった。精一郎は突き上げてくる不吉な予感を必死で抑えながら、はい、と返事をした。

「明日、兵原草廬を閉める」

そういうと、師はカッと目を見開いて精一郎を睨みつけた。一瞬、精一郎の坐っている床が抜けて、身体が果てしない宇宙に吸い込まれていく錯覚を抱いた。

精一郎は冷静になろうと努めた。塾生達の間で、囁かれていた危惧が、いよいよ現実のものとなってその恐ろしい姿を現わしたのだ。

——先生は、二度に亘って海防建白書をお上に上書されている。おろしやの武装船は樺太や択捉島を襲い、略奪をするばかりか人々を殺し、人家にまで火を放っている。北の守りは急務だ。先生はそれを論じただけでなく、自ら囚人を引き連れてこの国がさらなる侵略に遭う前におろしやを攻撃しようとお上に進言された。その過激な上書が全てにことなかれ主義の役人の反発を買わなければよいが、と妻木さんも大釜さんも心配されていた。あの心配が当ったのか。

——いや、やはり、一貫目玉の大砲を製造し、徳丸ケ原で試射したいとお上に申し出たことがいけなかったのだ。先生は土井大炊頭様に、申し出が却下された理由を激しく糾弾されたと聞く。そのため幕閣の不興を買ってしまったのだ。

——まてよ、先日、逃げた内弟子は密偵だったと下斗米さんはいっておられた。あの者がお上に何事かよからぬことを告げたのではないのか。

精一郎の頭の中は暗い光でめまぐるしく回転した。しまいに息苦しくなり、喉は焼け火箸を突っ込まれたように熱くなった。

「兵原草廬を閉めるのですか」

やっとの思いで精一郎は声を出した。師は手にした鉄扇で自らの股を打った。

「そうだ、閉める。わしはお上より謹慎を申し渡された。東照公以来の家柄故、罰を受けるということは免れたようだが、塾生をとることも、講義を開くことも相ならんということになった。八角棒をついて外を歩くこともまかりならんということだ」

「そんな……。罰を受けるとはどういうことです。どんな罪があったというのです。先生はこの国が亡びてはならんと、そのために……」

「精一郎、先生のお話はまだ終っておらん。騒がずによく聞くのだ」

師の横に坐った下斗米が腕組みを解いていった。吊り上った目尻とむくんだ頬が、下斗米の苦悩と怒りを表わしているようだった。

精一郎は頭を下げた。その上に、師の声が落ちてきた。
「おぬしは今後、わしの屋敷に出入りすることはまかりならん」
はっとして精一郎は顔を上げた。赤く充血した師の二つの目が、噛みつくように精一郎をとらえていた。
「おぬしは、今日限り、破門だ」
一語一語、小石を吐き出すように師はいった。精一郎の身体の底から血が沸騰して顔に上ってきた。
「何故でござりますか。何故破門されるのですか。私には納得がいきません。先生の許にいては私の将来に傷がつくとでも夏目様がいわれたのでしょうか。私は嫌です。お上の目など少しもこわくありません。私は一生先生のおそばにいます」
「男谷！」
下斗米の太い指が精一郎の肩を摑んだ。
「破門といわれたら破門だ。今すぐ、荷物をまとめてここから出ていくんだ」
「嫌です。私は嫌です。まだまだ先生から学ばなくてはいけないことがたくさんあります。お願いです。ずっとここにいさせて下さい」
「馬鹿！」
下斗米の拳が精一郎の頬を打った。精一郎は歯を食いしばり、嫌です、と叫んだ。

「馬鹿！　馬鹿！　馬鹿！　おまえには先生のお気持が分からんのか！　平山塾を閉めた後も、おまえだけはきっと屋敷に通ってくる。それが分っているからあえて先生は心を鬼にして、お前に破門を申し渡したのだ」
下斗米は精一郎の襟首を摑んで、力まかせに引き上げた。精一郎の頭が上がり、皺の多い師の顔とまともに向き合った。
「男谷、おぬしはお父上の期待にそむいてはならぬ」
普段の声ではなかった。死の淵から出したような掠れ声だった。精一郎は祈りを込めて師を凝視し続けた。
師の目から涙が溢れ出てきた。頬を伝って落ちていく大粒の涙に、射し込んできた夕陽が当った。師の涙は血の色に染め上げられた。
「先生……」
あとは声にならなかった。畳についた手の甲に、精一郎の悲しみをたたえた滴が一滴落ちた。

第二章　孤剣

一

番場町の実家に戻って、二十日余りが過ぎた。胸の内は複雑だったが、精一郎は不満や憤りを家人に対して語ることはなかった。

「平山子龍先生の教える武芸十八般とは、いかなるものなのでしょう」

「塾生は真冬でも、袷一枚を着ただけで過ごしていたと聞いていますが、本当ですか」

「兵原草廬では、町に火事が起きると、それを戦さに見たてて軍事訓練を行ったそうですが、どんなふうにやったのですか」

二歳下の弟の忠次郎はことあるごとに兵原草廬のことを聞きたがった。平山塾での修業は苦しいことばかりで、楽しい思い出など一つもないが、質問に答えることは、ときにはそれ以上の悲しみと心の痛みを精一郎にもたらした。それを表情に出さぬように気

をつけながら、精一郎は興味本位の忠次郎の質問にもいちいち答えた。

「これまでは、弓、馬、刀、槍と大雑把に武芸四門のみに分けられていたものを、平山先生は十八種の武芸に分類されたのです。その方が効率よく学べるし、それぞれの武芸の特徴が分かるからです」

精一郎は家人に対してだけでなく、弟にも丁寧な言葉で喋った。三年以上離れて暮していたせいもあったが、六年前に亡くなった母上と呼んでいた人は、実の母ではなかったし、ただ一人の弟は本妻の子だという遠慮も働いていた。

「たとえば、平山先生は、弓を木弓と李満弓、これは鯨半弓とも呼ばれていますが、それに大弓の三つに分けられた。李満弓は五間、大弓は名人の手にかかると三十間くらいの範囲まで届きますから、その目的も操作方法も違ってきます。しかも人によって得手不得手が現われるので訓練のやり方もおのずと変ってくる。誰が木弓が上手で誰が大弓がうまいということが分かれば、戦さのときには陣構えがしやすくなる、というのが平山先生の考えでした」

「精一郎殿は、兄上は何が得意だったのですか」

「入門当時は木弓だけをやらされました。大弓を持たせてもらえたのは、閉塾する半年程前からのことです」

「どのくらいの的まで届かせられたのですか」

「やっと二十間くらいです」

精一郎は苦笑して答えた。無邪気に訊いてくる忠次郎の瞳は眩しく、答えている自分の気持がそれに反して、沼地の底へ引きずり込まれてでもいるかのように、暗く湿ったものになるのが感じられた。いつ、忠次郎から「何故兄上は破門されたのですか」と訊かれるかと、警戒する気もあって、それが精一郎を余計に憂鬱にさせていた。

「剣術はどうです？　どんなものがあるんです？」

自室で書物を広げている兄に構うことなく、傍に坐って忠次郎は尋ねてくる。一年前から一刀流の道場に通い出した忠次郎は、師範代から筋がよいと誉められたという。父の忠之丞がそう誇らしげにいったあとで、「平山塾で習った実用流を、一手忠次郎に披露してやってくれぬか」と頼んできたが、精一郎は黙ったまま、いいともいやとも答えなかった。そんなことを平気で頼んでくる父の真意が、精一郎には計りかねた。倅の精一郎を、兵原草廬から追放し、今後も近づけないように企てたのは、父の忠之丞に他ならないと精一郎は思っていた。

「剣術においても、刀の他に使う武器があるのですか？」

あります、といって精一郎は書見台の前を離れて押し入れを開け、一冊の本を手にして忠次郎の前に差し出した。表に『武芸十八般略説』と書かれてあった。

「平山先生が書かれたものです。忠次郎殿に差し上げます」

いいのですか、と目を見開いて喜んだ忠次郎は、パラパラとめくりながら声を弾ませた。

「青龍刀というのは騎射戦で使うものなのですか。右構えで使えということは、こう打つのかな。眉尖刀というのは初めて聞きました。槍を相手にするとき使うのですか。それでは戦国か、いやそれ以前の室町の時代から使われていたものかもしれませんね。あ、この『鏢鎗』というのは何のことですか？」

「投げ槍のことです」

「ほう、投げ槍ですか。むつかしそうだな。だいいち、敵に避けられでもしたら、その投げ槍は敵方のものになってしまうでしょう。余程訓練をしなくては実戦では役に立ちそうもありませんね。あ、飛鎚というのがある。これは杖の先に分銅のついた鎖をはめ込んであるものではありませんか？」

「そうです。鎖鎌も飛鎚の中に入ります。鎖鎌は鎌の付け根に鎖のつけられたものと、柄の下端から鎖の出たものの二種類があります」

「そんな武器を持った者を相手にしたときは、どのように立ち合えばよいのですか？　刀に鎖を巻きつけられては身動きがとれなくなるでしょう」

「通常は二刀を遣います」

「あ、そうか。新免宮本武蔵の二天一流ですね。それなら私も知ってます。兄上も鎖鎌

をされたことがあるのですか」

「十八武芸は一応全てやりました」

「見せてもらえませんか。長持ちの中に鎖鎌も入っているのでしょう？　どのようにして分銅をとばすのか、是非見せて下さい」

永い間一人で育った忠次郎は、兄に甘えてみたかったのだろう。その言葉の裏には何の邪心もないことは分っていたが、精一郎はよしと答える気にはなれなかった。今後武芸は一人で精進する他はなく、たとえどのように上達してもそれを誉めてくれる師とは生涯二度と見えることができないのだ。実用流の鍛錬を続けることが無意味に感じられることもあった。

「兄上、ぶしつけなことを申してしまいました。鎖鎌を見せてくれなどと、まるで見世物小屋の軽業師に対する申し様でした。お許し下さい」

忠次郎は、精一郎の気持をおもんぱかってか、それとも、兄の顔にほんの一点曇りが浮くのを見て察したのか、その日はそういってあやまったものだった。

精一郎は、日に何度となく、破門を自分に申し渡した時の、師の涙にくれた悲痛な顔を思い出す。入門した十一歳のときから、何くれとなく師は精一郎に目をかけてくれた。先輩達とのつらい稽古に音をあげて、いっそのこと逃げ出してやろうと思ったことなどは数知れなかった。一度、実際に逃げ出すつもりで兵原草廬を飛び出し、数町も行かない内に塾生と連れ立って帰ってきた平山子龍その人に出会ってしまい、先輩の塾生から襟首を摑まれて引き戻されたことがあったが、師の平山は精一郎を叱ろうとはしなかった。ただ「無事でよかった」とひと言呟いたのみであった。

そのとき以来、精一郎は兵原草廬を逃げ出そうとは思わなくなった。自分に対する師の深い慈愛を知ったからである。それに応えるべく、精一郎は稽古に励み、勉学に勤んだ。師も精一郎の精勤ぶりを、他の門弟達の前で名指しで誉めたたえてくれたことさえある。その精一郎が、たとえ兵原草廬がお上の命により閉鎖せざるを得なくなったとはいえ、何故イの一番に破門されなくてはならないのか、どのように説明されても納得できるものではなかった。

実家に戻って以来、父の忠之丞に対しては、挨拶をする以外自分から口を開くことはなかった。また、父から尋ねられることがあっても、ごく簡潔に答えるのみで余談をさし挟もうとはしなかった。家に連れ戻された怨みを口に出すこともなく、精一郎の日常は平静に過ぎているかに見えていた。

兵原草廬の門弟として住み込んでいたときと変わりなく、家に戻ってからも、毎朝七時ツに起きて水を被り、荒縄で身体をしごいてから五尺（百五十センチ）の樫の木刀で素振りを一千回こなし、さらに石砲の素溜め、弓の稽古と励んだ。その頃になってようやく家で働く下女たちが雨戸を開ける。

朝食後は、今は心の師となってしまった平山子龍の著作物を読んで過ごした。そうしながら、時折精一郎は、諸葛孔明の画像のかけられた二間床を背にして坐った師が、陣羽織を着込んで講義していた姿を思い出して陶然とすることもあった。

午後は忠次郎に誘われて、近頃盛んになりだした町道場での剣術稽古を覗くこともあったが、大抵は一人で市中を散策した。十一歳の頃には気付かなかった町の光景が、精一郎の目を刺激した。

番場町の家から大川畔に出ると、穏やかな日差しの下を、寒風が槍の穂先のように鋭く伸びて首筋を刺してくる。風に向って堤を北に七町程行くと大川橋の東に出る。肥後新田藩細川若狭守の下屋敷の長塀が続き、空地を挟んで秋田藩佐竹右京大夫の下屋敷の塀が連なっている。塀の上には、枯木を押さえ込むようにして、寒さに強い樹木が葉を繁らせている。その隙間を縫って梅もこっそりと顔を覗かせている。

かつて秋田藩では、藩主継承問題にからんだお家騒動がもち上ったと精一郎は聞いたことがある。それは兵聖閣での午前の講義が終って、門弟同士がくつろいでいると、ひょっこり顔を出した下斗米秀之進が、何かの拍子に話し出したことだった。宝暦三年（一七五三）に二十二歳の若さで急死した義真という藩主は、次の藩主となる義明に毒殺されたのだとぶっそうなことを下斗米はこともなげに話したが、聞いていた若い精一郎やさらに年下の細井萱次郎などは、息を詰めて互いに顔を見合わせたものだった。藩

の政治を操る上層部にうごめく、生臭い息づかいを垣間見てしまったような薄気味の悪さを感じたからだった。

南部藩出身の下斗米秀之進は、平山塾では師に次ぐ地位にあり、その発言が門弟達にかなりの影響を与えることを知った上で「なに、こんなことはどこの藩でもあることだ。勿論、幕閣にもある」とカラリとした顔でいった。

細川家と佐竹家の下屋敷の塀の前に露店を出す者はいないが、大川橋の東橋詰には中ノ郷瓦町の町屋が川を背に並んでいて、野菜や魚だけでなく、古着や桶、籠などを売る店が出ている。

精一郎は、空地さえあればどこにでも店を出す、町の人々のたくましさを感じながら橋を渡り出す。ふと下斗米秀之進が、秋田藩について最後にいった言葉を思い出したりもする。

「現藩主の佐竹義和公はなかなかの名君だ。逃散する農民を村に留めるために副業を与え、新田を次々に開発していったのだ。しかもそれまでになかった藩校を開設し、二年前には医学館を併設して明徳館と名付けた。学問に力を入れられるだけの余力が藩にできたということだ。しかし、今売り出しの平田神道の平田篤胤は、藩校の開設を見ながら二十歳のときに秋田藩を脱藩した。藩校の未来に絶望したわけだ。平田は宣長狂いの度がいささかすぎるようだが、いずれにしろ、学問の視野を、一つの藩内のみに収め

ていては、この国を救うことはできないと悟ったのだ。平田の義憤はそこにある。同じ秋田藩から出た佐藤信淵もまたしかりだ。学問は利己の立身出世のためにするものではない。しかし、この国を治める君主が一人存在するとして、その君主を啓蒙し、さらに触発を受けた君主が農村の者、町の者に等しく米の食える生活を与えようと考えを広げたとき、学問は真の学問になるということなのだ」

もうすでに半年以上前のことであり、下斗米秀之進の言葉を、一言一句正確に覚えているわけではなかったが、下斗米から受けた熱意は、今も消えずに精一郎の胸の底に残っている。そういったあとで、続けて下斗米は何か言いかけたが、さらに塾生達が集ってくると、急に眉間に縦皺を寄せて黙り込んでしまった。

あのあと、下斗米さんは何をいおうとしたのだろう、と時々精一郎は思い出して考える。下斗米は江戸の南部藩邸には出入りしているが、国元では総領の兄が百石程の家禄を継ぎ、下斗米自身は藩からは一石の禄も得てはいないはずだと、兵原草廬の中ではちょっと風変わりな妻木弁之進が語っていたことがある。下斗米が口を閉ざしたのは、藩内に置かれた自分の不運な境遇を鑑みてのことだろうかと精一郎は思ってみたが、結論の出ることではなかった。

大川橋にはいつも強い風が吹きつけていて、人々は身を縮めながら急ぎ足で渡ってい

く。大川は水量が多く、ごうごうと音をたてて白波をとばしている。精一郎は袖の短い袷を一枚だけ着て、半袴に小刀を差して足早に歩いていく。

橋を渡ると花川戸町と材木町に挟まれた広場に出る。ここから先は少年時代の精一郎にとっては華やいだ未知の土地だった。町に吹く風の匂いが異なり、男たちの顔つきも本所に住む者と較べて鋭く、動きがキビキビとしていて、言葉遣いも荒っぽく、それに何より喧嘩っ早かった。幼い頃、父の従弟に当たる男谷彦四郎に連れられて蔵前の八幡宮の祭りに行ったとき、彦四郎の肩が触れたといって因縁をつけてきた者があった。それが紺の仕事着を着た町の者であるのに精一郎はびっくりした。ここでは武士に喧嘩を吹っかける町人がいるのかと、子供ながらに唖然としてしまったのである。

この二十日余りの間にも、何度か町の者から因縁をつけられた。若侍めと、精一郎を舐めきって唾を引っかけてきた鳶職の連中もいたが、精一郎は相手にせず、さっさと雑踏に紛れた。そうしなければ、どのような荒技を使うか、自分でも予測がつかなかったからだ。

いったん大川を渡ってしまうと、あとは出鱈目に歩き回った。雷門の前を通り、広小路から東本願寺の裏を通り、新寺町の大通りを抜けて上野下から不忍池に出て、池之端仲町の出会い茶屋に灯がともるのを眺めたり、さらに下谷御数寄屋町に入って白粉を首まで塗りたくった白壁のような女が、しなを作って男を迎えるのをじっと見てい

たりした。

浅草寺裏の浅草奥山という、見世物小屋の建ち並んだ小路に初めて足を踏み入れたときは、人ごみと「女怪力」とか「蛇女」「猿芝居」と書かれたのぼりと、看板絵の毒々しさに度肝を抜かれたものだが、二度目に行ったときには案外に落ちついてあたりを眺める余裕もできた。それで「大作頼光の鬼退治」の絵を砂で描く砂文字親爺を半刻も眺めていたり、子供の後ろに並んで、「於七吉三恋緋桜」ののぞきからくりを見たりした。

三度目に行ったときは、「女義太夫」と「ろくろっ首」の間に店を出していた寿司屋に入り、老人に混って一皿十六文のちらし寿司を食べた。それが買い食いをした初めての体験だった。床几に坐って食べている間、自分だけが他の者から見つめられている気がして首が凝った。侍のくせにこんな所でちらし寿司を食っているのか、という声が絶えずどこからか聞こえてくるようだった。

家から南へ向って御竹蔵の裏を通り、竪川を横目で見ながら相生町の町屋を抜け、両国橋東詰の見世物小屋を覗いたあとで、両国橋を渡って両国広小路に出ることもあった。物売りが往き交い、見物客でごった返す雑踏の中で、商いをする者たちのすさまじい熱気に気を呑まれたものだった。

神田川にかかる和泉橋を渡って、藤堂和泉守の上屋敷を外から見たり、旗本屋敷の並ぶ小路を歩いている内に、偶然一刀流中西道場の前に出たことがあった。それまでも町

道場を見つけると武者窓から中に目を向けていた。だが、中西道場は別格だった。門構えからして数千石の旗本並みで、門から見える道場は間口十間、奥行き二十間もありそうな壮大なものだった。ここに老齢になっても剛剣で恐れられた寺田宗有殿や、小柄ながら血の出るような修業を重ねて免許皆伝となった白井亨殿がおられるのか、と思うと、身体の奥深いところから血が沸き立ってくるのが感じられた。

紹介状がなければ立ち合うことはむつかしいだろうが、それが駄目なら、せめて稽古だけでも見てみたいものだ。そう思って敷きつめられた敷石を踏んで道場に向かうと、稽古を終えて出てきたばかりの、二人の門弟に呼び止められた。

「どこの者だ」

「何用だ」

二人は同時にそういって白眼の多い目を向けてきた。精一郎は名を名乗り、一手御指南願えないか、それが無理なら見学をさせてもらいたいのですがと頼んだ。

「だめだ。他流試合は禁じられておる」

「見学もならぬ。入門したいというのなら拙者が口をきいてやらぬこともないが、それには紹介料が入り用だ」

二人の目は敵意に満ちていた。一瞬、精一郎の胸に憤怒の思いが噴き上った。二人もろとも抜き打ち様に背骨までぶった斬ってやろうという衝動にかられた。

「それが嫌ならさっさと立ち去れ。当道場の門弟数は二千。じゃが、誰でも入門できるものではない」

「それにおぬしのような柔な身体では、とても中西派一刀流の荒稽古はつとまらぬわ」

敵意に侮蔑までが入り混った目を向けられて、精一郎は奥歯を噛みしめた。師の平山子龍は、立ち合いを望む者には、流派を問わず、演武場に招き入れた。相手が槍を持とうが木刀を取ろうが、師は一向に頓着しなかった。門弟の腕では敵わないと見た者に対しては、自ら竹刀を持って立ち合った。師の志す武道は、流派などという狭い範囲を超えていた。

「早く立ち去らぬか」

一人が角張った顎を振った。精一郎は小さく息を吸い、長い時をかけて吐き出した。それから、失礼致しました、といって二人に頭を下げて門を出た。我慢はしたが、それまでひっそりと身を潜めていた無頼の血が、どろりと流れ出すのを感じていた。

事件に遭遇したのは、それから二日後の夜のことだった。

二

その日、精一郎は増上寺まで足を延ばした後で、日本橋界隈から中村座、市村座のある二丁町、木挽町の森田座を見て回り、暗くなって新大橋を渡った。舟蔵と舟蔵番人の住む長屋に挟まれた小路を北に向かうと、弁才天の少し先の竪川にかかる一ツ目橋の手前で、「二八そば」と掛け行灯に書かれた担い屋台が出ているのが目に入った。

人足らしい者が丼から立ち昇る湯気に顔を埋めて、はふはふと音をたてて熱い蕎麦を啜っている。朝飯を食べただけの精一郎の腹はぐうぐうと鳴った。

それが夜鳴き蕎麦といわれるものであることは知っていた。だが、これまで、夜遅く町を一人で歩いたことのなかった精一郎には食べる機会がなかった。兵原草廬での三年半は、毎食玄米と粟の混ぜ合わさったふやけた飯を食っていた。それがあたり前だと思っていたからひもじいとは思わなかったが、破門されて家に戻ってからは毎日大変なごちそうが出され、すっかり舌が肥えてしまった。それでも父への意地から、魚や鳥などの贅沢な料理には箸をつけずにいた。

しかし、人足の食っている夜鳴き蕎麦はうまそうだった。もう自分はいい加減に生きる他ないのだから、ここで無頼の徒のように立ったまま蕎麦を食っても、誰にもとがめられる筋合いはないのだ。

そう思いながら精一郎は担い屋台にそろそろと近付いた。口の中はすでに滲み出した唾で溢れ返っている。左手は懐中にある小銭入れをしっかり摑んでいる。それなのに精一郎は弁才天と屋台の間の暗がりに佇んだまま、口を開くことができなくなっていた。

何といって屋台の親爺に声をかけたらよいのか分からなかったのだ。

「うーあったまった。うまかったぜ」

人足がそういって屋台の前を離れたとき、精一郎は思いきって行灯の前に進んだ。手拭いを被った親爺が顔を上げていらっしゃい、といった。その声が消えない内に、わっ、という人足の叫び声が起った。

人足の立っている所から三間程先に、侍が二人、向かい合っていた。着流しの浪人の手には刀が握られていて、すでに抜き打ちを放ったらしく、手首を返して後の、二の太刀の構えに入っているのが見てとれた。

討たれた侍は羽織袴を着た身なりのよい侍で、不意をつかれた驚きで、棒立ちになっている。その手には提灯と折り詰めが下げられていたが、何奴、と呟きを洩らすと同時に二つとも地面に落した。その侍が竪川に沿って建ち並ぶ、岡場所と呼ばれる遊里の一軒から出てきたらしいことは、十五歳の精一郎にも想像がついた。亀井屋敷というその一角へは、父の用人の源兵衛も時折酒を呑みに出掛けていた。

「借りた金で女遊びをするとは、さぞかし気分のいいものであろうな。だが、それでは貸し主の気が収まらぬ」

「待て、これには事情があるのだ、待て」

侍は一歩退きながら片手を伸ばした。浪人の手にした刀が一閃して、侍の腕から鈍い音が鳴った。ぎゃっ、という悲鳴が侍の口から発せられ、石にでも蹴つまずいたように身を半転させると、腰摧けになって尻餅をついた。

「痛い、痛い……医者を……頼む」

侍は泣き声をたてた。その傍に肘から先の腕が転がっている。

「ひ、人殺し」

人足が声をあげた。

「黙れ、下郎」

浪人は振り向き様刀を払った。ひっ、とわめいて人足は横向きに倒れた。その額に横に一筋、血が浮き出ている。

「何をするのだ」

人足を抱え起こして、精一郎は浪人を見据えた。

「小僧、余計なことに首を突っ込むと、命を落すことになるぞ」

浪人の荒んだ目が精一郎を睨みつけてきた。侍の泣き声を聞きつけた人々が横手から現われると、すっと浪人の姿は闇に溶け込んでいった。斬り落された侍の腕を見つけた職人風の男が、腕だ腕だと喚いた。そちらに気をとられたほんの一瞬の内に、浪人の姿は消えてしまっていた。

「ちきしょう。おいらの顔を斬りやがって。あの人殺し野郎、どこに行きやがった」

精一郎の腕の中にいた人足は、そういうなり脱兎のごとく飛び出していった。精一郎は斬り離された腕を押さえて泣き叫んでいる侍のところに行き、その腕を手拭いで固く巻きつけた。

「すぐに血止めをしないと死んでしまいます。医者のところへ連れていってあげて下さい」

そういって精一郎は取り巻いた町民を見回した。誰かが戸板を運んできた。痛い痛い、と恥も外聞もなく大声で叫んでいた侍は、戸板に乗せられるとき、「役人には知らせるな。よいか。絶対に知らせるな」と青鬼のように顔を怒らせて声を振り絞った。

その夜、下女の手を煩わせることを避けて、夕餉を冷や水で済ませて精一郎は床についた。蒲団は用意されていたが、精一郎は兵原草廬での寝間と同じように、敷き蒲団は敷かず、薄手の掻巻だけをかけて板の間に寝た。常に戦場にあるのと同じ心掛けでいるように、というのが師の教えだった。だがすきっ腹に寒さは余計にこたえ、さすがにその晩は容易に寝つかれなかった。そして、二つのことを考えた。

一つは、夜鳴き蕎麦を食べそこなったことで、あの騒ぎの後で、何故屋台に戻らなかったのだろうかと悔んだ。傷を受けた侍が戸板に乗せられて運ばれていくと、親爺は何事もなかった様子で屋台に戻っていった。それを知りながら、精一郎はまだそのあたりに人々がたむろしていたため、後ろ髪を引かれながらも、一ツ目橋を渡ってしまったのだ。そうしたのは、当然、武士の体面を気遣ってのことで、今の自分にはその様な気取りこそ全く無用なものではないかと戒めた。

もう一つは、浪人者を追っかけていった人足のことで、もし見つけて再び因縁でもふっかけたら、今度こそ脳天から斬りつけられてしまうのではないかと気になった。

ともかく、明日また担い屋台の出ていた弁才天付近にいってみようと結論を下して、ようやく精一郎は眠りにつくことができた。

水腹のまま励んだ翌朝の稽古はつらかったが、下女のたてる雨戸を開ける音を耳にしたときには、死んでいた胃袋が、馬の腹のように活発に動き出し、一年間の喜びをいっぺんに受けた程の幸せを感じた。

朝食後は、二尺四方の板の間に坐り、拳で板を突きながら、師の著作の一つである『武学正路』を読みふけった。

午後からは外出せず、長剣を持って庭に出て居合いを三百本抜き、ついで木弓で巻藁を半刻かけて射てから冷水で身体を拭き、自室に入って墨をすり、師から習った書道に一刻程没頭した。師は南宋の岳飛を慕っていたので、自然、精一郎もその書を学ぶことになった。

二月末の昼はまだ短い。暮六ツといっても、七月ならば七ツ半時で、夕餉の支度がで

きたといわれても腹には余裕がある。精一郎は下女の運んできた膳に、ほんの少し箸をつけただけで外に出た。月は東の空に出ていた。満月から五夜ばかり過ぎていたが、提灯が必要な程暗くはない。それに町屋にはまだ人通りがあり、人々の手にする提灯だけで路地は結構明るい。

竪川を越えて弁才天の前まで来たが、前夜あった担い屋台はまだ出ていなかった。精一郎はすでに客を迎えて賑わいを見せはじめている亀井屋敷から松井町一丁目をぶらぶらと歩き、さらに六間堀に出て、堀に沿って立てられた柵を拳で打ちながら暗い中を歩き、あたりを一周して弁才天まで戻ってきた。嬉しいことに昨日の親爺が掛け行灯に火を入れていた。

初めて食った夜鳴き蕎麦は格段にうまかった。こんなに温かくて幸せな気分に浸れる食べ物は他にはないと思った。昨日の人足の消息を聞くつもりだったが、それどころではなくなった。汁を全て飲み干してジーンとしていると、親爺がもう一杯どうか、といってきた。口開けなので、一杯十六文のところを二杯で二十六文にするという。精一郎は大喜びで頼みますといった。

「安は昨夜あれから遅くに戻ってきてね、あの浪人の居処はだいたい見当がついた、明日もう一度捜して、見つけ次第奉行所に訴え出てやるといっていたよ」

昨日の人足はどうなりましたか、と訊いた精一郎に対して、親爺はネギを刻みながら

そう答えた。男は安といって、もとは下総の出で家族はなく、その日暮しの人足仕事をしているという。下手に騒ぐと無宿者同然の安は寄場送りになっちまうかもしれねえのに、あいつは気が短くていけねえ、と親爺はいった。今度は二杯目なので、精一郎も落ちついて訊くことができた。

「浪人のようでしたが、暗い中を安という人はよくつけていくことができましたね」

「なに、油もローソクもねえところで育っているから、夜目は利くんだよ。林町か徳右衛門町あたりの旗本屋敷に巣くっている浪人なのは間違えねえからな」

「旗本屋敷に浪人がいるのですか？」

そう訊くと、親爺は頭を上げて精一郎を間の抜けた面で眺めた。

「博打場だ。旗本屋敷には町役人は入れねえからな。恐らく用心棒みたいなことをしているんだろう」

「そういうことですか」

頷いてみたが、実はどういうことなのか、精一郎にはまだよく飲み込めなかった。浪人は料理屋から出てくる侍を待ち伏せして不意討ちをかけたのだろうが、あんなにひどく傷を負わせては、貸した金を取り返すことはかえってむつかしくなるのではないかと思うのだ。どんなに脅かしても、働き手が不具者になってしまっては、銭を稼ぐことができない。

「斬られた侍の方はどうなったのか分かりますか」
「まだ生きているらしいが、どうなるか分からねえな。なんせ一斗樽をぶちまけたくれえの血が流れ出たからなあ。百俵取りの御家人だっていうから、おっ死んじまうめえに、早えとこ跡取りを立てた方がいいんじゃねえのかな」
どのようにして侍の素性を知ったのか不思議だったが、親爺はそういって洟を啜り上げた。
「あの浪人は相当の遣い手です。安さんという人が来たら、もう係り合いにならない方がいいと伝えておいて下さい。今度は額の傷程度じゃ済まないと思いますよ」
精一郎はそういって二十六文払って担い屋台の前を離れた。

三

竪川の二ツ目橋の袂に、男の溺死体が浮いたと聞いたのは二日後の朝のことだった。朝餉の膳を下げに来た下女の綾が、桜草を売りに来た植木屋から知らされたばかりだといって眉をひそめた。
「どんな男だといっていましたか？」
「薦をかけられていたので顔は見えなかったそうですが、若い川人足のようだといっていました」
綾は色黒の顔をそっと精一郎に向けてきた。頷いて見返すと、綾の目が逃げ場を失った兎のような戸惑いを見せた。精一郎とさして年齢の違わない下女だったが、この家の総領に対する怯えがあるのか、精一郎とはまともに目を合わせようとはしなかった。
精一郎は立ち上って小刀を手にした。あの、と綾が、持っている膳を空中で止めたまま遠慮がちに口を開いた。
「どうかしましたか」
「さ、先程、お殿様が若様のことをお尋ねでございました」
「父上が？　何と？」
「若様はどんなご様子かとか、膳のものはみな手をつけているかとか……大そうご心配のご様子でした」
「分かりました。出掛ける前に父上にご機嫌伺いをしておこう」
障子を開いて出ていこうとする綾を、精一郎は呼びとめた。振り返った綾の顔の向こうに梅の花が色づいていた。
「おう、もう梅の花が咲き始めたのか。二、三日前はまだ蕾のままだったが」
「はい、たった一日で花は娘から女になります」
綾は口許から白い歯を覗かせて庭の隅に顔を向けていった。綾の何気ない答えに、精

一郎は胸を女の長い洗い髪で打たれたような驚きをうけたのだが、綾はそれには気付かないようで、その横顔からは、爽やかな香りさえ漂ってくる。

顔を戻した綾は、精一郎の視線に出会って、あわてて目を落した。そこで精一郎は安心して今しがた言いかけたことを伝えることができた。

「父上のことを色々と気遣ってくれてありがとう」

そんな、といって綾は手に持った膳の中に顔を埋めるようにした。

「綾の目には、私は父に逆らっているように見えるのだろうね」

「そ、そんなことはございません。あ、あたしは、そんなつもりで申し上げたのではありません」

綾の細い肩が震えて、膳の上の皿が音をたてた。いいんだ、と精一郎は呟いた。

「侍というものは、家を継ぎ、守るために生きているのだ。それは分っている。だが、そう気付いたときは、私自身の命は終っているのだ。それはさみしいことだと思わないか」

精一郎はぬくみを含んだ春の風を胸元に受けて、少し感傷的になっていたのかもしれない。目を大きく見開いて、地蔵さんのように固くなっている綾に、それまで思ってもみなかったことを口に出していった。

「綾はいいなあ。家などには縛られず、好きになった男のところへいつでも嫁いでいけるんだからね。飛ぶ鳥のように、どこへでも、雲の向こう側へでも……」

視線を空に向けると、いきなり燃えている陽光が目にとび込んできた。頭を動かし、白い雲と清流のような空を、目を細めてちょっとの間精一郎は見つめていた。そうしていると、自分の魂が体内から飛び出し、風のように大空を遊び回るのが感じられるのだった。

廊下に別の下女が現われて綾の名を呼んだ。綾は挨拶をして精一郎の前を離れていったようだったが、精一郎はうわの空だった。透明だった魂が、青い色に染って、空の彼方に吸い込まれていくのを見たように思えた。

父忠之丞の居室は、池を前にした一番奥にあった。精一郎は廊下に片膝をつき、訪いをいれてから障子を開いた。書見台から顔を上げた忠之丞は、頬に皺を寄せて笑い、口に何かを含むようにして小刻みに頷いた。

「中に入らぬか」

「これから所用があって出掛けます」

「出掛ける？　どこへだ？」

「ご心配なく。四谷ではござりません」

精一郎の返答に、忠之丞は眉間に縦皺を寄せて唇をすぼめた。四谷北伊賀町稲荷横町

に、平山子龍の屋敷があった。破門を受けた精一郎には当然足を向けられるところではなかった。

「平山殿は立派な方だ。あれだけの憂国の士はもう現われまい。しかし、何分、お上より目をつけられておる。血気にはやり過ぎたのだ」

「この国を、夷狄の侵略から守ろうとする志の、どこがいけないのでしょう」

「守るだけならよい。しかしだ、罪人を集め軍隊にしたてておろしやに攻め込むなどという暴挙は、断じて聞き容れられるものではない」

「そのことについて、父上と論ずる気はございません。ですが、私が平山先生を尊敬する気持は生涯変わることはありません」

先程までの、空を見上げて遥かな心持になっていた精一郎はすっかり消えて、背中に鉄の板を嵌め込んだ、意地の張った強情者に変っていた。

忠之丞は吐息をつき、所在なげに書見台の書物に目を落した。だが、その開かれた箇所に気が入っていないのは明らかだった。

「依田金左衛門殿のことだが、いつからでも教授して下さるといっておられる。どうじゃな、習う気になってくれたか」

忠之丞はそういって目をしばたたいた。親戚から、仏のようにいい人だと慕われている性格の良さが、息子に対して臆したような物言いをするその表情に表われていた。

「書は平山先生に習いました。新たに師を求めるつもりはございません」

「じゃが、平山流の書道では書役は務まるまい」

「平山塾に入門しろ、三年間は家に帰るな、と私に命じられたのは父上でございます」

「わしはこれからのおぬしのことを憂慮して申しておるのだ」

「お気遣いはご無用です。これにて失礼つかまつります」

「待て、精一郎」

忠之丞は腰を浮かしかけた。だが精一郎がそのまま動かずにいるのを知って、そっと溜息をついた。その黒眼の隅が白濁していた。父はまだ四十四歳だったが、視力が衰えかけているというのは本当のことかもしれなかった。

「羽田藤四郎殿には先方が難渋するのを、こちらから何度もお願いして、ようやく引き受けて下さったのだ。羽田殿のところにだけは通ってはくれぬか」

「御小十人組に、算術など不要です」

父忠之丞は御小十人組。百俵高十人扶持だった。御鷹匠や御庭番と同格で、幕閣では低い地位にあるその役目につかせるために、隠居後は旭斎と名乗った祖父の男谷新次郎が、どれほど多額の金を使ったか、想像するだけでも嫌な気分になった。

「わしはそんなことをいっているのではない。元勘定組頭を務めておられた羽田殿から、直々に算術を習ったとなれば、御番入り吟味の際、何かと有利に働くと申しておるの

だ」

「私は勘定方など不向きです」

「何をいうか精一郎。今の世は武術よりも学問だ。それも兵法書などではなく儒学、算術に秀でていなくてはならん。無筆無算ではとても御番入りは望めんぞ」

「結構です。堅苦しいお城勤めなど私には合いません。急ぎますので、これにて」

精一郎は一礼すると、くるりと身体を回して一度も振り返らずに玄関まで出た。困惑した父の表情が脳裏に貼りついていたが、同情している余裕はなかった。今の自分は、小さな火を翳されただけで爆発してしまう火薬庫みたいなものだと思った。

門を出ると、入れ違いに忠次郎がどこからか帰ってきた。用人の源兵衛が一緒なので、乗馬にでもいってきたのかもしれないと思ったが、精一郎は軽く頷いただけで、何もいわずに屋敷を後にした。茫然と佇んで兄の後ろ姿を見送っている忠次郎の姿が、精一郎の胸に浮いた。

四

竪川にかかっている一ツ目橋を渡って弁才天の脇を通り、川の流れと反対に東に向かい、六間堀をまたぐ松井橋にさしかかると、向こうから大八車を引いた数名の男たちがやってくるのが見えた。

精一郎は橋を渡って小走りに大八車に近づいていった。大八車には確かに死体が乗せられていて、薦が被せてある。車を引いている男も、後ろから押している男もみんな暗い顔を手拭いで隠している。役人らしい者の姿は見えない。ちょっと、といって精一郎は先頭を歩いている男に声をかけた。男は赤く充血した目でギョッとしたように精一郎を見上げた。

「今朝、川に浮いていたというのはこの人ですか」

男は答える代りに精一郎の風体を上から下まで眺めた。頬から顎にかけて濃いひげが生えている。男の体臭は独特で、腐った魚を塗りたくったような臭いがあった。

「そうだが、あんたは？」

「ちょっと見せてもらいます」

精一郎はかまわずに薦の端を引き上げた。形相は変っていたが、先夜、浪人者から額を斬りつけられた安という人足に間違いなかった。身につけていた物はあらかた流されてしまったものらしく、腹の周囲に紐が巻かれている他は、褌が締められているだけの裸だった。

「あんた、安を知っていなさるのか」

大八車の傍らにいた六十がらみの老人が、首を曲げて眩しそうに精一郎を見た。病気

のせいか老人の片方の頬は細かい痙攣を起こしている。
「知り合いではありません。先日の夜、この人が浪人者から額を斬られた時、たまたまそばにいたんです」
そういうと、男たちは日に焼けた互いの顔をじっと見つめ合った。だが、結局何もいわなかった。
「役人はどうしました」
「けえった」
「どうしてです？　検死は済んだのですか？」
「酔っぱらって川に落ちたんだ。調べる必要はねえって、けえっていったよ」
大八車の後方にいた比較的若い男がぶっきら棒にいった。口調の割には、精一郎を見る目は、他の者程剣呑ではなかった。
「安さんは刀の峰で打たれたんです。それから川に蹴り込まれたのでしょう。ほら、このところが内出血している」
首の付け根と脇腹、腕に赤黒い鬱血があった。男たちはそれぞれ身を乗り出して見ていたが、一人がやがてぼそりと呟いた。
「杭にでも当ったんだろうってよ。溺れ死んでからできた傷だとよ」
「死んでからできた傷ならこんなに腫れません。誰かにやられたんです」

精一郎は男たちを見回して反応を待ったが、誰もが土鍋の底のような顔を向けたまま押し黙っている。
「それで、安さんをどこに運ぶのですか」
「小屋だ」
「小屋？」
「こいつの小屋だ」
「弔いをしなくちゃなんねえだろ」
「そうでしたか」
精一郎は小銭入れを取り出し、指の先に触れた粒を摑み出した。一分金と二朱銀が二枚あった。それで一両の半分になる。九尺二間の長屋であれば、半年間は住めるだけの金だった。それを一人の老人に差し出した。掌を広げて受け取った老人は、ごっ、と奇妙な声で喉を鳴らして他の者にも見せた。男たちの口から小さなどよめきが発せられた。無機質だった顔に、急に人間らしい表情が生まれた。
年嵩の頭が、どうも、といって頭を下げると、他の者がそれにならって頭を下げた。精一郎も誰にともなく礼をした。大八車が動き出すと蔦からはみ出した死体の足が、二匹の蛙のように交互にはねた。
大八車を見送ったあとで、精一郎は足を二ツ目橋に向けた。死体が仲間らしい者達に

よって運び出された後も、橋の袂では溺死体が発見された騒ぎがまだ残っていて、何も知らずに川魚や野菜を買い出しに来た者に、林町二丁目の住人が、河面を指さしながら何事か説明する姿も見られた。

精一郎はそんな町屋の人々の中に、溶け込む工夫をこらしながら、さり気なくあたりを観察した。もし安さんの溺死に、先夜の浪人が関与しているのであれば、死体が発見されたことに無関心ではいられないはずだった。

精一郎は町屋の南側に建っている広大な武家屋敷の塀づたいに弥勒寺に出て、弥勒寺橋の手前を折れて、入片町の広小路にさしかかった。入片町は元々は旗本の屋敷があったところだが、暮しに窮した旗本が町人に貸している内に、いつの間にか町屋を形造ってしまった一角だった。その細い小路から、痩せた浪人が押し出されるように出てきた。浪人は懐中に片手を入れ、もう片方の手を刀の鍔に引っかけて、ふてくされた面であたりを眺めた。精一郎は浪人が投げかけた視線の死角になるあたりまで移動し、その上でさり気なく町屋の陰に入った。

その浪人が、先夜、別の侍を待ち伏せして、肘から先の腕を斬り落した張本人であることは一目で分った。通常、刀を二本差している武士は、刀の重味で自然に左肩を下げて歩くことが多い。だが、この浪人は、極端ではないにしろ、右肩を下げて歩く癖がついている。

あるいは武家の生まれではないのかもしれない、と思いながら、精一郎は背中を揺らしながら東に向って下っていく浪人のあとをつけていった。

浪人と精一郎の距離は充分にあったが、浪人の姿が静かな武家地に入っていったため、精一郎は自分があとをつけることの無理を感じた。何かの拍子に浪人が振り返ったとき、今は安さんの溺死体が上ったことで周囲に敏感になっているはずの浪人ならば、自分が先夜、闇討ちを目撃した「小僧」であると見破られてしまうと思った。

どうしたものだろうと思案しながら歩いていると、路地から、大きな唐辛子の張り子を、右の肩に担いだ男が出てきた。男は役者でもないのだろうが変った身なりで、文字のようなものを染め抜いた、袖のゆったりした上衣を着て、花弁を散らした絹の袴をつけている。とっさに精一郎は男に声をかけた。

「失礼ですが、ちょっと頼まれごとをして頂けませんか？」

「なんでしょう」

頭に派手な色に染め抜いた手拭いを置いた男は、精一郎が差した小刀に目をやってから、どこか狸に似たひょうきんな顔を向けた。

「あの浪人のあとをつけてほしいのです。行き先を突きとめたいのです」

半町程先を行く浪人の後ろ姿は、心なしか右に左に揺れている。朝から酒を呑んでいるのかもしれない。

「いいですよ。代りに唐辛子を買ってくれますか」
顔を戻した男はあっさりと了解した。唐辛子、と呟いて精一郎はあらためて男の上衣を点検した。文字だと見えたのはやっぱり文字で「とんとんからし」と書いてある。
「あなたは唐辛子を売っているのですか」
「そうですよ」
男は番傘程もある張り子の唐辛子を肩の上で躍らせた。浪人の姿がまだ消えずに視界にあるのを確認して、精一郎は分かりましたといった。
「買います」
「いくつ？　二袋三文だけど」
「百袋買います」
「ひゃく？」
男は目を丸くした。精一郎は男の腕を引いて、あの浪人ですよ、と念を押した。
「私は二ツ目橋の袂で待っています。くれぐれも気取られないようにして下さい」
そういって精一郎は唐辛子売りを押し出した。男は軽快な足取りで歩いていき、浪人との距離をすぐに十間程に詰めた。すると不意に振り返って、心配して見ている精一郎の方に向って張り子の唐辛子を、まるで火消しの纏持ちにでもなったように、大きく上下に振ってみせた。精一郎は笑いをこらえて二ツ目橋に向った。

唐辛子売りは四半刻もしない内に戻ってきた。分かりましたよ、と愛嬌のある顔をさらに丸くしていった。
「案内します。ついてらっしゃい」
唐辛子売りは先に立って足早に歩き出した。あとを追いながら、精一郎は自分が唐辛子売りの弟子にでもなった気がして仕方がなかった。
「あの屋敷に入っていきました」
そこは三ツ目橋に近い徳右衛門町一丁目の屋敷町で、唐辛子売りが指さした屋敷は、片番所付の長屋門のある壮大な邸宅だった。さすがに精一郎もすぐには声が出せなかった。
「まことに、あの屋敷に入っていったのですか」
「まことです。あの門の脇の潜り戸から入っていきました」
「ここはいったい……」
呟きながら精一郎は陰に身を寄せた。長屋門には屋敷に仕える家士が住んでいる。片番所には番人がいて、大抵はぼんやりしているのだが、今は目を光らせていないとも限らない。
「ちゃんと調べておきました。なにせ唐辛子百袋ですからね。ここは三千石のお旗本、秋月様のお屋敷だそうですよ」

そういってから唐辛子売りは、荷を下ろして十袋、二十袋と唐辛子を数え出した。しめて百五十文也を払った精一郎は、無駄な出費をしてしまったと悔む気持より、いったい何といってこの大量の唐辛子を下女に手渡したらよいのかと、悩むことの方が大きかった。

「お武家様、ちょっと……」

弁才天のあたりまで来ると、暗がりから影のように滲み出てきた人足の風体をした男が、精一郎の袷の袖に手をかけて、軽く引いた。その男が今朝、安さんの屍を大八車に乗せて引いていた一団の内の一人であると、精一郎はひと目で分った。安さんの仲間を見つけるつもりで、夕方からこのあたりをうろついていたのだ。

「今朝はありがとうごぜえます。おかげで弔いを出すことができただ」

男は一団の内にいた一番若い者だった。今朝はつっけんどんな物言いをしていたが、精一郎に死んだ仲間に同情する気持があると知ったせいか、丁寧な物腰になっていた。男は留吉と名乗った。

「汚ねえとこだが、入ってけろ」

古材木が積んである裏手に筵掛けの小屋があった。中はひどい臭いで精一郎は息が詰った。糞尿、腐り物、獣の焼きかす、垢。はき溜めにあるようなありとあらゆる物の臭いが籠っていた。

「ここがあっしと安のお城だぁ」

瓦灯に火をつけて留吉はいった。中は男二人がやっと横になれるだけの広さで、土鍋と木箱の他はおよそ物らしい物はなかった。

「お侍様はここに腰掛けてくれ。着物が汚れっからな」

留吉は暗がりに手を伸ばして五升樽を出してきた。精一郎がいわれた通り樽に腰を下ろすと、留吉は筵に坐って湯呑みに濁り酒を注いだ。

「呑んでくれ」

湯呑みを差し出してきたが精一郎は断った。

「んじゃ饅頭を食うか、干し魚もあるぞ。なんでもあるから、欲しいものをいってけれ」

留吉は木箱の中に手を突っ込んで、饅頭や干し魚の他に大根や海草を出してきた。本当に何でも入っていそうな木箱だった。精一郎は饅頭を手にした。一口食うと甘味が口の中に広がった。うまい、というと留吉は心から嬉しそうに笑った。

濁り酒をちびちびと呑みながら、安の野辺の送りの様子を話したあとで、留吉は意外なことを言い出した。

「お侍様、安の敵を討って下せえ。あいつはお旗本に殺されたんだ。あっしらじゃどう

にもなんねえけど、お侍様なら安の敵は討てるだ」

留吉は一気に喋ったあとで、いやそうじゃねえ、こんだらことお侍様にお願いしちゃいけねえんだ、と呟いた。

「安さんが留吉さんに何かいったのですか」

「辻斬りを働いた奴の正体が分ったといっていただ。奴も顔を斬られて頭にきていたからな、一日中捜しまくっていただよ」

「誰です？」

「あきづき、つう三千石のお旗本の若様だ」

「……」

「驚かねえな」

「私も調べてみたのです。安さんに乱暴を働いた浪人が、秋月様の屋敷に出入りしていることまでは分ったのです。しかし、若様ではないでしょう。三千石の若様が浪人の風体をして、市中を徘徊するということなどあり得ませんから」

「そうかね。安は間違いねえといっていただ。なんでもそいつの父親はあきづきだいがくっていって、ここら一帯の火事場見廻りつうお役についているんだと。んだからそいつの倅に浪人のかっこさせて、あちこち調べさせているんだとよ。倅はあきづきんじろうっていうそうだ」

精一郎はさすがに驚いた。幕閣のことは詳しくは知らないが、それでも本所深川火事場見廻りといえば寄合からの出役で、大変な権勢を誇っているはずだ。使っている家士の数も三、四十人はいるはずだった。

「ですが留吉さん、秋月大学様の若様が金次郎さんだとしても、あの夜の浪人者がその人だとは思えません。あの浪人は待ち伏せをしていたばかりか、強請りまがいのこともしていたのです。旗本のすることではありませんよ」

そういったが、留吉は頭を振るばかりで精一郎の言葉を聞こうとはしなかった。

「安は馬鹿だ。大馬鹿者だぁ。いくらお役人にいっても聞いてくれねえからって、まともにお旗本に因縁つけちゃあ、殺られるのがあたりめえだ。きっと五両ぐれえにはなるといっていやがったけんど、五両どころか、てめえが仏様になっちまったじゃねえか。安は馬鹿だぁ」

留吉は急に酔いが回ったのか、立てた両膝の上に頭を置いて、くだくだと要領を得ないことを言い出した。精一郎は「仏前に供え物をして下さい」といって一分金を置いて小屋を出た。弁才天の前にさしかかると、いつもの担い屋台が出ていて釜から湯気を高く噴き上げていたが、さすがに蕎麦を食べる気は起きず、黙ってその前を通り過ぎた。

五

考えた末に精一郎は秋月金次郎宛に書状をしたためた。それには、先夜の事件を目撃したこと、武士の腕を斬り落した件については、二人の間に子細があるようなので関知しないが、安という人足が溺死体で発見されたことに係りがあるのなら、正直に名乗りをあげるべきではないのか、安があなたに無礼を働いた上での手討ちならば、役人なり目付なりに報告すべきではないのか。そして、安は先日仲間の者達によって野辺の送りに付された、といったことを書いて、最後に番場町男谷精一郎と自分の名をしたためた。父の名を書かなかったのは、父にとばっちりが及ぶのを恐れたからだ。

書状を書く前に、なんとかあの夜の浪人者が秋月金次郎である確証を得たいと思い、何度か秋月の屋敷を見張った。初めに見たのは登城する秋月家の当主で、開かれた門から馬に乗って出てきた姿を目のあたりにしたときは、さすが三千石の殿様だと思わせた。馬印を背に挿して馬に乗った立派な侍が二人従い、立弓、長刀、草履取りがいて、さらに挟箱や沓箱を持った者が続き、最後に荷駄を積んだ馬が二頭、ぽくぽくとのどかな音をたてて通り過ぎていくのを、海鼠壁の陰に隠れて眺めていた。

くだんの浪人者が羽織袴のきっちりとした姿で、脇の潜り戸から出てきたのは夕暮時で、たまたま下男の千蔵に代って見張りに立っていた精一郎自身が目にすることができた。髪もきれいに結われ、すっかり見違えた男ぶりは、とても先夜の荒んだ浪人者と同一人物とは思えなかった。

侍は尻からげをした若い男を供に連れて、急ぎ足で西へ向った。精一郎も後をつけたが、二人が両国橋東詰の小料理屋に入ってしまったので、とたんに途方にくれた。中に入るだけの勇気がなくて水を打った門の前で佇んでいると、不意に供をしていた若い男が赤い顔をして出てきた。酒を一杯ひっかけてごきげんになっている男に、今入ったお方は秋月様の若様ではないですか、と尋ねると、そうだと答えが返ってきた。何か御用で？　と訊かれて、いえ用はないが、剣術の道場でお見かけしたことがあるもので、とすましていうと、お武家様も小川町の撃剣館にお通いで、というのを、ええまあ、と精一郎は歯切れの悪い返事をして帰ってきた。たとえ嘘をつくのは仕方がないにしても、神道無念流を習っているふりをするのは居心地が悪かった。

それで納得した訳ではなかったが、他に確かめるすべもなかったし、安の一件をこのままうやむやにしては、見ていた者もいることだし、むしろ問題が大きくなるのではないか、と人ごとながら思い詰めて、精一郎は書状をしたためることにしたのだった。それであれば表沙汰になることもないだろうと、精一郎なりに配慮を示したつもりだった。

使いに出した千蔵は四半刻程で戻ってきた。書状は門番の方にお渡ししてきましたと

いう。秋月金次郎様はご在宅のご様子だったかと訊いても、さあ、どうでしょう、と千蔵は要領を得ない。その海鼠のような浮かない顔を見ている内に、果たして自分のしたことはよかったのか、出すぎたことをしでかしてしまったのではないかと精一郎は不安になった。その夜はまんじりともしないまま床に横になっていた。

翌日、四ツ（午前十時）に秋月家から使いが来て、口頭で用件を伝えてきた。

「秋月金次郎が男谷様にお目にかかりたいと申しております。恐縮でございますが、至急に当家屋敷までご足労願いたいのでございますが」

使いは駕籠を連れていた。初めに取次ぎに出た忠次郎が用人の源兵衛に伝え、驚いた源兵衛が主の忠之丞に大変でございますと注進に上ったため、奥の座敷では騒ぎになりかけた。秋月様は私に御用があるのです、と精一郎が奥に行っていうと、父も源兵衛も口を半開きにして平たくなった目を向けてきた。二人の顔がどことなく鮟鱇と呼ばれる面白い顔をした魚に似ていることに思い至って、吹き出す前に精一郎は早々に父の居室の前から辞去して玄関に向った。

「兄上、父上がどういうことかと心配をされています。源兵衛と私に兄上の供をするように命じられておられますが、いかがいたしましょう」

忠次郎は細面の顔を向けて、少し青ざめた様子でいった。

「何も心配はいらないと父上に伝えて下さい。そうだ、これは不要だから置いていこう」

精一郎はそういって長刀を、玄関にやってきた千蔵に預けた。秋月家の使いの者はかしこまりながら、いぶかしそうに精一郎を見上げている。登城をするときは勿論のこと、他家を訪問する際も、大小二本の刀を差していくのが武士のたしなみであり、しきたりだった。

「私はいつもこれだけで外に出ているものですから」

小刀を差して笑いながら駕籠に乗った。大身の旗本が乗るような飾りの多い駕籠に乗ったのは実は初めてだったが、家の者が見ているのでかえって落ちついてふるまうことができた。それに精一郎の差している小刀は初代越前の康継で、刃渡り一尺七寸二分と通常の脇差より四寸程長かった。大小の刀とも、師の平山子龍が見たててくれたものだった。それを一本差しているだけで、いかなる事態に遭遇しても、胆力を失うことなく、平静に対処できる自信が出るような気がした。

精一郎は窮屈な駕籠の中で、侍ともあろうものが、どうしてこんなものに乗るのだろうと思っていた。戦時にこんな馬鹿げたものに乗っていた武将はどうかしている、まるで襲って下さいといわんばかりのものだ。だから武田信玄は鉄砲で撃たれて死んでしまったのだ、と胸の内で呟いていた。

そんなことを考えたのは、このまま自分が秋月の屋敷内に運ばれ、門を閉じられた後で槍を四方から突き刺されたらひとたまりもないな、と乗った時に感じたからである。

相手は待ち伏せていきなり斬りつけてくるような輩なのだ。それ位の奸計を練るのはなんでもないはずだ。

それでも割合悠然と駕籠に揺られていたのは、この機会に駕籠の乗り心地を試してみようという子供じみた気持になったことと、未だにあの夜の浪人が、三千石の旗本の若様だとは信じたくない思いが働いていたせいだった。

駕籠が止ったので、精一郎は外へ出る支度をした。すると、どうぞそのままと声がかかった。仕方なくじっとしていると屋敷の門が開かれ、駕籠は石畳の上をすべって式台の脇につけられた。

「ここからは入れません」

駕籠から出た精一郎は必死に辞した。広大な屋敷は、塀の内側が家士の住む長屋になっていて、外からの襲撃をそこで食い止められるように設計されている。どの長屋も静まり返っているのは、当主の秋月大学に従ってみな登城したからだろうと見当をつけた。ここでいきなり囲まれて斬りつけられることはなさそうだと思いながら、精一郎は式台付きの玄関から屋敷に上がることは固く拒んだ。

「こちらから入らせていただきます」

脇にある錠口の前に佇んで、迎えに出てきた秋月家の家士にそういった。

「それでは、どうぞこちらへ」

家士は油断のない目付きで精一郎を見つめ、中の口から奥の間へ案内した。

「ただ今、茶をお持ち致します」

家士は慇懃にいって襖を閉めた。部屋は八畳間で床の間には狩野派の誰かが描いた花の絵が掛けられている。部屋の中は思いのほか明るく、障子の向こうは庭になっているらしく、陽を受けた庭木の揺れが感じられる。

襖が開いたので、茶が来たのかと思って振り向くと、丸顔の上品な侍が薄笑いを浮かべて佇んでいた。

「若いな。書状を読んで、もそっと年喰った者を想像していたのだが、ずっと若い。いくつになられる？」

「十五歳になりました」

「ほう、拙者より六つも年下だ。それにしては文章がしっかりしておられる。誰に習われた？」

侍は座敷にずかずかと入ってきて、床の間を背にして坐ると、精一郎の顔をまじまじと眺めた。その目が小鳥のように小さい。

「平山子龍先生の兵原草廬に三年半程おりました」

いってしまってから、背中が熱湯をかけられたように熱く痛んだ。破門になった者が、

口にしていいことではなかった。

「ほう、あの平山の……。色々と話には聞いておるが、三年半も鬼の住み処で修業をした者に会ったのは初めてだ。いや、さもあらん。立派なものだ」

開け放たれたままになっている襖の陰に家士が現われて、不粋な手つきで茶と茶菓子を二人の前に置いた。こういう屋敷では、きれいなお女中がたくさん働いているのだろうと漫然と思っていた精一郎は、ちょっと意外に思った。

「左門はいかが致した」

「おっつけ出ていく頃でございます」

「さようか。左門を裏門の前に立たせておけ」

「かしこまりました」

家士は無表情に頷いて出ていった。

「菓子を食え。毒は入っておらん」

そういって絹の羽織を着た侍は、菓子をつまんで口に含んだ。もぐもぐとやって小さな目を白黒させている。胸を叩いているのは、餅が喉につかえたからしい。

侍の妙にさばけた様子をそっと見ながら、この人は何者なのだろうと精一郎はいぶかしんだ。そして、もしかしたら、と思ったとき、どうだ？　と大きな声が放たれた。丁度、菓子をくわえた所だったので、なかなかおいしいです、と精一郎は答えた。

「そうではない。この顔じゃ。どうだ？　おぬしの見たという浪人に似ておるか？」

侍は精一郎の前にぬっと顔を突き出してきた。

「いえ、全然似ておりません」

「拙者が秋月金次郎じゃ」

秋月は身体を戻すと、にっと笑った。精一郎は菓子を急いで飲み込むと、身体を後ろにやって畳に手をついた。

「不作法を致しました。お詫びの致しようもございません」

「ちょっとこっちに来い」

秋月は立ち上って障子を開いた。精一郎は全身にどっと汗が噴き出し、平伏したままでいた。いいから来い、と秋月がもう一度いった。そういわれても動けるものではなかった。三千石の若様を辻斬り呼ばわりしたのだ。ただで済むことではなかった。

「来いといっているのが聞こえぬのか」

秋月の白い顔が初めて神経質そうに歪んだ。精一郎は膝をついたまま秋月の傍までにじり寄った。

「あの男ではないのか」

秋月は精一郎の襟口を摑んで、自分の顔の前に引き上げた。庭を通して裏口に佇んでいる侍の姿が精一郎の目に入った。削げた頬と尖った顎は、十七間離れた所からでも確

認できた。何より、明るい光の中で見る剣呑な目付きが不快だった。

「あの侍です」

「あれは木内左門といってな、当屋敷に巣くっていた大ネズミじゃ」

障子を閉めて床の間を背に坐り直すと、秋月は茶を口に含んだ。だがすぐには飲まず、うがいをするように口の中でがらがらとやってから、目を一回り大きくさせて飲み込んだ。このお方の所作は、どうにも若様らしくないな、と精一郎は血が凍りついたように感じる中で思っていた。

「左門の姉と拙者の父上がわけありなのじゃ。つまり、コレだ」

秋月は小指を立てた。口には出していなかったが、旗本に対して犯した重大な失態は、死をもって償うしかない、と思い詰めている精一郎にとって、秋月の仕種の一つ一つが癇に障った。

「父上が知行所から摘んできた女がいてな、その折、左門も一緒に連れてきたのじゃ。もう八年になるかの。国では船頭をしていたそうじゃが、ここに来てからやっとうをやり出してな。岡田十松の道場に通い出して相当の腕前になったようだが、奴め、図に乗って本物の侍になりたいと言い出しおった」

「秋月様……」

「父上も愛妾の弟のこと故、なんとかしてやりたいと思われた。じゃが所詮は船頭、旗本の所へ養子に出すわけにはいかん。残る手だては御家人株を買うことだ」

「秋月様」

「なんじゃ」

秋月は間延びした顔で精一郎を眺めた。

「お許しが頂ければ、庭先を拝借したいのです」

「庭？　ションベンでもするのか」

「……」

「何だ、恨めしそうなツラをして。何が所望なのじゃ」

「腹を斬ります」

精一郎は畳に手をついて秋月を上目遣いに見つめた。唖然とした様子でいた秋月は、つと立ち上って精一郎の前に来て肩に手を置いた。

「拙者はおぬしのような率直な若者が好きだ。しかもおぬしは美しい。かような美しい者を見たのは久方ぶりのことだ。どうじゃ、腹を斬る前に、拙者と情を交わしてはくれぬか」

「……」

「はは、冗談じゃ。怒った顔がまたいいのう。どうじゃ、いっそのこと拙者の妹をもらってはくれぬか。おぬしより二つ年上だが、こいつが拙者より丸顔でな。頬を突つくと

今にも弾けそうでなかなか愛い奴なのじゃ」

「秋月様、私は……」

「もうよい。拙者のことで腹を斬るなど無駄なことだ。おぬしには生きてやらねばならぬことが、まだまだたくさんあるはずじゃ。そのために、平山行蔵の門をくぐったのであろう」

「ですが、秋月様に、あのような無礼を働いては、おめおめと生きては参れません」

「生きて参ればいいのじゃ。侍の見栄の為に死ぬなどくだらん。おぬしが忠誠を誓うべき相手は他におる」

秋月は空になった湯呑みを傍に置いて、膝を崩して坐った。なぜだか精一郎の胸に、平山子龍から受けた強烈な感銘とは別の、ほのぼのとした行灯の灯りのようなものが忍び込んできたように感じられた。

「先程の話じゃが、三千石といっても内情はなかなか厳しい。父がいくら力んでも、百俵扶持で千両二千両もするという御家人株など、妾の弟においそれと買い与えられるものではない。そこで左門はやけになったのじゃ。やけになって御家人を賭場に誘い込み、あわよくば御家人株を巻き上げようと目論んだのじゃ。時には拙者の名を騙って、カモと目をつけた者に近づくこともあったそうじゃ」

「……」

「今朝、拙者は父上を説き伏せ、左門をこの屋敷から追放させた。おぬしからの書状がものをいったのだ。これ以上、左門に好き勝手させては、秋月家が断絶になるとな。男谷、礼をいうのは拙者の方だ。おぬしの正義のおかげで、秋月家の崩壊が未然に防げたのだ」

「そのようなお言葉は、もったいのうございます」

「男谷、左門に気をつけろ。あやつは今後おぬしをつけ狙うやもしれん。やつの剣は行き場を失っている。この屋敷から出るときでさえ、油断するでないぞ」

はい、といって精一郎は頭を垂れた。秋月金次郎の言葉は耳に入ってきてはいたが、実は木内左門という浪人のことなど、少しも気にかける気はなかった。眼中になかったというのではない。

初めて会った秋月金次郎のどこか人を喰ったような、それでいて人なつこく、思いやりに溢れた心遣いが嬉しく、それは一体、どのようにしたら会得できる悟りなのだろうか、と不思議に思う気持が全てであったからだ。

屋敷の門の脇の潜り戸から外に出たときも、昼間のせいもあって、木内左門のことはすっかり精一郎の念頭から離れていた。

白刃は、秋月家の斜め向かいにある、本多肥後守の下屋敷の角を曲ったとたん、生きている光のように美しく伸びてきた。

第三章 無頼

一

それは不思議な光だった。

輝きの中に人の発する怨念が籠もり、白光はさらに伸びると黄金をちりばめたような赤色に変った。

それが自分に向って突き出された抜き身の刀が、陽光を受けて反射したものだと気付いたのは、身を反転してかろうじてその切っ先から逃れたときだった。

精一郎は小刀の鯉口に手をかけて、塀の角から現われてくる男を見つめた。緊張は一気に頂点に達してはいたが、自分の身に起ったことをはっきりと把握していたわけではなかった。

「小僧、よくかわしたな」

白壁から黒い影が立ち上ってそういった。明るい昼の光の中に、頬肉のそげた木内左門の顔がぬっと出てきた。

「偶然か。それともおれが待ち伏せていたのに気付いておったのか」

木内左門は口元に陰惨な笑みを浮かべた。だが細い目は笑ってはいなかった。藪に潜む蛇のように冷たく湿っていた。

精一郎は答えられずにいた。驚きのためだけではない。いましがた秋月金次郎に木内には気をつけろと忠告を受けたばかりなのに、それをすっかり忘れて何かフワフワしたような感じで歩いていた自分のうかつさを思い知ったことと、襲撃してきた木内の剣は、相手の腕を見るために突いてきたものではなく、本気で不意討ちを狙った居合い剣であったことを知ったからだ。

「その様子を見ると、おれに怨みを受けることなど少しも考えておらなんだようだな」

右足を引いた木内は、下げていた刀身をゆっくりと持ち上げた。

「おまえの密告のおかげでおれは秋月家を放逐された。そればかりではない。御家人株を手に入れることも叶わなくなったのだ。これまでの労苦が水の泡だ。小僧、おれを売って秋月からいくらもらった」

刀の柄を顎の後ろまで引き、木内は刀身を水平に倒して、切っ先を精一郎の喉元に向けた。

いくらもらったと口では訊いているが、その答えを待っているのでないことは明らかだった。木内の細い目は押し上げてくる殺意で脹れ上っていた。弁解するのは勿論のこと、復讐心に衝き動かされている者を説得することなど無駄なことだった。

この男は狂犬と同じだ。そう思うと木内の唇の端から、ねばりのある涎が垂れているようにすら精一郎の目には映った。

その切っ先がじわじわと迫ってきて止った。精一郎の喉元までわずかに三尺しかなかった。木内の持つ刀の刀身は二尺二寸。精一郎の生命は、木内の間合いの内にとらえられていた。

しかし、精一郎の胸の内には、恐れも焦りも浮いてはいなかった。落ちついていられる理由は分からなかったが、木内の目に噴き出した憎悪の色を見つめていると、相手の呼吸が手に取るように感じられるのだった。その呼吸の調子を盗んでしまえば、相手は打ち込むきっかけを失ってしまうことを精一郎は知っていた。

ひゅっ、という音が木内の口から洩れた。精一郎は腰に差した小刀の鯉口を軽く摑んで膝を緩めた。だがそれは、気持の中でごく自然に膝を緩めただけであって、動きとして表われたものではなかった。自分が少しでも動けば、恐怖の極限に達している相手は、やみくもに剣先を突き上げてくるだろうと思っていた。精一郎には小刀を抜くつもりはなかった。

「ふ……」

木内の唇の端から泡粒が吹き出した。同時に剣先に集った光の点を渋い曇りが覆った。その刹那、精一郎の小刀の柄頭は木内の鳩尾深くに食い込んでいた。

身体ごと打ち込まれたため、木内は一間も吹き飛んで腰を本多邸の外塀に打ちつけ、ぬかるみの残った地面に尻をついた。

「お、おのれ！」

赤鬼のように顔を脹らませて木内は精一郎を睨み上げた。その顔には殺意と共に戸惑いも混っている。打たれた瞬間木内は気を失ったはずで、立ち上がろうとしているものの、夜中に目が覚めてしまった子供と同じ恐怖を味わっているはずだった。

「あなたを密告したのではありません」

精一郎は木内の面に目を据えていった。林町五丁目の町屋の方からあわただしく近づいてくる足音を耳にしていたが、木内の顔から目を離さなかった。

「秋月金次郎様に、犯した罪を潔くお目付様に自白して出るべきだと、書面にしたためて申し上げたのです」

「なにを……」

木内は抜刀したままの真剣で土を叩いた。膝が笑ってしまって容易に立てないでいる。

「先日、私は浪人の風体をした侍が幕臣らしい人を待ち伏せした上、いきなり斬りつけ

てその人の腕を斬り落す場面に出合いました。数日経って、同じ現場に居合わせた人足が殺されて竪川に浮きました」

そう言いながら精一郎は木内が白壁に掌をぴったりつけて、そろそろと立ち上がるのを見つめていた。頬肉が細かく痙攣すると、木内の顔はさらに悪相になった。

「私はその人足を殺したのは先夜の浪人だと見当をつけた。それがあなただ。だが、私はあなたを秋月金次郎様だと勘違いしてしまったのです。私は大変な汚名を秋月様に被せてしまいました」

「それを……」

木内は身体を立て直して半身に構えた。

「いらざる斟酌というのだ。小僧め、余計なことをしでかしおって。あの晩斬り捨てておくべきであった」

切っ先を地面に突いて、木内ははあはあと荒い息をついた。腹が苦しいため、身体をまっすぐに立たせることができないでいる。

小走りに寄ってきた二つの足音は、精一郎の影が踏めるところまできて止った。

「精一郎殿、これはいったい何事ですか」

息を弾ませていたが細井萱次郎の顔は蒼白だった。細井の後ろにいる千蔵は腰を屈めて身構えている。

「狼藉者め。男谷精一郎殿に何の怨みがある。刀など抜いて、どうしようというのだ」

萱次郎は柄袋を被せた大刀の柄に手をやって木内を睨みつけた。

「どうするってか？　きまってるじゃねえか、殺そうとしたのさ」

「なに！」

萱次郎は眦を吊り上げた。その彼を、まだ未熟者だと見下したのかもしれない。木内は不敵な笑みを浮かべて左手に持った刀をひょいと前に突き出した。

あぶない、といったのは千蔵である。用人の源兵衛から喧嘩の手ほどきを受けたことがあるらしく、その身のこなしは素早く、声と同時に萱次郎の前に自らの腕を伸ばしていた。

「いまはやらん。だが、いずれは殺ってやる。小僧、殺られたくなかったら、外に出ぬことだな」

木内左門は首を捻って精一郎をぬめった細い目で見つめ、切っ先に付着した泥を袖で拭った。

木内が背中を向けると、ひゃっ、と悲鳴が上った。何事かと駆けつけてきた商人に向って、木内が刀を振り回したのだ。木内は抜き身を鞘に納めると、右肩を下げる格好で悠然と歩き去った。誰かの知らせを受けたらしく、旗本の村越家の門前に置かれた辻番から番役人が飛び出してきていたが、木内の荒んだ表情にぶつかると、ひるんだように

肩を竦めて俯いた。

「いったい何者ですか、あの男は」

萱次郎は躍った目で精一郎を見た。それが、と言いかけたとき「こちらへ」と小声でいって千蔵が二人の袖を引いた。

「役人に色々訊かれると面倒ですから」

千蔵は二人の身体を木内の去った方角とは反対の方に向けて、さっさと先に立って歩き出した。そのあたりにいた者たちも、それをしおに散り出した。

千蔵は三ツ目橋が見える所にある甘酒屋に二人を案内した。中に入ると平たい床几に茣蓙を敷いた坐り台があり、先に腰かけていた老人の客は、丸盆に置かれた甘酒には手をつけずに、煙管をくわえてのほほんとしていた。

普段は頼りなげにして、ただへえへえと頷いて目立たぬように下働きの仕事をしている千蔵に意外な機転があるのを知って、精一郎は少しばかり感心していた。確かに、非は木内にあるとはいえ、いきさつを番役人に説明するのは難儀だった。

奥から精一郎と同い歳くらいの少女が出てきて注文を尋ねた。千蔵は甘酒でよろしいでしょうか、と萱次郎に訊いている。他に何があるのかと精一郎は思ったが、萱次郎がそれでよいというので黙って頷いた。

「それで、何があったのですか？」

ええ、といったん応えてから精一郎は小首を傾げた。萱次郎には訊きたいことがたくさんあった。

「萱次郎殿は、麻疹はもう治ったのですか」

麻疹は、と答えかけた細井萱次郎の頬が少し赤くなった。じき十五歳になる者が、麻疹になどかかって恥しいと思ったのだろう。

「ようやく治りました。ですがふた月近く臥せっておりましたので、身体がすっかりナマクラになってしまいまして、下斗米さんから笑われました」

萱次郎は首を曲げて口元をちょっと歪めた。兵原草廬の寄宿生として閉塾前まで残っていたのはわずかに三十名足らずだが、年少組でしかも三年間も逃げ出さずに錬磨に励んでいたのは、精一郎と細井萱次郎の二人だけだった。

精一郎殿があれこれ世話を焼いて下さらなかったら、私などとっくに逃げ出していました、と萱次郎は精一郎にいったことがあったが、その思いは精一郎も同じだった。半年遅く入塾してきた萱次郎が弱音を吐いていたら、自分も同調していただろうと思うことが何度かあった。雪の降る真冬に、川に浸って水練をさせられたときなど、萱次郎が気を失うまで気張っていたからこそ、精一郎も耐え抜くことができたのだ。

あのとき、川から上がると凍りついた髪は、手で払うとばりばり音をたてた。萱次郎は気を失ったままだったが、介抱をしていた妻木弁之進が、ここまで耐えるとはさすが

広沢殿の子孫だのう、と呟いたことが精一郎の耳に残っている。

塾生は互いに自分の素性を打ち明けることはなかった。それで細井萱次郎の身内の名も聞くことはなかったのだが、その後、萱次郎は儒者として高名な細井広沢の子孫であることが分った。広沢は堀部安兵衛と親交があったことでも知られていた。何人かの塾生は「さすが」といって感心したが、精一郎の思いは違った。偉い先祖を持った子孫の心の重荷を思って、むしろ気の毒に感じたものだった。

「床に臥している折に、兵原草廬がお上の命により閉鎖になったと聞かされてびっくりしました。以前より、北方警備に関する先生の激烈な建言に対して、幕閣の重臣が眉をひそめておられると聞き及んでおりましたが、まさかそこまでやるとは思いもよりませんでした。祖国を蛮敵の侵入から護ろうと苦心されていた平山先生の心中を思うと、いまも義憤に堪えません」

萱次郎は甘酒の入った湯呑みを両手で摑んでぶるぶると震わせた。千蔵は土間に置かれた炭火に手をあてて、二人に上体を横に向ける姿勢で両膝を折っていた。

「幕府は外国との揉め事を恐れているのです。それどころか樺太、千島の人々がおろしやに略奪され、放火され、殺されてさえいるというのに何の手当てもしようとはせず、少数の幕吏と北方警備についている南部津軽の兵に全てを押しつけて、何事もなかったようにふるまってさえいるのです。これがこの国の重臣たちの真の姿なのです。民衆から糧を得ておきながら大事なときに民衆を守らず、彼等のために生命を賭して戦おうとする憂国の士を支えるどころか抹殺してしまう。そんな老人たちに国を任せていたら、この国はいつか蛮敵に侵略されてしまいます。私は……」

「細井様、ちょっと」

千蔵が身体を二人の方に向けて小さく顎をしゃくった。いましがた入ってきた男が、萱次郎の話を背中で聞いていることには精一郎も気付いていた。話の腰を折られた萱次郎は、ちょっとむっとしたように千蔵を見返した。

「いや、たいしたことではないのでございますが……」

千蔵は上体を伸ばして萱次郎に耳打ちをした。萱次郎は尻をからげた町人の背中をちょっと睨んでいたが、手にした湯呑みを盆に置くと、なに、といってあたりを睥睨するように背筋を伸ばした。

「国政を論じるに何をはばかろうことがありましょうか。たとえ町方の者が耳をそばだてようが、役人に注進に及ぼうが何ら臆することはありません。そうでしょう？　精一郎殿」

「その通りです」

精一郎は萱次郎の視線をまっすぐに受けて頷いた。彼の直情型ともいえる純粋な心が精一郎は好きだった。下斗米秀之進も、萱次郎のそんなどこか危な気なひたむきさを愛

して可愛がっているのだろう。

「精一郎殿、お聞きになりましたか。兵聖閣に少しの間寝泊まりしていた、馬場十左衛門と名乗る御書院番頭の倅のことを」

「何でしょう」

書院番頭の子息に対して、あえて倅という言葉を口にした萱次郎に若々しい気負いがあって、精一郎は胸の内で思わず微笑んだ。

「先生の講義の内容を歪めて幕府に報告していたのです。先生があたかも儒学を誹謗し、陽明学こそ今の世には必要な学問であると説いていたと書面にしたためて提出していたのです。幕閣の中には、平山行蔵は塾生を反幕の徒に仕立てんと画策しているのだ、との疑惑を抱いた方もいたそうです。兵原草廬を閉鎖に追い込むに当っては、林家の陰謀も働いていたのではないかと小平太さんがいっていました」

小平太の名を聞いて精一郎の胸にほのぼのとした温もりが湧き上った。一条小平太は二年前に下斗米秀之進が故郷の南部領福岡に帰省した際、江戸に連れてきた男で、精一郎より四歳年上だった。小平太の訥々とした南部訛りに、大方の塾生は意味が分からず閉口していたが、何故か精一郎には理解できた。小平太は時折故郷の童唄を口ずさむことがあって、そのしみじみとした唄声に聞き惚れたものだった。

「一条さんはいまどうされておられるのですか？」

「下斗米さんのお手伝いをする形で、夏目様のお屋敷に詰めておられます」

精一郎は夏目信平の広大な屋敷の隅に、小平太の色黒で角張った顔を置いて思わず微笑んだ。南部領では、どこの畑を掘ってもこんな形の石がゴロゴロと出てきおる、といって自分の顔を指差した小平太を思い出した。それから萱次郎の言葉の中で、何か引っかかるものがあったことを感じて首を傾げた。

「下斗米さんは夏目様のお屋敷におられるのですか？」

「夏目家の書記なのですから、当然昼間はお屋敷におられます。ですが、夜はお宅に戻られます」

こともなげに萱次郎はいった。えっ、と精一郎は胸の内で喚いた。

「下斗米さんは夏目様にお仕えしていたのですか」

そう訊くと、今度は萱次郎の方が目を見開いて精一郎を見返した。

「そうですよ。昨年、夏目信平様に是非にと乞われて、夏目家の用人として夏目様にお仕えすることになったとき、南部藩に遠慮して、姓名を中山門蔵と改められたではありませんか」

「ああ、それで……」

ある時期から、下斗米秀之進が兵原草廬を訪れてくる幕臣や見知らぬ陪臣に対して、自分は中山門蔵と申す者です、と名乗るようになった。ふざけているのかと思ったがそ

の表情は真面目なままで、あの方はいくつも名前を持つのが趣味なのだろうか、と精一郎は不思議に思ったものだった。だが、その理由を誰にも尋ねることはなかった。子龍は、たとえ休息の間でも、塾生同士が私語を交わすのを好まなかった。講義の後で、その内容を論じ合うことさえも禁じられていた。だから個人のことについて、精一郎が他の者に何かを訊くということなど決してなかったのだ。

「精一郎殿は本当にご存知なかったのですか？」

驚きから不審に変った表情を向けて、萱次郎は精一郎を覗き込んだ。

「全然知りませんでした」

「だって、夏目信平様は、精一郎殿の胄親でしょ。それに、男谷家とは縁続きだと聞いていましたよ」

「私は何も知らされていません。兵原草廬に入っている間は、一度も男谷の家には戻っていませんでしたから」

「そうでしたか。すると……」

言いかけて萱次郎は千蔵の横顔をちらりと見た。口にしていいのかどうかためらっているようだった。

「すると、下斗米さんの奥方さまのこともご存知ないのですか」

「知りません。下斗米さんはお嫁さんを娶られたのですか」

「娶られました。半年前に娶られて浅草蔵前にお宅を借りられたのです」

精一郎の言葉に合わせて、萱次郎も間の抜けた言い様をした。

「そうだったんですか」

では正月の早朝に、ほとんどの塾生が帰省していたにもかかわらず、下斗米が兵原草廬にやってきたのは奥方を家に一人残してのことであり、それはやはり、塾に紛れ込んだ密偵のことが気がかりだったせいなのだと精一郎は思い当った。

「馬場十左衛門だ」

精一郎はぼんやりと呟いた。

「そうそう、その馬場ですが、妻木さんと大釜さんがひっとらえて、着物を剝ぎ取った上で大川に投げ込んだそうです」

再び勢いを得て萱次郎は得意気にいった。

「大川に……。しかしまだ水は冷たい。普通の人なら死んでしまうかもしれません」

「殺さないために着物を脱がしたそうです。しかし、殺しても飽き足らない奴ですね」

萱次郎はことさら声を張り上げて首を回した。背中を向けて坐っていた町方の小者らしい男は、一条小平太の話が出たあたりで甘酒屋から出ていったが、どこかのご隠居らしい老人はまだ店にくすぶっていて、煙草をやめて甘酒をすすっている。

それで、といって精一郎は先程から一番気にかかっていたことを口にした。

「平山先生はどうされていますか」

そう訊くと不意に萱次郎の身体が縮んだようになった。手にした湯呑みに目を落したが、甘酒を呑む気がないのは、その気後れした表情に表われていた。

「存じません。私にはお会いすることができないんです。閉鎖以降、先生のお宅に出入りが許されているのは下斗米さんのほかに、松村さん、吉里さん、小田さん、妻木さん、大釜さん、それに岩名昌玄様くらいなのです。他の者の出入りを先生は固く禁じておられます。たぶん、目付の差し金で、先生のお屋敷を見張っている者がいるのだと思います。見張りの目にとまれば、元塾生ばかりでなく、その親許にまで災難が降りかかると、先生は案じておられるのでしょう」

その通りだ、と精一郎は思った。その災難が男谷家の将来にも及ぶのを知って、平山子龍先生は私に破門を申し渡したのだ……。

「あとから精一郎殿のことを知って驚きました。何故、精一郎殿だけが破門……」

そこで萱次郎は言葉を切って、精一郎を臆した目で見つめた。

精一郎は答えずに戸板の隙間から射し込む光の筋を眺めていた。沈黙が落ちると、外を通る物売りの声が、端唄のようにのどかに響いて店内に聞こえてきた。

「参りましょう」

精一郎は萱次郎を促した。立ち上がりかけた萱次郎は、湯呑みに残った甘酒を一息に呑み干してふうっと息をついた。精一郎が盆に二朱銀を置くと、少女が首を竦めて「あの、三碗で二十四文なんですけど」といった。釣り銭を受け取ることを知らない精一郎は、ただ笑って店を出た。

三ツ目橋を渡ると二人は両国橋に向って竪川沿いの堤を歩いた。所々に植っている桜の木の枝にしがみついている蕾は、数日前に較べてその表情がずっと柔らかくなっている。吹いてくる風にも色濃い春の温もりが混っていて、精一郎の胸の中にときめいた騒きを残して吹き過ぎていった。

萱次郎が思い出したように木内左門の狼藉の理由を訊いてきたので、精一郎はこれまでに起ったこと、目撃したこと、木内が三千石の旗本秋月大学の嫡男、秋月金次郎の名をかたっていたこと、そのためにしでかした自分の失態のことなどを順序だてて話した。

黙って頷いていた萱次郎は、話を聞き終ると立ち止って首をそらした。

「その木内という狼藉者は貸した金を取り立てるだけのために、闇討ちまでしたということなのですか？　そうだとしたら武士がやくざ者に雇われてしまったことになる。そんな者は最早侍とはいえません」

萱次郎の強張った顔を、すれ違った花林糖の菓子売りが恨めし気な目をして見上げて

いく。萱次郎は精一郎より一歳年下だが、上背は一寸程高い。精一郎は萱次郎から視線をはずして、あの者は元々は船頭だったようです、といった。

「秋月様のお話を伺っていて分ったことがあります。あの者は御家人株が欲しくて秋月様に取り入っていたのです。だが秋月様が金を出さないことが分かると、今度は高利貸から多額の金を借りている御家人に目をつけ、借金を取り立てる代りに御家人株を奪おうと企んだのだと思います」

「株って、御家人株とは何です？」

萱次郎は意外なことを聞いたというように、眉をそびやかして精一郎を見返した。

「株を買えば、その者の代りに御家人になることができます」

「ということは船頭が侍になることができるということなのですか？　そんな馬鹿な。侍は侍から生まれるのが正義です。金で船頭が侍になれるなんて言語道断です」

萱次郎の頬は怒りで朱に染った。精一郎は苦笑して一歩先に立って歩き出した。

「私の家も元々は侍ではありません。曾祖父は検校だったのです」

それも十幾つかのときに、越後から杖一本で江戸に出てきたのだ、と精一郎は聞かされていた。検校は盲人の最高の位かもしれないが、そこまで上りつめられたのも豊かな財力のたまものだと、いつの頃からか精一郎は知るようになっていた。

「ほう、そうだったんですか」

「そうです」

「でも、下斗米さんは精一郎殿は公家の出だといわれていましたが」

「はは、それは下斗米さんの口ぐせです。あの方は浮世離れした親を持つ者に対しては、皆公家呼ばわりしてしまうのです」

「へえっ」

萱次郎は冷たい風で頬を叩かれた子供のように、ぼうっとした顔で町屋の屋根を眺めている。

「私の大叔父、つまり、父の叔父に当たる人に男谷平蔵という方がおられるのですが、この方は自分の子に御家人株を買い与えてやるだけでなく、中間として取りたてた者にも、十年の後には株を買い与えているそうです」

「す、すると、その方のところで真面目に年季奉公すれば、職人の倅でも侍になることができるということですか」

「まあ、そうです」

年季奉公という言い方がおかしくて、精一郎はにやりとした。下斗米秀之進が本丸御留守居役、二千七百石の夏目信平の用人になっていたことは知らなかったが、町人からも御家人が製造されていることは、精一郎は身内を通して分っていたことだった。代々武士の家柄として窮屈に育ってきた萱次郎にしてみれば、竪川で鯨が釣れたという程の

驚きであったかもしれない。

「それで、その御家人株とやらを買うには、いかほどの金子が入り用なのでしょう」

横に肩を並べてきた萱次郎はいく分蒼ざめた様子でいった。

「石高によって異なるのでしょうが、安くて千両。場合によっては二千両もかかるかもしれません」

「二千両！」

萱次郎は雷に打たれたようになって再び棒立ちになった。

「そ、そんな大金を、男谷家では中間風情に惜しげもなく与えているというのですか」

「当家ではなく大叔父の所です」

父の従弟にあたる小吉という人は、株を買い与えられたのではなく、七歳のときに勝家の養子に入ったのだが、大叔父はそれ相応の土産金をつけたと聞いている。それは精一郎が兵原草廬に入塾する前の十一歳のときだから、小吉は四歳年下ということになる。大変な乱暴者で通っている。

「若様」

後ろから千蔵が呼ぶので振り返ると、千蔵は二朱銀を指先で立てて精一郎の前に差し出してきた。

「二十四文の甘酒代にこれはいくらなんでも多過ぎます。お納め下さい。お代は私が払っておきました」

千蔵は二朱銀を精一郎の手に押しつけた。

「そんなに多過ぎたのですか」

「多過ぎます。こんなに置いてはあの少女が妙な気を回してしまいます。これは南鐐二朱銀というもので、両替屋に持っていけば、そうですな、銭の価値が少し下ったこの頃では六百文にもなるでしょう」

「そうか」

すると、二八そばと掛け行灯に書かれた夜鳴き蕎麦なら、三十七杯食べられる、と精一郎はたちまち暗算した。そうすると甘い唾が口の奥から溢れてきた。

「それにしてもあの狼藉者は本気で精一郎殿をつけ狙うやもしれません。あの荒んだ目付きは尋常ではありません」

驚きから覚めてやっと普段の表情に戻った萱次郎が、光を押し返すように顔を正面に向けていった。

「ええ、気をつけないといけません」

四半刻前に起きたことが鋭く胸にはね返ってきて、精一郎は思わず唇を噛んだ。自分のうかつさに改めて腹が立った。武家屋敷の長塀が切れる角では、決して塀に沿って曲ってはいけないのだ。もしそこに敵が潜んでいたら防ぐことなど不可能だからだ。それ

は兵聖閣の講義でも口酸っぱく平山子龍からいわれていたことで、武士はどのようなときでも、戦場におけるのと同じ心構えでいなくてはいけないと教え込まれていたはずなのだ。もし、用心を怠らず、長塀の切れる角を大回りして曲っていれば、壁に貼りついて潜んでいた木内左門も、居合いを使う機会を逸していたに違いない。

「精一郎殿」

萱次郎の固い口調が、深い後悔の念に浸っていた精一郎を現実に呼び戻した。

「兵原草廬が閉鎖になったあと、平山先生が下斗米さんに実用流の師範となって、散っていった元塾生を集めて教えるように勧められたのです。精一郎殿のお耳には達していなかったかもしれませんが」

「聞いておりません」

精一郎は濃い霧の、海の中に佇んでいるような心持で答えていた。平山子龍のいう元塾生の中には、自分の名は入っていないと改めて知る思いがした。

萱次郎は一つ間を置いてから口を開いた。

「でも下斗米さんは先生の勧めを固辞されました。そのような大役は自分の任ではないというのが理由です。はっきりとは分かりませんが、私は下斗米さんはいずれ江戸を捨てて、南部領に戻ろうと考えているのではないかと推察しているのです」

「江戸を捨てて南部へ？　何故そう思われるのですか」

「南部藩の藩士は毎年数百人、幕府の命令で北方警備に駆り出されているからです。つまり、江戸にいる侍に実用流を仕込むより、現実におろしやの侵略と立ち向っている、南部の若者達を鍛えることの方がより急務であるからです」

萱次郎は精一郎の袖を取った。

「そうなってしまう前に、私は下斗米さんを師と仰ぎ、実用流の全てを教え込んでもらいたいと願っているのです。実は、そう頼み込んで、小平太さんは勿論のこと、宮本さんや串崎さん、萩藩の福間さんなどと共に浅草蔵前のお宅まで押しかけて、すでにご教授を受けているのです」

萱次郎の精一郎を見つめる目は、急に上昇した熱のせいか白眼の部分が赤くなっていた。

「今日、私が参りましたのは、精一郎殿にも演習に是非加わってほしいというお誘いなのです。甘酒を呑むためではありません。精一郎殿、下斗米さんの教授を受けるのなら、平山先生もまさか反対されますまい。一緒にやりましょう」

吐息が精一郎の頬を打った。鼻の頭がぶつかってしまう程近くに、萱次郎の剝き出した目玉がある。精一郎はいったん視線を遥か千代田城の上空に浮いているちぎれ雲に向けた。雲が風に流されると、陽光に追われるようにして、一羽の鳥が北に向って飛び立っていった。

「それはできません。私にはもう、実用流を習う資格がないのです」
精一郎はやっとの思いでそれだけをいった。全霊を傾けて自分を説得しようと佇んでいる萱次郎の目を見返すことは、到底できそうになかった。

二

細井萱次郎が案じた通り、木内左門の執念深さは尋常ではなかった。
細井萱次郎が千蔵に案内されて、秋月家の屋敷近くにまでやってきた日から数えて四日目に、下斗米秀之進がふらりと番場町の男谷の屋敷を訪ねてきた。
「男谷忠之丞殿の御機嫌伺いに参り申した」
用人の源兵衛にそう告げて、下斗米は奥の間にいって忠之丞と向かい合った。知らせを受けて精一郎は父の居室に顔を出した。廊下から下斗米に挨拶をして自室に戻ってくると、使いの子供がこのようなものを届けてきました、といって下女の綾が紙の切れ端を持ってきた。
「誰の使いですか？」
「さあ。ただ若様に渡してくれと頼まれたといっていました」
綾の色黒の顔に田舎育ちの娘特有の純朴さが映っていた。畳まれた紙きれを開くと、

「艮現寺で待つ　左門」としたためられてあった。精一郎の胸の中に、棘のある食べ物が沈んでいくようないやな気持が残った。
「使いの子供はどうしました」
「菓子を持たせて帰しました」
その邪気のない言い方に、心やさしい両親の許で育てられたのどかさが感じられる。人を疑うことを知らない娘なのだ。木内左門は、そんな小女が働いていることを見越して、使いの子供を、玄関ではなく、裏口にやったのだろう。
「あの、なにか」
不安になったらしく、綾は廊下に片手をついて首を伸ばし、精一郎の様子を窺うようにした。
「少し出掛けてきます」
精一郎は紙片を丸めて袖にしまい、立ち止って刀架から小刀だけを手に取った。
家の前は越前大野四万石土井能登守の下屋敷になっている。長塀が続き、屋敷内はいつもひっそりとしていて通る人も少ない。
その長塀の切れた所が四ツ辻になっていて、西に曲がれば大川に出る。四ツ辻の先は南本所番場町と荒井町の切れ端のような町屋に挟まれており、艮現寺は荒井町に接している。背後には広大な境内を持つ妙源寺が控えているが艮現寺は檀家の数も少なく、参

詣する者はほとんどない。近くに住んでいながら、精一郎はそこに寺があったことさえも気付かなかった。

狭い境内に足を踏み入れると、足元で数羽の雀が飛びすさった。小さな羽音を耳の底に残しながら砂利を踏むと、本堂の右手の植木の陰に三つの影が現われた。六歳くらいの男の子が拳を握って佇んだ脇に、三歳くらい下の女の子が男の膝の上に坐っている。木内左門は丸石に腰を下ろし、右手に握った脇差を女の子の首の下にあてていた。

「やってきたか、待ちわびたぞ」

木内は片方の頬を歪めた。不敵な笑いだった。これからすることに対して緊張しているのではなく、相手の出方を楽しむような陰湿さを宿した笑いだった。

「さあ、坊主、このお侍にお願いするんだ」

木内は男の子に荒んだ目を向けた。お侍さん、といった男の子は、そこで喉を詰まらせ、苦しそうに咳込んだ。次に顔を上げたときには、その小さな目が雨水を溜めたように潤んでいた。

「この、このお侍さまにお金を返してください。そうでないと、いもうとがころされてしまいます」

「五百両だ」

すかさずそういった木内の、右手に持った脇差の冷たい輝きが、女の子の頬の上を流

れた。じっと目を見開いたまま動かずにいる女の子は、みみずくのような生真面目さを持っていた。

「この子はどこの子供達なのですか」

「知らん。たまたまそこいらで遊んでいたのを捕えただけだ。どうだ、たった五百両でこの子の命が救えるのだ、安いもんじゃねえか」

ぶ厚い唇の間から今度は白い歯が覗いた。何か企みがあるとは思っていたが、子供を人質にとるようなこととは考えていなかった精一郎は、どうしたらよいのか分からず、ただ奥歯を噛みしめて佇んでいた。

「男谷家の総領だったとはな。そんな大金持ちに目ェつけられたとは、おれの運も満ざらじゃねえな」

木内は上州らしい訛りを丸出しにして顎を上に振った。

「男谷という名を聞いてな、安宿の擦り切れた畳にひっくり返って、はてどこかで聞いたことがあるような、と考えていたのさ。日が暮れて按摩の奴が笛を吹いて通りがかりやがってな、そこでハタと思い出したのよ。男谷検校といやあ、金貸し稼業で百万両の財を築いた分限者じゃねえかとな。門前には無心を頼む大名の用人が列をなしたってな。なんでも江戸市中に十七もの地所を持ち、水戸家に貸した金の書き付けだけでも七十万両分もあったというじゃねえか。いやたいしたもんだ」

「子供を離して下さい」
「おまえは馬鹿か。おれはおまえの密告のおかげで一生を棒に振っちまったんだぞ。離せといわれてはいそうですかとガキを離せるか。さっさと家に戻って親父殿の手文庫から五百両持ってこい」
「そんなことはできません。だいいち、父の手文庫がどこにあるのかも知りません」
「知らなきゃあ捜しゃあいいだろう。どうせ他人様の汗を絞って貯め込んだ金だ。五百両くれえ盗んだってバチは当たるめえよ」
「その子達は何の関係もありません。離してやって下さい」
「ふざけたことをぬかすな、小僧」
木内はやにわに立ち上って女の子の髪をつかみ、端から二寸のところを脇差で斬り払った。それから左腕で女の子を抱え、その細い首に切っ先を突きたてた。
「すぐに持ってこい。でなきゃあ、ガキを殺すぞ」
すさまじい殺気が渦を巻いて精一郎の方に押し寄せてきた。女の子の顔は丸められた紙のように白く歪んでいるが、あまりの恐怖のために声が出せないでいる。その無垢な無抵抗さが精一郎の心に、憤りの炎を吹き起こした。
「坊や、妹から離れるんだ」
精一郎は鯉口を切り、柄に手をかけて小刀を抜いた。

「てめえ、逆らう気か。いいか、おれは破れかぶれなんだ。そこから一歩でも動けば、このガキの喉を突き破るぞ。本気だぞ」
「坊や。早く離れるんだ」
眦を吊り上げた木内の顔は、火あぶりにされた狐を連想させた。そうか、と精一郎は思った。こいつは狐憑きにあったのか、と。
「殺るぞ。殺るったらやるぞ。もう二人も殺っているんだ。こんなガキくらい殺るのは何でもねえ」
「では、川人足の安さんを殺したのもあんただな」
「あんなやつら、殺ったってどうってことねえ。どうせ無宿人だ。だれも悲しみやしねえ」
「悲しんでいた仲間がいたんだ」
腹の底で沈澱していた溶岩のようなものが、厚い殻を破ってどろりと流れ出した。それは以前にも感じたことのある憤怒と痛みに満ちた血の塊だった。ひとたび竜巻のように吹き上がれば、自分は別の人間になってしまうだろうと精一郎は思っていた。それが今、溜めていた力を、一気に爆発させようといったん身を屈めたのだ。
「寄るな。動くな。殺るったら殺るぞ」
木内はしゃがれ声で悲鳴をあげた。

「その前に、あんたが死ぬ」

ワレハ思ヒ込ミシ所ヲ只一刀ニ打チスエルコト也。

一刀必殺。敵ヲ殺伐。

平山子龍に植えつけられた剣術の極意が、念仏のように精一郎の頭の中で唱えられた。精一郎は燃え上った炎が青白く凍りつくのを感じながら、敵の心の臓に狙いを定めた。

「精一郎！」

背後から鋭い声が放たれた。その声の主が下斗米秀之進だと瞬時に分ったが、精一郎は気合いを解かなかった。

「この男がおぬしをつけ狙っているとかいう船頭か」

下斗米は精一郎の傍に佇むと、ためらうことなく刀を抜いた。木内の目玉はでんぐり返ったように白眼が剝き出しになった。

「な、なんだおめえは。これが見えねえのか、こいつの命がいらねえのか」

左腕に抱えた女の子を揺すり様、細い首に刀身を当てて木内は喚いた。妹を見上げた男の子の身体が風に揉まれたように震えた。

「坊、こっちにこい。おじさんのところにこい」

不意におだやかな声が下斗米の口から出た。すると男の子はまるで糸に引かれるように妹の脇から離れて下斗米の所にやってきた。

「よし、ここでじっとしているんだ」

下斗米は片手で男の子の髪を撫でた。五百両だ、と木内が喚いたが下斗米はそ知らぬふりで精一郎に顔を向けた。

「精一郎、おぬしは手出しをするな。こんな虫ケラを斬っては、おぬしの刀が汚れる」

「この者はすでに二人も斬っているのです。しかも見知らぬ子供を人質にとって、金を要求してきたのです」

「いいからおぬしは刀を引け。虫ケラを料理するのにそのような銘刀はいらぬ。このナマクラでたくさんだ」

そういって片手に持った刀を上に振ってみせた。それから大股に木内の方に歩み寄った。

「子供を下に置くんだ」

すっと間合いの中に入ると、下斗米は切っ先を木内の膝元にぴたりとつけた。木内の額と頬からどす黒い汗が泥水のように噴き出して垂れた。

「殺るったら、殺るぞ」

「精一郎、子供を取れ」

木内の脅しには頓着なく、下斗米はそういって精一郎に目を向けた。濃い眉毛と窪んだ眼窩が、なにか巨きな獣の顔のように精一郎には映った。三年前、まだ兵原草廬に

寄宿していた筆頭塾生の下斗米秀之進と初めて竹刀を合わせたとき、その大きな目に吸い込まれていくような息苦しさを感じたものだが、下斗米の持つ風格は、さらに変化して血腥さも宿すようになっていた。

いくつかの戸惑いと気持のすくみを感じながら、精一郎は小刀を鞘に納め、木内の左腕に抱かれた女の子に手を伸ばした。

「こ、こやつ、血迷うたか」

必死で武士らしい言葉を吐いたが、木内の身体はすでにおこりにでもかかったように震え出している。

「おいで」

精一郎は女の子の腋の下に手を入れた。その細い、雛のような身体が胸の中に落ちてくると、先程まで漂っていた言いようのない憤りがすっと霧散して、じんわりと温かいものが静かに湧き出てきた。

「ごめんね。こわかったろう」

女の子を抱いて兄のところにいって降ろすと、女の子は兄にぶつかるように抱きつくなり、しくしくと泣き出した。

「うげっ」

後ろで木内の喉を潰したような呻き声が出て、枯木が折れた音がそれに続いた。

「痛え、痛え、痛えよお」

土の中に鼻を埋めて、木内は泣き声をたてている。右腕を押さえているのは、下斗米に刀の峰で打たれたからだろう。下斗米はすでに刀身を鞘に納めていた。

「腕の腱を斬った。刀は持てぬが、田舎に戻って船頭くらいはできるだろう。次に江戸でおまえの顔を見たら、そのときは首を飛ばすぞ」

「う、う。痛え、折れたよう」

右腕を押さえて地面をのたうち回り出した木内は、目鼻口から得体の知れない液体を吐いている。

行くか、といった下斗米は、小さな兄妹が抱き合って泣いているのを見て、懐中から財布を取り出した。

「あ、それは私が……」

下斗米の意図に気付いた精一郎は素早く財布に手を入れ、つかんだ銭を男の子の前に差し出した。

「すまなかったな。これで菓子でも買いなさい」

二朱銀を目にとめた男の子の目が濡れていた。だが手を出そうとはしなかった。精一郎は二朱銀を彼の懐に突っ込んだ。その時、チリ紙が指に触れた。先程綾がこの子にあげた菓子なのだ。そう思うと、それまで身体の節々に張っていた力が急に抜けていく

ように感じられた。

「あやつをあのままにしておいてもいいのですか」

兄と妹が小さな肩を寄せ合って寺を出ていくと、狭い境内は木内のたてる呻き声で膨れ上った。

「まあよかろう。死にはせんだろうが、もし死んだら坊主が面倒を見てくれる」

だらしなく泣き叫んでいる木内に一瞥をくれて、下斗米は先に門を出た。

「酒でも呑むか」

振り返っていった。夕陽を背に受けた下斗米の身体は、山のように堆い。事実、精一郎より二回りも大きかった。

「いえ、私は……」

「だろうな。じゃがわしは呑みたい」

寺から出てしばらく行くと煮物屋があった。間口一間半の狭い店だが、中を覗き込んだ下斗米がにっと笑って入っていったので、精一郎も後に続いた。中はいい匂いがした。

「細井萱次郎が慨嘆しておった。おぬしがわしの所で演習をする気がないといってな。だが、わしはそれでいいと答えた。男谷には男谷の考えがあるとな」

四角い床几に腰を下ろすと、下斗米は刀を抜いて置いた。店の内は狭く、他に客はいない。

「おぬしの親父殿から書状をもらった。息子が心を開いてくれない、算術も書もやろうとしない、朝暗い内から木刀を振っているだけだ、とな。精一郎、どうして親父殿に反抗するのだ。いい親父殿ではないか。仏様のようだと人はいっておるぞ」

「それで今日うちに来られたのですか」

「それもある。それと、おぬしの顔をちと見たくなった。ますますいい男ぶりになったな」

下斗米はにやにやして精一郎を眺めた。精一郎は下斗米の視線をはずしてそっぽを向いた。父親の言葉に従順になれと説教をしに来たのなら、それがたとえ尊敬する下斗米でも耳を傾ける気にはなれなかった。

「分っておろうが、先生がおぬしを破門にしたのは、おぬしには特別の思い入れがあるからじゃ」

「父が、先生にお願いしたのではないのですか？」

「それは違う。それは違うぞ精一郎」

ヘイ、お待ち、といって腰の曲った老爺が酒と煮物の入った丼を運んできた。いつの間に頼んだのだろうと精一郎は驚いた。下斗米は野人のような粗雑さがある反面、そつがなく油断がならない、と赤蜻蛉と将軍家斉より称されたという小田武右衛門がいっていたことを思い出した。

「今後先生の所に出入りしては、男谷の家名に疵がつくと、先生自らがおもんぱかっておぬしにきついことをいったのだ。それも全ておぬしの気性を察してのことだ。先生とて、本心の所では、おぬしを離したくはなかったはずじゃ」

大根とこんにゃくを一緒にぺろりと食べてそういった。酒は大盃にもう三杯も呑んでいる。

「精一郎、兵原草廬がいかようにして成り立ち得たか、考えたことがあるか。先生はわずかに三十俵二人扶持。いかに粟飯とはいえ、何十人もの塾生を食わしていくのは容易なことではない。しかも先生は欲しいと思った武器は必ず手に入れられる。書物を売っただけではとても足りん。それでいて塾生からは一銭の月謝も取ろうとはしなかった」

「各藩から、お見舞金が出されていたと聞いたことがありますが」

「誰がそんなたわけたことをいったのだ。先生は本を出されても、版元から一銭だって受け取らなかったお方だ。見舞金など受け取るはずがない」

下斗米は盃を口に運び、実はな、といって精一郎を横目で窺った。

「一件だけ例外があった。おぬしの親父殿だよ。男谷忠之丞殿からの差し入れだけは有り難く受けていた。それは男谷殿の強い申し入れがあったからだよ。親父殿は、先生の思想に共鳴されていたのだ」

精一郎の身体は沸騰したように熱くなった。それで、と言いかけた時、「分っている」と下斗米が精一郎の言葉を制した。

「ならば何故おぬしの破門に親父殿が抗議をしてくれなかったのか、ということであろう。おぬしの不満ももっともだが、先生は全てを見越された上で、おぬしが男谷の家におとなしく納まるべきだと判断されて、親父殿に事前にそう伝えたのだ」

「つまり、お家のためということですか」

「それが一番大事なことだ」

精一郎は膝に置いた拳を強く握りしめた。そして小石を吐き出す思いで言葉を放った。

「私は男谷の家を継ぐつもりはありません」

「ない？　何故だ。おぬしは総領ではないか」

「父の跡は忠次郎殿が継ぐことになるでしょう。私はいずれ家を出るつもりでおります」

「どういうことだ？」

下斗米は胡桃のようにまん丸で大きな目をさらに開いて、精一郎を窺い見た。精一郎は横を向いたまま口を閉ざした。心にも重い蓋を被せた。

「そうか」

背筋を伸ばして外に目を向けた下斗米は、親爺、と声を放った。

「湯呑みを持ってこい。それから、酒をぬるめにもう一本だ」

親爺が湯呑みを持ってくると、銚子に残っていた酒を全て中に注いで一息に呑んだ。

ふうっ、と息をつくと、酒の臭いが精一郎の鼻孔にまとわりついた。

「おぬしの母親のことは、夏目様から聞いている」

その言葉に、精一郎は胸の内側を針で突かれたような痛みを感じた。

「おぬしはどう思っているか知らんが、親父殿がおぬしの母親、お縫さんだったかな、その方を屋敷から追い出したのではない」

「……」

母親の話を他の人から聞くのは好きではなかった。どのようによくいわれても、精一郎が物心ついたときには、母は家にはいなかったのだ。

「お縫さんは自ら屋敷を出たのだそうだ。それは忠之丞殿の奥方がとてもよくできた方だったからだ。その方に育ててもらった方が、息子にとってもよいと判断されたのだ。その話を聞いたことがあるか？」

精一郎はそっと頭を横に振った。用人の源兵衛がしきりに説明しようとしていたが、聞く気にはなれなかった。自分は乳母の手で育てられたという意識があった。

「おぬしには兄がいたことは聞いたことがあるだろう」

精一郎は声は出さずにただ頷いた。

「新太郎という名前だったそうだな。大変な難産だったが、ともかく無事生まれた。親父殿はそれはもう、目の中に入れても痛くない程にかわいがったそうだ」

新しく運ばれてきた酒を湯呑みに注いで、これもすうっと呑み干して空の湯呑みを盆に置いた。

「だが、その子は一年も生きてはいなかった。親父殿の悲しみは察するに余りある。それに不幸なことに奥方も身体を壊された。医者からはたぶんもうお子は産めないといわれたようだ」

言葉が少し途切れた。下斗米は丼に残った煮物を大急ぎで口に放り込み、残っていた汁を飲んだ。

「お縫殿は奥方に仕えていたのだそうだな。気品があり、静かで、よくお気のつくお人だったらしい。夏目様などは、秘かにお縫殿に恋焦がれておられたらしい。ガラにもなく深川元町に側女をもったのも、お縫殿を忘れるためではないかと勘ぐる者もおった」

そこまでいって下斗米は笑いを引っ込めた。精一郎の横顔が、岩のように無表情になっているのを目にとめたせいだろう。

「これは余計なことを申した。気を悪くしないでくれ」

「下斗米様、母の話はそれ以上聞きたくありません」

「分った。もう申すまい。だがな最後に一つだけ。それはだ、お縫殿に、忠之丞殿の子を産んでくれぬかと頼まれたのは、奥方だったということだ。もう自分は子を産める身体ではないと分って、奥方が一番大事にしていたお縫殿にお願いしたそうだ。名主から

行儀見習いにきて奥方に仕えていた程の女性だ、本来ならそんなことはとても頼める筋合いではなかったのだが、自分の命がそれ程永らえないことも考えて、奥方はお縫殿に無茶なことをお願いしたのだそうだ。こんなことをおぬしにいった者はいないだろうからな、あえてわしが申したのだよ」

だが、衰弱したはずのあの方の命は蘇り、自分が生まれた二年後に、忠次郎を産んだ。そして、母は屋敷を去った。いや、出て行かざるを得なくなったのだ。

「おぬしが生まれて親父殿は大喜びだったそうだ。それで死んだ子と同じ新太郎という名をおぬしにつけたのだ。親父殿の気持は今も変わらんぞ。おぬしを愛し、頼りにする気持はずっと続いている」

もうたくさんだ、と精一郎は胸の内で声を荒らげた。自分の心の底に、他人がずかずかと足を踏み入れてきて好きなように暴れている。本当にもうたくさんだ、と精一郎は叫んだ。

「精一郎、おれには二人の姉と二人の兄弟がいる。つまり、五人兄弟のおれは次男だ。だが、おれだけが妾腹なのだ」

はっとして精一郎は下斗米を見上げた。店の板壁を透かして見るように、遠くを見つめる目をしていた下斗米は、目の前にいる精一郎が自分を凝視していることに気付くと、はは、と乾いた笑いをたてた。

「おぬしにはわしのことは何にもいっておらなんだな。だが、今いったことは、他の誰にも喋ったことはない。夏目様も知らぬことだ。別に自慢することでもないしな。しかし、心に傷は残った。いつでもいらいらし、何かにつけて怒っていた。十八歳で故郷を捨てて江戸に出たのも、家にいるのが面白くなかったからだ。わしには実の母の名さえ知らされなんだのじゃ」

親爺といって下斗米はいきなり立ち上がると、銭を盆に置いて刀を差した。

「精一郎、母親がどこにおられるか、存じておるのか？」

「知りません」

「秩父だ。生まれ故郷に戻っておられる。おぬしも痛い心を引きずって毎日を過ごしておるより、一度、思い切って母親に会いに行くのがよかろう」

思いがけない言葉だった。そうしたいと考えないこともなかったが、江戸を出て、一人で母を訪ねる旅などできる訳がないと、すぐにそんな甘い考えを打ち消した。一人武者といわれた下斗米秀之進から、まさかそのように勧められるとは思いもよらなかった。

「いいのでしょうか」

「いいさ。息子が母を恋しがるのは当然のことだ」

「父には何といったらいいのでしょう」

「そうさな。武者修行の旅に出るとでもいえばいい」

下斗米は精一郎の肩にぶ厚い掌を置いてぎゅっと握った。うっと唸って振り仰いだ下斗米の目は、慈愛に溢れて朱に染っていた。その後方に連なった山に夕陽が落ちていくところだった。

「そうだ、もう一つ精一郎にいうのを忘れておった。わしは妻を娶った」

「萱次郎から聞きました」

「夏目様のご用人をしておられる松川紋左衛門殿の娘でよしというのじゃ。夏目様に実用流をチト仕込まれておってな、大変な男まさりの女子なのだ」

「それはようございました」

精一郎はすがすがしい気持になっていった。そのとき下斗米のいびつな赤ら顔が覗き込んできた。

「おぬし、あの浪人者を斬るつもりでおったな」

「……」

「わしは一瞬息を呑んだ。おぬしの背中からも、刃がわしに向けられているように思えたからじゃ」

下斗米は笑ったが精一郎は笑えなかった。あのまま時が過ぎていれば、たしかに、自分は別の自分になり得たと思い出したからだった。

無頼の血の塊が、またごろりと動き始めていた。

第四章　旅空

一

旅立ちの朝、精一郎はいつもより半刻早く起きて風呂場に行き、風呂桶にたたえてあった冷水で身を浄めた。毎朝していることだったが、その朝はことに気力を込めて頭から冷水をかぶった。

生を持って朝を迎えられたことに感謝し、あわせて神の御開運を祈るのである。その日の朝はことのほか冷水が気持よかった。濡れた身体を拭うと、仄暗い風呂場の中で、自分の身体から白い湯気が立ち昇っていくのが見えた。なにかしらほっとするものがあった。張りつめている心とは無関係に、身体の方ではいつもと変わりのない反応を示していたからである。

着物をつけ、手燭を持って仏間にそっと入り、仏壇の前に坐って先祖の霊に拝した。

別間でまだ眠っている家人や父の家士をはばかって、線香も立てず、声も出さなかった。読経は胸の内でとなえたがその終りに、現在の男谷家を興す祖となった曾祖父の男谷検校に、自分を産んでくれた母が、今も秩父の地で、達者で暮していることを共に念じて下さいとお願いした。顔を上げて仏壇に目を向けた時、漆黒の闇とも見えるその四角い縁の中に、曾祖父の霊がすっと起き上がる気配を感じた。

精一郎はもう一度手を合わせてから静かに立ち上がり、裸足のまま裏庭に出た。

外はまだ暗く、雲の切れ目から覗く星の光が可憐な程の温もりを感じさせる。夜空にかかる月はようやく半分位まで身を脹らませてきたはずだったが、それも雲に遮られて姿を隠してしまっている。

東の空は、ほんのわずかばかり夜が押し上げられて、青味が滲み出ている。それでもまだ町屋の屋根を空の中に縁取る程の明るさはない。七ツ近くになっているはずだが、陽が顔を出すまでは、まだ一刻程待たなくてはならないだろう。

いつものように、木刀での素振りを千回こなした後、精一郎は長さ七尺五寸の白樫の棒を手にして振り上げた。師であった平山子龍を見習って自ら樫を彫って作製したもので、重さは三貫あった。手が小さい精一郎が柄を握ると、やっと両方の指先が触れ合う程の太いもので、兵原草廬に入った当初は、三十回も振ると、腕の付け根が痛んで、朝餉の箸も持ち上げられない程であった。

四年が過ぎた今でも樫棒の重さを感じる。しかし、二百回の素振りは苦もなくこなせるようになった。

いったん首筋と胸に浮いた汗を拭い、息を整えた。裏庭にも咲いた桜の白い花弁が淡い明かりの中で、その優美さを訴えてくる。心が鎮まるのを待って、次に精一郎は長刀を腰に差した。

「とう！」

大声は出さず、気合いを刀身の分だけ発して居合いを抜く。刀を鞘に納め、間合いの内に、幻の顔が立ち上がるのを待って鋭く斬り込む。

一打ごとに空気が割れ、薄明かりの中に鮮血が飛ぶ。集中している精一郎には躊躇いが入り込む隙がない。腰を落して構えに入ったときから、精一郎の気持は戦場の上にある。

百本の居合いを抜くと、白い汗が身体中の皮膚に貼りついた蛭のようにびっしりと覆っていた。さすがに疲れて、井戸に向かうとき、胸の中にあった空気がすっかり吐きだされ、肺がしぼみきっているようにすら感じた。

冷水で身体を拭っていると東の空にふいに赤味が射した。清流を映したような澄んだ青さの中に、まっすぐ光が一筋伸び上った。身体を拭う手をとめて見つめていると、その強い光は瞬時に青い流れの中に溶け込んでしまい、その次には家々の屋根の上の空全

体がぼうっと朱色に滲み出した。

精一郎は目を細めて、平行に伸ばした両腕を徐々に上げていった。そうしながら鼻から息を少しずつ吸っていく。朝陽が送ってくる神秘な力を、空気と共に身体中に充満させるのだ。隅々まで瑞々しい光の粒が行き渡ったと感じたとき、そっと口から息を吐く。それを気のすむまでくり返すと、ぐったりしていた筋肉や細胞が、見違えるように蘇る。庭に出てきたときより余程元気になっている。

この日、精一郎は巻藁を真剣で斬ってから、弓を百本射ち、さらに槍の素振りもこなして朝の稽古を終えた。旅の途中では刀の素振りはできても弓を射ることはできず、槍も持てない。気がかりというのではなかったが、習慣を変えることがさみしい気がした。

朝食を終え、前夜の内に用意しておいた持物を点検していると、殿様がお呼びですと源兵衛が伝えてきた。頷いて風呂敷包みを閉じたが、父に仕える者たちが、父を殿様と呼ぶたびに精一郎は違和感を覚える。たかが百俵高十人扶持の御小十人組の下級といってもよい格の者に、殿様はないものだと思うからである。そう呼ばれることをよしとしている父にも疑問を感じる。

父の居室に行くと、父は一番古くからいる下女に手伝わせて目を洗っていた。母が他界して以来、父は福という名のその下女に、身の回りの世話をさせているようだった。忠之丞は福から乾いた手拭いを受け取って、最後に自分で目の周りを拭った。

「まだ目の具合がお悪いのですか？」

父が自分の方に向き直るのを待ってそう訊いた。父は唇の端を歪めて耳朶を拭いた。

「日毎に悪くなるようじゃ。目が弱いのは血筋じゃな。精一郎もせいぜい気をつけておくがよい」

「はい」

顔を上げた父を見て精一郎は胸をつかれた。目の下のたるみに細かい皺が何十本と走った父の顔には、それまで感じたことのない老醜が浮かび上っていたからである。

武者修行の旅に出る、と一方的に伝えた自分の我儘が、父の心労を深めたであろうことは察しがついた。

「用意は整ったか」

「はい」

「剣術修業の旅に出るというおぬしの志は尊い。わしだとて若い頃はそうしたいと思ったこともあった。それにお城に勤めるようになれば、好き勝手に屋敷を空けることは叶わなくなる。今の内に見聞を広めるのはよいことだ」

薬を溶かした水で目を洗ったせいで、父の白眼の部分は腫れたように充血していた。

「平山行蔵殿に鍛え上げられたおぬしのことだ。めったなことでは弱音を吐かぬと思うが、旅は道場とは違う。色々と災難も降りかかろう。気をつけることだ」

「はい、気をつけます」

父は福に向って軽く手を払った。福は頷き、そそくさと木桶と手拭いを持って部屋を出ていった。福の後ろ姿を追うように目を上げた父は、開けられた障子の向こうに咲いた満開の桜を見て、救われたように明るい表情をした。

「いたずらに道場を訪ねても立ち合ってくれるところはないぞ。紹介状はあるのか」

障子が閉じられると、父の表情は再び陰鬱なものになった。

「川越の念流、秩父大宮郷の甲源一刀流の道場に下斗米様のお弟子筋の方がおられます。江戸在府の折、下斗米様に実用流の指南を受けた方々です」

秩父、と口にしたとき、父の目蓋が微かに震えたようだった。その後も精一郎は父の表情を注意深く観察し続けたが、微妙な変化があったのはそのときだけだった。

父は懐中から立派な造りの財布を取り出して精一郎の前に置いた。

「二十両入っている。持っていけ」

「……」

金額を耳にした精一郎は、とっさにはどのような態度をとってよいのか分からず、息を詰めて脹らんだ財布を見つめていた。もともと金銭には一切関心がなく、平山塾で寮生活をしていた三年余りの間ただの一銭も使ったことがない。破門となって実家に戻ってからいきなり世俗の波にもまれ、銭とはどういうものか、一両の価値とはどれ程のものか、その十六分の一にあたる一朱金は公定相場は二百五十文だが、実際は三百文以上で両替してくれるということも分かるようになった。

「宿賃は一日百五十文で済ませるつもりです。二十両などという大金は必要ありません」

千蔵の一年間の給金は三両二分だと聞いている。二十両は千蔵のほぼ六年分の給金だ。とほうもない大金だと思いながら、精一郎は財布を押し返した。

「どれ程旅に出ているつもりだ」

「分かりません。とりあえず秩父を目指します」

精一郎はそこで言葉を切ってもう一度父の反応を窺った。白く干涸びた唇が不満気に歪んで見えたが、忠之丞は何もいわなかった。

「秩父には名のある剣客がひしめいていると聞いています。修業が許されればどこかの道場に逗留するつもりでいます」

その予定はなかったが、口に出した以上、そうしなくてはならないだろうと精一郎は思った。少し気持が盛り上がるのを感じてさらに言葉をたした。

「その後は甲斐に出るか、或いは十石峠を越えて信濃に行くことも考えています」

「ならば金はいくらあっても無駄にはなるまい。持っていけ」

嗄れ声でいって、父は苦いものでも噛んだように口をすぼめて顔を横にそむけた。精

一郎は畳に両手をついた。

「行って参ります」

財布は置いたままにして障子を開けて廊下に出た。すると大川を渡って時を知らせる鐘の音が庭に響いてきた。五ツ（午前八時）になっていた。庭木にぼんやりとした霞がかかっているのを眺めながら、旅人は明け六ツ（午前六時）には日本橋を発つというのに、こうまでのんびりしてしまったのは何故だろうと考えてみた。

秩父の栃谷村に戻っているという母の面影を偲んでみた。その人の表情は霞よりさらに濃い霧の彼方に潜り込んでしまって、容易に形を表わしてこない。廊下をそっと歩いて自室に向かいだすと、源兵衛を呼ぶ父のたてる鈴の音が背中から響いてきて、精一郎を追い抜いていった。

旅のいで立ちは小袖に野羽織、短めの野袴を穿き、肩紐の後ろには背負袋を通し、町人が被るような菅笠をつけた。腰には小刀だけを差し、右手には袋に入れた木刀を下げた。

父は見送りには出てこなかったが、門の前には十数名いる家士や下女、下男がそろって佇んで精一郎の旅立ちを見送った。握り飯を作ってくれた綾の色黒の顔に、陽にあおられて滲み出てしまったような感傷的な色合いが浮かび上っていて、背中を向けた精一郎の心が針で突かれたように痛んだ。

大川橋の東詰までくると「若様」と大声で呼ぶ者がいる。その声の主が誰だかすぐに分った精一郎は足を止めずに橋を渡り出したが、板橋宿まで見送ることを父から命ぜられた千蔵が「ご用人様」と頓狂な声で叫んで立ち止った。

傍らを春野菜のウドや竹の子を満載した大八車や、季節には少し早い笊売りが通っていく。源兵衛の荒い息づかいは、町人のたてる騒音に負けなかった。

「若様、お待ち下さい」

源兵衛は精一郎の手にした木刀の入った袋を摑んだ。仕方なく精一郎は立ち止った。

「お殿様からこれをお持ちになるように仰せつかりました」

案の定源兵衛は父の大財布を差し出してきた。

「お持ち下さらないと源兵衛は腹を斬らねばなりません」

どこか狸に似た風情の源兵衛の口から酒の臭いが漂ってくる。花見と称して朝から冷や酒でも呑んでいたのだろう。肩を上下させて、赤ら顔をすでに人出の多くなった大川橋の上にさらしている源兵衛からは、一刀流の達人だという凄みは全く感じられない。

「源兵衛のシワ腹など斬っても、父は喜ばないでしょう」

そういって源兵衛の手から財布を取り、無造作に懐に放り込んだ。橋の上で押し問答をしても仕方がない。

「そんなぞんざいに扱っては困ります。懐の奥にしまっておいて下さい。二十両の大金ですぞ」

それを聞いて立ち止った者がいる。肩に荷を担いだ行商人と女連れの町人だった。

「父は先程三十両入っていると私にいっておられました。源兵衛、猫ババしましたね」

「め、滅相もない」

赤ら顔が破れて中味がはみ出したように醜く歪んだ。精一郎は笑って歩き出した。雪解け水が増えたせいか、足下でごうごうと水流が吠えている。

「若様、この源兵衛めをいかように憎まれても結構でございますが、お殿様のことは決してお怨みにならないで下さい。若様のことはそれはもう、大変に誇りにお思いなのでございます」

横に並びかけてきて源兵衛が小声でいった。源兵衛の呟きは重く腹に響いてくる。千蔵は二人の後を神妙な様子でついてくる。

「私は父を怨んでなどおりません。源兵衛だって憎んではいない」

「お尋ねになられましたお母上のことについて、源兵衛めは何一つお答えできませんでした。お憎みになって当然です」

「母上が栃谷村で暮しておられる。それさえ分かれば充分です」

精一郎は足を速めた。七十八間（百四十メートル）の長さの大川橋は、人につかえてなかなか渡り切れない。

「何かございましたら必ずお知らせ下さい。この源兵衛がとんで参ります」

「そんな酒太りの腹では、飛ぶわけにはいかないでしょう」

初めての一人旅だというのに、今朝の自分は随分皮肉っぽくなっていると精一郎は思った。母がどういう状況で男谷の家を出されたのか、今はどのような境遇にあるのか、何もかも知っているはずの用人の源兵衛は、父に忠義だてして何一つ答えてくれなかった。父が母に対して不当な扱いをしなかったというのであれば何も秘密にすることはないではないか。そう不満に思う心持が、ここ数日、腹の中でくすぶっていたのは事実だった。

「こちらの通りを参りましょう。広小路は人が多すぎます」

橋を渡ると材木町の大木戸の前にすっと立って千蔵がいった。たしかに雷門の前にはもう人が出ていた。老人の姿が多いのは、花見に行くせいだろう。

「若様、旅先では親切ごかしに寄りそってくる旅人には、お気を許してはなりません。大抵の者は護摩のはひですぞ」

精一郎の袖を引いて源兵衛は白眼を剝き出した。

「ゴマのはいとは何です？」

「若様の懐中を狙うふとどきな者どものことです。のちほどどこかで休まれたら、懐中

の金子は三つに分けて持たれることです。それから見知らぬ者から飲み水なども頂いてはだめです。腹痛で済むならまだしも、毒が入っていることもあるのですぞ」

「何故毒を盛るのですか」

「たわけたことを申されるな。わずか一分の金で人を殺める無法者が、この世にはたんとおるのです」

「分かりました。気をつけます。では父上にご心配なさらぬよう伝えて下さい」

そういってあっさりと源兵衛を置いて、精一郎は町屋に入っていった。弁当を抱えた千蔵が後に続く。人通りは少ないが、材木を担いだ人足があちこちの路地から出てきて、大川に通じる路地に入っていく。うろうろしていると頭にぶつけられそうになる。

諏訪町を抜けて黒舩町に入ると後ろから千蔵が「おや忠次郎様だ」とひょうきんな感じでいった。見ると弟の忠次郎がにこにこして大護院八幡様の大鳥居の下に立っている。

「兄上、私も途中までお伴します」

何が嬉しいのか忠次郎は、白い歯を見せて精一郎に肩を並べてきた。

「今朝は算術と馬の稽古ではなかったのですか」

「はい。でも算術はつまらないので馬の稽古だけにしました。兄上を板橋まで送った後、千蔵が私を馬場まで迎えに来る手筈になっているのです」

米俵を満載した荷車が脇を通ると、細かい藁埃が舞い上った。忠次郎は袖で鼻を押さえて荷車をやり過ごすと、源兵衛のやつが、といきなり弾んだ声を放った。

「源兵衛のやつがあの蔵前の八幡様で、小揚の者どもと大立ち回りをしたのですよ。ご存知でしたか？」

「いつのことです？」

「おととしの祭りのときでした。そうだな千蔵」

へえ、そのようで、と千蔵が張り子の虎のような仕種で頷いた。その目が油断なくあたりを窺うようにしているのが精一郎の気になった。

「喧嘩をふっかけられて、四人ばかりを叩きのめしたそうです。あれは面白かったと源兵衛がいってました。喧嘩の仕方を覚えた方が、後々よいことがあるのです。お城にお勤めすると、必ず古手の先輩達から無体を仕掛けられる。そのときの為にも喧嘩の度胸をつけておいた方がいいということです」

元旅籠町には地方から江戸に出てきた旅人の宿が並んでいる。向かいは浅草御蔵でその後ろに御蔵奉行の役宅がある。蔵前には牛がつながれ、荷運びの人足が褌一丁の裸でたむろしている。仕事にあぶれた人足が、色黒の芋のような顔を二人に向けてじっとしている。その目は小石をはめ込んだように奥行きがない。

「叔父から聞いた話なのですが、勘定方に初めて出仕したときは冷や冷やものだったそうです。仲間や上司に馳走をふるまい、おみやげを渡すのはよいとして、いじの悪い者

にからまれると、宿直の夜などは褌をはぎ取られた上に、あそこを、つまり、男の一物ですね、そいつを箸でつまみ上げられて秤にかけられることもあるというのです。一貫目、色合い極めてよし、と合いの手も入るそうです。幸い叔父は付け届けが利いて、さような悪さを仕掛けられずに済んだということでした。いやはや、御番入りするのもひと苦労なら、お城に上っても大変な思いをすることになりそうですね」

森田町の大門の下を過ぎると御蔵前片町に入る。蔵番手代が人足頭を指図する姿が目につき、蔵番長屋の住人相手のぼて振りが、野菜を売り歩く様もせわしく精一郎の目をよぎる。

気が付くと忠次郎のお喋りが止んでいた。鳥越橋を渡り出しながら忠次郎の様子を窺うと、どこか浮かない顔であたりをそわそわと眺めている。

どうかしましたか、と訊こうとしたとき、背後で小石を地面に叩きつけたような足音が立った。ついで橋板を渡るどすどすという音が響いてきた。精一郎は振り向かずに歩き続けた。

「どあっ！」

掛け声と共に橋板を思い切り踏み込んできた者がいる。

精一郎は初めに左肩を後ろに回し、次いで右肩を後ろに回した。精一郎としては背骨を中心にただかわり番こに半転させただけなのだが、勢い込んで襲ってきた二人は、太鼓型の橋が下りにさしかかっていたところでもあったので、足を止めることができず、そのまま橋の欄干に突っ込んだ。

一人は胸を強く打ったらしく、口から蛙を潰したような音を吐いた。精一郎は二人の背後にすべるように進むと、片足ずつ手に取って、ひょいと持ち上げた。

悲鳴が上って二人の若者は二間下の堀に落ちた。蔵役人を乗せていた小船の船頭が大笑いをすると、小柄だが肩の張ったまっ黒に日焼けした蔵役人が、負けじと笑い出した。橋の上にはたちまち人がたかってきた。その中に蒼白になっている忠次郎の姿もある。

「忠次郎殿、お仲間を助けなくてよいのですか」

精一郎の言葉を耳にして、忠次郎はぴょんと跳び上った。欄干から見下ろしている商人達を掻き分けて堀に向って身を乗り出し、「おーい、弁蔵！　三郎助！」と叫んだ。

精一郎は笑って橋を降りた。

「待ってあげなくてよろしいんですか」

後ろから千蔵が遠慮がちに声をかけてくる。返事をしないで立ち止まり様振り向くと、千蔵は肝を潰した顔で精一郎を見据えた。

「千蔵もなかなかの役者ですね。この通りに私を誘い込んだのはおまえではないか。忠次郎殿の仲間が私を待ち伏せしていたのを知っていたのでしょう」

「へ、へえ」

千蔵の額に小粒の汗がびっしりと浮き出てきた。

「水はまだ冷たい。あの者達が風邪を引いたら千蔵にも責任があります。なにせ悪巧みの仲間なのですからね」

精一郎は再び前を向いて歩き出した。千蔵が二歩遅れてついてくる。顔を見られる心配がないので安心して微笑むことができた。

「おまえも私の懐の金子を狙っていたのですか」

笑いをこらえていった。め、滅相もない、と喚いた声が、先程の源兵衛とそっくりだった。

「あれはほんのお戯れになさったことで。忠次郎様のお仲間が兵原草廬でお鍛えになった若様の腕がどんなものか、是非試してみたいと言いだされたとかで……忠次郎様も当初は困っておられました」

「まあ、いいでしょう。私も堀にまでほうり込むつもりはなかったのだが、あの者たちが木刀を振り翳していたので、ついいたずら心が起きてしまったのです」

「いたずら心で……へえ、それにしては風のように素早い動きでしたな。ともあれ、後ろも見ずにお二人の打ち込みをかわされるとは、さすがに若様はすごい」

千蔵はぶつぶつと呟いている。大川から吹いてくる風に乗って、薬園に植えられた薬草の苦みのある香りが漂ってくる。精一郎はずぶ濡れになった二人の仲間を介抱している忠次郎のあわてふためいた姿を想像して、胸の中がほのぼのとしてくるのを感じていた。

浅草御門の手前を西に折れ、神田川沿いに上って湯島の聖堂を見下ろす道を斜めに入る。そこはもう中山道に通じる道で、なだらかな坂を上って本郷の町屋を抜けると加賀様の屋敷に出る。騒音が途絶え、急に静まり返った屋敷通りを行くと、長塀の上に身を迫り出した桜の木から、細かい花弁がはらはらと落ちてくる。それが光の海を泳ぐ花の精のように思えて、急ぎ足の精一郎の気持をなごませる。

急ぎ足になるのは、早く母のいる秩父に着きたいと思っているからではなかった。むしろその逆で、父に反発する形で家を出てきたものの、気持の整理がつかないままに母に会うことにでもなったら、自分はひどくうろたえてしまうのではないかと恐れに似た危惧を抱いているのだ。

足が速くなるのは、胸騒ぎめいた焦燥感がずっと潜んでいるせいだった。それが分っていながら、精一郎は母と対面したときの口上を決めることができずにいた。

畑地が多くなり、弁天不動の小高い山を眺め上げ、王子稲荷の赤い山門をやり過ごすと、道は二股に分かれてくる。その先が板橋宿だった。ここで中山道と別れることになる。

川越街道に入り、商人宿や飯屋、褌一枚の人足達や地元の荒くれらしい顔付きの男たちがたむろする盛り場を避けて、精一郎はひとの少ない茶屋を捜して床几に腰を下ろした。番場町の家からほぼ二里半。時刻は四ツ半になっていた。

千蔵が手にした包みを開けると、形の良い握り飯が四つと煮物、干し大根が出てきた。千蔵にも食べるように勧めてから握り飯を一つ取ってかぶりついた。程よい塩味が飯に乗っていた。口の中でもぐもぐやっていると甘味が滲み出てきた。綾の味だと思った。

頭を下げて、両手で握り飯を囲ってもそもそと食っていた千蔵が、若様、と奇妙な声で呼びかけてきた。なんだろうと思って千蔵を眺めていると、腰から手拭いを引っぱり出して、しきりに鼻を掻いている。あげくの果てに、ぐちゃぐちゃになった握り飯を下に置いて洟をかみ出したので、隣の床几に腰かけていた老武士が、不愉快そうに千蔵を睨んだ。

「若様、殿様からお赦しを頂いておりやす。あっしをお伴にして下さりやせ」

「それは駄目だ」

精一郎は即座にいった。

「父から私を見張るように頼まれたのでしょう」

そう問い質したが千蔵は黙っていた。

板橋まで見送らせます、と源兵衛が言いだしたときから怪しいと睨んでいた。それに

千蔵の荷物は昼食用の握り飯だけにしては大きすぎた。物のぶつかる音がしたとき、あれは小硯箱だなと思ったものだった。見送るだけの者には不要な代物だった。

「おまえは江戸に戻れ。父に代って陰膳を作って、旅の間私が飯の食いっぱぐれのないように祈ってほしい」

「連れてって下さい。何かとお役に立ちます」

「修業の旅に、伴の者を連れていく者はおりません」

「お願いです、若様」

千蔵は両手を合わせた。それには取り合わず、精一郎は奥に向って盃を持ってきてくれと頼んだ。

「水盃だ」

老婆が持ってきた盃に水を入れ、千蔵の前に差し出した。千蔵はまた洟を啜り上げた。情ねえ、といって目頭を押さえたのは、水盃での別れの儀式が白々しく、千蔵にとっては悔しい結果となったからだろう。

盃の水を飲み干し、厠に行って戻ってくると、千蔵は両膝をついて地面に這いつくばっていた。その後ろを炭俵を三つ積んだ荷馬が、馬方に引かれてうなだれて通っていく。

「千蔵、達者でな」

それだけいって精一郎は茶屋を出た。向こうから走ってきた飛脚が精一郎と入れ違い

に茶屋にとび込み、千蔵の隣の床几に坐っていた老武士に状箱を差し出した。それを待っていたのだろう。老武士は勇んで受け取り、飛脚に駄賃をやる閑も惜しんで状箱を開きだした。

その光景を横目でなんとなく眺めてから半町（五十メートル）程いって振り返ると、千蔵が頭を横に傾げて棒のように立っている。唇の端がへの字に下がり、肩が小刻みに震えているのは涙をこらえているのだろう。

さらに半町いってもう一度振り返ると、まだ同じ姿勢で突っ立っている。姿が小さくなった分さみしさも増したが、精一郎も精一杯我慢をして手も上げずに向き直った。

宿場を出るとあたりは松並木になった。道は平坦だが、松並木の奥は雑木林が深く続いて見通しはそれ程よくない。だが林の上には明るい空が広がっていて、初めて旅に出た精一郎の気持を伸びやかにさせてくれる。

江戸を出たのはこれで三度目だった。一度は家の者と品川海晏寺に紅葉狩りに出かけ、もう一度はどこだか場所は判然とはしないが、父に連れられて大川を遡り、梅を見に行ったことがあった。いずれも兵原草廬に入塾する前のことで、紅葉狩りに行ったときは、その当時通っていた一刀流の師範と師範の奥方も同行した。向こうで師範が酒に酔い、妻を殴ったので父がひどく立腹していたことを覚えている。

一人旅は無論初めてのことだった。母と向かい合ったときを想像すると、気恥しい気

持が浮き上ってきてしまうが、それ以外のことでは、思っていた以上に自分の心は晴れ晴れとしていて、のどかなことに気がついた。

秩父にあるいくつかの道場を訪ねてみたいという思いが、ともすれば引っ込みがちになる臆病な神経を励ましてくれている。本当に見知らぬ剣士と試合ができるのなら、それは素晴らしいことだと思う。

平山子龍先生は、常々他流の者と竹刀を交える重要性を塾生に説いていた。戦場にある武士が剣を交えるのは、同門の者ではなく、見たことも聞いたこともない剣を遣う侍であるはずだ、というのがその理由であった。一度、鉄砲を構えた道場破りを、子龍先生が一撃のもとになぎ倒してしまったのを目のあたりにしたことがある。先生は天狗のように飛んで鉄砲を足で払い様、敵の首に鉄扇を叩き込んだのだ。道場破りの首からコブが生え、それは柿程に大きく腫れ上った。

――できることならば、このままずっと旅に出ていたい。

林を縫って流れてくる冷ややかな空気と、空から舞い降りてくるぬくもりのある空気を同時に胸の奥深く吸い込みながら、精一郎はそう思った。

糊口をしのぐ方法は思いつかなかったが、その内、誰よりも強くなって、旅先で知り合った人の道場で客人となり、通ってくる弟子達に剣術を教えることができるかもしれないと夢みたいなことを考えた。

川越街道は想像していたより旅人の姿が多かった。

肩に荷を背負って足早に歩いていく行商人、弟子を連れた修験者、棒縞の合羽を着て尻を端折り、パッチを穿いて紺の脚絆をつけてひょうひょうとやってくる町人、籠を背負い、むつかしい顔で腕組みをしてガニ股で歩いている農民など、その旅姿は色々だが、精一郎の目についたのはなんといっても老若男女の巡礼の姿だった。

今も、道端の道祖神に、草鞋を奉納して手を合わせている老人とその孫らしい子供がいる。あれは道中の安全や足の病いが癒えることを願掛けしているのだろう、と精一郎は見当をつけてみた。

後ろから蹄の音が響いてくる。

向こうから来る旅人が道の端に身体を寄せるのを見て、精一郎も同じように真似て馬をやり過ごそうとした。

蹄の音が近い割にはなかなか近付いてこないので振り返ると、先程茶屋で状箱を開けていた老武士が、馬のハミをうまく合わせられずに難渋している。

どうどうといって馬の腹を蹴るが、馬は目を動転させて今にも立ち上がろうとしている。馬子から馬だけを借りて早駆けを目論んだのだろうが、御しきれずにみっともない姿を旅人にさらすことになってしまったようだ。

おーい、という声が街道を渡ってきた。手拭いを被った馬子が、馬より派手に土煙をたてて駆けてくる。やっと馬に追いついて口輪をとると、老武士も馬も安心したように同時に鼻から息を吐いた。

馬子に口輪をとられた馬が、落ちつきを取り戻してこっちに向って歩き出すのを見て、精一郎も身体を戻した。

「？」

だが目の隅に映ったものが気になり、改めてやってくる馬の後方に目を凝らした。松の幹の陰から顔を出したのは案の定、千蔵であった。精一郎は手にした木刀を千蔵に向けて突き出した。立ち止った千蔵は地蔵のように固くなった。次に木刀を振り下ろすと、千蔵はがっくりと項垂れてその場に蹲った。

「帰れ」

叫んだわけではない。ただ少しばかり威圧する気持を込めて、半町ばかり彼方にいる千蔵に向っていった。千蔵は渋々立ち上ったが、丁度そのとき精一郎の傍を通りかかった馬が、敏感に反応して両前足を空中に持ち上げた。

その拍子に老武士は馬から転げ落ちた。あまりあっさりと落ちたので、腕組みしていた農民まで不気味な笑い顔を見せた。声をたてて笑った町人は、怒声を発した老武士が足をもつれさせているのを見てあわてて駆け寄った。老人と孫の巡礼は口を半開きにして、まばたきもせずにその様子をじっと見ている。

精一郎は何喰わぬ顔をして歩き出した。

二

この頃日本橋から秩父に至る道筋はいくつかあった。その前に熊谷で用事をすませてから秩父に向かおうとする旅人は、川越から熊谷往還を通って松山、熊谷に行き、そこから道を西にとって小前田（埼玉県深谷市）に出た。

この道は秩父往還と呼ばれている街道で、小前田から秩父に至るには二つの道筋があった。

一つは道をそのまま荒川沿いに西にとって、古寄居（大里郡寄居町）、野上（秩父郡長瀞町）、金崎（秩父郡皆野町）ときて荒川を渡り、忍藩領の大野原（秩父市）に出るとさらに南へ下って、秩父郡の中心地である大宮郷（秩父市）に至る方法と、もう一つは小前田の数町手前の荒川村（秩父市）から荒川を渡って鉢形に行き、釜伏峠を越えて大宮郷に至る道筋である。

大宮郷では六斎市と呼ばれる絹取引を主にした市が一と六の日に開かれ、商品を欲しい者、現金を手にしたい者双方が各地から集ってきて、相当な賑わいをみせた。それで、江戸方面からだけでなく、上野の太田や中山道を使った商人達が、熊谷経由で秩父に入ってくることが多かった。

ただ荒川村から赤松村に至る荒川の渡しが始まったのは文化十二年（一八一五）からである。精一郎が旅に出た文化十年三月には吊り橋を使って往き来していたわけで、しぶきをあげて流れる深い急流を覗き込んだ旅人の中には、足がすくんで歩くことができない者も数多くいたという。

江戸から秩父に至る最短距離は、所沢から飯能を廻り正丸峠を登って芦ケ久保（秩父郡横瀬町）から大宮郷に出る道で、これは吾野通りと呼ばれた。江戸秩父道ともいわれる程絹や太織物、それに麦、煙草、油などが業者によって頻繁に運ばれた。他にも飯能から山伏峠を越えて大宮郷に入る道や、児玉から行く道もあった。

また甲州裏街道と呼ばれる道を選ぶ旅人もいた。これは甲斐国から雁坂峠を越え、国境の栃本関所を通って落合（秩父市大滝）から大宮郷に入る道筋である。雁坂峠は標高が六千六百尺（二千メートル）以上あり、旅人にとってはかなりつらい峠越えになった。

精一郎がとったのは川越通りと呼ばれる道筋である。誰かに教えられたものではなく、自分で調べて選んだ道だった。

板橋を出ると白子（和光市）、膝折（朝霞市）、大和田（新座市）、大井（ふじみ野市）と通って川越に至る。

川越藩は代々徳川家の門閥譜代が城主になることがほとんどで、酒井重忠が一万石で入城して以来、寛永期には知恵伊豆と呼ばれた松平信綱が治め、元禄期には柳沢吉保が七万二千石で入封して、そののち十一万二千石に加増された。柳沢吉保は平山子龍先生にいわせると、世間でいわれる程の単なるおべっか使いではなく、川越領を治めている間、荻生徂徠について新田開拓の方法を学び、新たに三千四百石の収穫を打ち出した程の藩主であるという。

子龍先生は武芸十八般を指導するだけでなく、農業にも通じていて、荒地を耕起し、さらに整地して田畑とし、充分な基肥を施して良田と化けさせる農法をも熱っぽく塾生に講義してくれたものだ。塾生は農作業をやったことはおろか、ちゃんと観察したこともない者がほとんどで、講義中は先生のいわれることを筆記するのに忙しくて頷く者などいなかった。

板橋を出て一刻程行くと雑木林が切れて畑が現われてくるようになり、春の光の下で農作業に精を出す農民の姿が精一郎の目に映り出した。それ程良田とはいえない畑を、牛に馬鍬を引かせて働いている男達を見て足をとめ、成程、あれが先生のいわれた整地か、あっちから天秤棒を担いでやってきた男は、先生がこれが稲の生命だといわれた種籾を運んできたのだな。それにしても種籾の俵というのは、随分小さいものなのだな、と一人で呟いては講義の復習をしていた。

現在川越藩を治めているのは松平直温というお方で十五万石になっている。聞いたところでは川越城下は、侍屋敷、寺社地のほかに町屋だけでも十ヶ町もあり、三百軒近い店が商売をしているという。それを町奉行配下の同心十名で取締っている。古い城下町なので全てが緊密に統制がとれているのだろうが、そういうところなら武道も盛んで、下斗米さんの紹介してくれた道場以外でも立ち合いを許してもらえるかもしれない、と精一郎は思ってみた。

そういうことを考えて歩いていると、ほの白い春の光が胸の中に入ってきて、金色に輝き出したと感じられるときがある。武道に気を向けたときの精一郎は何より生き生きとする。

いずれにしろ、今日中に川越城下に入るのは無理だった。出発したのが五ツ過ぎと遅かった上に、板橋でのんびりと握り飯を食べ、千蔵を置いて歩き出した後も、巡礼や行商人たちの物珍しい様子をキョロキョロと眺めながら歩いたので、かなりの時間をとられてしまった。

時折すれ違う供連れの武士にしても、精一郎のように閑そうに歩いている人はいない。たとえ貧相な顔立ちをしている人でも、視線だけはしっかりと前方を見つめていて、野袴の裾を蹴りたてて歩いていく。挟箱を担いだ年若い中間の方が主人を追いかけるようにしてついていく。藩に仕えるというのは、あのように大変なものなのだな、と精一

郎は思っていた。本当に急ぎの用事があるのではなく、当人の体面のためだけに速足になっていると見えたからである。

精一郎のそのような皮肉な思いは、父をはじめとする御家人や旗本衆にも向けられている。幕臣が将軍様をお護りするのは勿論のことだが、それ以上にすべての民に安心して生活できる環境作りをしてやることが重要だった。畑を耕す者がいなくなっては、刀を差した武士など十日たりとも生きてはいけなくなる。

だが、いまこの時に、一大事が起った場合、命を賭けてこの国を、人々を、護ろうとする武士がどれくらいいるのだろうかと考えると、精一郎の胸は悔しさと憤りで黒く塞がれてきてしまう。たとえば、おろしやがたびたび樺太から蝦夷にかけて襲撃をかけてくるのは事実であり、それがいつ何時全国に敵の目が向けられてくるか分からず、ことは緊急を要するところまで来ているはずなのに、幕閣の上層部のえらい人達は、まるで何事も起きていないかのように装って、現実から目をそむけようとしている。それらのむずかしい問題は、自分がしこたま銭を貯めて引退してから議論してくれといわんばかりの態度なのだ。

幕府が兵原草廬を閉鎖せよと平山子龍先生に命じたのも、正論を吐き、それを実践せんとする子龍先生の迫力に恐れをなしたためなのだ。

「それもたった一人の、ことなかれ主義の老人の権力によって、正義が潰されたのだ」

下斗米秀之進は秩父への旅の報告に訪れた精一郎に対して、それはいいことだといって、川越と大宮郷にある道場に紹介状を書いてくれた。その間にも訪問客があって、その内の一人と話している内に、急に激したようにそういった。その目は、あきらめや怒りよりも、強い切迫感に濡れていた。

「色々なことが急に動き出しています」

訪れてくる元兵原草廬の塾生との対応に忙しい下斗米が、座敷の中に戻っていくと、先日痛心の底に沈んでいた精一郎を見舞ってくれた細井萱次郎が、門前まで出てきてそう口を開いた。

「下斗米さんが南部領に開く実用流の道場に私も参加します。それに遠州浜松にも道場ができます。関西武士の性根を叩き直す必要があります」

そういったあとで一歳年下の萱次郎はぐっと歯を噛みしめ、鋭い目で精一郎を睨みつけた。

自分は下斗米さんについていく。だから精一郎殿も……。

萱次郎はそう伝えたかったのかもしれないと精一郎は思ってみる。だが、その言葉が吐かれない内に、屋敷内から萱次郎を呼ぶ声がして、彼は一礼してそそくさと戻っていった。兵原草廬に塾生としていたときと同じように、下斗米の道場でも、萱次郎は末席に名札を置かれているのだろう。だが萱次郎がいおうとした最後の言葉を聞かずにいて

よかったと、旅の途中で思い出して精一郎は自らに言いきかせた。

北方警備は大切だし、それに隊士として入隊する熱情は充分に持っているつもりである。だがまだそういう状況に身を投げだしてはいけない、それは今の自分には無謀すぎる選択だ、という思いが一方で厳然と存在し、それは正しく慎重な考慮であると判断するものが心に生じてきてもいた。

いや、むしろ、その思いの方が強かった。自分の力は世のために生かすのにはまだ充分ではなく、今は修業の途上にあるのだ、という不安が先に立っていて、いたずらに燃えさかる火の海に身を投じるのは犬死と同じではないかと、冷静に自分に語りかけているもう一人の自分を発見することがあるのだった。

そういう様々な思いが白子までの五里（二十キロ）の道を歩いている精一郎の胸に湧き起こるのだが、その度に気むずかしい顔をして腕組みをしていたわけではない。

街道にはあまりパッとしないが、農作業からはみだした老人達が営む旅人を休ませる茶店も出ていて、その中には茶だけでなく酒も呑ませる気楽な茶店もあった。そんな一杯呑み屋風の茶店の藁ぶきの屋根には、桜の枝が庇（ひさし）代りに伸びていて、風に散らされた花弁がはらはらと赤い顔をした客の上に落ちてくる。そんな可憐な花弁の舞いを、精一郎は口を半ば開いて眺めながら、同時に下斗米のことや子龍先生のことや、これから先の旅のことを考えていた。

茶店の前を急ぎ足で通り過ぎていく武士の中には、そんなふやけた表情で桜を眺めている精一郎に対して、この閑人め、といまいまし気に睨みつけていく人もいて、精一郎はそのたびに困惑する。実際に頭を掻くことはないが、気持の上でそうしてしまっている精一郎の胸の内では、そういう武士に対して、ああはなりたくないものだと軽蔑（けいべつ）する気持が湧き上っている。

今の武士の武士道は、天子様に命を捧げるためにあるのではなく、組織内で身を守るためにだけ存在している。あんな連中は武士ではない、といった子龍先生の言葉に強い影響を与えられていたせいだった。

――この分では、今夜は白子泊まりになるな。では明日は早い内に川越城下に入って、いくつか道場を訪ねてみよう。

首から長い紐を垂らし、その先端につけた巾着（きんちゃく）からジャラジャラと賑やかな銭の鳴る音をたてて往き過ぎた商人がいて、おかしなことをする人がいるものだと思いながら、精一郎は川越での過ごし方を考えていた。

――もし、これはという道場が見つかれば、何泊かして、道場主と申し合いができるまでねばることも必要だ。

精一郎の思いは蝶々のように次から次へと移っていく。

――源兵衛を通して父からもらった二十両が懐の中にある。その他にも一分金、二朱

銀合わせれば四両余りもある。安い宿を捜して泊っていればひと月やふた月旅に出てもなんとかしのげるのではないかな。ときには農家に宿を頼み、その生活ぶりを目のあたりにするのもいい勉強になるだろう。そうだ、子供達と釣りをするのもいいだろう。

そんな暢気な考えも精一郎の頭の中に浮かんできた。

そういった精一郎の若者らしい稚気に溢れた思いの裏側には、母に会うのだ、という厳粛な気持がひたむきに息づいている。自分を産んで間もなく正妻に遠慮をして実家に戻ってしまった母である。実家でどのように迎えられたか想像すべくもないが、肩身狭くこの十三年を生きてきたであろうことは容易に想像できる。

乳母の乳で育てられた精一郎には、母の温もり、その匂い、その面影を少しも感じとることはできなかったが、母、という響きの重さには、郷愁とか、親子の情などというありふれた言葉では表わすことのできない切ない痛みがある。それは、チクチク痛くて、冷水に刺されるように痛くて、どこまでも続く闇に腕を伸ばしていくような痛みでもあるのだった。

母に会ってどうする、という考えはまだ精一郎の胸に生じてはこなかった。

とにかく会ってみるのだ。だから、きっと生きていて下さい。それだけが精一郎にとって全てだった。

その母は栃谷村にいると下斗米から教えられた。栃谷は大野原の半里（二キロ）手前にある村で、秩父三十四番札所の内の一番、四万部寺を擁している。巡礼を見るたびに、精一郎の心になにかしらほのぼのとした暖気のようなものが漂うのは、そのせいらしかった。この人達はまず、母のいる栃谷村を目ざして巡礼の旅に出てきたのだと思うと、見知らぬ老人達にさえ、肉親に対するものに似た親近感が湧き上がるのである。

その栃谷村（秩父市）へは川越を出てまず高坂（東松山市）を抜け、次いで菅谷（比企郡嵐山町）、小川（比企郡小川町）と通り、坂本（秩父郡東秩父村）から粥新田峠を越えて至るのである。家からおよそ三十二里（百二十八キロ）。寄り道せずに歩けば三日で着ける距離だった。

三

「もし、お武家様」

そう声をかけられたのは、白子まであと半里余りという所まで来たときだった。もう半刻もすれば陽が沈むという頃で、今夜は白子泊まりにしようと精一郎は考えていた。その先の膝折までは一里足らずで行けるはずだったが、着く頃には暗くなる。そうまでして急ぐことに躊躇うものがあった。

「旅のご婦人が腹痛で難儀しております。薬のお持ち合わせはございませんか」

その男は中背のぽってりとした感じの男で、小袖の尻を端折り、パッチに紺の脚絆をぴっちりと着けていたが、行商人のようには見えなかった。

「腹痛ですか。薬はあります」

精一郎は即座に答えた。だが落ちついていた訳ではない。見知らぬ者から話しかけられたのは旅に出て以来初めてのことであり、うかつにもその男が、植込みの切れたあたりから、まるで陽の光の下をくぐるようにしてぬっと現われるまで、その気配に気付かなかったからである。

これがいつかの浪人者のように待ち伏せをされていたのであれば、身体のどこかに傷を負っていたはずだと精一郎はとっさに自らを戒めた。腹の底が冷たく沈んだ。

「こちらのお武家様が薬をお持ちだそうです」

男は庭に向って声をかけた。そこには雨戸一枚程の広さの床几が置かれ、旅姿の男女が一組腰を下ろしていた。その横に野良着をつけた皺の多い老人が朽木のように立っている。老人は精一郎に向ってうやうやしく腰を曲げておじぎをした。声を出したのは客の方だった。

「どなたかは存じませんが、助かります」

丁寧な口調でいったその男は、地方の商家の若旦那といった感じで棒縞の合羽をつけていた。傍らに振分けの荷物が置いてある。

農家の庭かと思えるような橙色の日差しを受けたそこは、どうやら旅人に茶を提供するつもりで床几を置いたようだった。見れば植込みの端から「お休処」と書かれた小汚い布きれが吊り下っている。声をかけられなければ、そこが茶店だと気付かないままに通り過ぎるところだった。

「どのように痛むのですか？」

背中の荷を下ろし、行李を開いて薬の入った袋を出した。横から初めに声をかけてきた男が無遠慮に覗き込んできた。

「半刻程前に饅頭を食べて、それから痛いと言いだしました。妹は昼食はとらなかったものですから、それで……」

「分かりました。ではこれを試してみて下さい。センブリの生薬です」

この二人は兄妹だったのか、と思いながら精一郎は薬を一包取り出して兄の方に差し出した。そのとき俯いていた妹が顔を上げた。薄く化粧をしていたがその下の肌は透き通る程の白さで、小さめに造られた顔立ちは人形のように整っている。二十歳位のようだった。

「ご雑作をおかけします」

消えいるような声でいって精一郎に視線を向けようとした。長い睫毛が印象的で、苦悶している黒い瞳が小鳥の目のように小さく輪を描いた。

目の中に波紋が立ったようだった。

女は身体を立てようとして兄の方に上体を捻った。女の襟許に夕方の光が当たり、小粒の汗が光った。そのとき精一郎は胃の底に大きな鉛が放り込まれるように感じた。重いだけでなく、その鉛はさらに胃に振動を起こした。

――これが大人の女の人なのだな。

浴衣地の合羽を着物の上に着けていたが、精一郎には女の肉体のうねりがはっきりと感じとれた。だが、それも一瞬のことで、兄の方が茶店の親爺に「水を」と頼むと、親爺の代りに、おうよ、ともう一人の男が返事をしたのでハッとするものがあった。

「おれが汲んできてやるよ。親爺さんはそこにいな」

男は敏捷に動いて裏に駆け込んでいった。そのくだけた言い方に男の荒んだ生き様を嗅ぎ取ったように思えて、精一郎は少しいやな気持になった。

「あの人はお連れの方ですか？」

妹の背中をさすっていた兄に、精一郎は訊いてみた。

「いえ、ここで会って親切にしてくれた方です」

兄は何も疑っていない様子で、ありがたみを込めた言い方で答えた。親爺に男の素性を尋ねるべきかと迷っている内に、男は湯呑みに井戸水を汲んで戻ってきた。いで立ちは旅姿なのに、立ち居振る舞いはこの家の者のようだった。その如才なさは疑うに充分だった。

「生水で薬を飲むのはよくありません。親爺さん、湯を沸かして下さい」

精一郎がそういうと、湯呑みを手にした男は差し出した腕をとめて、ぞんざいな一瞥をくれてきた。そのしぐさは、親切でやっていることに横から水を差された不快さの表現ともとれたが、男が本性を垣間見せてしまったとも見られた。精一郎には得体の知れない大きな虫が、土中からむっくりと頭をもたげたように感じられた。

「ここらの水はいい水だよ」

「いや、湯の方がよく効きます」

促すと親爺は倒れるような足取りで土間に入っていった。見知らぬ者から飲み水の提供を受けるなといった源兵衛の言葉を思い出してのことだったが、精一郎のいったこともまた本当だった。男は不快さを隠そうとせず、手にした湯呑みに入った水を、これみよがしに音をたてて飲んだ。

「これは当薬を粉末にしたものです。当薬は湯の中に入れてよく振り、その上澄みを飲むのですが、粉末でも湯に溶かした方が効果が速いのです」

精一郎は兄と妹の双方に等分に視線を向けていった。兄は頷いたが、妹は口の端を歪めて痛みをこらえていた。

センブリは精一郎自身が摘んできたものである。花をつけたセンブリを選び、根の先

を切らないように全草を引き抜いてそのまま乾燥させたものだ。その当薬を粉末にしただけのことだが、その効き目は実証ずみだった。薬草についても平山塾で習ったものだった。

親爺が湯を運んできて湯呑みに移した。粉末を溶かし、妹はそっと口に運んだが、少し飲んだところで咳込んだ。兄が背中をさすり、「さあ、お登勢飲むんだ」と励ました。妹は目を閉じて飲み干すと、ぐったりと背中を丸めて床几に両手をついた。

このまま立ち去るべきかどうしようか迷ったが、湯を新しく沸かしたついでに親爺が茶をいれてくれたので精一郎は兄の隣に腰を下ろした。少しばかり腹が減っていて、綾の作ってくれた握り飯がまだ残っていることも頭の隅に閃いたが、さすがに食べるのはためらわれた。

妹の方は四半刻で腹の痛みから解放された。すると血色もよくなって、その身体からは何か明るい花弁が開いたような艶っぽいものがこぼれ出てきた。

「すごいわ。ほんとに痛みがなくなったわ」

妹は高い声を出して笑った。その四半刻ほどの間に、二人は熊谷の大広という紙問屋の息子と娘で、江戸まで商用で出向いた帰りなのだということも聞いていた。兄の正之助の口調から妹の登勢に縁談めいた話がもち上っていることも想像できたが、精一郎は詳しく訊くことはさし控えた。

もう一人の男は、登勢が薬を飲むのを見るとすぐに、じゃこれで、私は白子に用がありますのでといって小走りに立ち去っていった。荷物も少なく、その立ち去り方の鮮やかさと身軽さにむしろ精一郎は不審を抱いたのだが、その男が兄妹の身体や荷に手を触れた様子はなかったのでその時は黙っていた。

「先程までいた男の人は、何の商売をしている方なんですか？」

二人が身づくろいをしだしたのを見て尋ねてみた。正之助と名乗った兄は浮かない顔で口ごもった。

「さ、なんですか、市が立ったときが忙しいのだといっていたようですが」

「何か失くなった物はありませんか」

「えっ？　どうしてです？　あの男は盗っ人なのですか？」

正之助の驚いて目を丸くする様子に精一郎は苦笑した。

「いやそれはどうか分かりません。私は旅が初めてなのです。用心深くなっているのかもしれません」

無料で他人に親切にするような男に見えなかったからそう訊いてみたのだが、それは口に出さずにいた。精一郎の言葉に、兄の方は合羽の上から懐中を叩いて財布のありかを確かめていたが、妹の方は落ちついて髪に手拭いを巻いていた。

精一郎は手早く荷をまとめると、それではこれで、と一礼して二人の前を離れた。何

とお礼を申してよいのやらと呟いていた正之助は、植込みの切れ目から街道に出ていこうとする精一郎の背中に、お武家様、と声をかけてきた。その声は思いがけない程力強さに溢れていた。

「今夜は白子にお泊まりで？」

「そのつもりです」

精一郎は正之助に向き直って答えた。妹の方は島田に結った髪に手拭いを冠り終えて、兄より先に杖を手にして立ち上がりかけていた。その足許の附紐の赤さが精一郎の目にしみた。

「旅籠は決めておいでですか？」

いえ、とだけ答えて精一郎は頭を振った。えたりとばかり正之助は頷いた。

「宿は四軒ございますが、『たからや』にお泊まりなさいまし。私どもと縁続きの者がやっている宿でございます。『大広』の紹介で参ったとお申し付けください。今夜は私達もそこに泊まる予定でございますので」

正之助は早口でそういったあとで、これが、といって妹に向けて顎を振ってみせた。

「足がのろいので、私達が着く頃には日が落ちてしまいます。どうぞお先にお発ち下さい」

正之助は足元を直し、菅笠を被った。腰には道中差を差している。背後から夕陽を受けた正之助の細面の顔が黒く沈み、大きな目が白く光った。

お達者で、とだけいって精一郎は街道に出た。床几に坐っているときは気が付かなかったが、立ち上った登勢の頭が、兄より一寸程上に出ているのが意外だった。

夕陽は精一郎の左頬に当ってくる。桑畑の上にかろうじて残っている夕陽は、精一郎の足を自然に速めた。

白子へは半刻足らずで着いた。一軒だけ留女らしきものが宿の前に出て、やってくる旅人に向って「お泊まりなさいませ」と声をかけていたが、精一郎は無視して「たからや」の看板の下った宿屋に入った。痩せた小柄な女が出てきて「おいでなさいませ」といった。続いて暗い土間から目尻の吊り上った男が小走りに現われて、これでもかという程腰を折った。精一郎が大広の名を出すと、それはそれは、と番頭は相好を崩して一度大きく頭を下げた。番頭が大声で奥に向って叫ぶと、小僧が水を張った盥を持ってよろよろとやってきた。

どうしたものかと思っている内に、精一郎は足をすすがれ、鶴の間へどうぞといわれ、二階の小部屋に案内されていた。色黒の女中が先にお食事にしますか、風呂にしますかと訊くので風呂と答えたが、財布の処置に頭を悩ませた。仕方がないので大財布、小財布、巾着の三つの財布を一つにまとめて腹巻の中に入れ、野袴を脱いで風呂場にいった。

風呂場は暗く狭く、三人が入るのがやっとだった。屋敷にいるときでも精一郎は熱い

湯に浸ることはめったになかった。兵原草廬から屋敷に戻ってきて、湯に浸ったのは二度だけだった。一度目は源兵衛が、垢は湯に浸ってからでないと落ちないといったから入ったのである。

桶に水を汲んで身体にかけていると、「お武家様」と暗い湯船から声がした。少しカン高いその声を聞いて、白子宿に入る前に薬をもっているかと訊いてきた旅人だとすぐに分ったが、精一郎はそ知らぬふりで次の水を汲んだ。

「これは奇遇でございますね。私は弥助と申します。先程はお急ぎのところをお声をかけて失礼いたしました」

そう名乗った男は湯気の立った身体を精一郎に寄せてきたが、水のはねを受けると、ひえっ、といって後ろに下った。

精一郎は弥助という男にかまうことなく、水を固く絞った手拭いで身体をごしごしと拭った。

「お供の方はいらっしゃらないので？　すると剣術修業の旅かなんかで？」

横に来て弥助は色々と訊いてきた。そのほとんどに精一郎は答えることをしなかったが、どちらまでお行きになるので、と訊かれたときはさすがにうるさくなって鯰のような顔をした弥助を見返した。

「なぜそんなことを訊くのですか」

弥助はぎくりとしたようだった。板の間の隅に行灯を一つ置いただけの暗い風呂場だったが、その中でも精一郎の鋭い眼光は、腹に一物を抱えているらしい弥助の気勢を殺ぐのには充分だった。弥助はぞんざいに身体を洗うと、それじゃお先に、といってそそくさと出ていった。精一郎は首筋と足の指の間の汚れを念入りに落すと、冷水を二度被って風呂から出た。

部屋に戻ると袴をつけ、階下に下りた。丁度調理場から出てきた番頭がお出掛けですかと訊いてきたので、近くに鍛冶屋はないかと尋ねた。それならここを出て、と道順を示したあとで、番頭はふといぶかし気な目付きになって「あそこでは鍬や犂を打つだけで、とてもお武家様の腰の物は直せませんが」と低い声で呟いた。精一郎は礼だけをいって、宿の草履を履いて外に出た。

宿場にはすでに夜が静かに舞い降りてきて、他の三軒の旅籠も灯を入れていた。一膳飯屋も一軒あって、そこでは褌をつけただけの人足が何人かかたまってもう酒を呑み始めていた。他にも数軒店があって、酒や醤油の他に種類は少ないが小間物を並べている店もある。

鍛冶屋は宿場の北のはずれにあった。瓦灯の下で小さな黒いものがもぞもぞ動いていると思ったらそれが親爺だった。

「鉄屑を分けてほしいのですが」

そう尋ねると、ちらちらと火が揺れる親爺の顔にけげんな色が映った。

「この位欲しいのですが」

右手を差し出して掌を上に向けた。それから二朱銀を渡そうとすると親爺はとんでもないというように頭を振った。結局二十文で両手に山盛りの鉄屑をもらってきたが、鍛冶屋にとっては屑とはいえ鉄は貴重品である。これでは大分損をかけてしまったのではないかな、と申し訳なく思いながら宿に戻ると、正之助、登勢の兄妹が盥で足をすすいでいた。

精一郎を見ると正之助は、先刻はありがとうございましたといって立ち上って礼をいったが、妹の方は俯けていた顔をチラリと上げて軽く頭を下げただけだった。そのときになって、大広の紹介でこの宿に泊まることになったが、果たして旅籠賃はいくらなのか訊きそびれていたことに気付いた。

だが旅に出て一日目なので懐中には余裕がある。その懐中に入ったものを、部屋に戻って全て出していると、女中が火の入った行灯を運んできた。すぐにお食事をお持ちしますか、と訊くので背中を向けたまま、そうして下さい、と答えた。女中に財布の中味を見られてしまうのがはばかられたのである。

膳が運ばれてくる間に、精一郎は大小の財布の中味を鉄屑に入れ替えた。小判は他の一分金などと共に小銭用の巾着に入れ、腹巻の奥に入れた。弥助という男の態度が妙に気になった。たとえあの男が盗みを働かないとしても、そうしておいた方が安心だと精一郎は思ったのである。源兵衛程の一刀流の達人でも、祭りの日に懐中深くしまっておいた財布をすられたことがあったそうで、そういう連中の腕の達者なことはよく聞かされていた。

女中が運んできた膳には蔬菜とこんにゃく入りの煮物、汁の他に銚子が一本載せられていた。飯をよそってくれた女中に、酒は頼んでいないが、というと、先程お着きのお客様からことづかりましたと何事でもない様子で答えた。椀に飯をよそって膳に置いた女中は、どうぞ、といって銚子を手に取り、急にしなを作った。年齢は分からなかったが、精一郎より大分年上な上に小さい頃から畑仕事をしていたらしい色黒の女中の手は、節々にタコが出来て男の手のようになっている。酒は呑まない、銚子は持って帰ってくれ、食事は一人でする、と精一郎はたて続けにいって女中を部屋から出した。

旅で食べる食事は格別で、精一郎は玄米に陸稲、麦の混った飯をゆっくりと嚙みしめて食った。兵原草廬では三年というもの、水でふやけさせた玄米を味噌をおかずにして食っていたのだから、どんな食事も大変なごちそうにみえる。

半分程食ったところで、隣室の閉め切った襖の向こうからごめん下さいと声をかけてきた者がいた。はいと答えると襖が開けられて正之助が顔を出した。手に銚子と盃を持っている。

「ほんのお礼のつもりなのですが、召し上ってはいただけませんか」
正之助は銚子を部屋の中に突き出して遠慮がちにいった。いや、それは頂けません、と精一郎は辞退した。すると、ほれ、おまえもちゃんとお礼を申し上げなさい、といって正之助は後ろを向いた。
襖がさらに引かれて、行灯の灯りに赤い花模様の着物が浮かび上った。ほう、と精一郎は箸を持ったまま大人びた溜息をついた。上っ張りの下には、こんなに色鮮やかな着物を着ていたのか、と感心したのである。登勢は「先程は助かりました」といって頭を下げた。それから「つまらないものですが、ほんのお礼の印に」といって紙にくるんだ物を、襖の敷居の上に置いた。
「いえ、お気遣いは無用です。それはお引き取り下さい」
精一郎が箸を置いていうと、正之助は登勢の膝を、盃をもった手で軽く叩いた。
「お武家様がそんなお饅頭なんか、召し上がるわけがないっていってあるだろ」
正之助はしょうもない奴だという表情で登勢を見返したが、精一郎が腑に落ちない顔をしているのに気付いて、あわてて大声でいった。
「あ、違います。これは、お登勢が腹痛を起こした饅頭とは別のものです。新しく買ったのです」
精一郎が笑うと、つられて登勢も笑った。白い花の中にもう一つ別の白い花が咲いたように精一郎の目には映った。女の歯は美しいと思った。

「是非一つだけでも召し上って下さい。さ、お登勢、お酌をしなさい」
精一郎の笑顔を見て安心したのか、正之助はすべるように膝を進めて部屋に入ると、妹の手に銚子を握らせた。
「あ、お酒はやりません。どうぞ正之助さんが呑んで下さい」
精一郎は片手をあげて二人を制した。少しあわてていたのは、登勢が部屋に入ろうとしたからである。精一郎の家に限らず、武士の家では食事時に女が傍につくことはない。女が酒をつぐということもない。それは客相手の芸者がすることだった。だから、ごく普通の娘らしい登勢が兄にいわれたこととはいえ、素直に銚子を手にしたことが驚きだったのである。
「どうぞ」
盃を兄から受け取った登勢は、唖然としている精一郎には頓着なく、急に活気づいたようになって盃を差し出してきた。なんとなく盃を受け取ってしまった精一郎は、登勢が注ごうとするのを、これは困ります、と必死で辞退した。
「すると、どちらかへ修業にお出掛けなのでございますか」
正之助も弥助と同じことを訊いた。そうか、やはりそう見られてしまうのかと思いながら登勢を見た。行灯の渋い灯りが頬を赤く染めて登勢を素朴な女に見せている。瞳に

奥行きすら感じさせる女の前では嘘をつけなくなった。

「人を訪ねていくのです」

「どちらまででございますか」

「栃谷です」

「栃谷でしたら私どもにも知り合いがおりますが、どなたをお訪ねですか？」

母を、といいそうになって口を閉ざした。目の前の二人に事情をいったところで何にもならないと思い直した。

「斎藤という家なのですが……」

あとは口を濁した。登勢が瞬きもせずにずっと自分に視線を注いでいるので、多少居心地の悪さも感じ始めていた。

「斎藤というお家は、栃谷では代々名主をなさっておいでですね」

「そうですか。いや、その斎藤かどうか分かりませんが、縫という人を訪ねていくのです」

「お縫さん。……その方はお武家様の親戚に当たる方か何かですか」

正之助は口調は柔らかだったが、無神経なまでに好奇心が旺盛なようで、ずかずかと精一郎の胸の内に入り込んでくる。精一郎が黙り込むと、さすがに調子に乗り過ぎたと気付いたのか、「これは失礼なことをお訊きしてしまいました」といって、自分の失態を覆い隠すように妹に向って、さ、お酌をと促した。

「そういう旅でしたら、お酒もよろしいのではないのですか」

そういって登勢は膳の前に坐って銚子を差し出してきた。かすかに白粉と髪につける油の香りがした。いったん下に置いた盃を、精一郎は、その甘い香りに誘われる形で手にしていた。町の人達は堅苦しくなく、気軽に男と女が差し向かいになれるのだな、と思いながら、登勢の注いだ酒を口にした。

「……」

ほんのりと温かいものが喉を通り、胃に落ちていった。酒を呑んだのは初めてではなかったが、何年も前のことなので胸が騒いだ。その時は端午の節供で親戚の者が屋敷に集って弓を射た。そのあとで酒が出て、精一郎も呑まされた。親戚の誰かが酒に酔って池に落ちたが、それが誰であったのかもう覚えていない。多分、精一郎も酔いが回ってしまったせいなのだろう。

「私も一度だけ熊谷で剣術を習ったことがあるんですよ。神道無念流の師範というお方からだったんですが、とても厳しくて、三日ともちませんでした」

そう正之助が話し始めた頃には、隣の自分達の部屋から銚子を持ってきて、勝手に一人で呑み始めていた。精一郎も登勢に勧められるままに呑んだ。それでも、銚子を空にしてはいけないという配慮が働き、銚子を持つ登勢の手がさがり出すと盃を伏せてあと

は首を横に振った。

「さっき風呂場で弥助という人に会いました。初めに私に声をかけてきた男です。どうもうさん臭いところがあります。気をつけられた方がよいですよ」

そう話し出した時は、かなり酔いが回ってしまったようだという自覚があった。二人が隣の部屋に戻り、女中が蒲団を敷きに来た頃には、目を開けていることさえ億劫になっていた。

いつもの習慣で蒲団にはくるまらず、畳にそのまま横になって羽織をかけて寝た。夜中に周囲の空気が騒ついているのを感じたが、身体が海の底に沈められているように重く、とても起き上がることはできなかった。

朝起きると、ひどい頭痛がした。風呂場に行き水をかぶったが、頭痛は消えず、身体もふやけたようにだるかった。

懐中に納めておいた大小二つの財布がなくなっているのにようやく気付いたのは、短袖の上衣を着ているときだった。宿の者には知らせずに、精一郎は木刀を持って外に出た。

四

旅籠の裏手の空地で春の冷気を見据えて木刀を振るい、手拭いで汗を拭って部屋に戻ると、女中が朝餉の膳を運んできた。色黒の気の弱そうな女中で、身体から湯気を立ち昇らせている精一郎の脇で、おどおどした様子で飯をよそった。

膳には汁と煮魚と菜っ葉が載っている。食事をする間ずっと横についていそうな様子だったので精一郎はもう下ってよいといった。痩せた貧相な女中は頷いて立ち上がり、ちょっと物欲しそうな視線を膳に送って廊下に出ていった。

入れ違いに番頭が入ってきた。狐目の腫れぼったい顔を精一郎に向けて、お手数ですが宿代のお勘定をお願いしますという。食事の最中に勘定を求めるのは、宿代を踏み倒されるのを恐れてのことだろうかと思いながら、いくらですかと訊いた。

「百六十五文になります」

番頭は幾分上ずった声で答えた。

百六十五文がおよそ一両の三十分の一であることは見当がついたが、それが上等ではなく、木賃宿でもないこの程度の旅籠の代金として適当なのかどうか分からなかった。江戸では銭百文で九合の米が買える。

「分かりました。いまここでお払いします」

精一郎はいわれるままに懐中に手を入れた。財布は無く、指先に触れたのは懐紙と手拭いだけだった。そうだ、なくなっていたんだなと胸の内で反芻しながら、昨夜のねばりついてくる闇の空気を思い出した。覆い被さってくる脂の浸み込んだ綿布を払いのけ

るとき、叫び声をたてた気もしたがはっきりとは覚えていない。
「どうかされましたか？」
番頭の吊り上った目尻が不審気に精一郎をとらえている。
「財布を盗まれたようです」
「えっ!?」
番頭はのけぞった。目が急に四角い形になるのを、精一郎は落ちついて見つめていた。
「盗まれたって、それは確かでございますか」
「確かです。大小二つの財布をここに納めて寝たのです」
「そんな、うちの旅籠に限って盗っ人に遭うなんて、そんな……」
細長い悲鳴に似た声をあげて番頭は腰を浮かせた。そのとき、ごめん下さい、と隣の部屋から声がして襖が開けられた。正之助が目をパチパチとさせて佇んでいる。
「盗っ人が出たって、本当ですか」
「こ、こちらのお客さんが財布を二つとも盗られたといわれますんで」
番頭は疑り深い目で精一郎を見直した。正之助の後ろから登勢がすでに白粉で整えた顔を覗かせた。
「お武家様ともあろうお方が、懐中を探られても気付かずに眠っておられたというのですか」

きつい言い様だったが、正之助にそういわれて精一郎は頭をかいた。
「面目ありません。慣れぬ酒を呑んで正体を失くしていたようです」
早朝、木刀を振っている最中、何度かめまいがした。流れ出る汗もいつもの軽いものとは違い、毛穴を黒く焦がして噴き出てくる感じがした。あれが酒毒のせいだとしたら、金輪際酒を慎しまなければならないと精一郎は思っていた。
「や、宿代は、宿代はどうなるんでしょう。払っていただけないのですか」
それは、と言いかけたとき、正之助が人なつこい笑顔を見せて部屋に足を踏み入れてきた。
「番頭さん、ご心配には及びません。お武家様の宿代はこちらでもたせてもらいます。お酒をすすめたのは私ですし、そのために盗難に遭ったと伺っては知らん顔はできませんからね。おいくらですか？」
「百六十五文になります。いやあ、そういっていただくと助かりま……」
「金ならあります」
精一郎は二人のやりとりの間に静かに割って入った。番頭は浮かべ始めた愛想笑いを顔に貼りつけたまま精一郎を見返した。正之助は白くふやけた頬を向けて瞬きをくり返した。大店（おおだな）の若旦那らしい仕種だったが、妙なきな臭さも合わせて感じさせるものだった。

「ここにちゃんと持ってます」
みぞおちのあたりを押さえていった。巾着は小さな袋で、小判、一分金銀、二朱金、豆板銀など合わせて二十両以上の銭を一緒にまとめて入れてしまうとさすがに重い。いまも銭の角が肋骨に当って違和感を生じている。
「財布を二つとも盗まれたといわれましたが」
「盗まれましたが中に入っているのは鉄屑です。宿代は食事のあとで払います」
首にかけた紐の先に巾着はついている。胸を開いて巾着を取り出す姿を二人に見せるつもりはなかった。それに登勢の目もある。
「鉄屑？」
そういったのは正之助だった。ゆらりと佇みながら幽霊を見るような震える目で精一郎を凝視している。
「なぜ財布に鉄屑なんかを……」
「怪しげな男が泊っていたのですり替えておいたのです。金は巾着に入れてあります」
精一郎は番頭に向き直った。
「盗っ人は外から侵入した者ではありません。どうやら私は昨日から目をつけられていたようです。早立ちした客がいたら、その者が盗賊です」
「えっ？　では、あの方が……」

番頭は黒眼を上瞼に寄せて白眼を剝いた。さっそくお役人に知らせなくては、といって腰を上げた番頭を精一郎は制した。
「無駄です。とっくに村を出ています。それに私には実害がなかったわけですし、今頃ほぞを噬んでいるのは盗っ人の方でしょう」
役人に色々と細かいことを尋問されるのがわずらわしくて精一郎はそういった。番頭は安心して部屋を出ていった。
「さすがお武家様は用心がよいのですねえ。では、私達もそろそろ出発いたしますので」
正之助は襖を閉める間際に頭を下げた。膳を前にした精一郎も黙礼を返した。食事を続けながら隣室の気配に耳をすませるともなくすましていると、小さな魚が水面ではねたような音が響いてきた。荷物をまとめる物音の他に聞こえてきた音はそれだけだった。二人が障子を閉めて出ていくと、あれは女の舌打ちした音ではないのかと精一郎は思い当った。
食事の間、胸から泥水のような汗がたらたらと噴き出すのを感じながら、これで毒が出ていくと思っていた。健全な自分の肉体が、侵入してきた異物を排除するために戦っているのだと知ることはたのもしかった。それから、自分が盗っ人から目をつけられたのは、どういう理由からだろうと考えてみた。

第五章 盗賊

一

旅籠を出て歩き出すと、もう陽は民家の屋根の上に姿を現わしていた。白子村から川越の城下までおよそ五里半の道程だった。ゆっくり歩いても二刻半で着ける。急げば川越城下を抜けて高坂村まで行けるだろうが、精一郎にはそうするつもりはなかった。母の消息を早く知りたいという気持に変わりはないが、息子として、武道を志した者として、前に立ったとき、母から立派になられたといわれたいという思いがある。それには旅に出たこの機会を逃さず、出来る限り名のある剣客と立ち合い、平山子龍先生に鍛えられた己れの気力を試してみるべきだと考えたからだ。その思いの底には、たとえ川越藩には数多くの武芸者がいるにしろ、所詮は田舎の剣術遣いではないのか、というあなどる気持もないとはいえなかった。精一郎の腹の底で永い間静まり返っていた無頼の血が、むっくりと頭をもたげだしたのを感じたときから、精一郎は眼前に佇む者があれば何者であろうと、容赦なく叩きのめしてやろうという思いを抱きだしていた。そして、それは多分、自分の意志では抑えることはできないだろうとも思っていたのだ。

白子村から次の村落のある膝折村まで一里足らずだった。道はだいたい平坦で、時折丘陵にさしかかるが、そこには雑木林に紛れて桜の木も混っていて、斜めに落ちてくる朝の木洩れ陽に当てられると、はっとする程のあでやかな様相を呈してくる。花弁の流れ落ちる様も可憐で、その小さな花びらの一つ一つに幾重もの衣装をまとった花の姫達が、おっとりとすまして坐っているような想像すら浮かんでくる。

行き交う旅人の数も膝折村に近づくにつれて多くなり、馬の背に乗った若い婦人の姿や武家の妻女らしい厳格な表情をした女が、供の者を連れてやってくるのにも出会った。その連れの女が若くて美しい武家娘なので、精一郎は一瞬だが心の一部分がほころびたように感じた。江戸では、若い武家娘はあまり外に出てこない。

周囲の畑に農民が出ているが、水田はほとんどなくて麦畑が広がっている。麦の間に播いているのは大豆なのだろう。少ない水田には苗束を無造作にばら蒔いている者がいて、その横手の台地の脇の荒地では、牛を使って鋤き起こしをしている男がいる。もうここらあたりは膝折村の領地らしく、二軒三軒と農家が川沿いに固って見えてきた。村には百軒程の家があると精一郎は聞いている。

宿場にさしかかると、くねった畦道を天秤棒をかついで、沈むように歩いている農民の姿が目にとまった。その男は霞に包まれて、動く様はどこかはかなげだった。

そういえば膝折の名を平山塾で耳にしたことがある、と精一郎は思い出した。子龍先生が休講の日で、代って下斗米秀之進が講義をしてくれたときで、堅苦しい話ではなく達人といわれた剣士のちょっとした逸話を聞かせてくれたはずなのだが、その日の精一郎は風邪気味で一日中熱っぽく、何か面白い話だったという記憶はあるのだが、その細部までは思い出せない。

宿場に入ると馬の姿がまず目に入った。白子村と大和田村の馬継宿らしく、褌一丁の馬子たちが馬の背を藁で洗ったり、通り過ぎる旅人に声をかけたりしている。宿場には雑貨を売る店だけでなく、端切れや小間物を扱う店もあった。そんな店の前を風の渦に乗って藁屑が舞い、窪地に溜った水が崩れ落ちそうな壁を映している。宿場はずれの、民家のきれるあたりから急坂になっていて、夜の間に降った雨のせいで坂の面はまだ濡れていて、氷が張ったような照り返しを放っていた。

精一郎は被っていた菅笠をいったん上げて坂の頂上あたりに目を向けた。左手には寺の塀が続いている。右手には平屋の民家に挟まれて竹籠を作る店が建っている。その先は空地で横に廃屋があった。それだけのことを見てとった精一郎は、ゆっくりと道の中央を歩き出した。緊張が広がっていた。

寺の塀が切れたところで、丸い影が引っ込むのが目をかすめたのだ。怨みを受ける覚えもなく、昼日中から宿場を出たばかりの場所で追いはぎもないだろう、と思いながら影の素早い動きに何となく嫌なものを感じて、とりあえずいきなり打ち込まれても充分に間合いのとれる道の真ん中に歩を進めた。

坂は半町程続いている。その頂上に一組の老夫婦らしい姿が現われた。二人は杖をつき及び腰ですべりやすい坂道を下り出した。

寺の塀は坂の途中で途切れている。袋に入れた木刀を左手の四本の指の腹で支えながら、精一郎は比較的乾いている足場を見定めて歩いた。三人の男の姿が塀の陰から現われたのはその直後だった。前に二人、後ろに一人。前の二人は棍棒を手にしていた。武士ではないのは一目瞭然だったが、まともな仕事についている町人風でもなかった。三人とも頭から手拭いを被り、尋常ではない目付きで坂道を下ってきた。

精一郎が下斗米の話の内容を不意に思い出したのはそのときだった。そうだ、と胸の内で呟くのと、二人の男が棍棒を振り上げて襲いかかってくるのが同時だった。

精一郎は初めに左から来る男の攻撃を肩でかわし、次に右手の男の脇腹を木刀の柄頭で打ち、返す勢いで最初の男のこめかみを柄の角で打ち抜いた。こめかみを打たれた男は無言で昏倒し、肋骨を数本折られた男は悲鳴をあげて坂道を転げ落ちた。

三番手の男は腰を落して身構えた。一瞬の出来事に目は動転していたが逃げるそぶり

は見せなかった。

「て、てめえ、鉄屑なんぞを財布に入れておきやがって。よくもおれをこけにしやがったな」

昨夜風呂場で弥助と名乗った男だった。男は懐に右手を入れて身構えた。

「おとなしく金を出せ。二十両は持っているはずだろ。さあ出せ」

昨日は小太りに見えた身体が、腰を落してすごんでいる今は適度な貫禄を示している。

「私が二十両持っているとどうして分ったのだ。江戸からつけてきたのか」

「ばかやろう。そんなことくらい分からなくてこの稼業がつとまるかい。さあ、痛い目に遭わない内に金を出しやがれ」

男は血走った目を剝いて右手を懐から抜いた。その手に匕首が握られている。後ろで見ていた老婆が悲鳴をあげた。精一郎の背後からも少女の声があがった。

人目につくのを承知でこんな真似をするからには、相当に破れかぶれになっているのだな、と精一郎は思いながら少し困ってもいた。物見高い見物人の前で、平山子龍先生仕込みの実用流の技を見せる訳にはいかなかったからだ。精一郎は右足を前に進めながら男の横に回り込んだ。

「匕首を抜いてしまえば、殺されても文句がいえなくなる。それを承知か」

「なにをほざきやがる。このガキ、殺してやる」

男は体当たりをするように身体を丸めて突っ込んできた。匕首の使い方も慣れたものでまっすぐに急所を狙ってくる。しかも男の気配にはすさまじい殺気がこめられている。これはあなどれない。

精一郎はそう自分にいいきかせて男の突進を正面から受けた。見ていた者の間から悲鳴が上った。はた目には若い侍がならず者に腹を刺されたと映ったのだろう。

全ては刹那のことだったが、精一郎にとっては男の殺気を見てとり、その荒んだ生き様をまざまざと感じながら技を返すだけの充分な余裕があった。

男の匕首の切っ先は、精一郎の身体に届く前に木刀の柄で払われ、目標を見失っていた。精一郎は匕首を払いざま男の鳩尾に柄頭を叩き込み、半転してその二の腕を木刀の背で叩きつけた。男は喉を潰したような悲鳴をあげて寺の土塀に頭を打ちつけた。

見ていた者の間で異様などよめきが上ったのはその次だった。若い侍はさらにもう一度、不様に泣き叫んでいる男のもう片方の腕に木刀を叩き込んだのだった。打たれた男は土塀に背をつけて両足を伸ばしたまま尻餅をついた。骨の折れる、小気味よいと感じられる音が静まり返った坂道に響いた。男の両腕はだらりと垂れ下がり、その目は見開かれたままで口の端からは涎が垂れ始めていた。男はあまりの激痛のために気絶してしまったらしかった。

「村役人はおられますか」

精一郎がそういうと、坂の下で固った土饅頭のようになって成り行きを息を殺して見つめていた見物人が、いっせいにふやけたように緩んだ。その者達の間から、角張った顔の身ぎれいな男が現われ出て、肩を上下に揺らせて坂道を上ってきた。

「村を治めている金兵衛と申す者です。まずはいきさつをお聞かせ下さい」

「この男は弥助といって、昨夜私の泊った白子村の『たからや』という旅籠で盗みを働いたのです。だが私は財布の中味を鉄屑にすり替えておいた。それで逆怨みしてここで私を待ち伏せしていたのでしょう」

「お武家様はどちらのお殿様でいらっしゃいますか」

「男谷精一郎と申します。父は男谷忠之丞で徳川様の御小十人組を務めております」

「さようでございますか。ですがここで立ち話もできません。ご足労ですが宿場までお越し願えませんか」

目の細い名主は、えらの張った顎を上に振って頷くようにした。二人が話している間に村の者や人足やらが荒縄で三人の男達を縛り出していた。その手際のよさに精一郎は感心した。

「申し訳ないのですが、私をこのまま立ち去らせて下さい。先を急ぐのです。役人に話すとなると閑がかかるでしょうから」

父の名を出したことを後悔しながら精一郎は頭を下げた。年は若くても相手は旗本である。頭を下げられた名主は恐れいって両手を前に突き出し、後ずさりする仕種を見せた。

「分かりました。あのようなごろつきのことでお武家様にご迷惑はおかけできません。八州様が廻ってこられるまで、あの者達はこちらで見張っておきます」

「ご雑作をおかけします」

顔を坂の下に向けた精一郎は、縄で縛られた三人が、馬子や人足達に担がれ、乱暴に大八車にほうり込まれるのを見ていた。弥助と気絶しているもう一人の男は、空の飼い葉桶にくまれた水をぶっかけられて、呻き声をたてたようだった。両腕の骨を折られて、ぶらぶらとなった弥助が、本当の痛みにのたうち回るのはこれからだろう。

「あの三人の他にまだ仲間がいます。そのことを役人に伝えて下さい」

そういいながら大八車の周囲に群がった村の者の中に、正之助とその妹の登勢の姿はないかと捜してみた。宿屋の二階から首を伸ばしている者の中にも二人の姿はなかった。だが盗みに手を貸したはずのあの二人が、白子の宿を出てそのまま熊谷に向っていったとは考えられなかった。この騒ぎの中で、今はもう泡を食って逃げてしまったかもしれないが、弥助ら三人が精一郎に襲いかかったときは、きっとどこかで成り行きを見ていたはずなのだ。

「この坂を上った所に小料理屋のようなものはありますか」

「いえいえ、そんなものはございません。団子を売る掛茶屋が一軒あるだけでございます」

金兵衛は苦笑して細い目を糸のようにした。思いついて精一郎は名主を見返して訊いた。

「この坂は膝折坂というのではないですか」

「はい、さようです」

「では小野忠明殿が賊と戦ってその首を斬り捨てたという……」

「はい、さようでございます。賊がたて籠った家というのが、寺の三軒向こうだといわれております」

その家は門構えも立派で豪農の家のように見えた。精一郎は金兵衛に後を頼んでゆっくりと坂を上り出した。

寺の塀のきれた小路に目を向けたが、そこには最前まで盗賊が身をひそめていた跡など何もなくて、塀の向こうに麦畑が広がっているのが見えるばかりだった。正之助とその妹がまだそのあたりに潜んでいると勘ぐっていたわけではないのだが、空漠とした光景を目にとめると、何かしら気落ちした思いが胸に沁み渡ってきた。

——あの者はいつ弥助に頼まれて酒に毒など盛ったのだろうか。もしかしたら最初から仲間で、街道筋の茶屋にいたときから、自分のような鴨を捜していたのかもしれない。

宿を出てから膝折宿に入るまでの間、精一郎はずっとそのことを考えていた。正之助が痺れ薬だか眠り薬だかを酒に混ぜて精一郎に飲ませたのは確かで、思い返すと、昨夜の精一郎の身体はそれまでにない異常な状態になっていた。

それが殺すための毒ではなかったのは幸いだった。盗みが目的の賊は役人に追われることを恐れる。盗みだけなら、被害に遭った旅人は泣く泣く次の宿場に向って旅立って行くだろうという思惑が成り立つ。だから殺しにまで手を染めることはないのだろう。

一軒の民家の前で精一郎は足をとめた。金兵衛の言った寺の三軒向こうという家がここで、下斗米秀之進が講義の途中で語ってくれた講談まがいの話の舞台となった家だ。それが事実だとしても門構えも家の造りも昔のままではないはずだ。

「一刀流三祖の一人で伊藤一刀斎の弟子だった小野次郎右衛門忠明が、まだ神子上典膳と名乗って駿河台で道場を開いていた頃の話だ。板橋の先の膝折村の民家に鬼眼という兵法者だか修験者だかが、人を殺して逃げ籠った。鬼眼は身の丈六尺の剛の者で村の者ではどうにも手が出せない。名主は江戸の検断所にやってきてどなたか腕の立つお方を遣わして下さいと訴えた。それが家康公の耳に入り、検使役の小幡景憲と共に典膳に村に行くように命じられたのだ」

扇子を手にした下斗米秀之進が、あご鬚を撫でながら得意気に、南部訛りを交えてそう語りだした時のこともはっきりと思い出した。普段は窮屈そうにしている三十人の塾

生達も楽し気に、身を乗り出して耳を傾けていたものだった。

「――典膳は病いで臥せっておったのだが、家康公の命とあって急いで村へ向った。実はこれより前に典膳は家康公の前で技を披露しているのだが、どういうわけか家康公はその剣技を妖法と見てお取り立てになられなかった。だから典膳もこの機会を逃すまいと病いをおして旅立ったのだ。鬼眼の籠った民家は膝折坂にあった。膝折という地名は小栗小次郎の馬がこの地で膝を折って死んだことに由来する。ともあれ家の前に立ち典膳が己が名を告げるとさすがに鬼眼も武芸者、典膳と聞いて相手にとって不足なしと走り出てくるや、大太刀を抜いて大上段から斬りかかった。典膳は坂の下に佇み、よくこれを受けたが鬼眼の剛力をかわしきれず、じわじわと後に下げられた。あ、という悲鳴が村の者の間から上ったのはそのときだ。鬼眼に押された典膳の足が溝にはまり仰向けに倒れてしまったのだ。得たりと鬼眼は真上から大太刀を振り下ろした。その刹那典膳は下から大太刀を払い鬼眼の両腕を手首から斬り落した。宙に浮いた大太刀は、まっすぐに典膳の上に落ちてきてその顔を傷つけた。典膳はひるまずに起き上って鬼眼の首を打ちはねた、とこれが膝折坂の決闘の一節じゃ。この一戦の典膳をさすが名人といって誉める者と、力負けして転ぶなどとは剣客にあらず、運がよかっただけだとそしる者もあった。さて、家康公はどう見たか。神子上典膳は天狗にあらず、その剣正剣にてまさしく人間業、と誉めて秀忠公の御指南役としたということだ。このときより典膳は小野

姓を名乗り、その流派も小野派一刀流として今日まで栄えることになった、とこういうわけだ」

話のあとで手を叩いたものがいて、おいこらと下斗米が笑って怒ったことも精一郎は思い出した。あとで先輩達に訊くと、それは有名な逸話のようで、話の筋も語り手によって微妙に違うのだが、典膳がここで賊と戦ってその首を斬ったというのは紛れもない事実として語りつがれているという。

この話を、ここに来るまではまるで思い出すことができなくて、盗賊三人に棍棒で打ち込まれた瞬間に鮮明に脳裏に浮かび上ってきたのは、何と妙なことだろう、と精一郎は思っていた。

「お、さっきのお武家様だ」

「若いがお強そうな方だ」

坂の上までくると葭簀張りの掛茶屋の奥から、そう小声で囁く村人の声が耳に入ってきた。行き過ぎようとした精一郎だが、次の言葉を聞いて足を止めた。

「ただの喧嘩かと見ていたが、まさかあいつらが盗っ人だったとはなあ」

乱闘が起ったとき、坂の上から眺めていた者達なのだろうが、その言葉は精一郎の気に障った。葭簀の切れ目から掛茶屋の中に入ると、床几に坐って茶を飲んでいた二人の行商人はびっくりして腰を浮かしかけた。

「あいつらが盗っ人だと教えてくれたのは誰ですか？」

「あ、あの人だ、あの人」

頬骨の尖った日焼け顔の行商人は、精一郎の剣幕にたじろいで言葉を震わせた。それでも頑張って茶店の奥の方を指差していた。

そこは別につくられた茶室のようになっていて畳が敷かれていた。案の定、そこにいたのは正之助だった。

「大変な大立ち回りでございましたねえ。ここから偶然見ておりましたんですよ。たぶんお武家様がこの前を通るだろうから、お登勢にお声を掛けるようにいっておいたんですよ」

正之助は如才のない笑顔を浮かべて、さあどうぞ、と腰を上げて中に招じた。正之助の前の丸盆には銚子が一本置かれている。祝いの酒でも仲間と呑むつもりだったのか、それとも……と精一郎は色々と思い巡らせながら笠を取り、草鞋の紐を解いた。その間も正之助は、お登勢、どこだい？　ばあさん、酒をもう一本つけておくれ、と騒々しい声をたてている。

「しょうがないねえ。まったく女の御不浄は長くて困りますよ」

正之助は立ち上がり、草履をつっかけて茶屋の裏手に入っていった。旅人がここでは草鞋ではなく草履を履いているのか、と精一郎は胸の内でひとりごちた。どうやらここは正之助がたまたま立ち寄った茶屋ではなく、相当に懇意にしている所のようだった。

畳に膝をつき、丸盆に置かれた銚子を指で挟んで持ち上げると、中にはまだたっぷりと酒が入っていた。どうやら酒は呑み始めたばかりらしい。

「喉が渇いておいでしょう。かけつけ三杯と申します。さあさどんどんやって下さい」

正之助が上がると続いて登勢も丸盆にお燗をした銚子を持って入ってきた。軽く礼をして精一郎の脇に坐ったがその表情は青ざめていて口許も固かった。どうぞ、という声も小石を吐き出したような冷たさがある。

「自分でつぎますから結構です」

茶室に入って精一郎は初めて口を開いた。登勢の手から銚子を奪うと、登勢はじろりと精一郎を上目遣いに睨んだ。

「そうそ、酒は手酌が一番うまい。お登勢、おまえは下っていなさい」

正之助は上機嫌でいって、自分の盃に残っていた酒を呑み干して新たに注いだ。精一郎は銚子を盃に寄せて顔を上げ、耳をすますような仕種をした。

「どうかなさいましたか？」

静止した精一郎をいぶかし気に見つめて、正之助は眉をひそめた。

「表で何かあったようだ」

その言葉に二人は上体をよじって外に顔を向けた。茶室の中からでは外の様子は窺え

ないのだが、ついそうしてしまったのは、いつも何者かに追われている者の習性だったのだろう。

「いや、気のせいのようでした」

精一郎は銚子を傾け、盃に酒を満たした。

「かたじけなく頂きます」

そういって盃を口に運ぶと、正之助と登勢は申し合わせたように息を詰めて精一郎を見つめた。精一郎が盃を空けると、正之助の目尻が緩み、頬には刷毛で塗られたような赤味が差した。

「さすがお若くてもお武家様はお強い。あいつらは人相はこわくても所詮やっとうなど習ったことのない連中でしょうから、お武家様からすればまるで赤子の手をひねるほどにたわいないものでしょうね」

正之助は上機嫌になって喋り出した。待ち伏せしていたのはどうしても金を奪う気だったのだろうとか、鉄屑を財布に入れて盗っ人をからかうのはさぞかし面白い趣向でしょうとかさんざん喋りながらしきりに酒を勧めた。勧めるだけでは具合が悪いと思ったのか、正之助の方でも大急ぎで酒を呑み、またたく間に銚子を一本空けてしまった。

「お登勢、私にもう一本つけておくれ。それから、お武家様の分もお燗しておくれ」

正之助はいつの間にか姿を消してしまった妹の名を呼んだ。私はもう結構です、といって精一郎は席を立ち、襖を開けて腰を下ろし、草鞋の紐に手をかけた。

まだよろしいじゃありませんか、といって立ち上がろうとした正之助の足がすべって膝をついた。正之助は涙ぐんだ目をしている。

「正之助さん、ここであなたに会うまで、あなた方二人は弥助に脅されて私に薬を盛ったものだと思っていましたよ」

精一郎は背中を向けたままそういいだした。なにを、と声を出した正之助の舌がもつれている。

「でも今やっと分かりました。盗っ人の頭はあなただってね。茶屋の親爺さんも弥助も、それから私を襲った弥助の仲間も、みんなあなたの手下だったんですね」

草鞋の紐を結び終えて精一郎は立ち上がり正之助に向き直った。赤かった正之助の顔はどす黒いものに変色していた。

「それにしても、腹いせ紛れにしては随分に手の込んだ仕掛けをしたものだ。今度は何の薬を混ぜたのかは存じないが、その薬か毒の効き目は、ご自分の身体で試すとよいでしょう」

精一郎はそういい捨てて笠を取り、踵を返した。右手を伸ばして何か短く叫んだ正之助は、目を白くひっくり返すと涎を口の端から大量に垂らして前にのめった。銚子をすり替えるのは造作もないことだったが、その中味についてまで考えていなかった精一郎

は、それが単なる痺れ薬ではなかったことを初めて知って、少し無残な気持になった。

茶屋を出るとき、奥から、あんた、と叫ぶ女の悲鳴まじりの声が響いてきた。精一郎は振り返らずに歩き出した。道はなだらかな下りになっていた。

駆けてくる足音は、長く続く下り坂の途中まで来て聞こえてきた。狂気に駆りたてられた走りで周囲の目を憚ることなく、目標に向って一直線に殺到してきた。精一郎の目に、向こうからやってきた托鉢僧が、笠を上げて驚愕する顔が映った。

未熟な殺気がすぐ背後まで迫ってきたところで精一郎は身をかわした。傍で赤い色が空を飛んだ。

「きゃっ」

女は小さく叫んだ。花模様の着物の上に埃が舞い上った。坊主とその後からやってきた背中に籠をかついだ農民は、茫然と立ち尽している。

精一郎は俯せに倒れている登勢の肩の下に手を差し入れ、抱き起こした。倒れたとき手にした短刀で傷をつけたらしく、登勢の頬から一筋の血が流れていた。小石ですり剝いた肘からは、泥を押しのけて血が滲み出している。

「私が一体何をしたというのだ。私はあなたに腹痛の薬を与えただけではないか」

投げ出された短刀を登勢に手渡して、精一郎はそういった。女はきつく唇を閉じ、小刻みに震える青い眼で精一郎を睨みつけていた。精一郎が女を置いて立ち去ると、それを待っていたかのように、坊主が黒い僧衣の裾を蹴り立てて女に駆け寄っていった。

大和田まで一里足らずのはずだった。怒りが消えないまま速足で歩き続けたせいで、大和田宿を抜けるまで、わずか四半刻しかかからなかった。

二

大井村で昼餉を摂った。それで江戸から持参した握り飯は全てなくなった。作ってくれた綾には申し訳なかったが、背中が軽くなり、ホッとする気持があった。やっと江戸の荷物を捨てることができたと思った。

大井村より川越城下までの一里半の道程を、休まずに歩き続けたので、八ツ過ぎには城下の南端に入った。

そのあたりは侍の長屋が棟を並べる閑静な地域で、どうやら足軽や小者の住む区画のようだった。道はまっすぐには貫通しておらず、どうかすると鉤の手に曲っていたり袋小路につき当ったりした。時折見かける子供達が不審気に精一郎を見上げていた。照れ隠しに精一郎は宮沢助左という方の屋敷を捜しているのだが、と訊いたが、子供達は返答をしなかった。宮沢助左は数年前、兵原草廬に通いで学んでいた者で、同年輩の下斗米秀之進と馬が合ったと聞いていた。川越藩では徒組に勤めているという。

下士の長屋のつづく町をなんとか通り抜けて北に向かうと、落ちついた武家屋敷が建ち並ぶあたりに出た。正面に、形のよい本丸が聳え、二ノ丸、三ノ丸の勇壮で堅牢な城壁が居住い正しく建っていた。精一郎は立ち止って、流れる雲に構うことなく、悠然と佇む川越城の美しさに見とれて立ち尽していた。天守閣を持つことを潔しとしない、領主の質実剛健な姿勢に胸をうたれた。

商人の住む町屋は、武家屋敷に囲まれるようにして、半町か一町ごとに碁盤割で町割されていた。江戸ではその反対で、将軍様のいる城を護る形で親藩譜代が取り囲み、町屋は武家地の外に放り出されている。川越藩では武力をもたない町人を、保護する形で武家屋敷が周囲を取り囲んでいるようだった。精一郎は胸の中のつき物がコロリと落ちていくような、気持のいい陶酔感を味わった。

蔵屋敷や時の鐘を見ながら適当な宿屋を捜していた精一郎は、高沢町に頃合いの旅籠を見つけて訪いを入れた。下女がさっそく飛んできて盥に水を張った。

二階に案内され、荷を解いて横になった。江戸では昼寝をする習慣などなかったが、昨夜からの尋常でない体験が続いていたせいか気付かぬ内に眠っていた。

起きたのは障子の外に蹲る人の気配を感じたからだった。盗賊をあまりにひどく叩きのめしたものだから御詮議があるのかもしれない、という思いが胸を掠めた。

「宿の者でございます」

その声を聞いて苦笑いが胸の内に浮いた。膝折村から自分のあとをつけてくるような、酔狂な者はいるはずがないと思い直した。番頭らしい男は部屋に入ってくると宿帳を差し出した。顔の細長い男で、頭の先が筆先のように尖っている。妙な顔だと思いながら、宮沢助左が師範代をしている馬庭念流の道場までの道順を尋ねた。道場は黒門町にあると聞いていた。

「それは脇田村でございますね」

番頭は即座に答えた。時刻を訊くと、七ツ（午後四時）を過ぎたばかりだという。丁度半刻（一時間）ばかり眠っていたわけで、身体が随分楽になった。

「では、明るい内に道場まで出掛けてみます」

師範代といっても城勤めがあるのだから、毎日道場に来られるものではない。それに大きな道場になると四、五人の師範代を置いている。宮沢助左が今日来ているかどうか分からないが、もしいなくても、稽古をしている人に挨拶をしておいた方がよいだろうと判断した。

番頭はしきりに夕食の時刻を気にしていて、こちらにも都合がありまして、と愚図愚図いうので二朱銀を渡したらいっぺんに相好を崩し、何時になっても結構です、という言い方をした。

「この部屋が狭いようでしたら、もう少し広い部屋をご用意できますが」

番頭は乱ぐい歯を剝き出して笑ってみせた。精一郎はこのままでいい、といって出掛ける用意をした。腰に小刀は差したが木刀は部屋に置いた。

小太りの旅籠の主人が陣どっている帳場に、金の入った巾着を預けて外に出た。商人町といっても江戸の日本橋のように雑然としておらず、また生魚の臭いも漂ってこない。乾物屋、酒屋、油屋、塩砂糖の店、藍玉を扱う店、瀬戸物屋、呉服屋、といった重厚な店々が、のれんを張って整然と軒を並べている。町の印象は明るいものではなく、全体に黒塗りの感じがするがその分風格も色濃く漂っている。

番頭に教えられた道順で黒門町に入り、空の籠を担いでいた物売りに道場の所在を訊くと、それはすぐに分った。畑と民家の間の小路を抜けると、右手から大きな門が不意に現われた。そこから竹刀の音が響いてくる。

そちらに向っていくと、二人連れの男が何か弾き出されたという様子で門から出てきた。先を歩いているのは小柄な老人で右手にさらしを巻いている。怪我をして間がないらしく、左手をさらしに添えてひどく痛々しい顔でやってくる。

供の中間はまだ若い男で、主人を気遣ってゆっくりと歩いている。精一郎は老人に黙礼をして歩き続けたのだが、すれ違うとき供の中間が驚いたようにこちらを見たのを感じた。

門をくぐって身体を横に向けながらそれとなく後ろを窺うと、今度は二人とも疑うような様子で背中を丸め、怨めし気な目でこちらを見ていた。精一郎はさっさと道場に向った。

宮沢助左は赤ら顔の大柄な男で、肉付きもよかった。今日は挨拶だけして帰るつもりだった精一郎だが、宮沢の磊落な性格に引き込まれるままに、道場脇の小部屋に招かれて茶を馳走になっていた。

「やあよく来た。中山殿から貴殿が当地に立ち寄るという書状を五日ばかり前に受け取ってな。今か今かと待っておったのだ。武者修行だと聞いたが、感心感心」

宮沢は、突然訪ねてきたことで恐縮している精一郎を、そんなふうにいって迎えてくれた。宮沢の言葉を聞いて、兵原草廬では、下斗米秀之進は南部藩の体面をおもんぱかって、中山門蔵と他藩の者には名乗っていたことを思い出した。

「兵原草廬が幕命によって閉鎖の憂き目を見たことは聞いた。腰抜けの幕閣の老人どものしわざであろう。どうやら異国に関することは全て知らぬ存ぜぬで通すつもりでおるらしいのだ。平山行蔵先生の心中を察すると、不肖の弟子としては慚愧に堪えん」

宮沢は腕を組んで頭を落した。だが、宮沢が苦悶の表情を見せたのはそのときだけで、あとは油を舌に流したように喋りまくった。

「この道場は儂の祖父が建てたものでな。元々は前橋で松平朝矩様に仕えておったのだ

が前橋城が宝暦七年（一七五七）に水没してな、松平様がこちらに城を移されるのに付随して祖父もここに道場を移築したのじゃ。もっとも馬庭念流は一世相伝でな、宗家は上州多胡郡にあって現在は十四世が継いでおる。じゃもんで祖父の場合はいわば出張道場ということになっている。今の道場主は儂の従兄でこれは馬役を務めておるのじゃ」

宮沢は城勤めの窮屈なこと、できれば江戸勤番になりたいということ、この道場には百六十人の通い弟子がいることなどを喋ったあとで、ふと、精一郎の顔を覗き込んだ。

「ん？　思い出したぞ、男谷、男谷精一郎。おぬしは男谷新太郎であろう。小柄で色白でまるで人形のように可愛い子であった。儂とほとんど入れ違いで兵原草廬に入ってきたのだったな。いやあ、成長したな。すっかり見違えたぞ、いくつになった？」

「十五歳になりました」

やっと口を開く機会を与えられたのだが、精一郎が返答できたのはそれ一度だけだった。

「すると三年半もあの地獄の道場で辛抱したのか。いやあ、大したものだ。儂などは一年ちょっと、しかも通いであったからちょいちょい仮病を使って休んだものじゃった。それにしてもあのふやけた水っぽい玄米粥にはまいったのう。おぬし、あれだけでよくこれまで生きておったものだ。ん？　顔つきは変ったが、背丈はあまり伸びとらんようだの。五尺三寸くらいか？　ま、そんなとこかの。平山先生も背丈は小さかったが、やはり、武士は戦場にないときは、せっせと大飯を食って身体を作っておかなくてはいかんと儂は思うのだがな。おぬしの身体が細いのも、成長期に粗食しか与えられなかったからではないのかな。しかし、美男子じゃのう。女がほうっておくまい。武者修行はよいが、女難にも気を配らねばいかんぞ。ん？　なんだ？　なんの用だ？」

門弟の一人が部屋に入ってきて宮沢に耳打ちをした。その間部屋は静まり、精一郎はやっと手にすることのできた湯呑みを持って、冷えた茶を飲んだ。

「なんだ？　また戻ってきたというのか？　どういう了簡なのだ。仕方がない、母屋に通せ、すぐ行く」

宮沢は憤然とした様子で腕を組んだ。

「旗本の隠居だという爺さんでな。本川というだけで身分を明かそうとせん。それでいて捕物の助太刀をしてくれと図々しいことを頼み込んできたのじゃ」

「はあ」

さっき門前で往き違った老人のことかもしれないと思ったが、精一郎は言葉にするのは差し控えた。

「なんでも用人が金を着服した上、屋敷で働く女中の一人をかっさらって出奔したとか申しておった。当地の親戚を頼って逃げ込み、潜んでいる所も発見したのだが、そいつが相当の遣い手だとかで、その爺さんは腕を負傷し、若党は肩と足を斬られて重傷な

のだそうだ。このままでは本川家の名折れになるので、是非手を貸してほしいとこういうのじゃ。旗本が名折れになろうが潰されようが、こっちの知ったことではない。しかも、全て内密にしてくれという。銭も出さんと、まったく、あの爺さんの図々しさにはあきれてゲップも屁になるわ。一度追い返したのじゃがまた戻ってきてぐだぐだといっているらしい。放り出してくるから、おぬしはその間道場で稽古でも見学しておられたらいかがだ？」

「よろしいのですか？」

「よろしいともよろしいとも。なにせ出張道場の三代目だからな。門外不出、などとうるさいことはいわんのだよ」

どっこいしょ、と掛け声をかけて宮沢助左は立ち上った。身体が太いので気が付かなかったが、その下腹は師範代には似つかわしくない盛り上がりを見せている。精一郎は礼をいって横の廊下から道場に向った。

三

道場は正面に小さな神棚があるだけで、他の道場にあるような香取、鹿島の神宮を奉る掛け軸は下っていない。およそ畳四十枚強の道場で、今日は時間が遅いせいか、二十名程の者が残って稽古をしているだけだった。

面白いのは、武者窓からの明かりだけでは道場内が暗いので、たぶんこの時刻に限ってなのだろうが、正面と対面にある板壁を全面取りはずして外からの光を採り入れていることだった。こういう開放的なところにも、馬庭念流川越出張道場の特徴が表われているようで、精一郎は声に出さずに一人でクスクスと笑っていた。

相稽古をしているのは四組八名で、残りの者は板壁に沿って坐り、真剣な眼差しで激しい打ち合いを見つめている。精一郎が坐るまで、蛇のような目付きで見ていた者も、今は仲間の稽古を熱心に観察している。

評判通りの厳しい打ち込みだった。兵原草廬を破門になってからしばらくの間、精一郎は江戸の町を闇雲に歩き回りながら、気の向いた道場があると、遠慮なしに入っていって細い隙間の武者窓から覗き込んだ。中には武者窓の位置が高過ぎて、全然見えないところもあり、そういう道場では問答無用とばかりに訪いを入れた。

その内の一つに京橋の馬庭念流の道場があった。すでに故人になっていたが、その道場を創設したのが樋口十郎兵衛定暠という剣士で、老いてもその技は衰えず、松平定信はその老翁を飛燕と名付けたという話も残っている。赤穂浪士の討ち入りで有名な堀部安兵衛が中山安兵衛と名乗っていた十代後半に、上州吉井村の馬庭念流の道場に入門して腕を磨いたのだが、その安兵衛を鍛えたのが定暠の父で十三世の将定であったという。

そういう話は全て下斗米秀之進や松村伊三郎から聞かされたもので、平山子龍先生が用事で外出された時の息抜き話だった。だが、どういう訳か細部まで忘れずに覚えている。話し手の表情まで一緒になって思い出されるので精一郎は困ってしまうときがある。

京橋の馬庭念流の道場を覗いたときは、さほど感心はしなかった。教え方は親切だったが、双方に炎にも打ち克つ気力が垣間見えなかったからだ。形にこだわっているようでは、踊りと同じだと思ったものだった。

京橋の道場で見た稽古より、ここの稽古の方が熱気が籠っていた。袋竹刀は重く、技倆によってその長さはまちまちのようだったが、稽古している者同士が、相手を見下しもせず、また遠慮もせずに打ち合う姿がすがすがしかった。

やめの掛け声がかかり、四組の八人は竹刀を引いた。それを待っていたらしく、脇の廊下で控えていた門弟の一人が足音を忍ばせて精一郎の所にやってきて、師範代がお呼びです、と囁いた。精一郎は頷いて立ち上った。道場にいる者がいっせいに精一郎に視線を向けてきた。精一郎は礼をして道場を出た。

先程の小部屋に戻ると、薄暗くなった中で、宮沢助左が浮かない顔で腕組みをしていた。精一郎がその前に坐ると、太くて長い溜息を一つ吐いて組んでいた腕を解いた。

「男谷殿、おぬし、今日ご城下に来る途中でならず者を三人叩きのめしたそうだな」

「はい」

「どういう経緯だったのだ？」

「はい。昨日白子宿に入る手前で妙な男から腹痛止めの薬はないかと訊かれまして……」

精一郎はそれから起ったあらましをかいつまんで宮沢に話した。聞き終った宮沢は、ふむ、といって再び腕を組んで天井を見つめた。門弟が行灯を持って入ってきた。宮沢の馬のように大きな目が浮き彫りになった。

「そいつらは盗賊だったというのだな」

「弥助という男は盗っ人だったと睨んでいます。弥助と一緒に襲ってきた男は頬かむりをしていましたが、初めて見る者でした」

「おぬしは八州を待たずに、そのまま三人を打ち捨ててきたということだが、真実か」

「はい。名主に後を頼んでこちらに向かいました」

ふむ、と嘆息した宮沢は、さっきとは打って変って深刻な表情になって精一郎を見下ろした。互いに坐っていても、宮沢の顔は三寸上にあった。

「一人死人が出た。頭蓋骨が割れて頭の中に血が回ったらしい。覚えがあるか」

「はい」

「負傷した二人は札つきの悪と盗っ人だからお構いなしとして、この死んだ者がまずい。こいつは安三といって遊び人だが、地元の左官屋の倅で無宿人でもなければヤクザ者でもない。せいぜい廻り筒で叱られたことがあるくらいの者だそうだ」

「……」
「いくら旗本の嫡男といえども、こいつを殺して立ち去ったのはよくない」
「廻り筒というのは何のことですか」
「サイコロ博打でそれぞれが持ち回りで筒を取る。つまり、素人博打のことさ」
「……」
「玄人の博打うちではないということだよ」
「分かりました」
やはり簡単に済むことではなかったのだと、精一郎は思っていた。背中が熱くなっている。掌に浮いた汗も拭わなくてはしたたり落ちてしまう程に噴き出してきている。
自分は人殺しなのだ、と改めて思った。
「この顚末の一部始終を本川の中間が目撃していたというのじゃ」
「分かりました」
「……？　なんだ？」
「明日、早くに膝折宿に戻り、お調べを受けて処分を待ちます」
「八州が明日膝折に回ってくるとは限らんぞ。連中はたった八人で武州、相州、上州、野州、常陸、それに房州、上総下総とぐるぐる回っているのだ。いつやってくるとも分からん」

「しかし、死んでしまった以上、このままでは済みません。本川の中間に限らず多くの者が私のしたことを見ております」
「そこなんだがな……」
宮沢は軽く舌打ちをして身を乗り出してきた。いつの間にか道場からの竹刀の音は途絶えていて、室内は静まり返っている。
「本川はこの一件を何の揉め事も起こさずに、うまく処理する方法を心得ていると申しておるのだ」
「どういうことでしょう」
「あの爺さんが何者かは存ぜぬが、そうできるだけのつながりがあると申しておるのだ」
「……」
あの爺さん、といわれて精一郎の頭の中で微かに閃くものがあった。あの顔を見たのは今日が初めてではなかった。しかし、どこで会ったのか思い出すことができなかった。
「処理できるつながりと申されましたか？」
もどかしさを感じながら宮沢に訊き直した。
「そう、つながりだ。八州取締出役といっても元々は代官の手附か手代だ。大した役ではない。本川はこやつらを指揮する代官か、そのまた上の勘定奉行公事方とのつながりをほのめかしたのじゃ」

「……」

「ただし、それには条件がある。最前に儂が申した助太刀を、おぬしにやってもらいたいということなのだ。本川家の手文庫から金を盗み、女中をかっさらって出奔したならず者を斬り捨ててほしいということなのじゃ。こいつはただの用人ではないぞ。中西派一刀流の免許皆伝だ」

「中西道場の……」

不快な思い出が精一郎の胸に蘇った。見学をさせてくださいと丁寧に申し入れた精一郎に対して、二人の門弟は小僧は出ていけといわんばかりの態度を示したのだ。あのときの屈辱と二人のふてぶてしい顔は決して忘れることがないだろう。

「まったくもって厚かましい爺で、おぬしが叩きのめした盗賊よりたちが悪い。……が、一喝して放り出すのもどうかと思ってな、それでおぬしの考えを聞いてみるといっていったん退散させたのじゃ。爺さんは明日中に返答がほしいと言っている。敵の奴がどこかに逃げんとも限らんからな」

「どうして逃げないでこの城下に隠れているのですか？」

「それが儂にもよく分からん。なにせ、あの爺さんの話には不明瞭な点が多すぎるのだ」

宮沢は太い首を回して嘆息した。失礼します、といって一人の男が顔を覗かせた。先程道場にいた一人だった。

「宮沢さん、若い者達が、明日にでも、是非こちらの方の稽古を受けたいと申しておるのですが。実用流の技を見たいそうなのです」

「儂の実用流では不足か」

にやりとして宮沢はいった。いや、そういうわけでは、と相手は俯いた。

「男谷殿には今、ちと面倒なことが持ち上っての。それどころではないのだが、ま、それはそれ、これはこれ、どうじゃ男谷殿、稽古をつけてやってくれるか？」

「それは、やめておきます」

「何故だ？」

「若い人では怪我をしてしまいます」

精一郎の答えに二人は、一間離れたところで互いの顔を見合わせた。ぷ、と宮沢は吹き出した。

「男谷殿は十五歳だろ。おぬしが若い人といえば相手は十歳以下になってしまうぞ。それらが相手ではたしかに危険だ」

「でもご安心下さい。今日稽古していた者は、皆男谷さんより年長ですから」

「は」

精一郎は黙り込むしかなかった。ここに来るまでは、できるならば道場に逗留して、他流派の者と稽古に励みたいと願っていた精一郎だったが、今日の稽古を見て、それは

無理なことだと分った。竹刀剣道の馬庭念流に対して、精一郎の身についた剣法は、あまりに実戦的だったからである。それは、加減することのできない流派だった。宮沢も一度は習ったことなのに、四年の間にあの血みどろの荒稽古を忘れてしまったのだろうかといぶかしんだ。

「旅籠の者が夕飯を用意して待っております。今日はこれで失礼します」

「分った。明日は非番だ。朝から道場にいるのでおぬしも顔を出してくれ」

「かしこまりました」

精一郎は深く礼をして道場を辞した。宮沢から借りた提灯を手に門を潜りかけると、厩から馬のいななきが聞こえてきた。暗いが広い内庭に反響して、それは切れ味のよい雷鳴のようにも聞こえた。

門を潜った精一郎はふと足を止めた。脳裏に馬から転げ落ちた老武士の無様な姿が、閃光に当てられて浮かび上ったからだ。

――あの時の老人だ。

板橋宿の茶屋で、飛脚が届けてきた書状を待っていた気むずかしい顔をした老武士と、さっきここですれ違った爺さんの顔が重なり合った。麦の匂いが鼻孔に忍び込んでくる。月はまだ細い。歩き出しながら、あのとき握り飯をぐちゃぐちゃにして泣いていた千蔵のことを精一郎は思い出していた。

第六章　撃剣

一

精一郎は夢を見ていた。

広大な草原を歩いているのだが、腰まで埋まる深い草と、真向かいから吹きつけてくる強風のために、思うように前には進まない。笠はすでにどこかに飛んでしまっていて、枯木や棘のある草が顔や首筋に当ってくる。

空は一面に渦を巻いている。どす黒い雲が地上の全てを吸いつくすように大きく回転し、その中央には空の眼を思わせる水色の空間が、楕円形に潜んで静まり返っている。その眼が、精一郎の草原の中でもがく姿を冷ややかに見つめている。

雷鳴が響いた。

精一郎は立ち止まり、上空に目を向けた。それまで遥か空の果ての透明さを連想させ

ていた水色の眼は、血に染め上げられた鮮やかな紅色に変っていた。

空が泣いているのだ。

風の音に混ってそう語りかけてくる野太い声が耳に届いた。あたりを見回したが誰もいない。鋭く長い葉を持つ草が、身をよじって精一郎の腕に容赦なく刃を立ててくる。

再び歩き出そうとすると、重い地響きが足に伝わってきた。太い鉄棒で地を打つような音ではなく、地中から何ものかが山ごと地表に向けて突き上げているような大きな震動である。

奈落を切り拓いているのだ。

その声は風に乗って遠ざかっていった。しばらくすると、チリンチリンという可憐な音が聞こえてきた。巡礼が通るのだな。こんな野っ原をよく歩いてきたものだ。そう思って音の出処を探った。

野の端の、空との境界に白い物が現われた。白装束の巡礼の姿はこけし程で、いまにも草原の中に潜ってしまいそうだった。

精一郎は向き直り、さらに強さの増した風の中を歩き出した。すると前方から鉦を鳴らす者があった。目を上げると、いつの間に出てきたのか、数十人の男女が、手にした鉦を打ちつけて、必死の形相で近づいてくる。

「ひと殺し、ひと殺し」

そう口々に呟く者たちの顔色はみな青ざめていて、目ばかりが黄金色に光っている。

チリン、チリン。

鈴の音が背後からまるで追いたてるように襲ってきた。振り返るとこれも数十人に脹れ上った巡礼達が、横に大きく広がって、精一郎に迫ってくる。笠の下にある老人の顔は土気色で、頬骨が皮膚を破って突き出している者もいる。

「怨むぞ、呪うぞ、たたってやるぞ」

鈴の音をくぐって老人達の低い呟きが伝わってくる。挟み撃ちにあった精一郎は、草原に踏みとどまって声を放った。

「襲いかかってくる者に対して、打ち返しただけです。殺すつもりではなかったのです」

声は風に押し戻されて口腔ではね返り喉に張りついた。精一郎は息ができなくなった。

「ひと殺し、ひと殺し」

「怨むぞ、呪うぞ、たたってやるぞ」

前後の輪が急速に縮まり、死人のような顔の中の目が、どれも喰らいつくように睨んできた。

「打ちかかってこなければ、私も打ち返すことなどしなかった」

喉を振り絞って精一郎は叫んだ。

違う。おまえは殺すつもりであやつを打ったのだ。

不意に耳元で掠れた声が響いた。それは人の声でいて、人の声でないような、地鳴りに似たうねりを持っていた。

そのとき、精一郎の足元から風が吹き上ってきた。白い光が伸び上がり、精一郎の身体はその光に押し上げられて空中に浮き上った。獣達が集団でたてる遠吠えのような音が湧き上がり、地表がぱっくりと開いた。

遥か眼下に激流が白い泡をたてて岩にぶつかる谷底があった。それが牙を剝き出した青いうろこを持つ竜に変わると、精一郎を支えていた白い光は力を失って消え、身体はまっ逆さまに谷に落ちていった。

これが奈落か。落ちながら精一郎は呟き、刀を抜いた。奈落に潜む怪物を突き殺してやろうと奮い立っていた。その開かれた口の中に切っ先を向けて落ちていく時、精一郎の傍を別な影が走って追い抜いていった。

「たあーっ！」

自分の叫び声で精一郎は目を覚ました。旅籠の雨戸はまだ閉てられたままで、部屋の中は暗い。障子に射す雨戸の節穴からの光も淡く弱い。

昨日旅籠に戻ると、部屋は奥の角部屋に移されていて、四畳半だったものが六畳間に変っていた。宮沢助左を訪ねる前に番頭に渡した心づけが利いたものらしい。隣の部屋は空部屋で、おかげで今発したばかりの叫び声で旅人を驚かさずに済んだようだった。

精一郎は畳に横たわったまま、暗い天井を見上げていた。まだ少し胸が高鳴っている。「ひと殺し」と夢の中でののしられたことが衝撃となって心に残っている。

――安三という名の遊び人が死んだ。私が殺してしまったのだ。

あの時、殺意は本当になかったのだろうか、と精一郎は思い返していた。最初に棍棒を振りかざして突進してきた男が安三だった。その攻撃をかわすのは簡単だった。威勢はよかったが、肩に力が入り過ぎて存分に棍棒を振り下ろすことさえできずにいた。

その一撃をかわして次の男の脇腹を木刀の柄頭で打ったとき、精一郎は安三に対してどのような反撃を加えるか、充分に思案する余裕があった。動きは一瞬だったが、思考は普段のときと変わらなかった。こめかみを打ちすえずに、背中を叩くこともできたはずだった。いやむしろ、その方が自然の動きだったかもしれない。

――あそこは急所だ。あそこを突けば、骨が砕けて頭の中は血で溢れ返るということが、自分には分っていたはずだ。

兵原草廬での荒稽古でどこを打てば必殺の一撃となるか、その急所と打ち込む気迫を会得していたはずだった。事実、木刀での立ち合いを師平山子龍に求めた剣客が、ただの一撃で血反吐を吐いて即死するのを目撃したこともある。

「ここは道場ではない。戦場なのだ」

師は常にそう口にした。

――夫れ剣術とは敵を殺伐することなり。

それが師の教えだった。その教えに臆せず、押し返すだけの胆力をつけるために稽古に精進した三年半だった。

――だから無意識の内に急所を木刀の柄頭で打ったというのか。何のためらいもなくあの者を殺そうとしたというのだろうか。

精一郎の胸の動悸はさらに速くなっていた。安三が武道の鍛錬をしていないことは、坂を駆け降りてくる体勢を見たときから分っていた。多少喧嘩の心得はあっただろうが、武士から見れば、その姿は案山子同然だった。いかに無法者とはいえ、そんな者に対して戦場での敵と同様に、勇剛をふるい起こして戦わなくてはならなかったのだろうか。

「勝負は巧拙ではない。勇気であり、剛強の心が大事なのだ」

師の言葉が重く胸に響いてくる。だが、と精一郎は思った。あの男が、師の教えに匹敵するほどの武者なのか、と。

――そうではない。あの男はただの木偶の坊だったのだ。先生はあんな者を倒すために弟子を鍛えていたのではない。私が勝手にあの男を戦場での敵だと思い込んでいただけなのだ。

その思いに、心のおごりというものはなかったのだろうか。あの者を見下し、あの者の技倆がたわいないものだと知った上で、自分の力の効果を試そうという思い上った心があったのではないだろうか。

精一郎の脳裏に、こめかみを打ち抜かれたときの、安三の絶望的な目付きが浮かび上っていた。充血した目が、一瞬の内に反転して白くなった。その表情が醜く歪むのを、精一郎は一連の動きのなかで目にとめていたのだった。

チ、チ、チ。

雨戸の外から鳥の囀る声がとび込んできた。その明るく切れ味のよい歌声とは裏腹に、胸にびっしりと小粒の汗を浮かべた精一郎の心は、塞ぎ込んでいた。

――夢の途中で、これは夢を見ているのだ、と気付いたようだった。

ひと殺し、怨むぞ、呪うぞ、という老人達の呟きがまだ耳元に残っているのを感じながら、精一郎は夢の中での出来事を思い出していた。

――夢だと気付いたのは、いつ頃からだったのだろうか。自分が老人達に向って反論したときだろうか。それとも、谷底を覗き込んだあたりだろうか。

落ちながら、刀を抜いたときは、夢の中であろうが、ひと暴れしてやろうという意志が働いていた。それは決して無邪気なものではなくて、自分は本当に死ぬ気でいた。夢の中で、死のうとしていた、と精一郎は思い返していた。

――それにしても、最後に、自分を掠めて飛んでいった影は何だったのだろう。

そう思い出したとき、階下で床板を踏む音がした。もう人が起き出す時刻になっていたのだと知って、精一郎は掛けていた羽織を弾いて立ち上った。

二

旅籠の周りは重厚な屋敷が並んでいる。庭に蔵を持つ家もある。そのあたりで朝の稽古をしては目を覚ました住民が驚くだろうと思い、高沢橋を渡った赤間川沿いに手頃な空地を見つけて、そこで木刀を振るった。薄暗い中で霧が揺れるのを感じていたが、陽が昇りだすと靄に変った。

半刻程して土手に上がると、石原町の街道に建ち並んだ旅籠から、いっせいに雨戸を開ける音が響いてきた。白い煙のような靄を通して、宿の女のかいがいしく働く姿が垣間見える。橋を渡る前に振り返ると、一軒の旅籠では精一郎より二、三歳年下の小僧が出て、竹箒で旅籠の前を掃いていた。

部屋に戻り、汗を冷水で拭った後、朝餉までの間『孫子』の四巻目を読んだ。汁と菜っ葉と小魚二匹の朝餉をとった後で、再び『孫子』を読みふけった。平山子龍先生から『孫子』の読み方を教わったときも、この謎の人物の大胆で緻密な兵法に驚嘆したものだったが、改めて一人で読み返してみても、感心させられることが多かった。ことに、

戦わずして勝つ、という言葉が、今朝は特に胸に響いた。

宮沢助左に会うために旅籠を出たのは四ツ近くになっていた。細い路地を通って養寿院という寺の前を過ぎて南町の大通りに出たのだが、そこに出るまでの曲がりくねった横町には、菓子造りの店が軒を接して並んでいて、朝から甘く芳しい匂いをたてていた。即席に販売している店の中に、薄く切った芋に砂糖をまぶして焼いたものを売っている店があって、胃の中で朝飯がこなれ始めた精一郎の口に、涎を溢れさせた。小さい町人の子供が、おまんが飴ちょうだい、といっているのを耳にして、いつでも自由に買い食いができる町の子はいいものだな、と羨しく思ったものだった。

脇田村は城下の南はずれに位置していた。呉服屋や太物問屋の建ち並ぶ南町を下って鍛冶町を抜けると、志義町に入ったところで突き当った。正面に「大塚屋」と看板に金文字を書いた薬種店があって、そこは風の通り路になっているらしく、藁や土埃が我が物顔で舞っている。

精一郎はいったん左に折れてすぐに南に曲った。蓮馨寺という大きな寺の門前を通ると、境内から太鼓を叩く音が聞こえてきた。足を止めてそちらに顔を向けると、見世物でも出すらしく、赤と白の幕を張ったあたりで、男たちが忙しそうに立ち働いている。連雀町と呼ばれるこの一帯は、屋台に商品を並べただけの小さな店が町一帯に溢れている。

そこを過ぎると藩士の住む長屋が建ち並び始めた。垣根を張りめぐらせた長屋はどこも間口が狭い。どうやら藩士の中でも身分の軽い者達が住む長屋らしい。それが一番町から三番町まで続いている。その先に出ると畑が広がっている。脇田村は郷分で、ここに道場を構えているということは、宮沢助左の祖父は上士ではなく、軽輩の者達を鍛えるために建てたのだろう。

宮沢助左は道場脇の小部屋で、破れた袋竹刀を繕っていた。若い門弟に案内されて精一郎が部屋に入ると、「あの爺さんがまたやってきおったぞ」といきなりいって自分の前に坐るようにと手招きをした。

「どこでどう調べたのか、朝っぱら早くに瀬尾町の儂の家にやってきて、道場の門弟を是非貸してくれと頼み込んできた。どんな事情があろうが藩士や藩士の子息を私闘の助太刀に出す訳にはいかん。何度言っても分からん爺イでな。朝飯を邪魔されて儂も機嫌が悪かったから、とにかく帰れと怒鳴ったのだ。すると三白眼を向けてきてな、『では膝折村の若者を打ち殺したあなたの知り合いが、面倒なことになりはしませんか』と強談判を仕かけてきたのだ。まったく嫌な爺イだ」

宮沢は袋竹刀を傍らに置いて懐から懐紙を取り出して開いた。四枚の小判が入っていた。

「こいつを置いていった。是が非でもおぬしの力を借りたいそうだ。今日にでも出奔した不埒者を成敗したいといっておった。高飛びする前に始末したいそうだ。四両だぞ、四両。あの爺イが無理やり置いていったのだ。一両儂が猫ババしたのではないぞ。初めから四両なのだ」

「これを受け取ったら、助太刀を引き受けることにはなりませんか」

「爺イが勝手に置いていったのだ。放っておけばよいさ」

「どこの誰かということもまだ分からないのですか？」

「分からん。だが爺イが帰るときに、丁度隣の村下の倅が釣りに行く支度で出てきおっての。こいつは素読も満足に出来ぬなまけ者だが妙に要領のいい所がある。で、こいつに爺イの跡をつけさせてな、何でもいいから探ってこいと命じておいた。おっつけここにやってくるだろう」

宮沢は太い溜息をついて小判に目を落した。次に精一郎を見た目が愛想笑いに溢れている。

「どうだ？　もらっておけよ」

「私はいりません。宮沢さんが処分して下さい」

「処分？　儂が処分するとしたらみんな酒に化けてしまうぞ。八十石の薄給では寝酒も三日に一度、それも一合程度なのでな」

「ともかく、私はいりません」

「そうか。それではしばらく儂が預っておく」
宮沢は毛深い腕を伸ばして四枚の小判をつかむと、素早く懐に入れた。そこへ先程精一郎を案内してくれた門弟が顔を出した。
「師範代、八人とも準備が調っています。お願いできますか」
「分った、すぐ行く」
宮沢は門弟にそう答えてから、精一郎に明るい顔を向けてきた。
「昨日お願いした通りだ。うちの者どもに稽古をつけてやってくれ」
「しかし……」
「実用流の稽古は実戦並みだということは伝えてある。目を回しても知らんぞ、と儂はいったのだが、連中は江戸でも名高い実用流、すなわち平山先生仕込みの忠孝真貫流剣術に長じたおぬしの剣を、どうしても見てみたいと言い張っておるのだ」
「……」
「ここは他流試合は許していない。だが見学は自由だ。師範と儂の意見が違うのだ。師範は入門者以外の見学は許さんといっている。儂は他流の者との試合もさせたいと思っておる。いずれにしろ、連中は昨日、おぬしに自分達の剣筋を見られてしまったと思っている。このまま旅立たれては不公平である、というのだ。おぬしも実用流の何たるかを、連中に教えてやってはどうかな」

「稽古着の用意がありません」
「儂のを貸そう。いや、儂のでは大き過ぎるな。どれ、探してきてやろう」
宮沢はひょいと立ち上がると廊下に出た。すぐに一組の稽古着を持って戻ってきた。
「少し黴臭いが我慢してくれ。用意が出来次第、道場の方へ来てくれ」
稽古着を精一郎の前に置くと、袋竹刀を手にして出ていった。
これで稽古をするしかなくなった、と精一郎は思った。それが目的で川越に立ち寄ったのに、今は相当に気が重くなっていることに気がついた。安三という名の男が死んでしまったことが、精一郎の気持を塞がせていることに間違いはなかった。
稽古着は、少し、ではなくかなり黴臭かった。汗のついた稽古着を、洗わずにそのまま暗いところに放り込んでおいたのだろう。上衣を裸の肌にあてると、粗目の木綿のごわついた感触が背中を刺した。
精一郎が一礼して道場に入っていくと、相稽古をしていた二組の四人に、やめの声が入った。
「竹刀はそこにある。どれでも好きなのを取ってくれ」
宮沢は壁板にかけられた袋竹刀に向けて顎を振った。精一郎は一番短い袋竹刀を手にした。柄は一尺で、袋竹刀の長さは三尺程だった。

「素振りが終ったら面と籠手をつけてくれ」
「素振りはしなくても大丈夫です」
「そうか。では稲葉、用意をしろ」
指名された者は精一郎より少し年上で、肩幅の広いがっしりとした体格をしていた。
精一郎は彼に合わせて面をつけた。
「男谷の剣は、儂のごまかしの実用流剣法とは違って筋金入りだ。おまえらのたっての願いで立ち合いを許したのだ。根性を据えてかからんと大怪我をするぞ」
宮沢は板壁の前に並んだ門弟達を睨みつけていった。皆、面をつけている精一郎を横目で見つめている。小柄な精一郎を見下す視線も混っている。
「お願い致します」
精一郎は立ち上って一礼をした。相手は黙って頷いただけである。
「はじめ！」
宮沢の声で稲葉は右足を引いて半身になり、竹刀の先を天井に向けた。斜め上段から一気に打ちおろす気迫を示している。
精一郎は正眼に構えて佇んだ。全身に気合いがみなぎる。だが声は出さず、気を前に押し出して相手を追い込んでいく。
気で押されて稲葉は必死で踏みとどまった。はね返そうとしているのがその目のあわてぶりで分かる。精一郎の精神は集中している。相手を倒すのだという一念のみが身体を支配している。敵を殺さなければ自分が殺されてしまうのだ。ここは道場ではなく、精一郎にとっては戦場なのだ。

苦しくなった稲葉が我慢しきれなくなって、打ち込もうと竹刀をさらに立てた。剣法では打ち込むときに隙が生じる。全霊を傾けた打ち込みなら力があるが、相手に気圧された末に、苦しくなって打ってくる技には力がない。形があるだけである。
稲葉の息が流れた。空気を吸おうとしたが、余裕がないため途中で吸うのをやめて、竹刀に打ち込みの意志を伝えようとしたのである。
その瞬間、精一郎は相手の間合いの中にとび込み、一気に竹刀を突き出した。切っ先は相手の喉に入り、大きな身体が羽目板まで吹っ飛んだ。竹刀の先を首の後ろまで貫くつもりで突き出したのだ。いったん浮いた身体は、猫が体当たりをしても軽く吹きとばすことができる。精一郎の肩が相手の胸に入ったとき、相手はすでに死に体になっていた。
「それまで」
宮沢は片手をあげた。稲葉の身体がだらしなく床板に伸びきったままでいるのを知ると、自ら稲葉の面をはずして喉に手をあてた。
「駄目だ。喉の骨が砕けたかもしれぬ。おい、石井、野田、稲葉を部屋に寝かしてから

医者を呼びに行ってこい」

立ち上った二人はすぐに稲葉を担ぎ上げて、隣の部屋まで運んだ。精一郎は面をつけたまま佇んでいた。あやまるつもりはなかった。稽古は竹刀に慣れ親しむためにやるものではなく、実戦を想定して行われるものだ。稽古で落す命だってある。

「どうだ安福、やるか」

中程に坐っている男が、濃い眉毛の下にある鋭い目を宮沢に向けた。それから精一郎を睨み上げて、やります、といった。

「臆しても駄目だが、気合いが入りすぎても駄目だぞ。心胆をどう鍛えてきたか、それが一瞬の勝負の勝利につながるのだ」

宮沢は面をつけている安福という者と、他の四人の者に説きつけるようにいったが、頷いた者はいなかった。面をつけ終えた安福は、立ち上がり様、踵で強く床板を叩きつけた。ドシンという音が響き渡った。それは相手を威嚇するためのものなのか、それとも自分を鼓舞させるための動きだったのか、精一郎には分からなかった。そんなことはどうでもいいことだった。

この人は、自分の未熟さを、ああいう形で表わしたのだ。

それは稚ない方法だと精一郎は思った。だが、竹刀を構えて向き合ったときは、相手を見下す思いも、相手の技倆を怪しむ思いも消えていた。そこには、敵、がいるだけであった。

「どあっ！」

安福が吠えて竹刀を頭上にかかげた。五尺八寸（百七十五センチ）程ある長身を、さらに大きく見せて小柄な精一郎をひと呑みに呑み込まんとしたのだろう。その気負った安福の竹刀の届く所に、精一郎は擦り足で入っていった。安福は後ずさりをした。そこで打っていっては、竹刀の根本が相手の面に当ってしまうと焦ったからだ。そうしながら遮二無二打ちかかってきた。精一郎は足を飛ばした。

竹刀の切っ先が、稲葉のときと同じように安福の喉をとらえた。違っていたのは、安福の身体は後ろには飛ばず、その場でいったん伸び上ってから、背骨がふやけたようになって前向きに倒れ込んだことである。宮沢は勝負の裁定をせずに安福のところに黙って駆け寄り、面をはずした。安福は白眼を剝き、口から泡を吹き出していた。

「これは危ない。だれか水を運んでこい。それから濡れ手拭いも持ってこい」

一人が足音を高くたてて飛び出していった。精一郎は板壁を背に坐り、籠手をはずして面をとった。いままでそこに並んで坐っていた三人は、皆、安福の上に顔を寄せている。一人が得体の知れない物を見るような目付きで精一郎を振り返ったが、精一郎は何もいわずにいた。

「お見事、まことに見事でござる」

そう大声でいって手を叩く者がいた。見ると武者窓から皺に囲まれた細い目が覗いている。助太刀を頼みに来た老人が今日も道場にやってきたのだ。背の小さい老人では、武者窓までは届かないから、樽の上にでも立っているのだろう。

「稽古はこれまでだ。男谷、部屋に戻って着換えてよいぞ」

安福の頭の下に手を差し入れたまま、宮沢はそういって精一郎を振り返った。磊落な感じの宮沢は失せて、強張った顔になっている。精一郎は立ち上って三人の後ろから安福の顔を見下ろした。喉元が焼かれたようにただれていた。精一郎は礼をして道場から出た。

三

精一郎よりもさらに小柄な老人は、鉄砲場の脇にさしかかると、胸をそらせて立ち止まり、場内で働く藩士たちを眺めた。彼等は調練のための土塁を築いたり、穴を掘ったりしている。そこは足軽長屋の西に広がる広大な地域で、今朝精一郎が通ってきた時は、人影はまだなかった。

「道場の師範代にも申し上げたのだが、故あって主人の名は明かせん。成敗する者は黒須喜三郎といって、当家に仕えていたものだ。さよう、三年半にもなるかな」

「ご用人をされていたそうですね」

「誰がだ？　黒須がか？」

「そう伺っています」

老人は灰色の目を精一郎に向けていぶかし気にしていたが、遠くで人の怒鳴り声がするとハッとして頭を振った。

「そうではない。用人は儂だ。現在は隠居しておるが、もともと黒須を雇い入れたのは儂なのだ。奴が十七歳のときで、どうしても旗本の屋敷で奉公したいと伝手を頼って願い入れてきたので、若党として屋敷に置いてやったのだ。奴は呉服屋の三男坊であったが、箱田（熊谷市）で秋山要助の道場に通うようになって、自分も武芸で身を立てたいと欲を出して江戸に参ったのだ。可愛がってやったのに、屋敷の下女をかっさらって逃げ出した上に、金まで盗んでいきおった」

老人は先に立って歩き出した。精一郎がその後に続き、中間がさらに後をついてきた。宮沢の道場を出ると二人が待っていたように立っていて、なんとしても手を貸してくれ、これから行くので同道してくれ、と老人は有無をいわせぬ口調でいって、精一郎の袖を引いたのだった。了解した訳ではなかったが、精一郎は何となく老人の剣幕に押されて、後についてきてしまったのだ。老人は、支払った四両は精一郎の懐に入ったと思い込んでいるから、あくまでも強気である。

「するとあなたは、元用人で今は隠居されているということなのですか？」
「そうじゃ。殿は今が一番大事なときでな。用人も何かと忙しい。不埒者一匹捕えるのに大挙して追ってくるわけにはいかん。じゃが、喜三郎の奴め、あんなに腕を上げていたとはつい存ぜなんだ。おかげで連れてきたもう一人の家士が重傷を負って医者の手にかかっておるわ。思わぬ出費じゃ」
老人は渋面を作って唇を尖らせた。
「それで、その黒須という人を捕えてどうされるつもりなのですか」
「腹を切らせる。抵抗したら斬るつもりだった」
「それはひどい。一体いくら盗んだのですか」
老人はそれには答えずに足を速めだした。
「ところが奴め、熊谷から昔の仲間を呼び寄せて、護衛をさせおった。うちのものが臆したのもそのせいだ」
畑の道に入ると、老人は泥で汚れる足元を気にしてか、歩く速度が緩くなった。
「その人はあなた方が追ってきたのを知ったのに、何故遠くへ逃げずに、ここらあたりに潜んでいるのですか」
「まとまった金子を手に入れようとしているのだろうよ。奴は親戚の別邸に女と共に潜んでいるのじゃ。実家に逃げ帰ったように見せかけて、その実、親戚を頼って川越に逃げ込んだのだ。儂は両方に追手をつけて見張らせておいたのじゃ。熊谷でも川越へでもすぐに行けるように、板橋宿で知らせを待っておったのじゃ」

精一郎は老人がまともに答えているようで、実は巧妙に話をはぐらかしているのに気付いていた。ただ、それが何のためになのか、理解できなかった。
「あそこじゃ」
老人は寺の隣に建った、藁葺き屋根の素朴な家を指さした。庭はあるが、垣根も低く、とても悪人が逃げ籠もるに適した要塞とは見えなかった。
「代吉、先に行って様子を見てこい」
老人は中間にそう命じた。尻を端折った中間が走って向かうのを、精一郎は釈然としない思いで見送っていた。
庭の見えるところまで行くと、男が二人、睨み合っている姿が目に入った。背中を向けているのは中間の代吉で、向かい合っているのが黒須喜三郎なのだろう。細面で肩も薄く、一見しただけでは、長年、道場で稽古を積んだ者のようには見えなかった。
「黒須、観念せえ」
いきなり老人が叫んだ。こちらに顔を向けた男は老人を見ると困惑した様子で後ずさりをした。老人は板戸を蹴破って庭に入った。精一郎は垣根の手前で止って佇んでいた。黒須を護衛しているという仲間が見えないので、老人に続いて中に入っていくきっかけ

を失っていた。

「喜三郎、我らと一緒に江戸に戻れ」

老人の声が高く響いた。切腹させるというのは、言葉の勢いでいってしまったことなのだな、と精一郎は思って少し肩の荷が軽くなったように感じた。老人の目的が和解にあるとすれば、自分が何か手助けすることも可能のように思えた。

「なぜです。なぜ連れ戻そうとするのですか。わたしはイヤです」

家の中から一人の少女が現われて、黒須をかばうようにその前に佇み、気丈にも老人に向ってはっきりと言葉を放った。

痩せた少女は、まだ十三、四歳のようだった。その少女の黒くて潤いのある目に精一郎は魅き寄せられた。胸の内で懐しい思いがこみ上げてきたのは、少女が屋敷にいる綾の面影を宿していたからだった。

四

「菊、若殿がおまえに戻ってきて欲しいといっておるのだ。おまえのしでかした不始末は許して下さると申されておるのだぞ。なぜ儂のいうことがきけんのじゃ」

「私は、お屋敷には戻りたくないのです」

菊と呼ばれた少女は、切れ長の目尻をもった黒く強い目を老人に向けて言い放った。江戸の屋敷で下働きをしている綾の面影がふっと消えて、庭に佇んでいる痩せた少女の張りつめた表情が精一郎の胸に押し寄せてきた。綾も割合にはっきりと物を言う娘だったが、どこか田舎の娘らしい素朴さを宿している。だが、菊という娘は江戸で数年奉公していたらしく、その口調ははぎれがよいばかりでなく、武士である老人に対して容赦のない敵意を含ませている。

「ではどうするというのじゃ」

老人はそういうとずかずかと娘の前まで歩いていって、その肩を摑んだ。男谷家に仕える用人や家士が、下女の身体にそんなふうに強く触れることはない。精一郎は老人の仕種に、使用人を蔑む気持が根強くあるのを感じて不快になった。

「このまま黒須と共に逃げ回っているというのか。こやつがどのようなうまいことをいっておまえを連れ出したのかは知らんが、いずれ持ち金を使い果たせば、おまえを女郎に売りとばすことなど簡単にしでかすやつなのだぞ」

「喜三郎さまは……、黒須様は私を連れ出したのではありません。私が、黒須様に、どこか安全なところにかくまって下さいとお願いしたのです」

「つまり、駆け落ちしたのじゃな。まだ十三の小娘のくせに色気づきおって。お屋敷で与えられた着物を持ち出した上に駆け落ちしたとなれば、どのようなおとがめを受ける

か、一度は武家屋敷で働いたおまえなら分かるであろう」

娘は身をよじって、肩を摑んだ老人の指から逃れようとしていたが、老人が巧みに急所を押さえているため逃れることができず、その場に坐り込んでしまった。精一郎が庭に入っていったのは老人の動きを制止するためだった。

「おやめ下さい」

娘の背後で肩をすぼめておろおろしていた黒須喜三郎が、たまりかねたように前に躍り出てきて老人の腕を取った。

「いてて」

老人は手首を押さえて黒須を睨み上げた。中間の代吉が小刀の鯉口を切って身構えた。

「本川様、このままお見逃し頂く訳には参らぬのですか」

黒須は細面の顔を老人に向けた。頬が蒼白になっていて、唇にも震えが走っている。

「できぬ相談じゃ。すでにおぬしはごろつきどもに命じて、吉岡を半殺しの目に遭わせておる。ここが松平領でなければ、とっくにおぬしを役人に捕えさせておるところじゃ」

「あれは、昨日のことはこちらの非ではありません。吉岡がいきなり菊をさらっていこうとしたので、菊の悲鳴を聞いた昔の私の知り合いが救い出そうとしただけです」

「ごろつきには違いあるまい」

「違います。皆、商家に勤めております。まともな者たちです」

「まともな商人が、やっとうを習ってどうするつもりなのだ」

老人は黒須を睨み据えた。その老人を膝を抱いて坐り込んだ娘が見つめ返している。気丈な性格が澄んだ目許に表われていた。

「では、どうあっても私と菊を江戸に連れ戻すおつもりですか」

「そうじゃ」

「連れ戻していかがなさるおつもりですか」

「殿の裁定を仰ぐのじゃ」

「殿はきっと……」黒須はそこで息を詰め、遠くに視線を向けた。「私に切腹を命じ、菊には才蔵さまの一件を口外するなと固くお申し付けなされることでしょう。もとより私どもには、この度のことを外部に洩らす気は毛頭ありませんでした」

「余計なことはいうな、黒須。命が縮むぞ」

「私は切腹などいたしません。私は商人の出です。理不尽な武家の慣習には従えません」

「ではどうする」

老人は半身を開いた。柄袋をはずしてある刀の柄に、その右手が伸びようとしている。脅しのつもりなのだろうが、その仕掛け方はよくないと精一郎は思った。かつて少しは剣術をしたことはあるのだろうが、老人には胆力が残っていない。刀身の重味さえも、その枯れた足腰では支えきれないだろう。

だが黒須喜三郎の方には徐々に生気がみなぎってきて、最初に見たときの病弱な若者を見るような弱々しさは消えて、今はその双眸に、強い怒りと復讐心のような危険な輝きが浮き上っている。気概と共に身体の内側に潜んでいた剣への渇望が、殺気となって脹れ上ってきたようだった。この人は只の、旗本に仕える家士ではないと精一郎は思った。

「私を打ち倒すというのであればお手向かい致します。そちらにいる若い方も、そのつもりで連れてこられたのでしょう」

黒須の目が初めて精一郎に向けられた。眉毛は薄かったが、その下にある目は意外に大きく、それでいて黒眼の部分に動揺は見られず、夜間の湖面に漂う三日月のような不敵な光をたたえている。何年間中西派一刀流の道場に通ったのか老人から聞き洩らしたが、一年や二年の修業でないのは確かだった。

「年が若いからといってこの方を侮るな。町人の生兵法でかかっていったら必ずや命を落すぞ」

老人はそういってじりじりと後ろに下った。尋常でない様子を悟った娘は、身を半転させて老人の前から離れた。その間、黒須の視線は精一郎の上にずっと置かれていた。

「生兵法かどうか、やってみなくては分かりません。それに江戸に連れ戻されてもどうせ失くす命なら、ここで試してみるだけの価値がありそうです」

白鞘を腰に差した黒須は、口元を歪めて、小袖から伸ばしていた右腕をそろりと動かした。どこかの寺から鐘をつくのどかな音が響いてきて、少し冷たさを含んだ風が斜め上空から吹いてきた。

その風に桜の花弁が乗っていた。花弁の一枚が黒須の髷に落ち、蝶のように震えながらとまっていた。

「もう少し話し合われたらどうですか」

精一郎は黒須の身体から見えない、靄のようになって伸び上ってきた殺気を、やんわりと押し戻していった。

「それに、さっきからお話を伺っていて、少々おかしいことに気付きました」

「おかしいのは隠居した元用人を追手に遣わした田村家四百石のお殿様ですよ。だがもういい。私は腹をくくった。この場をうまく切り抜けて、ことの次第を全てお目付様に届け出るつもりです」

黒須の顔色が不意に朱に染った。そのとき片方の目に鏡に反射したような光が走った。

「代吉、何をしている！」

そう怒鳴って身を翻そうとした老人は、わっと叫んで目を押さえた。地面に蹲っていた娘が、とっさに砂まじりの土を投げつけたのだ。

老人の叫びは、次の瞬間呻き声に変った。黒須の白鞘が老人の肩を打ったのだ。老人

は前のめりにゆっくりと倒れていったようだが、精一郎にはそれを見ているだけの余裕がなかった。

黒須は斬り下げた白鞘の切っ先を、白光のような素早さで、下段から精一郎の左の胴めがけて突き上げてきた。かわす間はなく、袋に入れた木刀の柄で合わせるのが精一杯だった。その剣の鋭さに精一郎は冷やりとするものを感じた。黒須が鞘に納めたままの刀ではなく、真剣を抜き放って打ってきたならば、精一郎の木刀は斬られ、顎に致命的な傷を受けていただろう。

精一郎は横に回って跳びすさり、二間の間をおいた。黒須は急いで追いつめようとはせず、いったん腰をおとして刀を抜いた。老人が何事か叫び、地面に両膝をついた。その老人を抱え起こそうとしていた中間の代吉が、娘に向き直る様子が黒須の背後で展開していた。

「剣を納めて下さい。私はあなたと争う気はありません」

「では何故本川などの助太刀に来たのです？」

「あなた方二人が金を盗んで屋敷を逃げ出した上に、追手の一人に重傷を負わせたと聞いたからです」

「それは違う」

怒気を含んだ黒須の声が震えていた。だが、その身体から発する殺気は薄らぎ、黒須は刀の峰を返した。斬り殺す気はないという意思表示だった。

「いやっ！」

細い悲鳴が風に逆らって伸びてきた。起き上って逃げだした菊という娘を、代吉が捕えて頬を拳で殴りつけた。精一郎は黒須の身体越しにその情景を見ていたが、背中を向けている黒須には何が起っているのか分からない。

焦りが黒須の決意を血腥いものにした。目の前にいる敵を早く片づけなくては、という思いが克ち、一気に二間の間合いを詰めて上段から斬り込んできた。その剣には薄らいだはずの殺意が乗っていた。上段に剣を構える寸前に、精一郎は黒須が掌の中で、柄をくるりと半回転させて、刃を敵に向けたのを目撃した。娘の叫び声が、黒須を殺人者に変えたのだ。

殺到してきた剣を受けることはできなかった。はずせば二太刀目が襲ってくる。その凄味は体験したばかりだ。だが急いで踏み込めば黒須の剣の餌食になる。二間の間合いは黒須の手の内に入っている。主導権は黒須にある。黒須は相手が動揺して構えを崩すことを計算に入れている。相手が受けの体勢に入れば、たちまち両腕を斬り落してくることだろう。

精一郎は待った。息を詰め、丹田に気力をみなぎらせてひたすら辛抱した。敵の襲撃に心を乱されまいと耐えた。

黒須の剣先が頭上で閃いた瞬間、精一郎は相手の胸にとび込んでいった。木刀が肉を打ち、骨を砕いた。黒須の喉を絞る呻きが耳元で獣の声のように響いた。

すり抜けて向き直ると、脇腹を押さえた黒須は右膝をついて刀を落した。顔だけこちらに向けて戦う気力を示したが、すぐに激しく咳込み、その痛みに耐えられず泣き声をあげた。

精一郎は黒須の傍にしゃがみ込んで、その手を取った。刀を鞘に納めて黒須の前に置くと、白鞘に水滴が落ちた。黒須の大きな目から涙が溢れていた。精一郎は黒須の背中に手を置いていった。

「こうなってしまったことは申し訳なく思います。しかし、防ぐゆとりがなかったのです」

黒須は口を開こうとしたが言葉にならず、二度、喘ぎ声をあげてねばっこい液体を口から吐き続けた。

「助けて！」

娘の悲鳴が絶叫に変った。代吉は逃げようともがいている娘の背中に馬乗りになり、襟首に手をさし入れて一気に着物を引き下ろした。娘の筋ばった細い背中が露わになり、娘は絶望的な叫び声をあげた。

「……菊を……」

黒須はそういって立ち上がりかけ、激しく嘔吐した。血の色が地面に落ちた。

「動いてはなりません」

自分より四つ五つ年上の黒須にそういって、精一郎は素早く動いた。憤怒が胸に充満していた。自分をここまで引き込んだ本川という老人に対しても怒っていたし、再び人を傷つけることになってしまった自分の未熟さにも腹が立っていた。全てはごろつきのような盗っ人とかかわり合いを持ってしまったことから始まっていたのだが、それは不可抗力というもので、その理不尽さに対しても言いようのない憤りを感じていた。

精一郎は娘を縛り上げようとしている代吉の帯に指をかけ、軽く引き上げた。どこか沢蟹のような角ばった身体つきの代吉は、わっとわめいて、庭の隅に積まれていた古材木のところまで吹っとんだ。

「なにしやがる！」

かろうじて古材木に顔を打ちつけられるのを免れた代吉は、肩を怒らせて振り返った。だがそこに立っているのが味方であるはずの若い侍だと知って、四角い顔を斜めに倒して本川老人を見た。

「おぬしが邪魔をして何とする。その娘は江戸へ連れて帰るのじゃ」

老人は腰を抜かしたように地べたに坐り込んでいたが、その表情は醜悪なまでに活力に溢れている。精一郎は娘の身体に巻きつけられた紐を解いて、老人に向き直った。

「私はあなたの助太刀を引き受けた訳ではありません。あなたが道場に置いていった四両の金子は、師範代の宮沢さんが預っています」

「なんじゃと。儂を裏切るというのか」

どす黒い色が老人の顔を覆った。小柄で一見好々爺に見える老人の身体の内には、腹黒いものが巣くっていたようだった。

「儂を裏切れば、おぬしの罪は軽減できなくなるぞ」

「膝折村での一件のことをいわれているのであれば、あなたの助けはお借りしません。後日、しかるべき所に届け出をします。喧嘩沙汰であの者達を打ち倒したのではありません。あの者達は盗っ人だったのです」

老人は目を吊り上げた。

「代吉、何をしている。菊が逃げるぞ」

怒鳴った老人の口の端から細かい泡がとんだ。娘は逃げたのではなく、脇腹を押さえたまま立ち上がれずにいる黒須のところに駆け寄ったのだ。

代吉は小刀を抜き放ち、頭上にかかげて二人に向って突進した。その目の周囲に血管が浮き上がり、蜥蜴でも潜んでいるような蠕動がある。

「待て」

精一郎は代吉の走りに合わせて横に跳んだ。武家に仕える中間が皆、真面目な者だとは限らない。渡り中間の中には博打に手を染め、そのために身を持ち崩し、無頼の仲間に入っていく者もかなりいると聞いている。この代吉という中間の身のこなしにも、一時はそんな連中と交った形跡があった。その荒んだ顔付きの中には、得体の知れない行状が隠されているように見えた。

「くらえ」

代吉が振り上げた小刀を、蹲っている黒須に向って振り下ろした。追いついた精一郎の木刀が、代吉の手首を下からすくい上げて打った。小刀が空中に飛んだ。

「痛え！　この小僧、殺してやる」

代吉はすさまじい形相で精一郎に摑みかかってきた。場数を踏んだ突っ込みだったが、精一郎はあわてずに膝を緩め、代吉がぶつかってくるのを待った。その少し酒臭い息が顔にかかるのを感じた時、精一郎は上体を落し様、代吉の股の間に木刀の柄を差し込んで軽く返した。代吉の身体は精一郎の上を跳び越えて、青い葉をつけた柿の木の根元に落ちた。ぎえっと代吉は呻いた。

「おまえは許さん」

精一郎は、あわてて起き上がろうとする代吉の前に佇み、その手首を取ってひねった。代吉の身体は今度は小さく後転して地面に尻餅をついた。

「いかに老人の命令とはいえ、娘を縛り上げるなど人のすることではない。しかも、あ

の娘とは同じ屋敷で働いていた者同士ではないのか」

代吉のやり方に、憎悪が含まれているのは明らかだった。この男は、娘にちょっかいを出そうとしてはねつけられたことがあったのではないか、という想像が精一郎の胸を掠めた。その腹いせのために肩口が丸見えになるまで着物を下ろし、紐で縛ったのであれば許し難い所業といえた。

代吉はキョトンとして坐り込んでいた。目が回っている。精一郎は代吉を打ち捨てて黒須の所まで戻り、腋の下に首を入れて黒須を抱き起こした。菊が反対側から黒須の腰を抱きかかえるようにした。

「わあ！　痛え、痛えよお、どうなってんだ。なんとかしてくれ、痛えよう」

中腰になった代吉が、右腕を押さえて泣きわめき出した。そちらに目を向けた黒須は、額から汗を噴き出しながら、何をしたのですか、と精一郎に訊いた。

「しばらく腕を使えないようにしただけです」

精一郎の答えを聞いて、黒須は口元を歪めた。笑おうとしたが、痛みのためにうまく唇が開いてくれないようだった。

「本川のいったことは、正しかった。生兵法は……怪我のもとだ」

かすれた声で、やっとそれだけを呟いた。

「いえ、中西道場に習われていたと聞いていたから、かろうじてかわせたのです。知らなければ私が倒されていました」

「何流……ですか」

「それは……」

実用流の名を出すことはできなかった。破門の二文字は重く肩にのしかかって消えることはなかった。菊は何もいわず、ただ思い詰めた様子で、唇をしっかりと閉じて二人の話を聞いていた。

戸口の前まで来たとき、おーい、と呼ぶ声が庭を横切って届いてきた。振り返ると宮沢助左がひょろりとした若い男を伴って、垣根の上から顔を覗かせて片腕を上げていた。

「男谷、その爺さんはくわせものだぞ。爺さんは旗本の田村市蔵に仕えていたと旅籠の者に洩らしたらしいが、田村は四百石取りとはいっても無役の捨て扶持だ。代官はおろか手代にさえ顔が利かない貧乏旗本だ。脅しに乗って人殺しの加勢などするでないぞ」

大声で言いながら宮沢は板戸を開けて入ってきた。少し遅かったなと思いながら、精一郎は内心安堵するものを感じていた。宮沢は粗雑そうだが他人への気配りは相当なもので、味方にすればたのもしいと感じさせる程の大らかさを宿していた。

「爺さん、この争いは私闘だ。どういう理由があるのか知らんが、このことが目付を通して若年寄にでも知れたら只では済まんのではないかな」

宮沢はやっとよろよろと立ち上った老人に向って胸を突き出した。老人は背中を丸め、

上目遣いに宮沢を睨み上げた。宮沢は老人の視線にも臆するふうはなく、ごく気楽な調子で言い放った。

「そこでこの喧嘩は儂が預かることにする。仲裁料には先程頂いた四両をあてる。本来なら迷惑料もほしいところだが、老人に免じて許してやるわ。さ、江戸に帰った帰った」

宮沢は老人の肩をぽんと叩いた。それだけで老人はよろけ、危うく両手を土につきそうになった。

「おいそこの中間。どこが痛いのか知らんが、そんなとこで唸ってないで、早くこの老人の伴をして出ていけ」

宮沢はそういうと、庭を横切って戸口の前で佇む三人の所までやってきた。

「宮沢助左と申す。よしなに」

そういって軽く頭を下げた宮沢は、娘を一瞥してから黒須喜三郎をしげしげと眺めた。黒須は立っているのもつらそうで、吐く息も絶え絶えになっている。精一郎としては早く黒須を横にしてやりたかった。

「男谷にやられたらしいな。だが、その程度で済んだのは幸運だったな。今朝、うちの道場で男谷と立ち合った二名の者は、いまだに意識不明、生死の間をさ迷っておる」

えっ、といったのは精一郎だった。宮沢は精一郎に温かい眼差しを向けた。

「そう驚くな。稽古中の怪我はつきものだ。しかも、試合は連中がたっての頼みとあってやったことだ。師範の留守に負傷者を二人も出したことは儂の不徳の致すところでな、従兄といっても道場主であるから儂は手をついてあやまらなければならん。しかし、これでいいのだ。うちの道場は近頃馴れ合っているところがあったのでな、活が必要だったのだ」

「しかし、生死が不明というのは……」

黒須の身体の重味を右肩に受けながら、精一郎は何程のこともないという顔をしている宮沢を見上げた。

「夜までには目を覚ます。気にするな」

そういってから宮沢は首を回していきなり怒鳴った。

「おい、新伍、その爺さんが領内から出て行くまで見張っているんだぞ。絶対に目を離すんじゃないぞ」

その声を背中で受けて、庭から出ていこうとしていた老人はびくりとして立ち止った。だが向き直って文句をいう度胸はなかったとみえて、仕方なく、そろそろと歩き出した。垣根の上から新伍と呼ばれた男が上体を伸ばして、了解というように腕を振ってみせた。

「あの方が宮沢さんのお隣に住む村下という方ですか」

「そうだ。よく覚えていたな。さ、中に入ろう。傷の手当てをしてやろう」

宮沢は手を広げて三人を促した。暗い土間に入った精一郎は、薄く目を閉じて仄暗い

灯りに目を慣らしてから瞳を開いた。

板の間に筵が敷かれ、中央のいろりに鍋が吊り下げられていた。その奥に一間あるようだった。黒須が呻いたので、精一郎は宮沢の助けを借りて、黒須の身体を慎重に板の間に下ろした。

五

痛みに耐えながら、これまでの経緯を語り終えた黒須喜三郎は、宮沢から、「もういい、休め」といわれると安心したように目を閉じた。三人は黒須の口から寝息が聞こえてくるまで黙ってその寝顔を見つめていた。痛み止めの薬が効いてきたので、黒須の顔からは苦悶の表情が消えていた。

宮沢の見たてでは、右脇腹の上にある肋骨の内三本が折れているということだった。内臓に腫れはあるが破れてはおらず、ふた月もすれば骨は自然にくっつくだろうということだった。それで少しほっとしたのだが、精一郎にはもう一つ気になることがあった。出来事の経緯を話したあとで、黒須が精一郎の姿をさぐり、頼みがあります、といって菊の名を出したことだ。

「菊が川越に来ていることは、菊の実家に知らせてあります。許しの書状が届き次第、菊を小川村まで送ってくれませんか」

要領を得ない話だったが、自分のしでかしたことでずっと気後れを感じていただけに、詳しいことを問いただすこともしないで、はいと精一郎は頷いていた。黒須の顔に安堵のいろが浮いたのはそのすぐ後だった。

「ま、だいたいのことは分ったが、これはやはりこのまま放っておいて済むことではなさそうだな」

宮沢は腕組みをして低く唸った。水を入れた木桶に手を入れて布を冷やしていた菊は、目を見張って宮沢を見つめ返した。暗い部屋の中で、障子を通して入ってきた弱い光が、菊の瞳に仄白く映った。

「菊、と申したな。田村市蔵の倅の才蔵という奴が、おまえに悪戯を働こうとしたのは、それが最初ではあるまい」

宮沢に訊かれて菊は顔を伏せた。それというのは、今度の駆け落ちとされた事件の発端となった出来事で、田村家の嫡男である十九歳の才蔵が、夜、寝ていた菊の部屋に侵入し、蒲団をはぐなりやにわに押さえつけてきたというものだった。口を押さえられ、寝巻も剝ぎ取られた菊は、夢中で襲ってきた男の指を噛んだ。

悲鳴を発したのは才蔵の方だった。菊は起き上って廊下に逃れようとしたが、才蔵に背後から摑まれ仰向けに引き倒された。そのとき障子がはずれ、掛け行灯が倒れた。火

はついていなかったが、物音と悲鳴を聞きつけて女中と下男が駆けつけてきた。黒須喜三郎が部屋に入ってきたのはその後だった。才蔵は下男と女中に向って出ていけと怒鳴っていた。彼等はおろおろと床に這いつくばるばかりだったという。

「無体なことをなされますな、といいますと、若殿は脇差を抜いていきなり斬りかかってきました。お酒を大分お召しになっていたことは、部屋の中がすでに酒臭くなっているので分かりましたが、まさか斬りつけてくるとは思いもよりませんでした。体をかわして腕を取り、なんとか押し止めようとしたのですが、怯えた菊が私の足にまとわりつき、思うように動けませんでした。揉み合う内に、若殿の脇差が、その右肩に刺さってしまったのです」

寝入る前に、黒須喜三郎はその時の状況をそう説明した。

才蔵が斬られたとわめき、屋敷内は騒然となった。その騒ぎの内に、覚悟を決めた黒須は、この屋敷にはもういたくない、と泣く菊を連れて出奔したのだった。初めに黒須の実家のある熊谷をめざしたが、追手がかかることを考えて、親戚と、かつて神道無念流の秋山要助の道場で稽古をしたことのある仲間が住む、川越に来ることに決めたのだという。

その仲間たちも、知らなかったとはいえ旗本の家人を傷つけてしまったことを大いに悩み、当分はこの家にも寄りつかず、姿を隠すことになったそうだ。それは黒須が提案したことだという。

「どうじゃ、菊。才蔵は以前にもそなたに狼藉を働いたのか」

宮沢は比較的やさしくいったつもりなのだろうが、菊の耳には尋問と聞こえたらしい。俯いたまま顔を上げようとしなかった。

「宮沢さん、そのことはもうよろしいのではないですか」

精一郎はそういって宮沢をたしなめた。菊が黙っているのは、過去にいじめられたことがあるからに違いなかった。宮沢は、む、と唸って組んでいた腕を解いた。

「それより宮沢さんは、才蔵の父上の田村市蔵という旗本をご存知なのですか」

先程、垣根の向こうから、田村は無役の貧之旗本だ、と宮沢がいっていたことを思い出して訊いた。江戸には五千騎の旗本がいる。その大ぜいの旗本の内の一人を、川越藩士である宮沢助左が知っていたのは意外だった。

「うむ。江戸での儂の囲碁仲間に、さる小藩で江戸留守居役を務めている者があってな。藩の名はいえんが小藩の上に、莫大な負債をかかえて苦しんでおった。この上無理な普請を仰せつかっては、藩財政は破綻するといつも嘆いていた。この者がある日、幕閣のさるご重役の用人と会うことができるようになった、と儂に伝えてきた。いうまでもなく、莫大な費用のかかる普請工事から逃れたいという腹づもりでな。まずは用人に顔をつないで、次にご重役に賄賂をという算段だったのだ。この段取りをしたのが田村市蔵

という四百石取りの旗本でな、重役の親戚筋に当たるというふれ込みだった。どうだ菊、そのような話を聞いたことがあるか」

宮沢は突然話を菊に振った。菊はあわてたように頭を横に振った。下働きの菊にそんな事情が分かるはずがなかった。

「ところがこれが大嘘でな。田村は別宅に妾を囲い、息子は放蕩三昧で家は火の車だった。そこで小藩の留守居役に一杯食わせて金をふんだくろうとしたのだ。その悪だくみは露見したが、かの御仁は哀れにも手付け金の二百両を盗られたそうだ。もし田村に重役の親戚筋がいたら、他人の世話などせず、まず自分が番入りを果たしておるわ。まったく、毎日ぶらぶらしながら四百石もの知行を得る旗本は暢気でいいわい。儂ら藩士からいわせれば、無役の旗本などこの世に無用の輩だ。こういう連中に限ってわるさをし、ぶくぶく太る。いざ事が起ったら、一番先に江戸から逃げ出すのもこういう旗本連中さ」

「いざことといわれますと？」

「たとえば、おろしやが江戸に攻めてくるということさ。蝦夷だけでなく、越前、越後の海岸でもおろしやの船はもめ事を起こしておるというぞ。おらんだやえげれすより、背後の白熊の方が余程不気味じゃ。平山先生の危惧された通りのことが、現実に起ってきておるからな」

平山子龍先生の名が出て、精一郎は下斗米秀之進のことを思い出した。宮沢を紹介してくれたのは下斗米だが、二人の生き方は、これから右と左に、大きく変っていくのだろう。いや下斗米だけが日本を背負って突き進む。その悲壮な姿を思い描くと、胸の中は痛みで苦しくなった。

菊が立ち上って板の間を通って土間に降りていった。その後ろ姿を見送ってから、宮沢は横になっている黒須を挟んで坐っている精一郎に、「妙なことに」といって再び口を開いた。

「田村の倅の才蔵は、御側御用取次の目にとまったらしい。余程のバカ息子のはずだのに、これは縁故が働いたせいだな」

「何のお話ですか？」

「先程黒須がいっておったろう、若殿の才蔵様には、欠員の出た御小納戸役にお召しの声がかかっているようだとな。つまり、候補者の一人に名があげられているのだろうよ」

「無役の旗本の嫡男が、いきなり御小納戸役に推挙されるのですか？」

精一郎はちょっと意外な思いに打たれて訊いた。御小納戸役といえば将軍様のおそばに仕える者であったはずだ。将軍様は朝食を摂りながら髪を結い、月代をすませるというが、その役目が御小納戸役の仕事であると聞いていた。名誉だが神経を遣う仕事に違いない。およそ八十名程がいるという。

「推薦されるのは一人ではない。ま、少なくとも四、五人はおろう。それにしてもそういう話がくるとは、田村のいったこともまんざらでたらめではなかったということだな」

「といわれますと？」

「幕閣のご重役に親戚はおらずとも、ナントカ奉行あたりに伝手があったのかもしれんな。いや、そういえば儂の碁友である留守居役は、田村の妻女がなかなかの家柄であると口にしていたな。そのバカ息子に奥吟味の話が持ち上ったのは、母君の線からに違いない。そうか、読めたぞ」

宮沢は広げた掌に結んだ拳をぶつけた。ぽん、と心地良い音がした。茶をいれて運んできた菊が何事かと目を見張った。菊は庭で本川老人に向っていったときとはうって変って、おとなしくて素直な少女に戻っている。

「田村めが、黒須と菊との一件に関して、神経をいらだたせておるのは、お家の体面のためだけではないぞ。息子の下女への狼藉ぶりが表立ったら、このたびの御小納戸役への推挙がご破算になるばかりか、親父同様、一生うだつの上がらない無役で終ってしまうことにもなりかねんからなのだ。それで黒須を口封じに殺し、あわよくば菊を連れ戻して飼い殺しにするか、才蔵の妾にでもする腹づもりだったのだろう。隠居した老人を追手に寄こしたのは、大人数で追っては騒ぎが大きくなるだけだと踏んだからだ。くそ、それにしても四両というのは人を馬鹿にした話ではないか」

宮沢は湯呑みを摑み、大口を開いて茶を飲んだ。

「うまいな。どこの茶だ」

「狭山茶だと聞いております」

「ふん。儂の家の番茶より数段上等じゃな」

そう呟いてから宮沢は思い直したように菊を眺めた。

「おぬし、田村の屋敷に奉公して何年になる？」

「二年半になります」

「生まれは江戸か？」

「いえ、小川村です」

「そうか、そういえばこの者がそんなことを申しておったな。家業は何をしておる？」

「養蚕をしております」

「小川村でか。紙ではなくてか。ふむ、それで、小川の家からすぐに田村のところに奉公に上ったのか」

「いえ……」

「その前にどこか奉公に上ったのか」

「はい……。いえ、奉公というのではなく……」

「では何だ」

宮沢はギョロリと目を剝いて菊を睨んだ。本人にそのつもりはなくても、まるで罪人に対する尋問のような口調である。それに宮沢の質問の意図がどこにあるのか分かりにくい。菊は俯いてもじもじとしている。答えを拒んでいるのではないにしろ、答えにくそうなのは確かだった。

宮沢さん、と精一郎は声をかけた。宮沢は質問を邪魔されたせいか、少しむっとした様子で精一郎を見返した。

「先程、このままでは済まないと申されましたが、どのようにすればよいか、何かお考えがありますか」

「それだ」

宮沢は膝を叩いた。その悠然とした体格は、他者を安心させるのどかさを含んでいる。

「田村家としてもこのまま捨ておく訳にはいかんだろう。バカ君の肩の傷がどの程度か分からんが、それだからといって表沙汰にすることもできん。しかし、黒須や菊の口からこの一件が世間に流布されるのも困る。そこで儂が仲裁に入る」

「はあ」

またですか、という言葉を精一郎はかろうじて呑み込んだ。この方は大胆でたのもしいし大変よい人なのだが、どこか早計なところがあるのではないかと気を揉んだ。

「まず明日にでも、黒須にことの経緯をこと細かに書かせる。それも同じものを二通作成する。一通は儂が預かり、もう一通は当主の田村市蔵に届ける。そこには儂の添え状も入れる。添え状にはこう書く。『過日の一件、黒須、菊両名とも口外することなし。貴家を致仕した両名は今後一切貴家と係りを持つものではない。才蔵殿も両名を恨みに思うことなく、御小納戸役奥吟味に専念されたし。もし貴家が両名をさらに追捕(ついぶ)されるならば、当方で預かりし同じ文面の書状を、若年寄殿に届け出る所存である』とな。どうじゃ、これで田村はぐうの音も出んじゃろ」

「はあ、そうですね」

「何じゃ。儂の名裁きに不満を洩らすのか」

「いえ、そのようなことはありません。なかなか名案だと感心しております」

精一郎は冷や汗をかく思いでいった。本当は、それは少し子供っぽすぎる作戦ではないかと思っていたのだ。精一郎はこの際、全てを公けにした方が後々のためによいのではと考えていたのだったが、それは口にしないことにした。

「ふあーっ、なんか、儂は疲れた。今日はひとまず帰る。おい、男谷殿、貴殿は今夜はここに泊ってやれ」

宮沢は立ち上って伸びをしながらあっさりといった。えっ、と精一郎はいって口を半開きにした。宮沢のいうことにはいちいち驚かされると思った。

「この娘も一人では何かと心細いだろ。それにおぬしにはこの娘を実家に送り届けると

いう役目があるのだろう。明日にでもさっそく発つとよい。旅籠には儂の方から連絡しておく。そうだ。新伍をつかわそう」

「待って下さい」

精一郎は片膝を立てた。

「送り届けるといっても、私には事情がつかめません」

「今晩一晩かけてゆっくりと聞くがいいさ。では、さらばだ」

宮沢助左は刀を差すと、片腕を上げて土間に降りた。それからファーッと大きなあくびを一つしてから、にっ、と笑って家の外に出ていった。

「や、困った人だ。私にここに泊まれなどと途方もないことをいって。あなたに迷惑がかかる」

精一郎は耳を掻きながらそういった。両膝に手を置いて俯いた娘は、何かを決心したようにきっとして顔を上げた。その黒眼が森に潜む小鳩のように鋭く光っている。

「お願いです。ここに泊って下さい。お食事は私がお作りします。ご迷惑でしょうが、お願いします」

娘は頭を下げた。それから、そのままじっとして精一郎の返事を待っていた。答える代りに精一郎は重い溜息をついた。娘の顔の白さが目に染みていた。胸の内側が重く感じられた。その時精一郎は庭先で見た娘の細い背中を思い出していた。

第七章 報復

一

翌朝、精一郎はいつものように暗い内に起きて水浴びをし、身体を拭って外に出た。刺してくる春の空気が心地よかった。息を深く吸い、丹田に溜め、球体になるのを感じると、そっと口から吐き出す。それを汗が噴き出してくるまで繰り返す。空にはまだ星が輝いていたが、その星の放つささやかな光さえも、体内に取り込めば、やがて大きな熱をもった球体に変貌する。空の深い処から鋭く伸びてくる透明な霊気があり、それをいったん自分の身体で吸収し、足の裏から大地の内側へと流してやる。次に大地の底から熱風を体内に吸い上げる。その微細な力が指先のすみずみまで行き渡るのを感じると、そっと体外に吐き出す。

精一郎は空の奥に潜む精霊と、大地の底深くで熱している力を、自分の身体を通して

交信させるのが好きだった。武士でもなく、人でもなく、木々や風などでもない、何かもっと別の透明で意志を持った創造物に変身していくように感じられるからだ。ただ、そのことは誰にもいったことがなかった。隠しているのではなく、そんなとらえどころのない話を聞く者はいないだろうと、遠慮する思いが働いている。

新河岸川の堤に出て一刻半（三時間）。素振りと居合い、河原に埋っていた大石を掘り起こし、それを持ち上げての素溜めを念入りにやった。敵を思い描いての打ち込みは、昨日の宮沢の道場での形の乱れを反省しながら直した。他流の者との立ち合いの後は、知らずに形にずれが生じていた。

低地から上ってくると、朝靄の中で鍬を振るう農民の姿が、遠くの畑の底に黒く動いているのが見えた。畑を隔てた一番町の足軽長屋からは、もう煙を立ち上らせているところもある。

井戸で身体を洗っていると、腹の虫がぐうと鳴いた。昨夜の菊の、つましいが温かい料理を思い出すと、さらに口腔に唾が湧き上ってきた。甘く煮た川魚は骨を取り除いてあって食べやすく、竹の子もうまかった。たんぽぽを口に入れたのも初めてではないかと思った。

黒須喜三郎も暗くなっていったん目を覚まし、精一郎が泊まることを知って感謝の意を表したが、粥を少し食べただけでまた眠ってしまったので、精一郎は菊と二人だけで

過ごしている感じになった。夜は永かったが、結局菊は、何故実家のある小川村にすぐに戻ろうとはせず、川越に留ったのか、その事情については説明をしなかった。精一郎もあえて尋ねなかった。精一郎は旅籠から持ってきた『孫子』の第四巻目を、菊に背を向けて読んでいた。菊は夕食の片づけをすますと、ずっと繕い物をしていた。

稽古着から小袖に着換えて土間に行くと、菊が井戸から汲んだ水を大瓶に移していた。地味な着物の裾から覗いた足首が、そこだけ別の生き物のように生白く動くのが奇妙だった。菊は精一郎に気付いて丁寧に頭を下げた。

「今、何時ですか」

「六ツ半（午前七時）です。随分早くからお出掛けになられていたんですね」

そういって菊は少し笑った。白い歯が覗き瑞々しい気配が立った。

「代わりましょう」

「いえ、これは私の仕事ですから」

「あなたは火を熾せばよい」

精一郎は菊の手から桶を取って井戸に行き水を汲んだ。瓶まで運びながら、これは女にとっては重労働だなと思った。精一郎がすると三往復で大瓶は水で溢れた。

胸に汗が浮き、土間に入ってくる風が熱くなった肌に気持よかった。胸を拭っている

と暗い処にぼうっと佇んだ菊がこちらを見ていた。

「どうかしましたか？」

「い、いえ」

菊は火の前に坐って頭を火口に寄せた。菊の顔に火のいろが映った。

「ちょっと外を歩いてきます」

そういって黒須の家を出た。仙波の喜多院までは、北に向ってほぼ一本道である。歩き出すとほどなく鬱蒼とした森が見えてきた。境内に人の姿はないが、あらかたきれいに掃き清められている。どこからか石を掻く音が聞こえてくるのは、御宮の砂利を熊手でそろえているのだろう。

喜多院に祀られている慈恵大師は厄除大師として有名だった。それより近隣に聞こえているのは、ここは家康公とも縁の深かった天海僧正が第二十七世の法統を継いだことだろう。精一郎は寛永の大火のあとに再建されたという鐘楼門、慈眼堂、多宝塔などを見て回って、別当所の横手にある書院の前に立った。ここは家光公が江戸城紅葉山にあった別院を、大火のあとにそっくりそのまま移築したものだった。それで三代将軍が誕生した部屋が、遠く離れた川越の地にあるのだった。精一郎はしばらくの間目を閉じて、書院に向って手を合わせていた。将軍家に神の御加護があらんことを祈っていたのである。

戻る道で、地蔵菩薩や阿弥陀如来や羅漢などがごっそり固っている一帯を見つけ、何だろうと思って入ってみた。釈迦如来を中央の高座に置いた、様々な形をした羅漢の石仏は、それぞれ個性的で、俗世間の姿態をそのまま暗示しているものもある。老人とその孫らしい男の子が一つ一つ眺めては何事か呟き合っていた。出るとき、もう三百の仏様が鎮座しているのじゃが、まだまだいらっしゃるのだよ、という老人の声が耳に入り、なんだかひどく物悲しい気持になった。今、生きている人にとって、羅漢を彫ることは、後ろ向きに世の中を見ることになるのではないかと思った。

脇田村の馬庭念流の道場に着いたのはそれから四半刻後だった。昨日、宮沢が黒須の家を出たあとで、暗くなる前にと思って道場に来て、負傷させてしまった稲葉、安福の二人の按配はどうかと見舞ったのだが、出てきた男に「今、手当てを受けているところでござる」といわれ、その後は何を訊いても答えてもらえず、明日また見舞わせてもらいます、といって仕方なく戻ったのだった。体のいい門前払いで、その真意は決闘さながらに相手の喉を突き砕いた、精一郎に対する嫌悪があるのがはっきりと感じとれた。宮沢助左はあれでいいのだと気楽な調子でいっていたが、門弟たちの気持は敵意で染め上げられているようだった。

今も、道場にいる四人の門弟に負傷した二人の名を出して、見舞いたいのですが、といったものの、いい返事はしてもらえなかった。四人とも目に白っぽい貝をはめ込んだ

ように精一郎を見つめていた。宮沢の住む長屋の所在を尋ねると、四人は一様に後ろを向いてしまった。

精一郎は憂鬱な思いを抱いて黒須の家に戻った。庭に面した縁側に、黒須が出て脛毛の濃い足をぶらぶらとさせて、朝の光を心地良さそうに浴びていた。

「起き上って大丈夫ですか。痛みませんか」

一礼したあと、精一郎はそういって黒須の方に寄っていった。

「痛みますが、朝の風が気持いいもので、のそのそと這い出してきました」

黒須はそういって笑った。初めて見た時の気弱そうな様子に戻っていた。そういう黒須に何故か精一郎は親近感を覚えた。

「昨日は失礼しました。まだちゃんとお詫びを申し上げていなかったですね」

黒須は頭を下げてから、眩し気に精一郎を見上げた。私の方こそ、ご無礼を働きました、といって精一郎は黒須の傍に坐った。

「男谷さん、といわれましたよね」

「はい。男谷精一郎と申します」

「お若いのに大した腕前だな。相当な修業をされたでしょ。ね、どなたについて修業されたんですか。あっという間にやられてしまって、男谷さんの剣筋を見ることができなかったんですよ」

黒須は悪びれた様子もなく、むしろ朗らかにそういって訊いてきた。精一郎は答えることができずにいた。

「あ、飛脚だ。おーい、ここだ。私が黒須だ」

息を詰める思いで黙っていると、不意に黒須はそう大声をあげて、垣根の向こうを走っている人に向って手を振り上げた。気付いた飛脚が板戸を押して庭に入ってきた。

「菊の親父殿からですよ」

飛脚に小銭を与えた黒須は、その場で書状を開いた。書面は一枚きりで、文面も短かった。黒須はさっと見るなり、おい菊、と奥に向って声を張り上げた。水で濡らした手を、前掛けで拭いながら菊が土間から庭に走り出てきた。

「親父殿が家に戻っておいでといっておられる。さ、すぐに出立の用意をするんだ。あ、朝餉がまだだったか。朝餉をすませたらすぐ出立するんだ。男谷様が送って下さる。あ、そう約束して下さいましたよね、昨日」

黒須は妙にはしゃいだ様子でいって、精一郎の顔を覗き込んできた。昨日は侍だった人が、急に紺の前掛けの似合う商人になってしまったような印象がした。

「ええ、しました」

「小川村までは四里ほどです。急げば陽のある内につけますよ。一晩泊って戻ってこられるとよいでしょう」

「私はその先の栃谷まで参るのです」
「栃谷？　では、粥新田峠を越えて行かれるのですか？」
「そうです」
「しかし、何故栃谷なんかに……ああ、秩父札所一番の四万部寺に参られるのですね。あれ、菊、何をしているのだ。さっさと用意をするんだ」
黒須はまだ思案気に立っていた菊に向って声を荒らげた。菊は黒須を腫れぼったい目で見つめてから、身体を倒すようにして家の中に駆け込んでいった。
「あいつは急に家に帰りたくないと言いだしたんですよ。厳しい親父殿らしいが、といって田村のお殿様の手前ここに置いておく訳にはいかないし、どこかに奉公するにしても、いったんは小川村に戻った方がよいのです」
黒須はきっぱりとそういった。昨日までの黒須は身を挺して菊を護っていた。だが、今日の黒須はまるで子猫を打ち捨てるようなあっさりとした態度でいる。そのどちらが黒須喜三郎という人の本当の姿なのだろう、と思いながら、精一郎は春霞の浮いた睡た気な空を見上げていた。

志多町を過ぎ、東明寺橋を渡ると川越十ケ町の外に出て、五ケ村に入る。坂戸までの二里の道は畑と雑木林の中を走る平坦な一本道で、女の足でも二刻（四時間）で着ける。精一郎と菊が橋を渡って十町程いったところに固っている初めての雑木林にさしかかると、数間前を歩いていた行商人が足を止めて、暗い林の中に向けて目をこらした。その横顔に不安気な影が走るのを見て、精一郎は足を止めた。林の奥にただならない気配がこもっている。とっさにあたりを眺め回したが、菊を隠しておくような小屋など見当たらない。農具などを入れる納屋は、遥か彼方にあるだけだった。
菊は虚ろ気な顔で精一郎を見上げた。どうして立ち止ったのかとその顔は訊いていた。
「いいか、菊、よく聞くんだ。私が、行けといったら畑の中を走って、あの雑木林の中に逃げ込むのだ。それから機を見て街道に出て北に向かい、一番初めに見えた民家に飛び込むのだ。分ったか」
「で、でも、なぜ……」
そういいかけた菊の目に、鳥のような影が映った。黒い小袖と野袴をつけた一団の影だった。その目は大きく見開かれて、突如現われた恐怖を目のあたりにして可哀そうな程に震えた。
「違う。この者たちはおまえの追手ではない」
雑木林から出てきた男達の数は十人を超えた。その手に、ある者は長尺の木刀を携え、ある者は棒を持っている。その半分の者の顔に見覚えがあった。馬庭念流の道場にいた者たちだった。立ちすくむ旅の行商人がいるのも構わずに、男達は殺意を剝き出しにし

てじりじりと寄ってきた。そこには武士としての名誉など全く感じられなかった。

「な、なんですか、この方たちは……何で、こんな……」

報復だ、と精一郎はいった。だが口には出さず、胸の内で呟いただけだった。

二

男達は無言で二人を取り囲んだ。怯えきった菊は、精一郎の背中に取りすがって身を縮めている。その指先が羽織の袖を摑み、震えていることも精一郎には感じ取れている。

――菊を乱闘に巻き込む訳にはいかない。

菊を逃がす隙を見出せずにいたことで、自身に対して断罪する気持が湧き上ってきている。だが血走った目でにじり寄ってくる男達に対しては、恐怖も焦燥感も生じていない。

――ここで討死するしかない。

街道に、股立ちを取り、それぞれ手に物々しく得物を携えた男達の姿が現われるのを目にとめた時から、その覚悟が腹の底にゆったりと立ち昇ってきた。

彼等の内の何名かが、沢蟹の様に腰を落して二人の背後に回り、退路を閉ざすのを察知した時も、その手にしたものがケラ首と呼ばれる稽古槍だけでなく、実戦に使う棍も掲げられているのを見ていた。棍は頭蓋骨を粉砕させる。

「男谷か」

中央に佇んだ長身の侍が、上から精一郎を見下ろして肩を聳やかした。尖った鼻を持ち、頬骨が迫り出したその男は、鳥のような風貌をしていた。

「小川村に向ったと聞いて待っていた。この者達がおぬしを生きて領外に出すなといい立っておる。理不尽なことだと承知しておるが、儂の腹の虫も納まらぬ。昨夜、江戸より戻って事情を知った。儂は稲葉与五郎。おぬしに討たれた連八郎の兄だ」

与五郎は半歩近づいて、威圧するように細長い目に力を込めて精一郎を睨みつけた。精一郎はその眼力を柔らかく受けて、いったん緩く巻き込んでから一気に押し返した。与五郎は二、三度瞬きをくり返した。

「道場での試合は防具をつけて立ち合った正当なものです。宮沢さんに審判をして頂きました。このような待ち伏せを受けるいわれはありません」

精一郎の言葉に、左右の者が熱り立って木刀の切っ先を上げた。精一郎はそちらには構わずに与五郎を凝視し続けた。

「分っておる。だから理不尽と申しておる」

「お見舞いにも参りましたが、会わせてはもらえませんでした」

「敵の見舞いなど受けん。しゃらくさいことを申すな。弟は、連八郎はまだ意識が戻ら

ん。喉が潰れて息ができぬのだ。奴は死んだも同然だ」

与五郎は精一郎の視線をはずして顎を振った。斜め後ろにいた男が「こっちにこい」と剣呑な目でいった。その男が歩き出すと、取り囲んでいた男達が、足元から土埃を立ててざわざわと動き出した。輪は楕円形になって、街道から雑木林の方に移動しだした。行商人や旅の者たちが、何事だというように、肩を竦めて横目で見ている。精一郎の背中に、菊の手が当った。石に蹴つまずいたようだった。

「お待ち下さい」

精一郎は旅人達の耳に届くように声を放った。振り向いた与五郎は半身で身構えた。

「この女は小川村に住む親の許に帰る途中です。私とは無関係です。放免してやって下さい」

与五郎は片方の目尻を上げた。精一郎の背後に隠れている菊を一瞥すると、横にいる男に向って頷いた。男は面倒臭そうに歩み寄ると、精一郎の羽織に顔を埋めている菊を無造作に覗き込み、「なんだ、百姓の小娘か」といって肩を摑んだ。菊は悲鳴をあげた。

「おい平助、いいから放してやれ」

与五郎がそういうと、平助と呼ばれた男は舌打ちして菊を突きとばした。

「女連れで武者修行とは、江戸者は気楽でよいな」

平助はそういって口の端を歪めた。精一郎は何もいわずに、奥目で顎の張った平助の

顔を見返した。この男は、昨日の稽古時にはいなかったが、今朝、負傷した二人を見舞うつもりで道場を訪れたとき、精一郎を冷たい目で見ていた四人の内の一人だった。

平助は左手に持った木刀の柄頭で、精一郎の脇腹を突き上げた。痛みはなかったが、平助の腹の底にある悪意は充分に感じられた。菊は道端に弾き出されると、手にした風呂敷包みを落しそうになって片膝をついた。その横顔は青白く沈んでいた。

――可哀そうなことをした。

何も分からないまま、十数人の侍に取り囲まれた菊は、さぞ肝を潰したことだろう。男達に囲まれて雑木林に入ると、笹の葉が足元から可憐な音をたてて鳴りだした。

与五郎が立ち止って向き直ると、男達は改めて精一郎を取り囲んだ。そのあたりは雑木林に続いた平地で、かつては何かの祭礼が行われていたのか、黒い土が踏み固められている。古びた阿弥陀堂が熊笹に脚を埋めて、ポツンと所在なげに建っていた。

「若い者はおぬしを生かして領外に出すなといったが、これだけの人数で一度に襲えば、それは闇討ちと同じだ。外に聞こえれば道場の不名誉となる。だが、このままおぬしに立ち去られるのはもっとよくない。川越の『練武館』は腰抜けぞろいだと、方々で吹聴されては名折れだからな」

与五郎はそこでいったん口を閉じ、三歩前に進み出て腰を落すとやにわに真剣を抜き

放った。切っ先は精一郎の三寸先の空気を裂き、風の鳴き声に似た音をたてた。

精一郎は微動することなく与五郎を見据えた。その居合いは精一郎の知っている念流の剣筋とは異なり、光の中を飛ぶ白い小鳥のような軽みを含んでいた。念阿弥慈恩が興した念流は古流の剣術で、諸国を旅した慈恩は多くの弟子を残し、様々な流派を生んだが、その中でも馬庭念流は戦さを想定した甲冑剣術を伝承していると聞いていた。それだけ気合いもすさまじく、打ち込みも激しいのが特徴だった。だが、前日稽古で立ち合った二人からは、体内に充満する血気の薄さを感じたものだったが、みんなを束ねているらしい与五郎にも、甲冑の上から敵の骨を断つという気概は響いてこなかった。その剣さばきは、よくいえば流麗だが、別の見方をすればこけおどしじみているともいえた。

――こういう打ち込みは、以前浅草奥山で見た大道芸人の居合いと似ている。

精一郎はそう思って、刀を鞘に納めた与五郎を眺めていた。

「おぬしをこの刀で、かように斬り殺したいというのが儂の本音だ」

与五郎は剣筋を見定められたことにも気付かないようで、唇を鳥の嘴のように突き立てて精一郎を憎々し気に睨んだ。

「弟の連八郎は『練武館』では五指に入る遣い手だったのだ。その腕を見込まれてさる家から婿入りの要請も来ておったのだ。だが甘く見た貴様の一撃にやられて、全てはご破算になったわ。これで連八郎は、徒横目格四十石の冷や飯食いで一生を過ごすことになったのじゃ。怨むぞ」

与五郎は精一郎の目を視線で強く押さえてから周囲を見渡した。

「ここにいる者もおぬしを怨んでおる。『練武館』名物の掛り稽古でおぬしへの怨みを晴らしたいといきり立っておる。さ、背中の荷を下ろして木刀を取れ」

そういってから与五郎は不敵な笑みを浮かべた。削げ落ちた頬に細い翳が走った。精一郎はいわれた通り胸の前の結びを解いて荷を下ろし、羽織を脱いだ。着ている小袖は稽古着のように袖が細く、短めに縫われている。それもかつての師平山子龍から、常に戦場にあると思え、用意を怠るな、という心得を叩き込まれたおかげだった。いま、精一郎を取り囲んでいる男たちのほとんどが襷がけをしているが、精一郎にはその必要がなかった。

木刀袋を懐に入れて立ち上がると同時に、背後から鋭い気合いが発せられた。精一郎は半歩身体を前に送り、振り返りざま木刀を斬り上げた。

「ぐえっ！」

叫び声と同時に骨の鳴る乾いた音が響いた。木刀の切っ先は先陣をきって突っ込んできた男の顎を打ち砕いた。

次に右から気合いが放たれ槍が突き出された。精一郎は撥ね上げずに槍の下をかいく

ぐって男の下腹に木刀を突き立てた。男は尻餅をつき、呆けたようになって口から液体を吐いた。

さらに斜め左から殺気が殺到してきた。その熱い勢いを胆力で押し返し、精一郎は身体もろとも敵の胸に打ち込んだ。胸に木刀を突き立てられた痩せた男は二間後方にふっとび、そのまま動かなくなった。

男が気絶したのかどうか確かめる間もなく、前と左横から木刀がくり出された。精一郎は左から来た男の右の腹に木刀を叩き込むと、返す勢いで、前から来た男の肩を打ち砕いた。男は両目を剝き出しにして絶叫をあげ、左膝を折った。

その時、一瞬攻撃がやんだ。じわじわと間合いを詰めてくる者が前と後ろ、そして右斜め後方にいたが、互いに牽制して自ら先に跳び込んでこようとしない。

円陣の中に一人置かれての掛り稽古は、兵原草廬の演武場でもよく行われた。打ち込んでくる者は三尺九寸の竹刀を手にしていたが、受けに立たされた者にはわずか一尺三寸の長さの竹刀しか持たされなかった。その長さでは、悠々と伸びてくる長い竹刀をとても防ぐことはできず、円陣の中に一人立たされた者は、打ち込んでくる相手の胸元に向って、遮二無二突っ込んでいくしかない。それは決死の覚悟がなくてはできないことで、その精神を創り上げるのが平山子龍の教えでもあった。

入門当時の精一郎は、それまで一刀流の道場で二年間稽古をしていたといっても、それは型剣術に近いもので、演武場での円陣攻めにはとても役に立たず、わっと打ち込んでくる先輩達に、なすすべもなく打ちすえられていた。

だが、敵の竹刀に打たれる前に、敵の懐深くに跳び込み、その胸板を突き刺すのだという師の教えが身についてくると、不思議に敵の姿がよく見えるようになってきた。打って来る者も、呼吸を合わせて同時に打ち込むということが出来ず、その攻撃の順には微妙なズレがある。一対十五、などというとき、迎えて打ち返す方は忙しいことは忙しいが、落ちついて敵を見据えていれば、次にどこが打ってくるということも察知でき、結果的には一対一と同じ稽古になっているのだ。三年たって精一郎は師から「男谷は若いが一刀必殺の呼吸をつかんだようだな」と皆の前でいわれ、冷や汗をかいた。その冷や汗は、師から誉められたあとで妻木弁之進から「おれにもその極意を教えてくれ」といじめられ、一歳年下の細井萱次郎からは「尊敬します」と熱っぽい目を向けていわれたとき、本物の汗になって胸を流れ落ちたものだった。

「何をしておる。臆するな。打ち込め！」

稲葉与五郎の怒声が林の中の広場に響き渡った。精一郎は動かずに、周囲の気配を窺っていた。足元では、右肩を押さえてのたうちまわっている男の呻き声がしていたが、少しずつ間を詰めてくる殺気を消すものではなかった。

いったん鎮まった気合いが発せられたのは、精一郎の正面にいる平助と呼ばれた男か

らだった。平助は足を前後に広く撞木に踏んで、木刀を下段に構えていた。だが、実際に打ち込んできたのは、精一郎の真後ろにいた男だった。大柄で肩幅の広いその男は昨日、道場にいた男で、精一郎は街道で行く手を阻まれた時から、その男の目に宿る、すさまじい憎悪の光に気付いていた。

上段から真っすぐに打ち下ろしてきたその剣は、振り向いた精一郎の頭上に殺意を乗せて落ちてきた。精一郎は下がらずに踏み込んだが、木刀は浅く敵の脇腹を打っただけだった。体が入れ替わり、男はもう一度渾身の力をこめて打ち下ろしてきた。怒りに満ちたすさまじい形相が目に映った。精一郎はその顔を見据えながら、木刀を敵の背中に貫かんばかりにぶつけた。肉を深く突き刺した手応えがあった。

男が呻いて身体を前に二つに折ると、今にも打ちかかってこようとする平助の顔と目が合った。精一郎は流れた腰を立て直して正眼に構えた。その刹那、右の脛に焼け火箸を押しつけられたような痛みが走った。

目の下に白い光が走った。見ると肩を砕かれて呻いていた男が、右手に抜いた刀を持って、地面に這いつくばっていた。男はもう一度攻撃を加えようと、必死で刀を横に戻した。精一郎は後ろに跳んだ。跳びざま、その男の脳天を打ちすえるべきか躊躇った。打てば、男は間違いなく死んでしまう。

精一郎はその男を打ち捨てて、横からとび込んできた木刀に合わせた。初めて木刀の音が高く鳴った。二ノ太刀でその男の胴を打ったが、右足の抑えがきかず、腰が沈みきらずに中途半端に浮いた。

その隙を見逃さずに平助が打ちかかってきた。受けるのが精一杯で打ち返すことができなかった。平助は崩れかかった精一郎を見て、上から力まかせに木刀で押し潰してきた。身体をひねって精一郎は平助の脇を擦り抜けた。息を整え、構えを作って平助と対峙したとき、背中に痛みが走った。その鋭利な刃は、木刀を持つ精一郎の右手の指先を、瞬時に痺れさせた。

――手裏剣を撃たれた。

右手が木刀から離れ、切っ先が地面に向ってゆっくりと下っていくのを意識しながら、精一郎はそう思っていた。手裏剣は急所を刺していた。

「わあ」

「どりゃ」

左右から怒声と掛け声が上がり、男たちが殺到してきた。初めに肩を打たれ、次に太股を突かれた。転倒した精一郎は、土の上を横転して打ち込まれる木刀をかわしたが、腰に重い一撃を受けるともう動けなくなった。その精一郎の頭を殴り、蹴った者がいた。

遠のいていく意識の隅で女の叫び声が聞こえた。菊だなと思ったが、かすかに脳裏に浮き上ってきたのは、母親らしい女の面影だった。

三

「卑怯者らめ。倒れた者に寄ってたかって打ち据えおって。それが川越藩松平家の家臣の剣術作法というものなのか」

重い足音が耳元でして、精一郎は薄目を開いた。意識はまだ、完全には跡切れていなかった。

「相手は一人。それもまだ少年ではないか」

薄日を乗せた青っぽい空に、人の影が映っていた。その影が沈んで、顔のそばに土埃に混った男の臭気が漂うと、骨太い指が精一郎の頸に触れた。

「脈が弱っておる。おぬしらどのような遺恨があって、かような狼藉を働いたのだ。しかも背後から手裏剣を撃ちおって、武士のなす所業ではない」

精一郎の上半身は力強い手によって抱え起こされた。

「血止めを」

そういって男は刺さっていた手裏剣を抜いたのだろう。脳の奥まで重い痛みが響き、それで精一郎は意識を鮮明に戻すことができた。

「訳を承ろう。ことと次第によっては儂らがお相手つかまつろうぞ」

男は旅の姿をした侍だった。左脇に脱いだ笠を持って無造作に佇むと、取り囲んだ者たちをじっくりと見回した。

「こちらへ」

旅の侍の連れらしい男が二人、左右から精一郎の腕をとって、比較的太い幹の陰まで運んだ。二人とも道中合羽をつけていた。武士ではなかったが町の者にも見えなかった。一人が精一郎の上半身を素早く裸にすると、もう一人が口に含んだ焼酎を背中に吹きつけた。再び焼け火箸を突っ込まれたような痛みが襲ってきた。

「おい。足も斬られているようだ。看てやれ」

旅の侍は、精一郎が洩らした小さな呻き声を聞きつけたらしく、悠然と振り向いてそういった。日焼けした丸顔の中に、黒々と艶光りした目があった。中肉中背でどちらかといえば小太りだったが、その身体から発せられる気配には、精一郎がこれまでに出会ったことのない、獣じみた凄味があった。

ははあ、と侍はいって稲葉与五郎の前に足を踏み出した。それだけで与五郎は半歩引いて身構えるようにした。

「おぬしの顔には見覚えがあるぞ。『練武館』の片隅で震えておったな。たしか、二年前のことだ。すると、これは意趣返しか。あのときも、儂が何人かに稽古をつけて帰ろうとすると、ただならぬ殺気が道場から漂ってきたからの」

侍は精一郎を見返した。少しの間何もいわずに顔を向けていた侍は、ぶ厚い唇を斜め上に歪めて笑った。頬肉が奇妙な盛り上がりをみせた。

「おぬしら、あの若者に手もなくひねられたと見えるな。それで待ち伏せして大ぜいで襲った訳か。十四人か。随分と臆病者をそろえたものだ」

「黙れ。おぬしの差し出口は聞かぬ。とっとと立ち去れ」

「そうはいかぬ。儂はこういうことにはつい首を突っ込みたくなる性分でな。それに助太刀は儂の家業でもある」

「ふ、ふざけたことをぬかしおって……」

与五郎は差している刀の柄に手をかけた。鯉口を切ったようでもあった。すると侍は腹を突き出すようにしてすたすたと歩き出し、一間の間合いに入るところで何気ないように立ち止った。与五郎は腰を落した。周囲にざわめいた緊張が走った。

「ほほう。居合いか。二年の内に少しは腕が上ったか。面白い、見せてもらおう」

侍は心持ち右足を開いた。だが構えに身を入れたふうでもなく、相手の動きを見物するといった気楽さを宿している。事実、侍は与五郎の傍で木刀を正眼に構えている平助や、横で棍を立てている若い者にもチラリと目を向け、白刃を手にして、砕かれた肩を押さえて喘いでいる男には頭を回してそちらを見た。

精一郎の右足の傷に、さらしを巻いていた侍の連れの男は、そのとき手を止めて互いの間合いの中にいる二人を凝視した。身体中から立ち上ってくる痛みに苛まれながら、精一郎は侍の背中をじっと見つめた。

侍の顔が与五郎の方に戻されようとしたとき、与五郎の右肘がそよ風に当てられたような震えをみせた。つづいて右半身に振動が走ったのは、抜き打ちをするつもりだったからなのだろう。

だが与五郎の剣は抜かれることはなかった。侍がとっさに左脇に持っていた笠で与五郎の手首を押さえ、動きの止った与五郎の後ろに回って小刀を抜き放ったのだ。

それは精一郎がぐったりと腰を下ろしている場所からは死角になっていた。精一郎の目に映ったのは、与五郎の頭上に切っ先が一閃し、その流れる光は、隙をついて打ち込んできた平助の木刀にからみついたことだけだった。

だがそれで充分だった。こなれ過ぎていることを除けば、侍は紛れもなく一流の剣士だった。

「わっ」

平助は派手な声をあげて、鍔元から断ち斬られた木刀を見た。彼の手にあるのは柄だけだった。

「い、稲葉殿。そ、その髷は……」

驚きからさめた平助は、茫然として与五郎を眺めた。足元に斬り落された髷が転がっ

ていたが、誰もそれに手を出す者はいなかった。他の者は一様に浮き足立ち、動揺していた。林の中からことの成り行きを見守っていた村人や通りすがりの旅人の間から、忍び笑いが洩れた。

「あっ、ああーっ！」

与五郎は頭に両手をやり、悲鳴をあげた。髷を斬り落されたと知った与五郎は、ガニ股になって二、三歩後ろによろけた。尖った顔がしなびた胡瓜のように青くなった。

「仮病でも使って、しばらく長屋に閉じ籠っておられるがよかろう。それとも思いきって士分を捨てて生臭坊主にでもなるかな」

侍はもう小刀を鞘に納めていた。小太りの身体からは想像もできない敏捷な身のこなしを目の当たりにして、精一郎は声も出せなくなっていた。

――この方は、人を斬ったことがある。それも、武士を斬っている。

そう思ったとき、幽鬼の形相になった与五郎がもう一度刀を抜いて侍に突きかかった。侍は身を半転させて笠で払った。及び腰になった与五郎はそのまま地面に突っぷした。あわてて上体だけ起こして右手で刀を取ると、細い目を精一杯に開いて叫んだ。

「おのれ秋山、生かしてこの場を立ち去らせはせんぞ」

その叫びは仲間の十三人に向けていわれた言葉のようであった。だが侍を遠巻きにした十三人の間に、春には似つかわしくない秋風が立ったような悄然とした騒きが起った。

「秋山？」

「秋山要助か」

「すると、あれが鬼秋山……」

精一郎の耳にそう囁く「練武館」道場の門弟たちの声が聞こえてきた。

――秋山……秋山要助。

聞いたことがあると思った。師の口からでなく、確かあれは巷の噂に耳ざとい妻木弁之進からではなかったのか。

「その腕、兄弟子の岡田十松を凌ぐといわれたこともある。神道無念流では傑出した剣士だ。じゃがな……」

そこまでいって妻木は口を閉ざし、腕を組んで気むずかし気に頭を揺すった。たしか細井萱次郎か兄弟子の大釜紋三郎が先を促したが、妻木はその後はごにょごにょと口を濁すのみで、胸に浮いたらしい不審の念は言葉にしていうことがなかった。

「相手をしたいというのなら、相手になってやる。ただし今度は手加減をせんぞ。手足の一本も斬られる覚悟でかかってこられることだ」

秋山、と呼ばれた剣客は足をそろえ、踵を支点にしてじわりと半回転して取り囲んだ男たちを睨みつけた。目にそれまでにない厳しい色合いが浮いていた。男たちは互いの

顔を見合わせて少しずつ後ずさりをした。

「おらぬようじゃな。では今日はひとまず引きあげる。いずれまた城下に立ち寄った折は、道場に挨拶に参る」

秋山はもう一度、一人ずつの顔を見覚えようとするかのように睨んだ。そこまで目をしっかりと開いて見つめていた精一郎は、急に頭の芯に空洞ができたようになり、血の逆流する不快感も生じて意識が遠くなった。身体は一寸刻みに全ての箇所から痛みを訴えてきていたが、その痛みも、精一郎を呼び起こす助けにはならなかった。

広い背中に背負われたときだけ、かげろうのように頼りなげな意識が近づいてきて、秋山たちの話し声が耳にそっと忍び込んできた。

「石原町の旅籠に運びますか。懇意にしている所もありますので」

「いや、城下に戻るのはまずい。火でもつけられたら旅籠にも迷惑がかかる」

「そこまでやりますか？」

「夜になって、酒が身体に入れば、火つけをしたくなる奴も出てくるだろう」

「ではどうしますか？」

「うむ、そうさな、坂戸で村役人をしている者が、三年程前、儂の許で少しばかり稽古をしていたことがある。剣術の方はさっぱりだったが気の良い男だった。忠兵衛といって親の代までは名主をしていたようだ。そいつの所まで運べば何とかなる」

「坂戸ですかい。二里近くありますぜ」

「だからどうした？　背負うのがいやか」

「いや、そうじゃありませんが、背中の傷がちとひどいようで、早いとこ医者に診せた方がいいと思いやしてね」

「そんなにひどいか」

「へえ、縫った方がいいようで」

「では川越の城下から医者を連れてくるほかはないな。どこか手頃な屋敷があったらひとまずそこに運び込もう。おい、伝六、てめえは少し遅れてついてきな。連中の誰かが、あとをつけてこねえか見張っているんだ」

「かしこまりました」

「ねえ秋山様、後からついてくるあの女の子はどうしますか？」

「連れというわけでもなさそうだが、儂に助けを求めてきたんだ、なんかしら訳ありなんだろ。この若いのに一緒について看病したいといったらそうさせてやれ」

「へえ。それにしても、こんなに小さな身体で、よくあれだけの人数を相手に戦ったもんですね。感心しますぜ」

「うむ。余程修業をしたのだろうな。それもそこいらにある竹刀剣術の道場で稽古をし

たものではないな」
「それはどういうことで」
「この若者は、打ち込んでくる者に対して身をかわしたり、木刀でかち上げて受けたりはしなかった。すなわち、右と見せて左を打つといった、江戸で大はやりのだまし剣法はやっとらんということだよ。生きるか死ぬか、一撃必殺の厳しい道場で鍛錬したのだろう」
「ありますか、そんな道場が、江戸に」
「ま、二百もある道場の内には、実戦さながらの稽古をさせる所もあるかもしれん」
「それにしても大したもんだ。身体も骨も細いが筋はまるで鉄のようですぜ。やっぱり、武士の子は違いますね」
「さよう。じゃが、この若者はまだ十五か十六。ふぬけた旗本奴の中では出色だ。いずれ名を成すに違いない」

四

背中の傷の縫合と脛の斬り傷の手当てを受けたあと、精一郎は痛みに揺り動かされながら、農家の一室で二昼夜眠った。時折目を覚ますことがあったが、細い指が額に手拭いをあて、胸に浮いた汗を拭うのに気付くばかりで、そのまますぐに眠りに入った。

はっきりと意識を取り戻したのは三日目の早暁のことで、外はまだ暗かった。傍に、ぼろ屑のようになった菊が眠っていた。板の間に筵を敷いただけの粗末な寝床に、木綿の布を一枚掛けて背中を丸めている姿は、まだほんの子供のようだった。

――菊が看病をしてくれていたのか。汗を拭ってくれたのも、菊だったのか。

水の入った木桶が枕元に置かれていた。打たれた処から熱が出て、身体全体に広がったのだろう。腰と肩の痛みが特にひどかった。精一郎は掛けていた羽織を菊の身体に被せて土間に降りた。そこに月の光が射し込んでいる。

片隅に置かれた木刀を手に取り、庭に出た。傷の具合を確かめるように、静かに木刀を振った。するといきなり背中の肉が引き攣った。西の空に沈みかけた月は、まだ充分に光を溜めていて、木刀を振り上げる精一郎の影を、固い土の上に木偶のように伸ばしてくる。

――自分のために、菊をこのような所に丸二日間も留めてしまった。

早く両親に会いたいだろうにと思いながら、右足をそっと上げた。

そこは腫れてまだ熱を持っていた。いつも素振りをしていたようには思いきって踏み込むことはできない。

――戦場で傷を負った場合は、穴倉に隠れ、傷が快癒するまで身を潜めておることだ。

いい気になって飛び出すな。犬死を望む者は武士ではない。天子様の役に立ってこその武士である。負傷者は足手まといなだけだ。

この言葉は、師に代って下斗米秀之進が講義をしてくれた時に話してくれたものだ。足手まといという言い方は、聞いていた塾生に少なからぬ衝撃を与えた。たとえ負傷しても、一太刀なりと敵に刃を浴びせたいとするのが、武士の使命というものではないのか、と皆、心中深く思っていたからである。

——しかし、負傷をした自分は、あの方達に大変な迷惑をかけてしまった。

秋山、と呼ばれたすさまじい気迫を腹の底にたたえた小太りの武芸者を思い浮かべて、精一郎は頭を垂れた。あのまま打ちのめされていたら、自分は死んでいたか不具者になっていたことだろうと思った。それに長い道のりを、自分を背負ってここまで運んでくれた人にも礼をいわなければならない。

その礼が、いくらいっても言い尽せないことだと知って、精一郎の胸に悔恨の念が浮いた。十数名を相手に大立ち回りなどをせずに、素早く逃げだしていれば、あの方達に世話をかけることもなかったのだと思い当ったからだ。それにこれから先、永い年月、精一郎は秋山という武芸者とその連れの二人に、負い目を背負って生きていくことになる。それもまた精一郎の気を重くさせていた。

東の空に赤味が滲み出てくると、薄い雲が山の嶺に横に長く浮いているのが目に映ってきた。ゆるやかに風が吹いてきて、農家のはずれにある雑木林の梢に音が立った。

精一郎は痛みの出処を探りながら、焦らず静かに木刀を振り続けた。もし下斗米さんの話を聞いていなかったら、自分は負傷しているにもかかわらず、討死覚悟で、あの稲葉与五郎という者に、果たし合いを申し込んでいたかも知れないと思った。

——そして、返り討ちに遭っていたことだろう。

街道を、馬を引いた農民がもう通っていく。人と馬の黒い影が、灰色の地平を背景に、水墨画を見るように滲み出てきている。夜の冷えた空気が少しずつ溶かされて、露となって貧し気な畑の土に立ち籠めてきている。足音を響かせて駆けてきた飛脚が、馬を引いた農民を追い越していった。すると、いつの間に陽が昇ったのか、街道には土煙が陽に染められて舞い上っていた。

その街道に、大柄な宮沢助左の姿が現われたのは一刻程あとだった。腰に差した大小の鍔に左手を当て、宮沢はドスドスと重い足音をたてて、麦畑の間を通って農家の庭に駆け込んできた。精一郎と菊は身じたくを終え、世話になった農家の夫婦に充分な謝礼をして、庭に出てきたところだった。

「おーい、男谷どのー」

宮沢はそう叫ぶと右手を高々と上げて振った。そのとたん宮沢の身体は地上から消えた。柔らかい土に足をとられて無様に倒れたのだ。宮沢は出仕姿だったが、土にまみれ

たことを気にするふうもなく、よたよたといった感じで二人の前にやってきた。
「今朝になって隣の倅の新伍が、急に思い出したようにおぬしがここにいることを伝えてきたのだ。儂は二日間捜したがつかめなかった。まるで街道から消えてしまったようだった。すまん、いや、なんとあやまったらよいのか儂には分からんが、とにかく大変に申し訳ないことをした。この通りだ」
宮沢は地べたに膝をつこうとした。精一郎はあわてて宮沢の手を取った。
「袴が汚れます。手を上げて下さい」
「襲撃に加わった者から逐一聞いた。いやその者は待ち伏せの仲間になる気などなかったのだが、稲葉の脅迫じみた誘いをどうしても断ることができなかったというのじゃ」
「分っています。あの中で本気で私を討とうとしていたのは四、五人です」
「まったく愚かな奴じゃ。師範が戻ってきたら破門にする。いや、もう道場とは係りのない奴なのだが、徒横目という仕事がらなかなかしつこい。しかし、髷を斬り落されたからには目付の耳にも当然入る。もう大手を振って城下を歩けぬわ。いや、まったく男谷殿には災難だったな。奴等が報復を企んでいようとは、儂はまったく気付かなんだ。儂の管理力不足だ。面目次第もない」
汗を顔や首からしたたり落しながら、宮沢は大きな目を剝いてしきりにあやまった。菊が荷の中から手拭いを取り出して宮沢に渡すと、むしるように取って顔をこすった。

手拭いの下から現われた顔は、猪のようだった。
「それで傷の方はどうなんだ。足と背中を刺されたと聞いたが」
「背中は縫ってもらいました。足の傷も歩く分には大丈夫のようです」
肩や腰、それに頭までも十数ヶ所打たれたことは黙っていた。折れていないのが不思議な程だった。
「そうか、医者に診せたか。何という医者だ」
「高見良庵という方だとさっき聞いたばかりです」
精一郎は菊を見た。菊はこっくりと頷いた。
「高見か。うん、あれは優秀な医者だ。城にも上っておる。高かったであろう」
宮沢は首を縮めて精一郎を覗き込んできた。宮沢は銭の話をしだすと顔付きがふやけた達磨のようになる。
「それが私を助けてくれた、武芸者の方が払って下さったようなのです」
精一郎の手は、自然にこめかみを掻くような仕種になった。
「おお、秋山要助殿か。偶然とはいえ、秋山殿が通りがかってこっちにとっても幸いした。もしおぬしを死なすような目に遭わせたら、道場閉鎖どころではすまなくなる。そうか。秋山殿が支払ってくれたか」
宮沢の目に汗が入り、涙ぐんだようになった。

「あのお方は強い。難剣だが強い。儂は二年前に立ち合ってあっという間に二本取られた。籠手を打たれて手首が腫れ上った。やはり場数を多く踏んでいる方は凄い。紺屋の小倅と悪口を叩く者もおるが、出はどうであれ強いものは強い」

そういって汗を拭いながら、宮沢はしきりに頷いた。

「宮沢さん、稲葉さんと安福さんの具合はどうなんですか」

精一郎は宮沢の姿を見て以来、ずっと気にかかっていたことをやっと訊くことができた。

「奴等は大丈夫だ。息を吹き返した。今度の一件を知って悔んでおった。稲葉連八郎は兄と違って律儀な男でな、もしまた川越に来られることがあったら、是非道場に立ち寄ってほしいと申しておった。立ち合いは勘弁だが、おぬしと色々と話をしたいそうだ」

「そうですか。……今度のことで連八郎さんの婿入りの話が、駄目になってしまうのでしょうか」

眉間に縦皺を寄せた精一郎を見て、宮沢は大声で笑い出した。

「あは、そんなことを悩んでおったのか。大丈夫だ、決して破談になることはない。相手は連八郎の人柄を見込んで申し込んできたのだ。それも閑職の御旗組二十八石だからな、遠慮しながら打診をしてきたのじゃ。連八郎が受けると聞いて、向こうでは大喜びじゃ」

あはは、と大口をあけてまたひとしきり笑ったあとで、宮沢は目の前にいる二人のいで立ちにやっと気付いたようだった。

「なんだ、おぬしらこれから出立するのか」

意外なものを目にしたというように猪首を傾げた。

「菊を実家に送り届ける約束をしたのに、私の看病のために二日間も遅らせてしまいました」

そうか、と頷いて宮沢は腕を組んだ。珍しく困惑した色合いが滲んでいる。精一郎も菊も、宮沢の次の言葉を待って黙っていた。

「菊といったかな。おまえが働いていた田村家のことはもう心配ない。黒須に書かせたこれまでの経緯を、もしもの場合には目付にも送りつけると、儂の添え状を入れて送っておいた。おまえのことは今後一切お構い無用ときつく書き添えておいた。もうどこの屋敷に奉公しようがおまえの勝手だぞ」

最後の方には、口元に笑みが浮かんでやさしい目で菊を包んでいた。

「ありがとうございます。ご恩は一生忘れません」

菊は胸の前に持った風呂敷包みを、きつく抱え直して宮沢に頭を下げた。

陽は家々の屋根の上に顔を現わしていた。街道を通る人の数も増えている。旅芸人らしい一座が朗らかな声をあげて、城下の方に向っていくのを、幾分物悲しい思いが湧き

上ってくるのを感じながら精一郎は眺めていた。町から村へ、村から城下へと人々に楽しみを与えに旅をする、芸人達の気儘さが羨しくなったのである。旗本の家に生まれた者は、本人が望もうが望むまいが、一生型にはまった、堅苦しい生活を送らなければならない。

「わざわざお見舞いに駆けつけてきて下さいまして、痛み入ります。そろそろ出立いたします」

精一郎は礼をした。儂も行かねば、といって宮沢も精一郎と共に街道まで並んで出た。精一郎は見送りに出てきた農家の夫婦に頭を下げ、再び宮沢に向き直って別れの言葉を述べた。頷いた宮沢は菊の方にちらりと視線を走らせると、ちょっと、といって精一郎を地蔵のある所まで引っぱった。

「あの黒須という田村家の若党のことだが……」

「はあ」

宮沢の顔に先程見せた困惑の色が滲んでいた。何を言いだすのかという、恐れに似たものが精一郎の胸にも浮いた。

「あいつには、江戸に出る前から言い交わした許嫁がいたようなのだ。おぬしが菊を連れて出立した日に、熊谷から女がやってきてかいがいしく黒須の世話をしだした。儂も会ったが、これが丸顔で胸の大きな、なかなかの器量良しでな。十九歳だといっておった」

宮沢の口元にはいつの間にかだらしのない笑みが浮いている。精一郎が憮然として見ていると、宮沢は咳払いをして厳粛な表情をとった。

「あんな娘がいたのでは、あの小娘が放り出されるのもあたり前じゃ。なにせ弾力が違うからのう。ともあれ、あの菊という小娘には、戻ってくる用事がなくなったというわけじゃ。おぬしから、それとなく伝えてやれ、心の傷は早く治した方がよい」

宮沢はそういうと、袖から太い腕をにゅっと伸ばして、機嫌よく左右に振って街道を戻っていった。その幅の広い背中と腰を眺めながら、あんなふうに憎めない人柄の武士も珍しいと思っていた。

振り返るとこちらを見ていた菊が、あわてて目を落した。細い肩が落ちて心細そうな風情が漂っていた。精一郎は痛む右足を大股に開いて歩み出した。

第八章 郷愁

一

菊を実家に送り届けて、槻川沿いの街道に出ると、夕陽が険しい山の頂きに、呑み込まれるように沈んでいくところだった。振り返ると、小川村の藁葺きの屋根の裏から、炊飯の煙が立ち昇っていく。それを精一郎はちょっとの間物悲しい気分で眺めていた。あの娘に、もう会うことはないだろうと思っていた。

街道には往来する人の姿はほとんどない。小川村からは寄居を抜けて遠く藤岡、高崎まで続く街道が北に走っているが、西に向かうこの道は、安戸、御堂、奥沢という三つの村落を過ぎると、あとはもう険しい粥新田峠を越えて栃谷関所に出る山道しかない。関所を出るとそこは秩父である。

陽が山の中に完全に沈むと、あたりは黒い幕が降りてきたように、急に暗くなった。畑帰りの農民の姿ももうない。川の瀬の音が、暗がりに馴染もうとする虫の音のように澄み渡って響いてくる。

――結局、菊という娘のことは、何も知らずに終ってしまった。

申し訳なさと悔いとわずかばかりの憐憫の情が、精一郎の胸に残っている。菊のその横顔には、いつも一抹のさみしさが漂っていた。田村家の元用人という爺さんとその中間が、黒須喜三郎の家に乗り込んできたときだけ、勝気な部分を覗かせたが、そのあとは白い花弁の中に潜り込んでしまったかのように、神妙に静まり返っている。果たしてあれが、あの娘の本当の素顔なのだろうか、と精一郎は考えてみる。娘とまともに話をしたことのない精一郎には、女の心の内は計りようがない。

坂戸を過ぎ、高坂に入って昼餉を摂ったが、その間に交わした会話もわずかなものだった。

自分の看病なんかせずに、さっさと一人で小川村に向かえばよかったではないか、と訊いた精一郎に対して、菊は、秋山様に残れといわれましたから、と答えたのみで、それで困ったとも弱ったともいわない。

秋山殿はどちらに向かわれたと尋ねると、飯能です、とこれはっきりと答えた。入間川沿いに南西に道をとるのだとおっしゃっておられました、と両手で握り飯を大事そうに包んで食べながらつけ足した。だが、二人の会話はそこで跡切れてしまった。宮沢

助左のように世間ずれした人ならば、江戸で奉公するようになった訳であるとか、田村家に来る前はどこで働いていたのか、ずけずけと尋ねることもできるのだろうが、武人として、勇猛になるべく育てられた精一郎ではそうはいかない。多くの武士がいうように、女は静かに男の命じることに従っておればよいのだ、という意見にはどうしても馴染めないが、ではどういえば女は普通に話してくれるようになるのか、その方法がつかめない。

昼餉のときだけ菊は精一郎の傍で、茶屋の床几に控え目に腰かけていたが、道中はいつも二、三歩遅れてついてきた。そのため時々精一郎は後ろを振り返らなければならなかった。これが刺し傷、打撲で身体中が呻き声をあげている精一郎にとっては、結構苦痛を伴う所作になった。見栄を張って顔には出さなかったが、実は筋肉はその都度きしんだ。

ちゃんとついてきているか確かめる精一郎に対して、菊はきまって目を上げて怪しむように精一郎を見返した。その瞳の奥には、どこか猟銃に怯える小鳥のような臆病さが潜んでいて、身体を前に戻すたびに、この娘は、自分もまた田村家の若様のように、無体を強いるのではないかと警戒しているのではないか、と思ったりするのだった。

二人が並んで歩けば、話も少しは弾もうというものだ。

町人の男女や連れの手をひいていく巡礼姿の老夫婦を眺めながら、精一郎は何度となくそう思った。おまえが頼りにしている黒須喜三郎には実は許嫁がいて、などと言い出すつもりは毛頭なかったが、せめてこれから帰る家の様子なりは訊いておくこともできるのに、と幾分腹立たしくは思っていた。その怒りの原因は、武士であることの堅苦しさにある。

菊の家を出てから一里程で安戸宿についた。小さな宿に訪いをいれ、足をすすいで二階の小部屋に通されると、身体中の筋肉が悲鳴をあげ、関節は錆びついたようになっていた。

茶を運んできた痩せた女中は、痛みのために汗を噴き出している客を見て、腰を抜かしたようにぺったりと畳に尻をついた。どうした、と精一郎が訊くと、女中は恐る恐るやっと口を開いた。

「お客さん、顔がまっ青だべ。どこか具合が悪いんでねが。生きている人には見えねえだべ」

そうか、そんなにひどいか、と胸の中で呟いて精一郎は苦笑した。

「ちょっと頼まれてくれませんか」

そういって精一郎は背中に傷や打撲のあとがあることを言い、薬を替えてさらしを巻き直してもらえないかと頼んだ。

仕方なく了承した女中は、傷口を見て、わっとわめいたが、驚きがひととおりおさま

ると、あとはてきぱきと作業をしだした。精一郎が礼をいって心付けを差し出すと、女は初めは遠慮したが、やがて顔をパッと明るくして銭を受け取り、茶がぬるくなったから熱いのと取り替えてきます、といって出ていった。その間に精一郎は脛に入った斬り傷に軟膏を塗りつけた。三日前は骨が見えていたらしいが、今は薄く皮が張り出している。

女中が新しくいれ直してくれた茶はうまかった。ほんのりとした甘さが舌に乗り、喉を通ると、冷えていた身体に血が通い出すのを感じた。

——菊の家では、茶の一杯のもてなしもなかったな。

ふとそう思った。戸口から土間を覗き込んだだけで、中の様子は分からなかったが、どこといって普通の農家と変わりがないようだった。

菊が戸を叩くと、初めに父親が出てきて、精一郎を一瞥すると、菊を抱きかかえるように中に引き込んだ。土間に汁を煮る匂いが漂っていて、その芳しい香りをつけたまま母親が戸口の外に出てきて腰を折った。菊に似て上品で顔立ちのよい女だった。

菊の母は礼を言い、精一郎は、いや、ついでがあったので送ったまでです、と受けてそのまま立ち去ってきた。菊はいったん家の中に入ると、それきり出てこなかった。

案外薄情な娘だな、と道々呟いたが、それを怨みがましく思ったわけではなかった。精一郎が気になったのは、父親が娘を迎えたときに見せた一種異様な目付きである。その白っぽい目には娘が戻ってきてくれた嬉しさに混って、どこか淫靡な色合いが浮いていて、精一郎に対して見返した目には、微かに敵意のようなものが含まれていた。

——あるいは、気のせいだったかもしれない。

泊っていけ、と誘われるとは考えていなかったが、せめて茶ぐらい馳走してくれるものと思っていた。その期待があまりにあっさりと裏切られてしまったので、すねているのかもしれないと苦笑した。

女中が膳を運んできた。麦飯に川魚が一匹、菜っ葉と汁が載っていた。質素な食事だったが、それでも兵原草廬の水でふやけさせた玄米飯に比べると、大変なご馳走だった。

翌朝、雨戸の節目に、淡い明かりが射すのを待って精一郎は床から起きた。そんなに床の中でゆっくりしているのは珍しいことだったが、筋肉に血が通うのを待つ方が大事だと念じて、はやる気持を抑えていたのだ。

木刀を手にして土間に降り、足袋のまま外に出た。陽はまだ射してはいなくて、あたりは朝靄が立ち籠めて気流のように流れている。精一郎は河原に出て素振りをするつもりで宿の前を離れた。すると薪を積んだ奥で黒い影が動いた。

精一郎は気配を殺して薪の前に回った。人が一人、うずくまっていた。髪に落ちた靄が艶を出し、それは人が永い間そこに潜んでいたことを物語っていた。

「菊、菊ではないか」

精一郎の呼びかけに、菊は糸で引かれたように弱々しく頭を上げた。白く小さな顔が福寿草のように揺れていた。薄い唇が震え出すと、整っている少女の顔が、花弁が散ったように歪んだ。

「どうしたのだ、一体」

精一郎は手を差し伸べた。その指先を見つめた菊の双眸から、涙が二滴、同時にこぼれ落ちた。

二

「ともかく中へ入れ」

精一郎は菊の肩に片手をそっと置いていった。菊は俯き、頬に流れた涙を、黙って手の甲で拭った。朝の薄い明かりの下で、菊の頬に汚れが付着したのが分った。

――この娘はさみしい娘だ。

ふいに精一郎の胸に哀しい思いが湧き上ってきた。

――見かけとは違って、相当につらい体験をしてきたに違いない。

そうでなければ、実家に戻ったその夜の内か或いは翌日の夜明け前に、家を逃げ出してくるはずがなかった。

「さ、菊、こんな所にいてはよくない。宿の者には私が話をする。おまえは中に入って休むのだ」

身体をさらに、薪の積まれた隙間に沈み込めてしまった菊は、精一郎の言葉に抗うように頭を小さく左右に振った。

菊の意外な反応に、精一郎はちょっと躊躇ったが、すぐに気を取り直して両腕を菊の肩を包み込むようにして回した。骨ばった肩が胸を刺してきた。菊の冷たい身体は、精一郎の腕の中で、生まれたての雛のように幼く震えた。

「着物に露がついている。すぐに休まないと熱が出るぞ。さ、立つんだ」

もし、自分に妹がいたら、こんな感じの娘に育っていたかもしれないと愛しく思いながら、精一郎は固く閉じている菊の両肘の下に指をあてて、軽く押し上げた。

それだけで菊の身体の中心軸が砕けた。柔らかくなった肉体は、たわいなく精一郎の胸の内に落ちて、持ち上げられるままに立ち上ってきた。

「男谷様にご迷惑はかけられません。あたし……」

背中を押されるままに歩き出した菊は、そこまでいって喉を詰まらせた。

「話はあとだ。何も気にすることはない。私の方こそおまえに迷惑をかけてしまったとずっと申し訳なく思っていたのだ」

野袴の股立ちを取って、木刀を携えた十数名の侍達に取り囲まれた菊は、さぞ肝をつ

ぶしたことだろう。そんな経験は一生に一度でもあるものではなかった。それに、菊の献身的な看病がなければ、わずか三日で起き上がれる程の身体に戻っていることもなかっただろう。

菊にはあやまらなければならないことがいっぱいある。昨夜、宿について寝込む前に、その思いが精一郎の胸を掠め、骨や筋肉の痛みの中で、いっとき寝つかれなくなったものだった。

ちゃんとした詫びと礼をいわずに別れてきてしまったのは、照れ臭さ以前の、自分の人間としての未熟さに原因があるからではないかと反省もしていた。

薪の間に蹲った菊を発見したとき、燃え尽きたはずの火鉢の中の灰に、まだ燃えずに残っていた小さな炭を見出したような喜びを、自分の心の中に感じたのは事実で、それは菊にもう一度会ってちゃんと話をしたいという思いの表われではなかったのだろうか。

宿屋の戸を開け、上がり框に菊を坐らせながら、精一郎の胸の中を去来していたのは、そのような今まで抱いたことのない戸惑いだった。

「すみません。どなたかお願いします」

宿の者がまだ眠っているのを承知の上で、奥に向って声をかけた。昨夜、膳を運んできた女中の口ぶりでは、他に薬種を売る商人が一人、宿泊しているだけだということだった。

しばらく経って出てきた痩せた女中は、薄暗がりの中に坐っているのが菊だと知ると、「ま、どしただ?」と驚きの声をあげた。

「知り合いか?」

そこに立っているのが精一郎だと分って女中はもう一度びっくりした顔をしたが、治まるとこっくりと頷いた。

「菊ちゃんは安戸の生まれで、おらとは幼馴染みなんだ」

それから女中は菊に向って、どうしただ? いつ戻っただ? と矢継ぎ早に訊いた。それでも泊まり客に遠慮して、声は抑えている。

――そうか、菊は私を訪ねてきたのではなく、幼馴染みのこの女を頼ってきたのか。

菊の肩を抱いて目を丸くしている女中を見ながら精一郎はそう思っていた。少し落胆する思いがあった。

「あれ、熱があるでねえが」

菊の額に触れた女中が頓狂な声を出した。精一郎は膝を落して菊に向って声をかけた。

「さ、上って部屋で休むのだ。おまえは病いに罹っている」

菊は板戸の節穴から洩れ入ってくる光をぼんやりと眺めている。目の周囲が腫れぼっ

たく、目も膜を張ったように淡い光沢が滲んでいる。

「菊を私の部屋に連れていって寝かせてください。この娘は永い時間、表に蹲っていたのだ。たぶん、昨夜は一睡もしていないのだろう」

「あの、お武家様と菊ちゃんは……その……」

いきなり部屋に連れていけといわれて、女中は困ったのだろう。けげんな表情で精一郎を見上げた。

「菊を親許まで送り届けたのは私です。だが菊は家にはいたくなかったようだ。何か事情があるようだが……」

精一郎はそういって女中の表情を注意深く窺った。女中は固い表情になって肩をすぼめた。

「相部屋で不都合があれば別の部屋でもいい。費用は私が払います。そう宿の主人に伝えて下さい。私は外で稽古がある」

女中は精一郎の手にした木刀に目をとめて首を竦めた。

「それからすぐに火を熾せますか？　先に乾いた寝巻に着換えさせ、白湯を飲ませるか粥を食わせるとよいでしょう。頼みます」

女中は頷き、菊の顔を覗き込んで小耳に何事か囁いて、肩を両手で支えた。

戸口に手をかけた精一郎は、今いったことだけでは不充分な気がして、もう一度口を開いた。

「昨日、あんたには傷口に薬を塗り込んでもらったが、ここまで歩ける程、看病してくれたのは菊なのだ。妙なことから道連れになったが、菊がいなければ、私はまだ熱にうなされていたでしょう。菊には恩がある。今度は私が助ける番だ。宿代は心配しないよう主人に伝えて下さい」

精一郎の話すことを、何故か肩を縮め、怯えた表情で聞いていた女中は、精一郎が戸を引いて外に出ていくと、はい、伝えますだ、と張りを含んだ声で返事をした。

外は朝靄がまだ立ち籠めていたが、もう四半刻もすれば東の空に陽が昇るようで、ぼんやりとした明るみが畑に続く林の上に滲んでいる。

精一郎は山に向って歩き出した。槻川の河原で、村人の目に触れないように素振りをするつもりだった。

――背中の傷口が破れてしまったかもしれない。

そう危惧を感じながら宿屋に戻ってきたのは、一刻程あとだった。木刀を振り上げたものの身体の節々が痛く、何度も続けられない。斬られた右足は腫れがひどく、踏み込むたびに激痛が脳天まで走った。

それでも精一郎は気合いを込めて木刀を振り下ろしていたのだが、医者に縫ってもら

った手裏剣で撃たれた傷の周囲に非常な違和感を感じ、仕方なく中止した。引き攣れが極限に達し、背中の肉が左右に引き裂かれてしまったようにも感じられた。

そんな精一郎を、槻川に沈めた楮を引き上げに出た早起きの女が、いぶかし気に眺めているので稽古をあきらめて戻ってきた。楮は紙の材料になる木で、寒い内に刈り、冷たい水につけてそのあと蒸し、皮を剝ぎ取るのだ。蒸したり、皮を剝いだりするのは女の仕事のようだった。

紙の作り方を知ったのも、平山子龍先生の兵原草廬で教わったからだが、それも知識としてあるだけで、白皮加工から煮熟、そして打砕といって皮を叩いて繊維を綿状にするまでの工程に、どんな工夫がいるのか、うまくなるまでにどれ程の熟練が必要なのか、実際のことは何も分からない。このあたりが紙の産地であると気付いたのも、農家の庭にすき槽や、それらしい民具が置かれているのを目にとめたからだった。

宿屋に戻ると、腰の曲った老人が出てきて、お帰りなさい、といった。昨夜も見かけた老人だが、下男だと思っていた精一郎は、ご主人はどこですか、と訊き、儂ですという答えを耳にして改めて老人を見直した。

つぎはぎのあたったパッチを穿いた姿は、下働きの老人としか見えなかった。川越城下の旅籠とは随分様子が違うものだと妙な感心をした精一郎は、さっき女中さんに菊のことを頼んだのですが、といって相手の様子を窺った。

「へえ、いま、お武家様のお部屋で眠ってますだ」

宿の主人は眠そうに目をしばたたいていった。精一郎は勝手にすすぎ盥に足を入れて、汚れを落しだした。

「食事はどうしました？」

「へえ、亀が粥を作って食わせましただ」

亀とは先程の女中の名前だなと思った。

「亀はどこにいますか？」

「お連れさんの看病をしていますだ。丁度薬屋さんがいたもんで薬もらって飲ましたら、えらい汗が出たんでな」

主人はそういって雑巾を精一郎に差し出してきた。川越の旅籠では下女が足を拭いてくれたが、ここでは違うらしい。こういう所の方が、菊も安心して休めるかもしれないと思いながら精一郎は濡れた足を雑巾で拭いた。

「私は今日にでも出立しますが、連れの者は、かげんが良くなるまでここに置いてあげて下さい」

「へえ。で、いってえいつ位までだか」

「二、三日もすれば治るでしょう」

そういったが主人は返事をしないで、曲った腰で土間からぼうっと精一郎を見ている。

草履の裏を折り曲げたような顔が宙に浮いているので、精一郎はちょっと居心地が悪くなった。

「宿代はお武家様が払って下さると亀がいっていただが」

眠た気な顔に似合わず、はっきりした声で主人はいった。そうだった、と精一郎は財布を取り出して一分金を摘み出した。俗に文字金と呼ばれているものだ。

掌に落された一分金に目を落した主人は、もう一度古びた祠のような顔を精一郎に向けた。

「それでは足りませんか？」

主人は重たい目蓋をゆっくりと上下させてから、すがるような声でいった。

「これでは二十日以上泊まれますだ」

「二十日も？　ここの宿代はいくらなのだ？」

「六十五文だに。これでは多すぎるだ」

「残った分は菊に渡して下さい」

精一郎はそういって主人の前を離れた。実直なようだが、金には敏感そうな老人の前に佇んでいるのがつらくなったのだ。それにしても、一両の四分の一でしかない一分金で、傾きかけた宿屋とはいえ、二十日間も逗留できるというのは、貨幣の価値は、城下町と山村とでは、随分違うものだと感心した。

部屋に入ると、菊の額や首筋に手拭いをあてて汗を取っていた亀が、たじろいだように腕を引っ込めた。

「驚かせてすみません。菊は薬を飲んだそうですね」

「んだ。それからすぐに眠りましただ」

少し顔は赤くなっていたが、菊はよく眠っている。安心したのか、十三歳のあどけない少女の素顔になっていた。

「腹が減った。食事を用意願えますか」

「へえ」

亀は立ち上ってすぐに出ていった。台所の方から主人と話す亀の声が聞こえてきて、二人の話し声が鎮まるとすぐに亀が膳を捧げて戻ってきた。

「お待たせしただ。江戸の方の口には合わねえ食い物だども……」

麦飯を椀によそって亀は昨夜は口にしなかった世辞をいった。膳には汁の他に山菜と小魚が一匹ついていた。勝手に食べるから、といったが、お武家様についているようにといわれたから、と亀はいって、細い顔の中にあるリスのような目を向けてきた。

「菊の幼馴染みというと、あんたはここの宿屋の娘さんですか？」

「んだ」

「じゃあ、宿の主人は……」

飯を頬張りながら亀を見た。亀はいったん言い淀んでから、じっちゃんです、と固い物を吐き出すようにいった。

「ほう、両親はいないのか」

「かあちゃんはここから出ていってしまったし、とうちゃんは博打に負けて、気が変になって、川にはまって死んじまっただ。菊ちゃんのおとうと同じだで」

「菊の？　だが、菊の父親は小川村にいるではないか。あれは菊の父ではないのですか？」

その人は、といって亀は頬を赤く染めて俯いた。

「あの人は菊の実の父親ではないのですね。それで菊は実家に戻るのを嫌っていたのか……。昨夜、家から逃げだしたのも、あの父親に原因があるのだな」

かすかな寝息をたてて眠っている菊に目を落していった。繊細な肌は、花弁を振り下ろしただけで切れてしまう程だった。

「菊ちゃんの家は、紙を作っていて、ここらでは一番の豊かな家だっただ。たくさんのおばさん達が、冬の間は、菊ちゃん家に行って働いていただがらな。小川村で紙の市が立つ日は、大ぜいで紙を運んでいっただ……」

ここらの紙は細川紙と呼ばれ、その質の高さは人気があり、多くは江戸に運ばれたという。菊の家では原料となる楮の木の山を持ち、冬から春にかけて、多くの職人を使って上質の細川紙を製造していた。養蚕も少しは手がけていたが、菊の家で働く職人達は、夏から秋にかけては、竹縄を作っていたという。そのほとんどが川越、江戸へと出荷され、村人たちの現金収入となっていた。

「でも悪い人達が、菊ちゃんのとうちゃんを博打に誘い出して、紙の市が立つたんびにとうちゃんは家さ帰えらなくなって、しまいに滅茶苦茶になっただ。山も家もみんな博打うちがやってきて取っていって、菊ちゃんも、菊ちゃんのあんちゃんも、ばっちゃんも、じっちゃんも、みんな追い出されてしまっただ。そのさ中に、菊ちゃんのとうちゃんはぽっくり死んじまっただよ。毒飲んだっていう人もいただ」

それは菊が七つの時だったという。三つ上の兄は寄居村の親戚に預けられ、菊は祖父と母親と共に小川村に移ったが、間もなく祖父が死に、親子は坂戸に住んだ。そこで農作業の手伝いをしていたときに、菊の母は今の夫に見そめられて小川村に戻ってきた。菊も母親についてきたが、半年もしない内に熊谷の商家に奉公に出された。ところが商家が火事になり、菊は再び母親の許に戻ってきた。菊が十歳のときだった。

「んでも、菊ちゃんは新しいとうちゃんによく折檻を受けていただ。髪さ引っぱられて、ここんとこ、ごそっと髪が抜け落ちたこともあっだがらな」

「何故折檻を受けていたんですか？」

「よく分がんねえども、菊ちゃんはとうちゃんがこわいって、会うたんびに泣いてた。

家にいたぐねえから、どっか、遠いところさ奉公に出たいっていってただ」
「それで江戸に出たのか」
「んだ。菊ちゃんのおっかあが、だれかに頼んで、その人の知り合いという人が、江戸のお旗本のところはどうだっていってきたと聞いただ」
精一郎は箸を置いて、半分開かれた障子戸の外に目を向けた。春霞のかかった遠くの山に、紅を水に溶かしたような色づきが浮き上っている。山桜か、と思いながら、精一郎は胸元まで迫り上ってきた憐愍の情を顔に表わさないように抑えた。
山村で、すくすくと育っていた娘が、ある日突然父の死と直面し、一家の離散に巻き込まれる。何の罪もない娘なのに、大人達の間で翻弄され、辛酸を舐める。奉公先では若殿に乱暴され、抵抗したため逃げまどう羽目になる。
こんな理不尽なことがあってよいのだろうか。十三歳のこの娘は、これからどうやって生きていけばよいのか。
「菊ちゃん、家さ出てきたのは仕方ねえだども、これから、どうするんだべ」
亀も同じ心配をしていたようだ。浮かない、疲れきった表情でそう呟いた。
「父親に捕まれば、また折檻を受けることになるのだろうか」
精一郎が呟くと、亀は細い首を伸ばして、勢いよく頭を振り下ろした。
「菊ちゃんの今のとうちゃんは、博打で桑畑をとられた人のもんを手に入れて、蚕をやりだしただ。もともと小川村の人でねえし、なんか得体が知れねえ」
苦いものを吐き出すように亀はいった。昨夜目にした、菊の父のどこか薄汚れた笑みを思い出し、精一郎は不快になった。実の娘でないならば、あの男のねばりつく目付きは、菊を襲った奉公先の若殿と、同じ好色な魂胆を宿していたからではないのかと思った。

「この村に、菊を受け容れてくれるところはないのか」
「ねえごとはねえだども、それだけでは食っていけねえだよ」
亀は顔を上げ、精一郎に真摯な目を向けてきた。
「お侍様、菊ちゃんに恩があるといってただな。んなら、菊ちゃんを江戸に連れてってやってくだせえ。菊ちゃんも、それがおねげえしたくて、ここに来たんでねえのか」
「菊はおまえを訪ねてきたのではないのか」
「違うだ。もしそうなら、遠慮しねえで、おらんとこくるだ。外にいたのは、お侍様に会いたかったからだ」
「しかし、菊は私がここに泊っているのを知らなかったはずだ」
「分かるさ。こんな村だもの。そんだらこと、すぐ分かるだ」
亀は小さい身体を伸ばして、うんうんと二度力強く頷いた。精一郎の決断を促しているようでもあった。

これが縁というものかもしれない、と精一郎は思った。十三歳のとき、自分は先輩達に揉まれながら、兵原草廬の演武場で竹刀を振るい、一撃必殺の気合いを養い、兵聖閣では孫子を始めとする平山子龍先生の立派な講義を受けていた。同じ頃、菊は、養父の許を逃げ出すように江戸に奉公先を見つけ、誰一人知る人のない屋敷で水を汲み、洗濯をしていたのだ。

そういう苦労をしているのは、この娘一人ではない。この村にも、博打に狂った父を持った娘は大ぜいいるはずだ。その娘たちの多くは、運命に翻弄されて苦しい思いをしたはずだ。菊一人だけがつらい生き方をしているのではない。

だが――。

「分かりました。膳を片付けて下さい」

精一郎は荷の中から矢立てを取り出して、紙をすり切れた畳に置いた。筆を取る前に一瞬、父の苦虫を噛み潰した顔が脳裏に浮かんだが、それを消し去る思いとともに筆先が動き出し、膳を片付けた亀が部屋に戻ってきた時には、墨も乾いて、精一郎はゆっくりと紙を折り畳んでいた。

「菊が目を覚ましたら、この書状を渡して下さい。江戸の番場町に男谷という家がある。そこにいる源兵衛という者を訪ねて行くように伝えて下さい。その者なら、なんとか菊の奉公先を見つけてくれるでしょう」

精一郎は亀にくるんだばかりの書状を手渡した。手にした亀は蒼ざめた顔で精一郎を見返した。

「えっ？　番……な、なんだべ、よぐ分がらなかっただども」

精一郎は書状を取り返し、表面に「番場町、男谷忠之丞家用人源兵衛殿」と書いた。

亀は書かれたものを見て茫然としている。

「どうかしましたか？」

「おら、読めねえだもの」

「そうでしたか。では、覚えてほしい。もし忘れてしまったら、菊に、誰か字の読める人に、この書状のあて先を読んでもらうように伝えなさい」

それから精一郎は二度、番場町と男谷と源兵衛の名をくり返した。亀は復唱し、口の中でも呟いていた。

「んで、この人は誰なんだべ」

「男谷家の用人です。そこにある忠之丞というのは私の父だ」

「ひえっ」

亀は大袈裟にのけぞった。

「どうした？」

「男谷様ったら、信州の代官様でねえのか。おら、いま思い出しただ。去年の秋に、た

くさんお伴の人を連れて、うちさ泊ってくれたことがあるだよ。とってもえらいんだって聞いただ」

「ああ、その人は……」

男谷彦四郎殿のことだなと精一郎は思った。麻布狸穴に屋敷を構えており、十歳の頃、父に連れられて一度訪ねたことがあった。書をよくする人で、顔付きは厳しかったが、言葉遣いは丁寧だった。その彦四郎殿の奥方が父の妹で、この人は女中を連れて、年に何度か番場町の屋敷に父や、当時まだ健在だった母を訪ねてきた。彦四郎殿の父と、忠之丞の父は兄弟であることも、遊という名の叔母の口から精一郎は聞いた。男谷彦四郎は昨年、代官を命じられて信州に詰めているはずだった。精一郎より丁度二十歳年上だというから、今年三十五歳になっている。

「父の従弟だ」

細かいことは説明せず、簡単にそれだけをいって精一郎は荷をまとめだした。足袋を穿き替え、新しい草鞋を取り出し、羽織をつけた。亀は唖然とした様子で見上げている。

「握り飯を用意して下さい」

「ど、どうしなすっただ？」

「出立します」

「えっ？　だども、菊ちゃんはどうするだ？」

「どうって、その書状を持って男谷を訪ねるとよいでしょう」

「ひ、一人でか？」

「そう、一人で」

心細いかもしれないが、江戸で奉公がしたいというのならそれしかないだろうと精一郎は思った。

「お武家様は、どちらに行くだ？」

「秩父の栃谷まで」

「栃谷？　四万部寺の札をもらいにいくだか？」

「人を訪ねていくのです」

「んだども、今から峠越えていったら夜になっちまうだ。雪もまだ残ってるだろうし、山犬にでも襲われたら生きては帰えれねえぞ。山菜採りに出たモンが、何人も嚙まれて死にぞこないに遭っているだべ。それに、お武家様の背中の傷もまだ治ってねえべ」

亀は急に早口になってまくしたてた。かまわぬ、と精一郎はいった。

「早く握り飯を作って下さい。それからこれは……」

精一郎は財布から一分金を取り出して懐紙にくるんだ。

「菊に渡して下さい。江戸までの路銀です」

恐る恐るそれを受け取って亀は部屋を出ていった。精一郎は菊の傍に坐り、亀がやり

忘れた首筋の汗を手拭いで拭き、桶に張った水に浸して絞り、額に置いた。頬に浮き上った赤味はまるで血が滲み出した程に鮮烈になっていたが、菊の寝息に乱れはなかった。ほんの少し開かれた唇から、白い歯が覗いているのが愛らしかった。

精一郎は外に目をやり、母の住む栃谷村の風景を思い浮かべ、静かに息を吐いた。菊の身の上話を亀から聞いたときに感じた哀切感とは別の、胸が痛くなるような、郷愁の念を抱いたからだった。

安戸宿を出ると、すぐに槻川にかかる橋を渡った。

険しい山が遥か彼方に聳えていたが、まだ頂きには雪を被っているように見えるその山を、越えていくことになるとはその時には思っていなかった。

道は平坦で、川堤には桜の木が植わり、暖かい日差しの下で、農作業に精を出す農民の姿がちらほらしていた。

道幅が狭くなり、坂が多くなりだしたのは奥沢村を過ぎてからで、東に南に蛇行して細くなっていく槻川に沿って、ときには農道に足を踏み入れたりしながら、精一郎は足を急がせた。

その槻川と別れることになったのは、安戸宿を登って二刻も歩いた頃で、西へ二里、粥新田峠、の道しるべのある新井という村落にさしかかったときだった。

二里なら一刻半もあれば着く。その先は下りだからぎりぎり日のある内に栃谷の関所を抜けられるだろう。精一郎はそう思って、再び勇んで山道に入った。

はじめの内は道幅が一間程もあり、たまに大根を軒先に干している農家を目にすることがあったが、半刻程すると、勾配が急にきつくなり、歩く姿勢も前傾しがちになった。左右から伸びてくる雑木林の枝が腕や顔に触れてくると、頭上にあるはずの日も直接見えない程森が深くなった。

獣道に迷い込んだかもしれない、と不安になった頃、不意に山肌にこびりつくようにして建っている小屋を見つけて、ひと安心したものだった。

そこは薪や山菜と引き換えに、麦や川魚を置いていく物々交換所の役目をしていて、老婆が一人、日の当たる所に出て留守番をしていた。精一郎はそこで亀の握ってくれた握り飯を一つ食った。老婆は気をきかして茶らしきものをいれてくれたが、耳が遠いらしく、精一郎が何を訊いてもちゃんとした答えが返ってこなかった。

精一郎は半日ですっかり傷んでしまった草鞋を捨て、新しいものに替えた。それで川越を出るときに用意した予備の草鞋はなくなってしまった。

日差しが陰ったので空を見ると、高い所では強い風が吹いていて、雲が北西の方からどんどん流れてくる。夜には厚い雲で覆われそうだった。精一郎は老婆に十文渡して小屋の前を離れた。銭のことはよく分かるらしく、老婆は相好を崩して精一郎の出立を見

送ってくれた。

峠に近づくにつれて雑木林の幹が細くなり、枝を縫って吹きつけてくる風も冷たくなった。山道には積って固った雪も目立つようになり、時には踵まで埋った。往きかう旅人は一人もなく、時折遠くから地鳴りのような不気味な音が響いてきた。

粥新田峠と石に刻まれた道標は、さらに上りの続く山頂近くに立っていた。茶屋のような小屋があったが、固く戸が閉ざされていた。地蔵が一体、侘し気に置かれていて、精一郎はさらに強くなってきた風の中で地蔵に手を合わせた。この地蔵に、十三年前、江戸から栃谷に戻る途中の母も、手を合わせたのではないかという思いが胸をよぎった。

噴き出した汗もすっかり冷え、精一郎は感傷に浸る間もなく歩き出した。道はいったん広くなったが、雪の量が多くなると、再び狭まった。

ひとかたまりの雑木林があり、そこを抜けると不意に視界が開けた。夕方近くになってはいたが、山あいにひっそりと沈む村の家々が、滲みだした青っぽい霧の下で、人に気付かれぬように息をしていた。すぐ隣に聳える山頂は、谷から迫り上ってきた霧で青黒く染まり出していた。

――あれが大霧山なのだろう。すると麓まではまだ二里以上ある。

急に焦燥感に襲われた。関所が開いている内に着くのは到底不可能だった。せめて人家のあるところまで日のある内に行き着かねば、と思った。

道は下りになり、平坦なところに出てもう一度上りになった。山の端に、雲に覆われた陽がとまったのか、そのあたりが薄ぼんやり明るくなっていた。立ち止った精一郎は、その明かりに導かれるように延びている杣道を、雑木林の中に見出した。樵が歩くような道だったが、麓の村落までまっすぐに続いているようにも思えた。

精一郎は峠から歩いてきた道を捨てて、杣道に入った。だが、さほど行かない内に雪が深くなっているのに気付いた。いまはまだ、樵さえもめったに通らないのだろう。固っていると思われる雪の上に足を置くと、ずぶずぶと膝頭まで潜った。

戻ればよかったのだろうが、はやる気持が精一郎の足を前に押しやった。雪にそれ程悩まされることがなくなった頃には、あたりはすっかり暗くなっていた。

精一郎は荷を下ろし、暗い中で火打ち石を枯草にあてて火をつけた。それを懐紙に移し、燃え上った紙の上に、乾いた小枝を載せた。それから松明になる松の木片を捜した。

用意が後手後手になり、松明の松も充分に集まらなかった。右手に火のついた松明を翳して歩き出したが、空は星一つ見えず、方角も定まらず、ただ下っている方向に、幹の間を縫って進んでいった。

しばらくして、松明の火が細くなり、精一郎はいったん荷を下ろして松の木片を捜しだした。そのとき、屈んだ精一郎の周囲に、異様な殺気がたちこめているのを感じた。

それは低い唸り声と共に、じわじわと包囲を縮めてきていた。消えかかった松明の灯

りが、取り囲んだ黒い影を低い処でかすかにとらえた。
地面が蠕動していた。いや、それは獣の背中だった。いくつもの黄色い目が、闇の中から精一郎を見定めて襲う機会を窺っていた。
——狼だ！
胸の中でそう叫んだとき、松明の火が消えた。

第九章　孤立

一

不意に濃い闇に包まれた。踝まで埋めている雪が、刺すような冷たさで攻めたててきたが、それさえも忘れた。闇が凍りついて精一郎の身体を縛った。
獣の強い臭いが鼻をついた。
精一郎はかじかんだ指で小刀の鯉口を切り、両膝を雪に接する程低く身構えた。落ちついているつもりだったが、背骨が熊笹の枝のように細かく震えているのが分かり、それが膝頭に伝わって、釣り上げられた川魚の尾鰭のようにはねた。
——最早これまでだ。
そう胸の内で呟いていた。自分はこの山の中で、狼の襲撃を受けて死んでしまうのだと観念した。悔しかったが、認めざるを得なかった。敵は夜目が利く上に、縄張りを侵

されて狂暴になっている。

——母にも会えずに死ぬ。それが宿命なのだ。

悲痛な思いが噴き上ってきたが、それもすぐにあきらめの胸の内に沈んだ。次に湧き上ってきたのは、自分はとうとう、天子様を一度も護ることに役立たなかったという悲しみだった。これまで血反吐を吐いても耐えて修業してきたのは、そのためではなかったのか。

暗い中で、狼達の唸り声が低く響いていた。囲みは狭くなっていたが、敵は直ぐには襲ってこなかった。絶望感に打ちひしがれながら、精一郎は指先に力を入れた。寒さのため、背中や脛の傷の痛みは感じることがなかったのだが、そのときになって、腕が全く動かなくなっていることに気付いた。筋肉が硬直し、鯉口を切ったものの、わずか一尺六寸の小刀を抜くことすらできずにいるのだ。

四方から、雪面を這って迫ってきていた狼達の唸り声が、一瞬途絶えた。全ての生き物が、闇の底に吸い込まれてしまったようだった。

その時精一郎は、自分が一本の氷柱になったのを感じた。

そう感じた刹那、頭上を獣が跳躍した。狂おしい息が首筋にかかり、鋭い爪が笠を剝いだ。捨て身の覚悟が、凍りついていた精一郎の筋肉を生き返らせた。

小刀を抜き様、闇を払った。切っ先がまだ空を舞っていた狼の後肢をとらえた。筋を斬った手応えがあった。

——平山先生直伝の信抜流居合いだ！

狼の鳴き声を耳にしながら、精一郎は胸の中で叫んでいた。腹の底から急に、火のような勇猛さが噴き上ってきた。

——だが、有頂天になるな。

とっさにそう言いきかせて、気を鎮め、耳を澄ました。

前と後ろから、同時に闇を裂いて、獣の熱い息が吹きかかってきた。得体の知れない妖怪が、闇を身にまとって襲いかかってきたような錯覚に、一瞬だがとらわれた。人間ならば、打ち込んでくる間に、前と後ろでは若干のズレがあるはずだった。

——なんというやつらだ！

驚嘆の思いと共に、精一郎は小刀を振り上げていた。頭上で狼の叫び声がしたが、返す刀が間に合わず、肩を噛まれた。たまらずに雪の上に横転した。すると、精一郎の喉元を的確に狙って、真上から牙が落ちてきた。闇の中で輝く金色の双眸が、精一郎の目を射した。

「グエン！」

顔の上で狼が呻いた。小刀は狼の喉を貫き上げていた。血飛沫が頬にかかった。身をかわすと、固くなった雪の上に、小さな物体が落ちてきて、もう一度呻いた。

囲みがバラけて、唸り声が跡切れた。ひるんだのか、と思ったがそうではなかった。体勢を立て直すと、一頭の吠え声を合図に、三方から襲撃してきた。かろうじて上体を起こした精一郎は、敵の呼吸を計る余裕もなく、闇雲に小刀を振った。

微かな手応えはあったが、そのときには精一郎の身体は細い幹の上に飛ばされていた。月代に爪が走り、脇腹と左腕を手ひどく嚙まれていた。

起き上がり様、一度過ぎ去り、たちどころに戻ってきた黒い影を斬り払った。ギャッ、という叫びが耳元で起った。右膝を立てると、雪の面に蹲っていた獣が、風のように跳躍してきた。その風が喉にぶつかる寸前に、必死の思いで出した小刀が胴体を二つに斬った。血飛沫と共に、粗い狼の体毛が頬をかすめた。

斜め前と後ろに、二頭の狼が息を潜めていた。その二頭以外に、獣の気配はなかった。精一郎は思いきって大きく息を吸った。そして闇の中で初めて声を出した。

「おい、もういいだろう」

その語尾が、硬い空気を震わせた。余裕ができて口に出した言葉ではなかった。息があがり、余力がもう少しも残っていないと知った上で、ようやく出した言葉だった。何か声を出せば、敵もこちらの事情を悟って、そっと姿を消してくれるかもしれないという、淡い期待も働いていたようだった。

だが、確かに前と後ろに潜んでいる二頭の狼からは、何の反応もかえってこなかった。

凍った闇は押し潰されたように静まり返り、微かに二頭の吐き出す鼻息を、雪の面に漂わせていた。

二頭が動かないのは、次の攻撃を狙っているからだった。精一郎は両膝を曲げて雪の中に埋めた。そして、目を閉じた。

静かな世界に蹲っている自分がいた。

闇を見透かそうと、必死で両目を開いていた先程までの焦燥感がふっとかき消えて、ただ冷たいものの中で、小刀を携えている感覚だけが存在していた。揺れ動かない心に、安らかささえ感じ始めていた。

――静かだ。

心に浮いた思いはそれだけだった。どこか遠くの谷で、雪がすべって落ちる音を聞いたように思ったが、梢を揺らす風さえも凍りつくと、それが確かであったかどうか判然としなくなった。

無限の暗がりの中で漂っている心地良さに酔っていた。そして、心には恐怖も、勇気も、自分がここにいるという思いさえ、滲み出てはこなくなった。

雪の面を葉が一枚、寂し気に舞っていた。そう感じたのは、どれ程の刻がたったあとだったろうか。葉っぱの後ろに隠れるように、気配がゆっくりと近づいてきていた。それはまっすぐにやってくるのではなく、渦巻きの中心に向かうように、秘めやかな息遣

いで曲線的に迫ってきた。

不意に気配が形に変った。風に飛ばされた薄絹物が、地から宙に舞い上がるのが精一郎の胸に閃いた。すると、もんどり打ったそれらが、色のない雷光のように、一気に殺到してきた。

精一郎は身体を沈めてふた太刀、空を斬った。切っ先は獣の骨を断ち、薄い肉を薙いだ。背中に尖ったものが当ってきたが、痛みはなかった。獣の悲鳴と共に、二つの物体が雪の上に落ちた。一頭はキャンという鳴き声を残して、木立の奥深くに逃れていった。

精一郎はそこで初めて目を開いた。依然として何も見えなかった。小刀を下げたまま、膝を伸ばし、塞がれていた闇を斬り拓く思いで足を前に進めた。すこし深いところに足を踏み入れたらしく、左膝まで雪に沈んだ。

その時、左手の空気が歪んだようにうごめいた。雪の面を覆っていた一枚の闇が不意に起き上がり、手足をむささびのように伸ばして飛翔してきたようにすら感じた。

身を縮めながら小刀を突き出したが間に合わなかった。獣の牙がこめかみを突き、首筋に鋭い爪が立った。たまらずに精一郎は雪の上にもんどり打った。

左肩が沈み、顔半分が雪に埋った。もがく程に身体が雪に沈んでいく。残った狼は三頭で、その三頭目が最大の敵であったことが頭の隅で、悔恨となって点滅するのを見ながら、夢中で小刀を振り回した。

雪の上に出ていた顔を擦るように、風を身にまとった獣が翔び過ぎた。精一郎は上体を半転させた。起き上がろうとした動作だったが、雪の中で腕がすべって、どうした拍子か身体全体が仰向けになって雪の上で寝そべっている格好になった。

星一つない夜空から雪の粉が舞い落ちてきて顔にかかった。恐らく精一郎が掻き出した雪が、粉になったものなのだろう。

――さすがは山に生きる狼だ。

家で飼われている犬とは全く違うと、精一郎は観念した気分の中で思った。最後に放った一撃が、狼の腹を斬った手応えは感じたが、それが致命傷になるとは思えなかった。

――もう一度襲われたら、自分はもう生きて里に行きつくことはできない。

指先の筋も、脇の筋肉も、今は死に絶えていた。闇の中での死闘は、精一郎から全ての精気を奪い取ってしまったようだった。首から血が流れ出すのを感じていたが、それを止血する力も残っていなかった。痛みは頭の中まで忍び込んできたが、冷たい雪がそれを緩和していた。

それを心地良いと感じながら、精一郎は狼がもう一度襲ってくるのを待った。頭が痺れ、手足に何の感覚もなくなっているのを知りながら、次の襲撃を待った。

しかし、狼は襲ってこなかった。

気力が縄のような太さから紐となり、やがて糸のように細くなった。全てが消えてし

まう前に、平山子龍の声を聞いたように思った。

二

夜が明けかけていた。暗い空の表面を、箒でひとはきしたような薄い明るみが滲み出ていた。山の樹木の影も、微かだが空の下に識別できるようだった。

精一郎の身体は、雪の表面に近いところで仰向けに横たわったままになっていた。夜半の冷気が雪を凍らせ、精一郎の身体をそれ以上、雪に埋らせることから防いでくれたのだ。

静かに息を吸い、長く吐いた。それを二十数回繰り返した。その短い間に、空の色はもうひとはきされたようだった。樹木の枝と葉が、見上げる空の中に形を整えて浮き彫りにされてきた。

死んでいた細胞に、少しずつ新鮮な空気が送られていくのを、精一郎は薄く目を開いて、あたりの気配が鮮明になるのを見ながら感じていた。

手足の指先に、感覚が戻るにはさらに刻がかかった。両膝を曲げ、上体を捩って起き上ってみて驚いた。腹に、狼の死骸が一つ、乗っていたのだ。それを払って立ち上がると、さらにもう数頭、雪の上に倒れている狼のなきがらが目に入った。

二頭は精一郎が横たわっていた場所から二間と離れていない雪の上に、首と胴から血を流して倒れており、一頭は密生した熊笹の中に首を突っ込み、もう一頭は緩やかな傾斜の中程に倒れていた。

襲ってきた頭数ははっきりとは思い出せなかったが、六、七頭いたように思えた。傷ついて逃げだしたのでなければ、近くの熊笹か雪の中に倒れているはずだった。再び襲うために、仲間を呼びにいったとは考えられなかった。狼は思っていたより、ずっと小さかった。

歩こうとしたが、容易に足が動かなかった。やっと右足を踏み出したが、そのとたんにまるで棒のように身体が前に倒れた。そのまま、しばらく、精一郎は雪に顔を突っ伏していた。首をどちらにも回すことができなかった。

――凍傷にかかったのかもしれない。

雪の日、兵原草廬の庭で、何度となく平山子龍から雪中訓練を受けた。刀槍の打ち方だけでなく、数時間も雪の中で坐しているように命令を受けたこともあった。そのあとで、足の指が凍傷になり数日間歩くことができず、放塾になった南国出身の塾生もあった。

だが不思議と身体の細い精一郎は、雪の影響を受けなかった。坐している間、絶えず足の指先を動かし、そこに意識的に神経を置いて暖気を送り込んでいたからだった。そ

れは全て、師が教えてくれたのだ。

——まだ命があるのも、先生のおかげなのだ。

のそのそと起き上がりながら、精一郎は雪の上に倒れていた間、しきりに呼びかけてくる師の声を聞いていたことを思い出していた。

それはまだ師が十代の終り頃のことだったという。師は真冬に水風呂に入ろうと試みていたが、何度やっても失敗してしまっていた。戦さでは氷の張った池に潜る場合も起こりうるというのに、冷たさに気が遠くなり、たまらずに水風呂から裸の身体を放り出す度に、己れの未熟さを恥じた。

「だがある夜、一尺四方の袋に綿を詰めたものを腹に抱いて水風呂に入ると、それまで我慢できなかった水の冷たさが、嘘のように感じられなくなった」

師は淡々と、そして珍しく表情に嬉しさを隠して塾生に語ってくれたものだった。その時の話を、精一郎は折に触れて思い出すことがあった。

腹さえあたためていれば、雪山に閉じ込められても死ぬことはない。

そんなふうに自分に言いきかせることもあった。狼の襲撃を受けて眠っている最中、どこか遠くの方から、何度となく師の声が聞こえていたのだが、はっきりと聞こえた声は、精一郎の意識下に埋れていた思いを、呼び覚ますものだった。

「腹を冷やすな。物をあてて押さえろ」

師の叱責が、精一郎の脳を目覚めさせ、腕に動くように命じさせたのだ。眠りながら、夢中で探り当てたものが狼の死骸だったのだろう。

すると、自分は、襲ってきた狼に命を救われたことになる、と精一郎は思った。あのまま眠ってしまえば決して起きることはなく、初夏になって、この山中に、精一郎の屍が発見されていたことだろう。

やっと歩き出したが、足が思うように動かなかった。筋肉が凍土のようになっていた。血行も悪い。空は少しずつ明るみを増しているが、精一郎の気分は晴れることはなかった。依然として、胸の内側では、闇が色濃く残っていた。父に対して意地を通すような形で一人で旅に出たものの、何一つ、自分の思い描いていた状況に遭遇していなかったからだ。

手頃な枝を斬って杖にして、木々の少ない傾斜を這うようにして進んだ。里の灯りは全く見えず、遠くに目に入るものも、黒ずんだ山の影だけだった。

さらに踏み出そうとして、腰が流れた。踏みとどまろうとしたが抑えがきかず、無様に尻餅をついた。その拍子に斜面を転げ落ちた。杖は倒れた木に当ってすぐにどこかへはねとばされ、精一郎自身も頭や肩を切り株に何度か打ちつけた。

——危ない！

胸から叫び声が出たが、身体は全く意のままにならない。谷底に落ちていく自分の姿

が脳裏をよぎったが、その恐怖心さえ湧き上がる間もないくらいに、伸び上った身体はあちこちの木に当たりながら転げ落ちていく。

やっと止ったところが谷底ではないと知って安堵の息をついたが、道のない山中であることに変わりはなかった。ただ、あたりの雪は浅く、土の見えているところもあった。息が鎮まるのを待ちながら、薪を集めて焚き火をしなくては、と思った。

腕の届く範囲にある枝を集めるだけで、気が遠くなりそうになった。首から背中にかけて、肉が引き裂かれるような痛みが出て、それが精一郎の動きを窮屈にさせていた。枝が少しばかり集まると、背中の打飼いをはずした。手探りだったが、そこが鋭い牙で破り取られているのが分った。中に入れておいた小物のあらかたはなくなっている。

――もし、これを背負っていなければ、狼の牙にざっくりと背中をやられていたわけだ。

身体の感覚が鈍っていたせいで、その恐ろしい想像も、精一郎には実感を与えてこなかった。幸い火打ち石は左腰に結びつけた火打ち袋の中に入っていた。打飼いの中に残っていた懐紙を取り出し、かじかむ手で火打ち石を打ち合わせた。懐紙に火がつくまで四半刻かかった。それだけでありたけの力を使っていたのだろう、小枝に火が移っていくのを見たときには、再び睡魔に襲われ始めていた。精一郎は木に寄りかかりながら、チロチロと燃えている火を眺めた。そのささやかな暖かさがありがたかった。

三

揺り動かされているのは分っていたが、目が開かなかった。

「おい、大丈夫だか」

その声が耳に入り、頷いてみせたが、相手に通じたかどうか不明だった。

「歩げるか」

そういわれて、やっと半分目を開いた。薄ぼんやりとした灰色の空が広がっていて、ひげ面の男の影が覗き込んでいる。

――人がいたのだ。

そう安堵すると、地中に棲む得体の知れない何物かに引きずり込まれるように、急に気が遠くなった。男は舌打ちをして精一郎の身体を担ぎ上げたのだが、それも分からなかった。

次に目を開いたときは、勢いよく燃える火が見えた。狭い小屋の中には暖気が充満していて、男は火に鍋をかけているところだった。

「気付いただべか」

男は精一郎が起き上った気配を感じたらしく、色黒の顔を向けた。小屋には斧もあっ

たが鉄砲も立てかけてあった。樵もするが、猟もするという男らしかった。何の獣か分からないが、それ程大きくない皮が二枚、渡された紐に吊されていた。

「傷口は塞がっでいだが、薬を塗っておいただ。んでもあんだ、若えのにえれえのう。あの山犬どもさ、一人でやっつけただげえ」

人のよい性格らしく、男は悪びれずににっと笑った。ひげの間から汚れた歯が覗いた。前歯が欠けていて、そのため初めは若く見えた男の年齢が、皆目見当がつかなくなった。

「お世話になりました」

精一郎は上体を起こしていった。土間に敷かれた藁に寝かされていたのだが、それが綿の蒲団以上に心地よかった。

「なんの。山犬さ、血ィ流して死んでだがら、何があったげと思うでな。谷さ覗いで見だら、人が倒れでいたんで、拾いにいったまでだ」

男は鍋の中を掻き回して蓋を閉じた。

「もうちっと休んでいろ。狸汁作ってやってるがら。煮たったら起ごしでやるがら」

精一郎は頷き、いわれるままに横になった。すぐに眠った。

「さあ、食え」

ほんの一瞬だと感じたのだが、四半刻はたっていたものらしい。男は椀に汁をいれたものを、差し出していた。まだ寝惚けていたが、ともかく礼をいって汁を口の中に流した。熱い汁が舌を打った。

「うまいが？」

男は小さな丸い目を向けて訊いてきた。精一郎が黙って頷くと、男は得意気に洟を啜り上げた。

「里のモンはあまり食わんが、こいつは精がつくんだべ。まだ寒いんだがら、ジーンとあったまるべ」

男は話しながら椀の中のものを食った。汁の中には小さな肉片の他に、芋とごぼうが入っていた。まだ頭がぼんやりしていたが、味噌の味のきいた汁はうまかった。

「おめえ、お侍様か」

ええ、と精一郎は頷いた。男はちょっと顔を曇らせたが、すぐに気を取り直していった。

「川越がらか」

「そうです」

そう答えたあとで、江戸といった方がよかったかなと思ったが、男は次の質問をすでに出していた。

「どこさいくだ？」

「栃谷村です」

「んだば、浪人狩りにいくだべか？」

男は人の好い顔を向けている。浪人狩りの意味が分からず、精一郎は目を上げたまま、次の言葉を待っていた。狼との闘いの途中で木刀をなくし、今は小刀を差しただけの精一郎は、武者修行の侍にも見えないし、ましてや御用の旅とは誰の目にも映らないはずだ。

「好きなだけ食えや。んで、もう少し休んだ方がええべ。ひどい傷だで、起きとったら熱が出るべ」

男はそれ以上話を続ける気はないらしく、椀を置いて立ち上った。足は短いが、肩幅が広く、精一郎の倍程もあった。

「わしは猪を追っかけてくっがら」

鉄砲を持つと、男はあっさりと出ていった。精一郎は鍋から汁をよそって、もう一杯飲んだ。温もりが身体の隅々まで行き渡るのを感じた。首といわず、背中といわず、身体の節々が痛み、坐っているのさえつらくなった。椀を置いて横になると、今度もすぐに眠りについた。

鉄砲の音を聞いたように思ったが、精一郎は起きなかった。目を覚ましたのは、身体に妙なねばりを感じたからである。

横になったまま顔を上げると、獣の皮を身にまとった男が、精一郎の身体に覆い被さっていた。いつの間にか精一郎が着ていた小袖を脱がして、身体を直接舐めていたのだ。

「何をするのです」

上半身を起こしていうと、男は驚いた様子もなく、欠けた前歯を見せて、鼻の上に小皺を寄せた。

「こうした方が、傷にはいいだに」

「いや、それは困ります」

白い肌が火に照らされて朱に染っていた。女の肌のように白いと妻木弁之進がよくからかってきたが、そういわれることが一番傷ついた。父は皮膚が黒いので母、縫の血筋を引き継いだようなのだが、一つ年下の細井萱次郎でさえ、行水の折などにはうらめし気な目をするので、精一郎は随分と恥しい思いをしたものだった。

精一郎が小袖を身につけるのを、男は口をへの字に曲げて睨んでいた。猟が不調に終り、その不平がそのまま顔に乗り移ってしまったのかと思ったが、そうではなかった。

首から吊していた巾着も、腹に巻いたさらしの中に入れておいた財布もなくなっていることに精一郎が気づくと、男の顔はさらに険悪になった。

「お世話になったお礼はします。私の財布を返して下さい」

「それはできねえ」

「なぜです」

「おめえのもんは、わしのもんだべや」

小ずるそうな小皺を鼻の上に寄せると、男は肩を怒らせて、上からのしかかってきた。殴り倒すというのではなく、押さえ込んでくる仕種だった。男の小さな目に、どろりとした油を流したような、好色の光が宿った。

恐ろしい程強い力が精一郎の両肩にかかってきた。男のぶ厚い掌が腋の下をさぐり、剝き出した前歯が肩に喰らいついてきた。傷の痛みより、欠けた前歯の先端で嚙みつかれる方がずっと痛かった。

——仕方がない。

精一郎はそう決心すると、上体をねじって男の上半身の裏側に肩を入れた。不意に目標を見失った男は、頓狂な格好で両腕を宙にあずけた。その男の左肘と肩に手をあて、軽くひねった。すると盛り上っていた男の肩が急にぺちゃんこになった。

「な、なんだべ」

男は白い眼をギロリと向けた。細かい唾が口の周りに浮いている。

「財布を返して下さい」

男は頬を脹らませるなり、右手で摑んで薪を振り上げた。精一郎はその手首を取り、手前に軽く引いてから送り返した。

「いでェー」

野太い悲鳴をあげた男は、狭い隙間だというのに、たまらずに半転して背中を土間に打ちつけた。精一郎は立ち上がり、身づくろいをした。男はひっくり返された亀のようになって、両手両足を上に向けてバタバタとやっている。

「な、何をしただ！」

「一刻もしたら元に戻ります。財布はどこです？」

男の上体を起こしてやってから、小刀を腰に差すと、男の動きは少し静かになった。無論精一郎には刀を抜くつもりはなかった。だが、少年と侮った相手が、意外に手強い技を秘めているのを知った男は、そうはとらなかったようだ。ひげの生えた顎をガクガクといわせて叫んだ。

「殺さねえでくれ。わしが悪かっただ。財布は壺の下にあるだ。殺さねえでくれ」

男は本当に震えているようだった。精一郎は男の視線の先にある壺を起こした。柔らかい土が盛られていた。そこを掘ると、財布と巾着が出てきた。

土を払って巾着から二つの一分金をつまみ出して土間に置いた。男は四肢を上に向けた無様な格好で、精一郎のすることを、おっかなびっくりといった目付きで眺めていた。

「これは世話になったお礼です」

そういうと、男は涎を垂らしながら、こっくりと頷いた。よく訳が分からないが、ともかくそうした方が無難だという計算が、一見愚鈍そうなその男にも働いたようだった。

荷を背中につけてから、精一郎は男に振り向いた。
「先程、浪人狩りといっていたようでしたが、あれは何のことですか？」
「あれは、食い詰めた浪人どもが、村に流れ込んできているからだべ。信州の方がら潰れ百姓も逃げてきているだ」
精一郎はちょっと考えてから、そうか、と呟いて、鉄砲を手にした。古いものだったが手入れはよくされていた。
「やめでけれ！」
何を不安に思ったのか、男は小屋を揺るがすような声をあげた。鉄砲を点検した様子で、若い侍が、鉄砲の扱いに慣れていると知ったのだろう。
「あなたは私を助けてくれた人だ。撃ちはしない」
そういうと、安心したのか、男は涎をどっと垂らした。肩の関節を外してしまうと、人によってはそういう反応を示すことがあると、妻木がいっていたことを思い出した。
「だが、この鉄砲を人に向けるようなことがあれば、きっと制裁をうけますよ」
男は目を見開いて頷いた。精一郎は男の傍に寄り、左肘を握って回した。コンと乾いた音がして男の肩が入った。男は信じられないといった顔で坐り直した。だがまだ右手が骨のない腕のようにぶらぶらとしている。
「私が山を下りる頃には、そっちも元通りになっています」

精一郎が小屋の戸を開けると、男は雨に打たれた熊のようにうなだれて、精一郎を上目遣いに見つめていた。
「かたじけない。おかげで命拾いをした。恩にきます」
そう礼をいうと、男は口を半開きにして頭を下げた。まだ、自分の身に起きたことが信じられないような顔付きだった。

身体の節々は痛んだが、猟師の塗ってくれた薬がきいたのか歩くのに不都合はなかった。小屋を出たとき、日のない空はすでに光を失いはじめていたが、足早に歩いたため、暗くなる前に栃谷関所に着くことができた。行ってみて初めて知ったのだが、そこは関所とは名ばかりで、門もなければ通行手形を吟味する役人もいなかった。昔そこに関所があったというだけで、いまは旅人の休憩所のようになっていた。厠を使う者だけでなく、木と木の間に渡した麻縄に干しておいた褌や肌着を、取り込んでいる老人もいた。
井戸があったので、精一郎は水を汲んで喉をうるおした。冷たい水が臓腑にしみわたり、それは血液となって指の先まで伝わっていくような気がした。まだ生きているのだ、と実感した。
随分ひどい怪我をしているべ。熊にでもやられただかな、そう囁く声が耳に入った。口元を拭って振り返ると、あわてて目をそらす者がいた。そんなにひどいことになって

いるのかと思って、精一郎は腹の中で赤面した。

そこを出ると、下りの急な坂道になった。水田は少なく、畑には陸稲が植っている。まだ苗が植えられたばかりで、いかにも心細げに揺れている。そこはもう忍藩阿部領十万石の領内だった。

日は少し冷たく、夕方の陰鬱な光が、村を暗くさせている。

——しかし、ここは、母のいる村だ。

そう思っただけで、精一郎の胸は高鳴った。

桜の木が門の内側から伸びているその前に、「一番」と看板の出た宿屋があった。二階の障子の開いたところから、白い着物が覗いている。巡礼宿だとすぐに分ったが、他に宿屋もなさそうなので、土間に入って訪いを入れた。

すぐに老婆が出てきたが、精一郎をじっと見つめるだけで、何もいわない。仕方なく、旅の者だが、泊めて頂きたい、と申し出た。老婆はもう一度精一郎の顔をしげしげと眺めていった。

「お部屋はみんなふさがっていますだで」

申し訳なさそうにいうその目に、不審の色が浮いている。精一郎は、ああ、といって笑いかけた。

「この額の傷は、ここへ来る途中、山犬に襲われて出来たもので、喧嘩をしたものではありません。ご安心下さい」

浪人狩り、といった猟師の言葉も頭に残っていた。老婆は、ちょっと待ってろ、といって奥に入り、出てきたときにはニコニコしていた。

「相部屋をさせてくれるそうだ」

それを聞いて精一郎はほっとした。身体を洗いたかったし、鏡で傷の程度を確かめ、薬を塗る必要もあった。気張って佇んではいたが、身体の方ではすぐにも横になりたがっていた。

出された盥で足をすすぎ、老婆の案内で階段を上ったすぐの部屋に入った。老婆の話では、この宿屋には四部屋しかないという。中には三人の巡礼姿の者がいた。

「お世話になります」

精一郎は跪いて礼をした。暗い隅で荷箱を開けて、何か捜し物をしていた様子の三人は、相部屋になる者が、若い武家だと初めて知ったようで、あからさまに緊張の表情を見せた。

三人は家族のようだった。精一郎より十歳くらい年上の、きれいな顔立ちをした女が、そっと精一郎を盗み見てから、はっとしたように顔をあげた。すると、それに合わせたように、老婆が皺だらけの顔を醜く歪めて精一郎を凝視した。

「あ、ちだ」

そう声をあげたのは、女の傍でちょこんと坐っていた五歳くらいの男の児だった。老婆があわてて男の児をたしなめた。

「いや、驚かせてすみません。昨夜、山中で道に迷いまして、山犬の襲撃を受けたのです。これはその折やられたものです」

精一郎は月代と首筋に手をあてた。

「どうやら、山犬の一匹が、私の頭の上にとび乗ったようなのです」

精一郎は笑っていった。すると男の児が声をあげて笑い出した。老婆が「これ」と叱ると、男の児は健気にも口を手で押さえた。その目がまだ笑っている。

くす、と女がたまらずに声を洩らした。老婆は憎々し気な顔で女を睨みつけた。

「熊谷の者じゃ。これは嫁の民で、こっちは孫の長太じゃ」

老婆はそういって女と男の児を紹介した。

「男谷精一郎と申します」

精一郎はあらためて頭を下げた。女は気恥しそうに上目遣いに精一郎を見た。その瞳が、薄暗い中だというのに川魚の腹のように濡れている。何故だか精一郎はドキリとした。

「風呂に入ってきます」

そう挨拶をして廊下に出た。狭い階段は足を置くたびにきしんだ音をたてた。帳場からよたよたといった感じで出てきた宿屋の老婆に、風呂の場所を訊くと、先に立って案内してくれた。

「お膳はお部屋に運んでおきますんで」

それが夕食の膳のことだと分ったのは、下帯一枚になって、湯を身体にかけたときだった。湯に浸ると、頭や首、そして背中が痛みでしみた。歯をくいしばって耐えながら、風呂の向こうに見える暗い畑を眺めていた。よく命があったものだ、という思いが胸に浮いた。それから相部屋になった三人連れの家族のことを考えて、秩父三十四ヶ所の観音霊場巡りの旅に出たのは、あの老婆の息子、すなわち、あの美しい女の夫がすでに死んでしまっているからなのだろうかと考えていた。老婆が口にした「嫁」という言葉は、そういう意味を含んでのことではないのか。

狭い洗い場で、用意してきた薬を月代にある傷に塗り込んだ。縦に三本の爪痕の入った引っ掻き傷は、長太という男の児がびっくりした通り、ひどいことになっていた。皮が裂かれ、骨の一部が剝き出しになっている上に、固った血がみみず腫れのように見えている。

首についた牙の痕は二つの穴になっていた。江戸から用意してきた薬は、切り傷に効くものだったが、果たして狼の牙で開けられた傷に効果があるかどうか分からなかった。

部屋に戻り、粗末な食事を終えると、三人に断って精一郎は先に休んだ。三つの並ん

だ枕元に横になる形で、壁にそって寝た。自分の肉体が泥のように感じられた。その泥が熱で茹だったようにのたうっていたが、起きて薬を飲む気力もなく、喘ぎつつ強引に眠り込んだ。

目が覚めたのは、全身に汗をかいて、呻いていたからだった。喉が渇いて、息ができない程だった。

人が起き上がる気配がして、精一郎の額に手があてられた。冷たい手だった。その冷たさが心地よかった。

「ひどい熱」

暗い中で女の呟きが洩れた。女は立ち上って部屋を出ていった。すぐに戻ってくると、精一郎の額に冷たい手拭いがあてられた。

「申し訳ありません」

掠れる声で精一郎はいった。すぐ近くで女の匂いが揺れた。

「水を……」

そこまでいったが後が続かなかった。さらに吹き上ってきた熱のため、意識がもうろうとしだした。微かに気力が戻ったとき、精一郎の唇が柔らかいもので塞がれた。少しなまぬるい水が舌に落ち、喉を通った。女が口移しで水を飲ませてくれたのだ、と思ったとき、意識は再び遠のいていった。

第十章　燭光

一

朝は、雨戸の節穴から洩れ入ってくる、淡い白さから始まった。障子に映った明かりは、夜の名残りをのせて、澱んだ池の面に浮いた雨月のようだったが、精一郎には、白みかけている外の様子が想像できた。

熱っぽく、身体もだるかったが、意識ははっきりしていた。昨夜、口の中に落してくれた一滴の水が、生気を蘇らせてくれたのは明らかだった。

あの水は、生命の水だ、と精一郎は暗い天井に目を向けて思った。それにおいしくて、甘かった。

母が与えてくれた慈愛に満ちた水のようにも感じたが、それは違っていたようだった。母が精一郎に残した香りは乏しく、その温もりにも記憶がなかった。それに、母は口移

しで水を飲ませてくれたりはしない。

傍から、三人の寝息が聞こえてくる。その中から女の寝息を聞き分けて、その呼吸にしばらく合わせた。女の恥し気で潤いのある瞳が胸に浮いた。するとすぐに安らかな気分になり、精一郎はたわいなく眠りに戻った。

次に目を覚ましたのは、下で雨戸を開ける音を耳にしたときだった。精一郎はためらわずに起き上った。

素早く身支度を調えながら、眠っている巡礼の三人を見下ろした。老婆は前歯を剝き出しにして鼾をかいていた。少年も口を開いていたが、寝息はかわいらしいものだった。廊下側に寝ている女は唇を閉じ、端整な顔を上に向けて眠っていた。昨夜はまともに女の顔を見つめるのが気恥しく感じたのだが、その理由が今になって分った気がした。女の顔が、いつだったか妻木弁之進がこっそり見せてくれた浮世絵に描かれた、美人画の女にそっくりだったからだ。

「どうだ、美しい女だろう」

妻木はそういって、細井萱次郎と精一郎の眼前に、一枚の浮世絵を開いてみせたものだった。それから顎を手の甲でごしごしとこすったのだが、それは何か愉しいことを喋り出すときの、妻木の癖だった。

「これは谷中にある茶屋の看板娘を描いたものだが、実物はもっと瑞々しく、麗容と評してもよいくらいだ。この女を目当てにどこぞの藩の家中の者から町人、老いぼれの百姓まで集ってくるが、女は笑顔ひとつ見せん。この取り澄ました風情がなかなかよいと評判を呼び、この茶屋は連日黒山の人だかりだ」

そのとき背後に四天王の一人、大釜紋三郎がそっと佇んでいたのだが、妻木は気付かずに得意になって喋り続けた。

「おれはこの茶屋女は武家の出だと見当をつけておる。何故茶屋で働いているのか分からぬが、家の事情か或いは何かの魂胆があるのではないかと睨んでおる。つまり、茶屋女は世を忍ぶ仮の姿で、その実体は市井の動向を探る、密偵の手先ではないかということだ」

「さすがは妻木殿だな。なかなか鋭い」

大釜が口を挟むと、妻木はこれはこれはといっていったんは下がる様子を見せたが、他にも数名、目を大きくして集ってきたのを知ると、これは内緒の事なのだが、といって声をひそめた。

「この女の場合は格別でな、大抵の茶屋女は愛想がいい。客の前でわざとこけてふくら脛を見せて客の気を魅こうとする女もいる。そうやって客を喜ばせるのだと店主に言い含められておるのだ。もっとも……」

そういって妻木は浮世絵を四つに折って懐にしまい、背中を丸めて萱次郎と精一郎

の目の奥を覗き込んできた。そのとき、妻木の口から微かに酒の臭いがしたのを、精一郎は覚えている。

「増上寺近くの料理茶屋では酒も出すところがあってな。気の弱い男だったら、女に引っぱられて奥に連れ込まれてしまうであろうな。ま、男である以上、女を知るのは当然のことだが、溺れてしまうのはよくない。その内、剣の修業などどうでもいい気分になってしまう。ここがむつかしいところでな、女を避けて生きるのも武士の習いであれば、女が持っている毒を承知の上で喰らって腹に納め、何事もなかった面で立ち去るのもまた修業の一つなのだ」

「それは吉原の遊女のことでありますか」

萱次郎の後ろで腰を屈めていた者が、ふいに尖った声を出して訊いたので、萱次郎は無残にも目玉をでんぐり返して振り返った。

「いや吉原の女は別だ。ここの女には段階があってしきたりがそれぞれ違う。詳しいことは話せんが、まず初会があり、二度目は裏を返すといい、三度目からは馴染みということになっておる」

「何が三度目なんですか」

「三度目といやあ、そりゃ……」

「何をくだらんことを話しておる」

質問者の後ろから厳しい声が起って、その場にいた者は縮み上った。とっさに床に這いつくばった者もいる。

「こ、これは夏目様。い、いつもご壮健でなによりでございます」

首を竦めた者の後ろから、小柄だがかくしゃくとした夏目信平の姿が現われると、妻木は顔をまっ赤にさせてそういった。

「兵聖閣では、女人の口説き方も講義するようになったのか」

夏目は元来温厚な人だったが、そのときは目尻を吊り上げた険しい顔になって妻木を睨みつけた。

「い、いや、その……」

いつもは剽軽な妻木も、師平山子龍の後援者であり、二千七百石の大身の旗本につく視線をあてられて額から汗を噴いた。

「さすがは女は妻木と噂されるだけのことはあるな。白首にも馴染みがあるようだな。ひとつ儂も妻木先生からご高説を承ろうか」

夏目はそういってにやりと笑うと、袴を叩いてその場に坐って胡坐をかいた。お、お戯れを、と呟いて腰砕けになった妻木に、夏目に付き添って戻ってきた下斗米秀之進が、とどめとばかりに大声でいった。

「それで妻木弁之進先生。三度目からは馴染みというておったが、何が三度目なのか、

詳細に説明してもらおうか」

妻木がその場に平伏して許しを乞うと、夏目をはじめ大釜や年かさの塾生がどっと笑いだした。萱次郎と精一郎だけは何のことか分からず、ぽかんとしていたが、だらだらと汗を噴き出している妻木に対して、誰かが「妻木殿の脂から女難によく効く薬が作れるのではないかな」というとさらに笑いは大きくなり、つられて二人も笑いだした。兵原草廬ではめったに笑い声が起こらないので、そのときのことは精一郎の胸に深く刻まれて残った。

宿屋の戸を開けて、朝靄の湧き出た外に出ながら、精一郎は自分の気持が重く塞がれていることに気付いていた。そこには失ってしまったものへの深い感傷も含まれていた。いつも腹をすかせ、つらいばかりで楽しいことなどほとんどなかった兵原草廬での三年間だったが、時折、木洩れ陽のように射し込んでくる光景が強烈で、修業の救いになった。

そこには人間臭さから転がり出た笑いがあった。先輩が心を砕いてくれる慈愛があった。友人が示してくれた情があった。男ばかりの集団だったが、時としてはっとする程清新な心の交流を見出すことがあった。

感傷は、それらの思い出が全て過去のものとなり、兵原草廬も潰されて、もう二度と戻ってくることのない時代であると認識したことから出ているのだ。師平山子龍が、七ツ（午前四時）から打つ木刀の音の響きも、下斗米秀之進が道場破りに対するときの剛剣も、吉里藤右衛門の米俵を二本の指で持ち上げる怪力ぶりも、妻木の市井放談も、もうみなで見たり聞いたりすることはないのだ。

精一郎は旅に出て以来、小舟で大海に漕ぎ出したような心細さをずっと感じていた。その気持の中には、明るさも混っていた。舟を漕いでいる限り、どこかの島に到着するだろうという思いがあったからだ。しかし、兵原草廬で過ごした日々を思う時、決して取り戻すことのできない世界への郷愁に心を掻き乱され、精一郎の胸の内ではきまって大雨が降った。今朝はことに、その感傷が強かった。

遠くの山に、桜の花の白さが滲んでいた。あたりに人の姿はなく、雨戸を開ける音がしたあとは、村は静寂に包まれていた。

精一郎は小川を渡り野原に出た。固い土を捜し出し、その上で小刀を振り上げたが、身体中が痛みで悲鳴をあげた。ようやく百本の素振りを終えたが、顔も胸も、米の研ぎ汁のような白濁した汗でベトベトになった。

一刻（二時間）程して宿に戻ると、同室の三人は出立の身支度をしていた。部屋に入ってきた精一郎を見て、巡礼の姿になっていた女は「まあ、すごい汗。いったいどうなさったのですか」といって、荷物の中から真新しい手拭いを取り出して、精一郎の額を叩くように

拭ってくれた。

精一郎より小柄な女は、そうするのに背伸びをしなければならなかった。そのため片手で精一郎の袖を摑んで絞るようにした。女の身体が揺れると、長太という子供がくすくすと両手を口にあてて笑った。

「もう大丈夫です」

精一郎は礼をいって坐った。女は「これをお使い下さい」と手拭いを差し出してきた。精一郎はそれを手に取って腋の下をごしごしと拭った。女は子供と並んで笑っていたが、老婆は陰険な目を向けていた。こんな婆さんが姑では、この人もさぞかし大変だろうと思ったが、無論口に出していうことではなかった。

「今日はどちらから回られるのですか」

傷口に薬を塗り込んでいると、子供に脚絆をつけていた女が、横顔を心持ひねって訊いてきた。それが札所巡りのことをいっているのだと理解するまで、すこし時間がかかった。

「あ、私は霊場巡りをするのではないのです」

それを聞いて、女はあらと小声でいったが、隅で笈摺をいじくっていた老婆はとんでもない、というふうに目を剝いた。なるほど、この人たちは、自分も札所巡りをする者だと勘違いして、昨夜は相部屋になるのを許してくれたのだな、と精一郎は思った。そう考えてみると、このあたりを訪れる者は、三十四ヶ所の観音霊場巡りをする巡礼の他には、薬を売る者か古着屋などの商人くらいしかいないはずだ。

「お武家様と真福寺までご一緒するんだといって、この子は楽しみにしていましたの。それでお武家様がお戻りになるまで、この子はぐずぐずとしていたんですよ」

女は息子の顔をまじまじと眺めていった。精一郎が長太に目を向けると、彼はまだ生えそろっていない歯を剝き出しにして、両目を手で押さえて上体をくねらせた。

「この子、お武家様が好きになってしまったらしいんです」

女は上気した頬を見せて、面映ゆそうに微笑んだ。戸惑って顔を伏せた精一郎だったが、視線をはずす瞬間、女の身体から芳しい香りが色づいて立ち昇るのを目にしたように思えて、それが余計に精一郎を狼狽させた。

「これは熱冷ましのお薬です。どうぞ服用して下さい」

姑を先に部屋から送り出したあとで、女はそういって小袋を畳に置いた。いや、これは、と言いかけた精一郎だったが、女の面に浮いた純朴で思いやりのある表情を目にすると、ではありがたく頂戴致しますといって懐に入れた。兵原草廬で修業したことのある者は、どんなに高熱が出ても、熱冷ましの薬は飲まなかった。戦場には薬がないというのもその理由の一つだったが、子龍先生から、熱が出たらせいぜい額を濡れ手拭いで冷やす程度にして、あとは熱が出るのに任せた方がいいと教えられたせいだった。

——高熱が身体に巣くった病原菌を殺すのだ。平熱では菌は死なない。いわば熱は救援隊だ。その熱を薬で下げてしまっては何にもならん。熱は下っても菌は体内で生き続けることになる。熱が出るのは、身体が菌と戦っている証拠なのだ。

兵聖閣での講義の途中で、子龍先生が何かの弾みでそんなことを言いだした。そのときの師の表情はおだやかで、なぜだか少し涙ぐんでさえいた。

もしかしたら先生はあのとき、熱っぽかったのかもしれない。巡礼姿になった女を前にして、精一郎はぼんやりとそんなことを思い出していた。

「民さんでしたね。昨夜はお世話になりました」

女に合わせて立ち上った精一郎は、そういって頭を下げた。顔を上げると、女の頬が赤らんでいた。あらためてきれいな人だと思った。

「今日は何ヶ所の札所を巡るおつもりなのですか」

送る言葉が見つからなくて、代りに精一郎はそんな質問をしていた。女の目に生気が戻った。

「義母は七番目の法長寺まで参るつもりなのですが、私はせいぜい語歌堂までだと思っています。山道は険しいと聞いていますし、義母やこの子の足ではとても……」

女は息子の頭に手を置いていった。下から姑の呼ぶ声がした。女は会釈をして細い背中を向けた。階段を下りだすと、長太が振り返って片手をあげ、にっと笑った。暗がりでその顔は金もくせいのように輝いていた。

二

麦飯と汁、山菜だけの貧しい朝餉を、精一郎はゆっくりと食った。味わっていたのではなく、いよいよ今日これから、母を訪ねるのだと思うと、心が騒いで落ちつかず、それをたしなめる気持が働いて、故意に時間をかけて食ったのだ。

頃合いを見計らって膳を下げにきた宿の老婆が、まだ口を動かしている客を見て、おろおろとしだした。精一郎はかねてから用意していた質問を、さり気なく老婆に発してみた。

「ちょっとお尋ねしますが、この村に斎藤という家がありますね」

老婆は表情を崩して精一郎を見返した。喉に飯が詰っているように感じた精一郎は、冷えた茶と椀に残っていた汁をたて続けに飲んだ。

「その家にはどう行ったらよいのでしょう」

「斎藤様……」

老婆は背中を丸めて畳に坐り、思案気に顎を上に向けた。

「斎藤様は三軒あるだども、どちらの斎藤様をお訪ねかの」

そんなふうに質問を返されると思っていなかった精一郎は、言葉を失って呆然とした。

「ご本家の斎藤様は、清右衛門様とおっしゃるけな」

老婆は窪んだ目でじっと見つめてきた。怪しんでいるようにもとれた。縫という言葉が喉まで出かかったとき、階下から老爺の呼ぶ声がして、続いて声高に詰問する若い男の声が聞こえてきた。

老婆が腰を浮かして、何だろうね、と呟いて障子に手をかけると、外から荒々しく開ける者があった。小刀を差し、尻を端折った男が二人、険悪な目付きで中を覗き込んできた。老婆は腰を抜かしたように畳にべったりと坐り込んだ。

「浪人改めでござる。率爾ながら、ご姓名とどこのご家中の方か承りたい」

土の付着した長芋のような長い顔をした役人が、立ったままそう訊いてきた。

「男谷精一郎と申します。父は徳川家に仕える者で御小十人組、男谷忠之丞です。私は所用があって当地に参った次第です」

そう名乗ると、役人の黒い顔に、一瞬ひるんだような色が浮いたが、すぐに威厳を取りつくろうかのように胸を張り出した。

「さようか。お連れの方はないのか」

「ありません」

「よろしい」

役人はもう一度狭い部屋の中をぎょろりと睨んで、障子を音をたてて閉めた。役人とはいえ、無礼な人達だ、と精一郎は思ったが、あえて口には出さなかった。その胸に生じた憤りのようなものが、精一郎から臆病さを吹き払った。

精一郎は箸を置いて老婆にいった。

「お縫という方のおられる家です。その家を訪ねたいのです」

「お縫様……そ、それならご本家です。代々この村の名主様をなさっているお家だに」

驚きからまだ立ち直れずにいる老婆は、けなげにも枯れた上体を半転させて、首を竦めたままそう答えた。

四万部寺の塀に沿って坂を下ると川にぶつかり、栃谷橋と書かれた小橋が架けられていた。老婆に教えられた道は、橋を渡らずに東へ上りの道を取れということだった。小石の転がる道の左右には、陸稲の他に大豆やネギを植えた畑が段違いに続いている。その先には桑畑が広がっている。

辻を曲がると不意に土塀に囲まれた大きな家が現われてきた。角から門までは半町程もあった。正面に立つと改めて家の大きさが感じられた。母屋の表間口は二十間以上もあり、馬屋から二頭の馬が鼻を鳴らしたり、蹄で土間を打つ音が聞こえてくる。

栃谷村の家数は百五十軒程で、石高は三百石未満であると江戸を出る前に調べてきた。

水田が少ない為、男たちは畑仕事のあい間に山稼ぎを、女は養蚕や絹織物に精を出すと物の書物に書かれてあったので、母屋の左手に建っている七間程の別棟には、さしずめ四月の孵化を待つ蚕種が納められているのかもしれない、と精一郎は思っていた。

門から壮大な藁葺き屋根を持った母屋と広い庭を、気後れした思いで覗き込んでいると、野良着の百姓が、布切れを頭から被り、脇に筵をかかえてひょこひょこと出てきた。精一郎は男の前に佇み、「お尋ねします」と声をかけた。

いきなり声をかけられた男は、まっ黒に日焼けした顔を、鍋底のように引き伸ばして精一郎を見た。

「こちらは、斎藤清右衛門様のお家だと伺って来たのですが」

男は何もいわず、小さな目を見開いたまま首を伸ばして頷いた。

「こちらに、お縫様というお方がおられると存じますが、ただいまご在宅か、ご存知でしょうか」

男は口を半開きにして、まだ黙って精一郎を見つめている。その目が月代や首筋に向けられているのを知って、この人は狼の爪痕に驚いているのだろうと思っていた。

「この傷は粥新田峠を越える最中に、山犬に襲われてできたもので、怪しい者ではありません。私は江戸から参った者で、男谷精一郎と申します。ここにおられる……」

そこまでいうと、それまで地面のように無表情だった男の顔に、不意に波が立ち、

驚愕の色が走った。男は正面を向いたまま、二、三歩後ずさりをすると、くるりと身体を回して暗い、洞窟のように口を開けている土間に駆け込んでいった。どうしたのだろう、といぶかしく思ったが、精一郎には男が驚いた理由が分からない。

門を入り、ゆっくりと母屋に近づきながら、もしかしたら斎藤家で働く人達は、皆、母に男谷精一郎、かつては新太郎と呼ばれた息子があることを知らされているのかもしれないと思った。すると、注進を受けた母が、びっくりして裸足のまま飛び出してくるかもしれない。精一郎の胸は急に高鳴った。

庭の中央に佇んで、必死で冷静になろうと土間に目を向けていると、突棒を持った男が弾かれたように暗がりから飛び出してきた。続いて鉄砲を持った猟師らしい男と、褌姿によれよれの上っぱりをつけた若い男が出てきた。猟師はこれから山に入るつもりでいるのか、広口の袖の上衣に軽衫袴をはき、脚絆をつけていた。最後に、最前話しかけたばかりの百姓が、沢蟹のように上体を縮めて朝の光の中に出てきた。

「お武家さん、ここの家にどんな用があって来たんだ」

語尾に強い訛りを含んで口を開いたのは、先程「一番」の旅籠に、浪人改めをしにやってきた役人の内の一人だった。さっきは口をきかなかったが、ずっと精一郎を険悪な目付きで睨んでいたのが気にかかっていた。

「ここにおられるお縫様を訪ねて来たんです」

「そんな人はここにはいねえ」
叩き潰すような荒っぽい口調で男はいった。いや、しかし、といって精一郎が一歩前に踏み出すと、男は突棒を斜めに振り上げて身構えた。
「それ以上寄っちゃあならねえだ。徳、かまわねえから火縄に火をつけるだ」
男は傍にいる猟師に命じた。猟師は懐から革袋を取り出した。
「ちょっと待って下さい。私は喧嘩をしにきたのではない。お縫様に会いに来ただけなのです」
「んだから、そんな人はいねえといっただべ」
「いや、私は確かにここに住んでおられると聞いてきた。清右衛門さんの娘のお縫様です」
「出てけ。この家からも、村からも出てけ」
「何故です。何故こんなことをするのですか」
精一郎は悲鳴をあげるように叫んでいた。母屋の開け放たれた板間の居間の障子に、人影が映ったのを見逃さなかった。声を大きくしたのは、その影が母のものではないかと直感したからだった。
「おめえは白子村で人を殺しただべ」
注意深く精一郎の様子を探りながら、突棒をさらに高くかかげて村役人らしい男はいった。
「その人殺しが、斎藤様を訪ねてやってくる、つう知らせが届いていただ」
「……」
「おめえ、斎藤様に因縁でもふっかけるつもりだかや。それとも、火でもつけるつもりだか。そんだごと、おらたちがさせねえ。徳、この人殺しに、よく狙いをつけるだ」
猟師は銃口を精一郎に向けて腰を落した。
「殺すつもりはなかったのです。その者たちは盗賊で、私から金を奪えなかった意趣返しに、報復を仕掛けてきたのです。そのことは白子村の名主も知っていることです」
目の前で身構える三人から目を転じて、精一郎は居間を閉ざしている障子に向っていった。動いたように見えた人影は、朝の光を受けた障子紙の背後で蹲ったままだった。
「盗賊もいたかもしれねえだが、おめえが殺した者は、村の若い衆だったというでねえか。そんな人殺しに用はねえ。斎藤様の家に入ることは許さねえ。とっとと出ていくだ」
「待って下さい。私は男谷精一郎といって、お縫様は私の……」
母といおうとして精一郎は言葉を飲んだ。村役人の目は狂気を帯びた人のように吊り上っていて、猟師の指は、引き金にかけられていた。この者たちに、母の名を出し続けることは、母への冒瀆のように思えた。

「この人殺しやろうが」

村役人の後ろから、褌姿の若者が鍬を振り上げて躍りかかってきた。忠誠心を示したつもりだったのだろうが、その激しい憎悪には殺意が籠められていた。

その男は、精一郎が身をかわすと勢い余って前のめりに倒れていった。直後に悲鳴をあげたので見ると、鍬の刃で自分の太股を刺していた。

「こ、こいつ」

村役人の両目が赤く充血して腫れ上った。

「待って下さい。私は出て行きます」

精一郎は村役人と猟師を制していった。土間の奥も居間も静まり返っていて、馬体を震わせる音だけが聞こえていた。家の奥で、家族や使用人が、息を殺して聞いているのが感じられた。

「出て行きますから乱暴はしないで下さい。ただ、私は今日一日だけは『一番』という宿屋にいます。夜までに、当家から何の連絡もなければ、私は明朝、江戸に戻ります。それだけは、お聞き入れ願います」

礼をしたが、村役人の殺気立った構えは解けなかった。振り返らずに門を出たが、猟師の手にした銃の銃口が、自分にぴたりと向けられているのが察知できた。背中を流れだした汗が、傷口にしみた。

坂道を下る精一郎の足取りは重く、痛かった。のどかな田園風景が、闇を切り裂く電光に打たれて震えているようにすら見えた。盗賊の頭領格であった正之助と、妹だとふれ込んだ登勢の顔が脳裏に浮いた。あの二人が、先回りをして、斎藤家に人殺しが訪ねてくると知らせたのだろう。二人の他に、この旅の間で、母の名を口に出したことはなかったからだ。

この旅の間に起きた、あらゆる不運が、あの盗賊どもとの出会いから始まっていることを思い直して、精一郎は唇を噛んだ。たかが盗っ人の逆恨みだが、そこから端を発して、自分と生母の間に、越えることのできない深い谷が出現してしまうなど、想像すら出来ないことだった。

「一番」に戻ると、精一郎は宿の老婆に、斎藤家からの使いがあれば、すぐ自分の部屋に通してくれるように伝えて二階に上った。

荷物の中から『孫子』第四巻を出して開いたが、ほとんど頭に入らなかった。夜になっても、訪れる者はなかった。

翌朝、六ツ（午前六時）の鐘の前に起きだした精一郎は、枕元に置かれた文を見つけて、急いで行灯に火を入れた。

男谷精一郎様、と漢字で書かれた宛名がまず目に飛び込んできた。武骨な書体だった

が、読みにくい字ではなかった。精一郎は指先が震えるのを感じながら、続きに目を走らせた。

「とちやばし　たもとのじんじゃにて　明け六ツより　おまち申しあげます　たつぞう」

書かれてあるのはそれだけだった。母からの便りか、それとも伝言でも書かれてあるのではないかと、沸き立った気持を抑えて読んだ精一郎は、いったんは落胆したが、すぐに思い直して身支度を調えた。昨夜はまんじりともせず、うとうととしていただけに、何者かが部屋に入ればすぐに気付いたはずだった。それが何の物音もたてずにこの文を枕元に置いていった者は、尋常の者ではないと考えたからだ。

小刀を腰にあてがうとき、精一郎はちょっと躊躇した。敵か味方か分からない。それに武士であれば刀を差さない方が不自然だ。江戸なら脇差一本だけを差して歩いても不審の目で見られる。旗本の子弟は大小二本の刀を差すものと決められている。

迷ったが精一郎はあえて丸腰のまま部屋を出た。たとえ呼び出した者に、どんな企みがあろうが、母の住む村で、無用の殺傷沙汰を起こしてはならないと思ったからである。

宿の者はまだ眠っていて、物音一つしない。精一郎は音をたてぬように戸を開き、外に出た。とたんに花の匂いに包まれた。あたりにたむろしていた花の精たちが、香りを嗅いでくれる人を見つけて、大喜びで集ってきたような錯覚にとらわれた。精一郎は、

幾分良い心持になって坂を下った。

神社は橋を渡った左手にあった。まだ六ツの鐘はつかれていない。畑にも人影はなく、乳色をした靄の下に村は静まり返っている。鳥居をくぐり、社殿の裏にまっすぐに向った。先に奥の院に祀られている神を拝むつもりだったのと、文を寄こした者がまだ来ない内に、先に待っていてやってくる者の風体を観察しようと思っていた。

杉の御神木に護られて、小さな神殿が建っていた。その色の褪せた祠の前で礼をし、精一郎は二度、低い音で手を打った。そして再び礼をしたとき、背後に空気の揺れを感じた。だが、胸騒ぎめいたものは全く起こらず、それであわてずに深々と神殿に向って頭を下げた。

振り返ると、六十過ぎの老爺とも見える男が、腰をかがめて精一郎に向って涙ぐんだような目を向けていた。その感傷の浮き出た表情を見て、精一郎の心の中で身構えていたものが、たわいなく崩れ落ちた。

「たつぞうさんですね」

「へい、辰蔵です。若様、ご立派になりなさいましたねえ」

辰蔵は洟を啜り上げて精一郎を見上げてきた。だが、二度まぶたをしばたたくと、耐えられなくなった涙がぼろぼろとこぼれだした。

「おまえは私を知っているのですか」

辰蔵が涙を袖で拭うのを待って訊いた。へえ、と頷いた辰蔵は、今度は反対側の目をごしごしと拭いた。

「わっしは、番場町のお屋敷に二十八年前に奉公に入った者でございます。若様がお生まれになったときにも、お殿様にお仕えしておりました」

「そうだったのか」

それで辰蔵の涙の理由が分った気がした。この老人は、赤ん坊だったころの自分を知っているのだ。

「それで、父上に仕えていたおまえがどうしてここにいるのだ」

「奥様がお屋敷をお下がりになりますときに、お殿様がわっしともう一人、カネと申します下女をおつけなさって、無事ご実家までお送りするよう、申しつけられたのでございます。わっしとカネはそれ以来、番場町の屋敷には帰らず、栃谷に留って奥様のお世話をしているのでございます」

母が江戸を去って十三年近くになる。精一郎は吐息をついて訊いた。

「斎藤の家では食い扶持が二人も増えて、迷惑がらなかったのですか」

「それが、事前にお殿様から斎藤様の所にお使いがあって、給金と一人二石分の扶持米を毎年送るから、わっしらをこちらに置いておくようにとのご命令が下っていたのです」

「それはひどい」

「いま、ご実家に戻っては、奥様は一人ぼっちでさみしい思いをするし、遠慮やいやな思いをすることもあるだろうから、気心の知れた者がついていた方がよいというお殿様のご配慮だったのです。わっしらも、江戸の暮しより田舎にいた方が性に合うし、ありがたく思っております」

そういうと、辰蔵は二、三歩前に出てきて、まだ濡れている目で、精一郎をまじまじと見つめた。

「奥様に生き写しでございますねえ。若い頃の奥様は、色が白くて、それはそれは美しいお方でございました。近頃は、お身体を悪くして、少しお痩せになりましたが」

「母上は、昨日私が参った斎藤の家におられるのですか」

勢い込んで訊いた精一郎に対して、辰蔵は弱々しく首を振った。

「おられません。先代の与左衛門様がお亡くなりになった八年前にご実家を出られまして、横瀬にあった分家に移られたのでございますが、そこにいるのも落ちつかなくなりまして、二年前から荒川を渡った巴川にお住いでございます。湯温は低いが奥様のお身体によい、いい湯が出ますもんで」

沈痛な表情になると、辰蔵はさらに老け込んだように見えた。

「では、辰蔵は私が栃谷に来たことをどうして知ったのだ」

「昨日の昼過ぎに、わっしは本家に参りましたもんで。そん時、男谷家の侍が来たと聞きました。奥様のお兄様にあたります清右衛門様は、男谷の名を耳にしただけで血相を変える程のお方ですんで」

「父のした仕打ちを憎んでいるのですね」

「それもありますでしょうが、もともと旗本、御家人がお嫌いな方で。奥様が男谷家と係り合いを持ったというだけで、実の妹であります奥様を遠ざけるような有り様で……」

そういう事情があったのか、と今さらながら精一郎は母の運命の苛酷さを思った。名主の清右衛門という人は、母の実父だと思っていたが、兄では実家にいづらくなるのも無理はなかった。

「では、母上は私が栃谷に参ったことを、まだ存じていないのですね」

「ご存知です」

低い声で即答した辰蔵の言葉は、精一郎の胸を矢のように貫いた。

「ご存知なのか!? では、では、これからすぐに母上の許へ参ろう。話は道々聞く。それでよいな、辰蔵」

気負い込んで促したが、辰蔵は地蔵のように固って、その場を動かずにいる。

「どうした辰蔵、私は江戸から母上にお会いしにやってきたのだ。是非ともお目にかかりたくて訪ねてきたのだ。何故動かないのだ。何か不都合なことでもあるのか?」

不吉な思いを吹き払う勢いでそういったが、辰蔵は首一つ動かさずに、苔むしたように立ち尽している。そのとき、精一郎の胸に、突風が衝き当ってきた。まさかと思ったときには、口に出して尋ねていた。

「母上はどこぞに嫁がれたのではあるまいな」

辰蔵は目を上げた。

「そんなことはございません。奥様は、ずっとお一人でございます」

赤黒く頬を膨らませた辰蔵は、それでは言葉が足りないと思ったのか、いきなり唇を震わせて喋り出した。

「生前、大旦那様が何度か縁談をもちかけられたことがございます。秩父の大旅館のご長男とか、熊谷の商家の主とか、かなりの良縁を持ち込まれたようでございますが、大旦那様がどのように申されましても、奥様は、いやですとはっきりとお断りなされまして、しまいに大旦那様もさじを投げた格好になりました。ここに戻られた当時の奥様はまだ二十一歳でございましたから、それはそれはお美しゅうございました」

「辰蔵」

精一郎はきつい声でいって、眉間に深い縦皺を刻んでいる老爺を睨みつけた。

「私は、もし母上が、私がここに参っているのをご存知なら、すぐにお会いしに行きた

いと申しておるのだ。なぜそれに答えてくれないのだ」

「奥様は、お会いしたくないと申されております」

辰蔵の身体が、再び緊張で溢れた。

「なに？　会いたくないとな。何故だ？　何故会いたくないなどというのだ。赤子の時に見たきりの息子に、会いたくないなどという母親がいるものか。事情があって離れ離れになったが、母上はあくまでも私の母だ。何故会わぬというのだ」

「奥様のお気持をお察し下さい。若様」

そういったあとで、辰蔵は重いうめき声を洩らした。

「番場町のお屋敷を去られたときから、奥様は若様は産まなかったものとあきらめられたのでございます。しかし、一日たりとも、若様のことを思い出さなかった日はないとわっしは思っております。一番つらかったのは奥様でございます。やっと死んだものとあきらめがついたものを、今、むし返してどうなさるというのですか。お会いになったあとで、また死ぬ程の苦しみをおかかえになるのは、奥様の方ではないですか」

辰蔵の目から滴のような淡い涙がこぼれ落ちた。精一郎は辰蔵の肩を摑んで揺すった。

「私は会う。母上にお会いするぞ。母上だってもう何も遠慮することはないのだ。私を育ててくれたもう一人の母は、六年前に亡くなっている。母上は番場町の屋敷に戻ってこられてもよいのだ。私が父上にかけあう、会ってそう母上にお伝えする」

「その申し出は、再三、お殿様から伺っているのでございます」

急にしんみりとした口調になって、辰蔵は思いがけないことをいいだした。精一郎は辰蔵の肩から手を離して、苦痛に満ちた表情で唇を噛みしめている老爺を見つめ直した。

「父上が？　父上が母上に、屋敷に戻るようにいったというのか」

「さようでございます」

「それで……」

そういったが後が続かなかった。父は、何故ひとことも、そのことを自分に伝えてくれなかったのか。その疑問が精一郎の胸の中で噴き上った。

「それで、母上は何とお答えになったのだ」

「戻るつもりはございません、とお答えになられたそうでございます。理由は申されなかったそうです」

「そんな、そんな馬鹿なことがあるか……。父上がそんなことを……私には信じられない……なのに、母上はどうして、どうして戻ろうといって下さらなかったのだ。どうして、私の母として、私を待っていて下さらなかったのだ、何故だ」

精一郎の胸の内は嵐になっていた。その嵐を鎮めるすべも、身を隠す場所も見つからなかった。ただ、捨て犬のようにびっしょりになって、風雨に打たれたままになっていた。

「私はお会いしに行くぞ。母上に会いにいくぞ。何故私の母であることを拒むのか、会って直接お伺いするぞ。そうしなくてはならないのだ」

歩き出そうとした精一郎の身体が砂袋でも引きずっているように重くなった。気がつくと、辰蔵が腰に腕を回して、両足を地面に長く伸ばして精一郎に貼りついていた。

「離せ辰蔵。おまえには私の気持は分からぬ。母上の気持も分からぬ。親と子は、会って話せばよいのだ。そうしさえすればよいのだ。他人の斟酌(しんしゃく)などいらぬ。私は巴川へ行くぞ、すぐに行くぞ。離せ」

「なりません、若様、こらえて下さい。奥様が心を鬼にしてお会いしたくないといっておられるのです。今日、ここに来たことも、私の一存でしたことなのです。奥様は何も知りません。もし、どうしても行かれるとおっしゃるのなら、この辰蔵を殺してからにして下さい」

「よし、殺す、殺してやるぞ辰蔵」

精一郎は腰をひねり、辰蔵の浮いた片腕を取って地面に投げとばした。老いた辰蔵の身体は猫のように軽かった。

「おまえが聞いたふうなことさえ口にしなかったら、私は何の引け目を感ずることなく、母上にお会いすることができたのだ。おまえさえ、いらぬことをいわなければ……」

仰向けに地面に身体を伸ばした辰蔵は、観念しきって濡れ蒲団のように横たわっていた。精一郎はしなびた辰蔵の喉元を指で挟んだ。

「おまえを殺せば母上とお会いできる。そうだな、辰蔵。それで邪魔する者はもういなくなるのだな」

辰蔵は何も答えなかった。閉じた目蓋(まぶた)の裏側が、虫でも這っているかのように小刻みに震えている。

精一郎は指先に力を込めた。老人の喉を潰すのは簡単だった。本来なら力を入れる必要はなく、饅頭(まんじゅう)を潰す握力があれば充分だった。指先に力が溢れているのは、喉元を挟んでいるからではなく、ただいたずらに指先を緊張させているせいだった。

だが、精一郎に老爺を殺すことはできなかった。江戸から母に付き従って草深い栃谷にやってきて、十三年間を忠実に母の下僕として働いてくれた辰蔵という老人を、殺すことなどできなかった。

力のみなぎった指先は、辰蔵の喉元を絞める代りに、指の関節を白くさせた。その手の甲に、精一郎の目からこぼれた涙が落ちた。

――母上、私が会いにいっては、母上を余計に苦しめることになるのですね。生きている息子に会うということは、母上にとっては、息子の死を見ることよりつらいことなのですね。

自分の叫びが胸の中で半鐘のように響き渡った。頭の中も、胸も、どこもかしこも火

車になっていた。焔が心を焦がし、火の粉が身を包んだ。来るべきではなかった。いや、生きているべきではなかったのだ。そう思った。狼の唸り声と、凍りついた雪の冷たさが懐しかった。

神社の外の道を、誰かが通っていく気配がした。朝靄は晴れて、空には霞が流れだしていた。精一郎は辰蔵の上から身を起こして、袴の泥を払った。

「辰蔵、私は江戸に帰る。おまえも私と会ったことは忘れてくれ」

虚脱感で身体の中は空白になっていた。重いはずなのに、前に送り出す足の重みも感じなかった。

「若様」

後ろから辰蔵がそういった。精一郎は振り返らずに歩き出した。社殿の前に出たら、もう一度拝もうと思っていた。

「若様、奥様は若様がひどい傷を負っておられることもご存知です。わっしが申し上げました。山犬に襲われて、月代にも爪痕があると申し上げました。斎藤様の下男から聞いた通りのことをお伝えしたんです」

狼だけではない。松平大和守の家中の者から、なぶり殺し同然で受けた傷もまだ残っている。まだ背中には穴が開いたままになっているのだ。

精一郎は自嘲気味にそう思っていた。だがそれも、もうどうでもよい気がした。

「そうお伝えしましたら、奥様は悲しそうなお顔で俯かれ、しばらく肩を震わせておられました。そして、かわいそうにと呟かれました」

耳に入ってくる辰蔵の喋りを聞いている内に、足に重味を感じだしていた。背中に受けた傷の痛みもぶり返してきた。

「それから『鹿の湯ならば、傷にもよく効くのに』とおっしゃって、『数日逗留なされればよいものを』とわっしに顔を向けていわれたのです」

精一郎は足を止めた。

「それはどう解釈すればよいのだ。母上は私に、その鹿の湯に行って養生しろと申しているのか」

前を向いたまま、背後の辰蔵の様子を窺っていた。辰蔵の喉から、掠れた息が洩れた。

「私がその湯の宿に逗留しておれば、母上は訪ねて来て下さるということなのか」

「いえ、そういうことではございません。たとえ、どのようなことが起きようとも、奥様は若様とはお会いになることはございません」

弱っていたはずの辰蔵の口調が、急に自信に満ちた断定的なものになった。

「ですが、若様に、宿に泊って、鹿の湯で傷を治してほしいと願っておいでなのは確かです」

「辰蔵」

そういって精一郎は振り返った。臆病そうな老爺の顔があった。小皺に囲まれた目を見つめて、精一郎は問い質した。

「作り話ではあるまいな」

「滅相もない」

老爺は首を竦めた。つとめて落ちついて精一郎は訊いた。

「その、鹿の湯というのは、どこにある」

「熊倉山の麓で谷津川の上流です。そうそう、秩父観音霊場の三十番目にあたる法雲寺から半里ばかり奥に入ったところです」

「今夜中に着けるか？」

「それはちょいと無理でしょう」

「母上が教えて下さった湯だ。きっと今夜中に着いてみせる」

辰蔵は目を窪ませて、茫洋とした顔を見せていたが、どうやらそれは、この老人が少し安心したときに見せる表情らしいと精一郎は気づいた。心の内で微笑が洩れた。

いったん歩き出した精一郎は辰蔵がのそのそと付いてくるのを知ると、もう一度振り向いて訊いた。

「昨夜、おまえは私の寝ている部屋に忍び込んだのか？」

へ、といって辰蔵は唇をひょっとこのように突き出した。

「昨夜は、わっしは、おカネとずっと一緒にいましたです」

「では、私の枕元におまえからの文を置いたのは誰だ」

「宿の婆さんです。わっしが誰にも気付かれねえようにそっと置いておいてくれと頼んだんです。多分、婆さんは、行灯の火を消しに部屋に入ったときにでも文を置いたんでしょう」

「そうだったのか」

口元に自然に笑みが浮いた。

「分ってみれば、簡単なからくりだな」

それから精一郎は、はっきりと分かる笑い声を出した。辰蔵はいぶかし気に精一郎を眺めていたが、何故笑ったのかを、老爺に説明する気は毛頭なかった。精一郎は腹の中で、そうか、昨夜はカネさんと一緒だったのか、と呟いていた。

三

宿屋に戻ると、老婆に握り飯を用意してもらい、草鞋を二足買いそろえて荷の中に入れ、精一郎は鹿の湯めざして出発した。四万部寺の観音堂に納められているという行基作の聖観世音には、土塀の外から手を合わせて歩き去った。

定峰川にかかる栃谷橋を再び渡ると、すぐに「みぎ三番　ひだり二番」と石に刻まれた道しるべが立っていて、道は二手に分かれていた。

宿の老婆からはとりあえず、第十一番目の札所である常楽寺めざして横瀬川に沿って進み、熊谷から来ている街道に出たら、あとは大滝村方面に行けばよいと教えられた。

精一郎は道しるべの前で立ち止って顔を左に向けた。野草に覆われた道の先は、鬱蒼と茂った木立が続き、道の見えなくなったその向こうには小高い山が聳えている。二番札所の真福寺はその中腹辺にあるのだろう。山には緑や黄の葉に混って、山桜の花がおとなし気に咲いている。

道を右手にとって歩き出しながら、精一郎は昨日宿屋で別れた三人の巡礼の姿を思い出していた。多分今頃は、語歌堂を出て六番目の札所に向っているのだろう。底意地の悪そうな姑を励ましながら、あの民という女は、息子の手を引いて巡礼道を歩いているはずだった。端整な顔の上に浮いたやわらかい表情が、精一郎の脳裏いっぱいに広がった。すると何故だか胸が苦しくなった。切なさとやるせなさが大きな網に捕えられて、身動きできなくなっている気がする。幾つも年上の女の顔を思い浮かべて、意気消沈して歩いている自分はどこかおかしいのではないかと思ったが、足はなかなか速くならない。

畑の中の一本道を、胸に重たい感傷を抱えながら歩いていると、不意に桑の葉の陰から巡礼姿の老婆が二人現われてきた。一体どこから出てきたのだろうと意外に思ったが、老婆達の方ではいきなり若い侍が出現したので、足を止めて目を丸くした。その驚いた様子が、まるで極楽で出くわした閻魔大王を見たようであったので、精一郎は頭を下げて驚かせたことを詫びた。

「この道はどちらに続いているのですか？」

老婆二人が出てきたばかりの右手の小道に顔を向けて訊いた。背の曲がりかけた方の老婆が首を捻って精一郎を見上げ、何事かぼそぼそと呟いた。何をいっているのか分からず、黙っていると、もう一人の老婆が「三番札所の常泉寺ですだ」とはっきりと聞こえる声でいった。

「橋を渡ってしばらく行ぐと屋根が見えてきますだ」

「そうですか。では、常楽寺へはどっちに行ったらよいのか、分かりますか」

道はまっすぐにも続いているし、左にも農道がある。老婆は懐から四つ折りの紙を取り出して広げだした。札所巡りの順路を図にしたためたものらしい。

「この先が第四番金昌寺、半里行くと第五番の語歌堂、んで、そごがら山に入れば第六番の卜雲寺に行ぐだども、おらたちはまんず第九番の明智寺に参拝しでがら、第七番の法長寺に向かうだよ」

「そうですか。それで第十一番目の札所の、常楽寺へはどういけば近道なのでしょう」

宿を出てきたばかりだというのに、こんなところで道草を食っていては、とても日のある内に鹿の湯まで行きつけないのではないかと内心焦りながら、精一郎は老婆の答えを待った。

「こおーっと、常楽寺は大慈寺の先で、おお、ここじゃ。語歌堂を過ぎて語歌橋を渡ると出てくるな。語歌橋から一里足らずじゃ。おおよそこの道をまっすぐに行かれたらええ」

老婆は手甲を巻いた手を上げて、正面の道を指し示した。もう一人の老婆は口の中でぶつぶつといっている。礼をいった精一郎に対して、背の曲った老婆に耳を近づけていた老婆が、不思議そうに顔を上げた。

「お武家様は、四番、五番の札所には参らないで、いきなり十一番に行ってしまうだか」

「ええ、そうです」

「他のどこも参拝しないだか」

「しません。今日中に第三十番まで行くつもりです」

そういうと、背を曲げてぼんやりと地面に顔を向けていた方の老婆が、首をぐるりと半転させて、肝を潰したような目で精一郎を見つめた。精一郎はもう一度礼をいって二人の老婆を置いて歩き出した。

語歌堂から先の札所、六番から十一番までは直線で行くのではなく、循環で参拝するようになっているらしい。そうであればどこかで民さんと会えるかもしれないと精一郎は思った。そう思うと急に心が弾んだ。自然に足早になった。鹿の湯に行くのが目的なのは勿論のことだが、少し位寄り道をしてもいいという気持にもなった。

武蔵秩父には十九の村があって、そのほとんどの村が霊場を持っていると聞いている。三十四ヶ所全てを回ったところで二十三里でしかない。そこを巡礼者は七、八日かけて参るという。第一番の四万部寺から第三十番目の法雲寺までは一気に行けば十里足らずの行程であろうし、自分の足なら、途中たとえ山道に入っても五刻程で行き着けるという自信が精一郎にはあった。地蔵を横目に見ながら、この道の先のどこかに民が、そしてたどりついた先の鹿の湯の旅籠には、母が待っているような気がしてならなかった。

四

金昌寺を過ぎると、手甲脚絆に草鞋がけ、白い笈摺を身にまとった巡礼達の姿が目につくようになった。そのほとんどが語歌堂をめざして、のたのたと歩いている老人達で、狭い巡礼道を遮るように進んでいるので、精一郎は追い抜くのに苦労をした。それでも子供を連れた母親らしい女の背中が前にあると、追い越し様さり気なく笠の下にある顔

を覗き込んだ。そしてその度に失望をしていた。

少年の声を聞いたのは、どうやら道を間違えたらしいと気付いた明智寺に近いあたりだった。来る途中で橋を渡ったが、それは老婆が口にした語歌橋ではなく、横瀬橋だった。それも語歌堂を過ぎて余程行ってからのことだった。巡礼者の後ろ姿を追っては追い抜いている内に、近道を通らずに正規の巡礼路を来てしまったものらしい。

ではこれからどう行ったものか、と農家の土塀を背に佇み、寺の屋根の彼方に聳える武甲山の雄姿を仰ぎ見ていると、「お侍さん」と声をかけてくるものがあった。見ると参道に続く木立の中から見覚えのある少年が転がり出てきて、精一郎に向って駆けてきた。

「おお長太か、この寺に参ったのか」

「ねえお侍さん、これ」

長太は手にした細い棒を突き出して得意気に鼻をうごめかした。生木の皮を剝いだばかりの匂いがした。

「きのうどっかのおじさんがけずってくれたんだ。ねえ、みてくれよ」

そういうと長太は棒を持った両腕をまっすぐに伸ばして、勢いよく振り下ろした。元気がよすぎて、棒の先が地面を打った。通りがかった老爺は、けわしい目で長太を見返したが、長太は無頓着だった。

「ねえ、いまのどうだい？」

「おまえは町人の子だろ」

「うん」

「町人の子が剣術を習ってどうするつもりなのだ」

「だって、おとうもどうじょうにいってたもの。死んじゃったけど、いつかおいらにもおしえてくれるっていってたもの」

「そうか」

「そうだよ」

「じゃあ、もう一回振ってみなさい」

長太は頷き、棒が自分の背中にくっつくくらいに振り上げた。精一郎はそっと腕をのばし、尾骶骨の上部にある仙骨の上に指をあてた。

「待て。ここに意識を置いて、ゆっくりと棒を振り下ろしてみなさい」

長太は急に生真面目な表情になって、棒を振り下ろした。からくり人形のような動きでかわいらしかったが、いかにもぎこちなかった。

「いしきってなに？」

「いしきとは……長太、おまえいくつになる？」

「六ツ」

六ツか、と精一郎は思った。口は存外に達者だが、六歳では理解できないのは無理もなかった。精一郎が剣術を習い出したのは、素読を習い出してからのことで八歳の時だった。一刀流の道場へは十歳になってから通いだした。

「では、この腰のところに、小さな穴が開いていて、そこから息を吸い込むつもりで棒を振り上げてみなさい」

そう教えると、長太は今度は前にも増して神妙な顔になって、棒を一振りした。

「よしいいぞ。それから棒を振り上げるときは、両肘を緩めることだ。緩めるから次の振りが伸びるのだ。毎朝起きたら、それを百回繰り返すのだ。何日かすると、急に肩が軽くなって感じられるぞ」

「うん」

長太の目は生き生きとしていた。一昨夜会ったときの、母親の陰にかくれるようにしていた怯えた表情が嘘のようだった。

人のそっと佇む気配がして横を向くと、笠を取った民が随分と上気した頬を上げて精一郎を見ていた。

「やっぱりまたお会いできましたわね」

民は挨拶を抜きに、潤いのある黒い瞳を精一郎にあててそういった。芳しい香りが、暖気にのってやってきたようだった。精一郎は返事を忘れて、気の抜けたようになって

突っ立っていた。

「この子があのお侍さんにまた会うんだと言い張ってきかなかったんですよ。でも会えてよかった。こんなに明るい顔しているの久しぶりなんですよ。ずっとふさぎ込んでいましたもので……」

民は精一郎から長太に目を移すと、しんみりとした口調になって呟いた。長太は、ほら、見て、といってしきりに棒を振り上げ、振り下ろしている。その仕種がおかしいのか、民は口に手をあてて笑った。

「みなさんは、今日はどちらに参られるんですか？」

やっと口をきくことができて、精一郎はそれだけをいった。民は上目遣いに精一郎を見た。黒い瞳と白い眼の部分がくっきりと際立って、眩い光を反射してきた。精一郎は光で脳天を撃ち抜かれたような気がした。

「法長寺から卜雲寺、最後に常楽寺までお参りすることにしていますの。こういうの、逆打ちというんですってね」

はは、といって精一郎は民に合わせて笑ったが、逆打ちとは何のことだか分からなかった。

左手に見える明智寺の簡素な門から、姑の老婆がよたよたと出てくる姿が目に入った。遠くからでも、笠を被った老婆の顔には、剣呑な色合いが貼りついているのが望見でき

た。

「お武家様も参拝ですか？」

民が首を傾げて訊いてきた。その唇が妙に濡れているのが気になった。一昨夜の、女との触れ合いが、閃光のようになって精一郎の胸をえぐった。

「いや、湯治です。こんな顔では人前に出られませんので……」

月代に浮いた、狼の爪痕に手をあてて呟いた。

「鹿の湯というところで三、四日湯治をするつもりです。傷によく効く湯だということですので」

「鹿の湯……」

民は眉間に細い皺をたてた。その表情すら美しいと精一郎は思った。

「法雲寺の奥にある湯です」

ああ、と民がいって頷いたとき、背後に来た老婆が、何しとるの、と尖った声を出した。振り返った民が、先夜のお武家様が、といいかけたが老婆は取り合わなかった。精一郎の方に憎々し気な一瞥を投げかけると、頭も下げずに、嫁と孫をせきたてて歩き出した。

「おさむらいさん、またあうよね。きっとあうよね」

老婆に襟首を摑まれた長太が、物悲しい顔でそう叫んだ。横向きに振り返った民が申し訳なさそうに頭を下げたが、老婆に遠慮してか何もいわなかった。三人の姿が橋を渡り、畑の間の巡礼道に入ってなだらかな坂を上っていくのを、精一郎は同じ所に佇んだまま見送っていた。三人の姿が雑木林に遮られて見えなくなると、ふっと重い吐息をついた。女のこれからの生活が胸をよぎった。

荒川沿いの街道から、谷津川沿いの林道に入る頃には、あたりは暗くなっていた。水音を左の耳でとらえながら上りの道を進んだが、月が黒い雲に隠されると、まっ黒い煙に包まれたように何も見えなくなった。提灯を用意していなかったのを悔んだが、この山中では、たとえ灯をともしても、大して役に立たなかったかもしれない。

ゆっくりと土を踏みしめて四半刻程いくと、人家の灯りが見えてきた。法雲寺の門前茶屋らしく、戸口は閉ざされていたが、中で人の動いている気配がする。通り過ぎるとき、女の笑い声も聞こえたので、巡礼だけでなく、商人も泊って酒でも呑んでいるのだろうと思った。足も腰も疲れきり、あちこちの傷が痛み出していて、すぐにでもその茶屋にとび込んで、一夜の宿を乞いたかったが、歯を食いしばって歩み続けた。

鹿の湯はそこからさらに半里程上った川の畔にあった。宿屋は一軒だけだったが幸い中から灯りが洩れていた。まず水をもらおう、それから湯につかりたい、喘ぐようにそう思い、精一郎は閉ざされた戸に向って拳を振り上げた。あまりの大きな音にびっくりしたのだろう、中からあわてて床を踏みしめる足音が響いてきた。精一郎は安堵しつつ、

ここでひるんではならないと気持を引き締めた。満室ですと断られても、なんとしても泊めてもらわなくてはいかん、と唸っていた。

五

二日経っても母からの連絡はなかった。それでも精一郎の身体のあちこちにできていた傷は、大分よくなったように感じられた。温泉は川に向った岩場から湧き出ていて、二間四方の湯船に溜められている。庇が湯船の上に張り出しているので、鳥の糞や木の葉が落ちてくることもない。早朝に入る温泉は、森から靄が湧き出してくる様子が神秘的で、ことのほか気持がいい。精一郎は湯から上がるたびに傷口に薬を塗り、身体のほてりを冷ますと、森の中を散策した。

三日目の夕方、いつものように脱衣場で浴衣を脱ごうと紐に手をかけると、戸がそっと開かれて女が顔を出した。精一郎が手をとめて女を見ていると、女はためらう様子もなく中に入ってきて、精一郎の傍に立って浴槽に目を向けた。湯面から湯気が立ち、樹林の隙間から洩れてくる弱い夕暮の青みが、浴槽を囲った岩場に淡い露を浮き上がらせている。

この時刻、自炊の湯治客は飯を炊き、七輪で魚を焼いている。もともと客数は少なかったが、夕刻には他に客が入浴しないのを見越して、精一郎は手拭いをぶら下げてやってきたのだ。今日は一刻半程みっちり山中で稽古をしたので、身体中から汗を噴き出している。部屋で浴衣に着換えて風呂場まで下りてきたのだが、浴衣にはもう汗が貼りつき出していた。

「……」

女は二十歳を幾つか過ぎているのだろう。外から内に顔を戻すと、何もいわずに精一郎の足元に目を落している。

「何か御用ですか」

あでやかな色彩の小紋の小袖を着た女は、村の女のようには見えなかった。商家の妻女風でもなく、江戸にこの女を置けば、料理茶屋の女中が一番適当かと見当をつけた。

「なんだぁ」

髪をひっくり返すようにして顔を上げた女は、丸顔の中にある細い目を向けて、ニヤリと笑った。厚ぼったい唇から白い歯が覗いた。

「天狗がいるっていうから来てみたら、きれいなお侍さんじゃない」

女はそういって精一郎を上から下まで無遠慮に眺めた。三尺と離れていないところで眺められて、精一郎は紐が解けなくなった。

「お邪魔しました」

女は首を傾げてそういうと、顔に薄笑いを浮かべて出ていった。精一郎はほっとして浴衣を脱いだ。下帯をつけたまま風呂に入り、村人の誰かが、山で鍛錬をしている自分を見て、天狗がいるなどと触れ回ったのだな、と考えていた。人に見られたとは感じていなかったので、村人もなかなか油断できない。

コトッ、と音がしたので振り返ると、今出ていったばかりの女が、手に浴衣と手拭いを持って戻ってくるのが目に入った。あわてて山に顔を向けたが、耳を澄ましていると、しゅるしゅると帯を解く音がする。湯に浸りながら背中から冷や汗をかいていると、目の隅に白い腕がにゅっと現われてきた。

「ごめんなさいましね」

女の声が耳のすぐ脇で響いた。精一郎は身体を固くして、はは、と応じたのだが、そのときには女は白い脛を湯文字から剝き出しにして、湯に浸っていた。

「ああ、いいお湯だこと」

女は身体を肩まで沈めて艶っぽい声を出した。湯は透明なので、女の胸が湯の中でたわわに揺れるのや、緋色の湯文字が鯉のぼりのように湯の中で泳いでいるのが垣間見える。見ようとして見ているのではなく、女が湯に波をたてながら精一郎の前を動き回るので、仕方なく目に入ってきてしまう。

「お侍さん、お若いのに、随分修羅場をくぐって来られたんですね」

女はいつの間にか後ろに回ってそう話しかけてきた。

「なぜですか」

「だって弓矢で射られた傷があるもの。ここに」

女の指が穴の開いた傷口にいきなり突っ込まれた。身を捩った精一郎は驚いて女を見返した。強張った表情になってしまったはずだが、女は平然としていた。

「背中だけでなく、肩にも腕にも刀傷があるでしょ。道場で受けた傷じゃないんでしょ。ご浪人には見えないし、得体の知れないお方ですねぇ」

湯に浸りながら、女はすずしい顔でいって、片方の口の端をひねり上げた。湯温が低いので永く浸っていないと傷には効果がないのだが、精一郎は女と一緒の湯に浸っているのが不快になってきて、いっそ出てしまおうかと思いだした。

その時戸が開かれ、床を音をたてて踏みしめて、男が一人入ってきた。男は中から「お、お駒さん」と声をかけて、すぐに裸になって湯にとび込んできた。精一郎に向って、どうも、と意味不明の笑みを浮かべて挨拶してから、女に親し気な笑みを向けた。

「しばらく顔を見ねえから、また江戸へ行っちまったのかと思ったよ。色男の許へよ」

「なにいってんですか、助三さんこそ江戸に置いてきた女の人に、まだ後ろ髪引かれてんじゃないんですか」

「それをいっちゃいけねえよ。ところでお駒さん、どうしていたんだね」

「おっ母さんの具合が悪いんで、看病に行ってたんですよ」
「そうかえ。おめえのおっ母あは、たしか吉田だったな」
「あんなけちな家に後妻に入って、牛馬のようにこき使われて、雑巾のようになっちまいましたよ」
女の声に怒りがこもった。話の様子から女は十年程江戸で暮していたことがあり、助三と呼ばれた三十半ばの男は、渡り大工のようなことをしているのが分った。
「昨日本町で浪人狩りがあって、二人捕ってぶち込まれたそうだ」
「ドジな奴等だねえ。なんだって町中を歩いていたんだろ」
「余程腹すかしていたんだろうよ。一体どこから湧き出てきたか知らねえが、あんな小役人にやられるようじゃ、とんだ田舎侍だわな」
「役人には、たっぷり鼻薬が嗅がされているって聞いたけどねえ」
「だからさ、はぐれ鳥の浪人どもなのさ」
浪人狩りという言葉は、前にも聞いたことがあったなと思い返していると、助三が四日前に捕ったという盗賊の話をしだした。和銅温泉と聞いて、そこなら栃谷から一里半程しか離れていないなと精一郎は胸の内で呟いていた。
「二人連れが、商人の財布を狙ったが見つかってよ、匕首を抜いて脅したところが反対にやられちまって一人は腹、も一人は背中を刺されて半死半生の目に遭ったそうだ。大方もう二人ともおっ死んじまったんじゃねえかな」

「何者だい、その、盗っ人を刺した商人というのは」
「それがよ、役人が来る前に姿を消しちまったそうだ。あの腕っぷしのよさから侍じゃねえかと宿の者は噂してたな。隠密だというやつもいたな」
「どこの領にも、城中のお偉いさんから放たれた隠密がうじゃうじゃしているというね」
お駒という女はそういってから、横目で精一郎の様子を窺うようにした。暗くなってきたせいか、口許を緩ませて左肩を湯から浮かせた姿は、流し目を送ってきた程の艶っぽさがあった。
「その二人組の盗賊にはもう一人女の仲間がいてよ、宿の者からのまた聞きだが、どっちかの妹だといっていたそうだ。なかなかの美形だったというぜ」
「男は女を見るとすぐそれだ。いい女に限って腹黒いものなのさ。妹であるわけがないよ」
「違いねえ。その女は男連中が争っている内に逃げちまったんだが、今朝になって、宝登山神社の裏山に、すっ裸にされて殺されているのが見つかったそうだ。大方野盗にでもやられたんだろうって話だ」
「ふん、盗っ人の情婦が野盗にやられてちゃ世話ないねえ」

女は小鼻に皺を寄せ、唇を尖らせて含み笑いをした。精一郎は助三の方に顔を向けて、お尋ねしますが、と口を開いた。湯を顔にぶつけていた助三は、声の出処を知ってひょっとこのような顔を向けた。

「その盗賊一味の名は分っているのでしょうか」

「そうさね、何とかいっていましたねえ。こおーッと女の方は分からねえが、男の一人はたしか巳之吉とかいったかなあ」

正之助、という名を胸に秘めていた精一郎は、ちょっとあてがはずれた思いがした。

「なんでも熊谷から川越にかけて縄張りにしていた連中とかで、他にも仲間があったらしいですよ。腹を刺されたのが、どうやら一味の頭領らしいんだが、狙ったカモが、商人の身なりをしていても中味はお侍だと見抜けないようじゃ、大した連中じゃありませんよ」

「正之助という名をいっていませんでしたか、そんなことを聞きませんでしたか」

「お侍さん、盗賊に知り合いでもあるのかい？」

お駒が横に来て茶々を入れたが、精一郎も助三も取り合わなかった。暗くなってきた中で、助三が湯の中で腕を組むのが分った。

「ああ熱くなった。もうのぼせちまいましたよ」

お駒はそういって、上目遣いで唸っている助三と精一郎の間を、泳ぐようにして通って湯から上っていった。小太りの下肢に、湯文字がぴったりと貼りついているのを、精一郎は薄明かりの下で目にとめた。動揺は起きなかった。

「正之助ねえ……ん、そういやあ、連中にはいくつも名があって、旅籠ごとに変えてるって話も聞きましたよ。正之助という名も使っていたかもしれませんね」

「登勢、弥助という名はどうでしょう」

助三は首をひねった。首を縦にしたときには、湯から胸を出す程に上体を伸ばした。

「登勢ねえ。さあ、なめえまでは聞いていなかったんでねえ。裸にされていたという処があっしは気になっちまって、そんなにいい女なら殺らねえで、もちっとマシな使い方ができたんじゃねえかと、そんな不埒なことを考えていたものでねえ」

へっへ、と笑ったようだが、その表情ははっきりとは分からなかった。湯に浮いた月が砕けて助三の表情を潰していた。

「助三さん、おカミさんに言いつけますよ」

浴衣を着終えたお駒が、髪を手拭いで巻きながらいった。そこへ行灯を持って宿の下女が入ってきた。下女は食事の用意ができていると精一郎に伝えてきた。

「お武家様は、あの盗賊どもと何か係り合いでもあるんですかい？」

「その連中はたぶん、私の財布を盗もうとした一味です」

頬骨の張った弥助が、初めて精一郎を呼びとめた時のことが胸に浮いた。正之助が

盃を口に運び、登勢がしなやかな指で銚子を手にしたときの情景も脳裏に蘇った。

「盗られたんですかい？」

「いや、私は銭はいつもここに吊している」

精一郎は首から吊した巾着を振ってみせた。湿った巾着の中にある銭は、重い音をたてた。

「ま、盗っ人の末路なんてものは、みんなみじめなもんで」

助三の呟きを聞きながら、正之助のおだやかな表情と、醜く歪んだ顔を交互に思い浮かべて、その通りだと精一郎は思っていた。恐らく、自ら酒に混ぜた毒から回復した正之助は、精一郎がまだ栃谷に到着していないのを知ると、斎藤家を訪ねて悪意の注進に及び、そのあと和銅温泉に回って、熊谷までの行きがけの駄賃を決め込もうと企んだのだろう。それが失敗に終ったのは天網恢恢疎にして漏らさず、というものだが、それにしても何故、あのような美貌を持って生まれついた女まで、悪人の心を持たなくてはならなかったのだろうかと、精一郎は哀しい思いで考えていた。

湯から上がると、少しフラついた。それは湯あたりのせいばかりでなく、もし、自分の母が、登勢のような運命を背負ってしまっていたらどうであったか、という思いが、精一郎の胸を掠めたからでもあった。

第十一章　夢幻

一

――精一郎どの。

呼びかけてくる女の細い声が、暗い彼方から響いてくる。その声は、幾重にも積み上げられた夢が混乱して、その軋みからいやおうなしに生じさせられたものだろうと、眠りながら精一郎は見当をつけている。

声は、二、三度こだまると、どこからか滲み出てきた乳色の靄に覆われて、声の主の影らしいものと一緒に吸い込まれてしまう。

「母上！」

胸の内でそう叫ぶ。叫びながら全身を震わせて靄を吹き払う。

夢だと分っていても、その人の姿をひとめなりとも目にとめたいと必死になっている。

その祈りが風を起こし、靄がいちどきに掻き消える。すると夜の海がすっとせり上ってきて、そこにはただひとつの夜光虫が、針でつついたようなささやかな光をまたたかせて海面を漂っている。

そこで精一郎は目を開く。天井の節目が、海流の衝突によって起きた渦のように見えている。

息が整うのを待つ間、今日も母上の姿を見ることができなかった、と夢の中味を思い返している。

淡い悲しみが湧きだしてくるのを唇を噛んで押しとどめる。母の姿が現われることがないのは、母が息子の記憶を、心の中から無理に棄て去ってしまわれたからだろうと考えると、自分の目の前にあるべきはずの道が、沼地から浸食してきた泥水に覆われて、水没していくのを目の当たりにしている感覚にも襲われる。

——母に誉められるひとかどの人物になろうと精進してきたのに……。

精一郎が二歳に満たない内に、男谷の家を出ていったという実母の面影を偲ぶのは容易なことではなかった。弟が生まれて数年経って、自分が母上と呼ぶ病弱な人は、父の妻ではあっても自分を産んでくれた人ではないことを知ってから、いつか実の母に会うことができたら、その人に、よくぞ御立派になってくだされたといわれるようにならなくてはと、ことあるごとにいいきかせてきた。兵原草廬の演武場での先輩達に混っての

荒行に耐えられたのも、母への思いに支えられていたからだった。

——でも、今日こそは母上にお会いできるかもしれない。母上は同じ秩父の地においでになるのだ。

鹿の湯で迎える四日目の朝も、それまでと同じように精一郎は自らをそう鼓舞させて起きあがった。それから山に入るための身支度を素早く整えた。

この日は、新たに削り直した木刀で五百本の素振りを終えても、ほとんど背中の痛みを感ずることがなくなっていた。前日までは頸の後ろから腕の付け根にかけて、時折、釣り糸が岩に引っかかったようにひきつれることがあったが、それも気にならなくなって、木刀を持つ腕が軽く感じられた。肩胛骨の付け根に違和感があると、肩が柔らかく動いてくれないのである。

狼の襲撃で受けた月代から額にかけての傷は、内側から盛り上ってきた肉が赤く腫れて、みみずが這っているようにも見えた。巡礼の老婆のなかにはあからさまにみつめる者もいたが、大抵の人は、あわてて目をそらした。傷痕が容易に消えないのは、狼の爪に潜んでいた菌がまだしぶとく生き残っているからだろう。

川越の「練武館」道場の門弟からしたたかに叩かれた腰と足には、まだ内出血が消えずに、皮膚の下に黒い染みをつけている。しかし筋肉は弾力を取り戻していて、これな

ら下斗米秀之進から紹介を受けた大宮郷にあるという、甲源一刀流の道場での申し合いも、数日内にはできるのではないかと精一郎は楽観して思うことがあった。

だが、この日も、母、縫からの連絡はとうとうなかった。居合い抜きで汗をかき、湯で傷を治し、『孫子』を読む合間に、二階の部屋から望める川堤に目をやり、母らしい人の姿を捜してみたが、その都度、寂寥感に胸を塞がれた。辰蔵から母の気持を聞かされたが、精一郎は理解できたわけではなかった。

――ここの湯で傷を癒せとおおせられたのだ、きっと母上はどこかで見ていてくださる。

朝、目を開いて天井を見上げて思い悩んでいたことが、日に何度となく形を変えて精一郎の心に言葉となって現われてくる。そのたびに胸が張り裂け、弾け、揺らぎ、どろどろになる。その間隙を縫って、精一郎の胸の奥底から悲鳴に似た叫びがあがる。

――母に会いたい一心で、父に逆らってまでも秩父にやってきたのだ、母にその思いが通じないはずがない。

その祈るような思いも、陽が落ち、枝葉が音をたて、山桜の香りが行灯の灯された部屋に、含み笑いをする童女のような無邪気さで忍び込んでくると、入れ違いにそっと消えてしまって、精一郎の心は夜の色で染め上げられた。

あまりにも毅然とした、悲しいまでの母のかたくなさを知って、一筋の淡い光さえ自分と母の間には射し込むことがないのではないかと、再び気弱な思いにとらわれてしまうのだった。その夜は目尻に伝う涙を何度となく拭ったため、なかなか寝付けなかった。

二

五日目の朝は宿を濃い霧が囲んだ。

精一郎が稽古袴をつけて、宿の裏庭に続く畑に出てみると、霧が、まだ夜の名残りを漂わせている空を、微細な虫が密集しているようなざわめいたほの白さで覆い尽していた。

いつものように、素振りと居合い抜きで汗を流した後、精一郎は川を渡って山に入った。

小刀を抜いて右手に持ち、足場の定まらない急斜面を、腰を割り、「浮き身」の足さばきで小走りに進むのである。

山には、宿にきた翌日の昼から入ったが、雑草や熊笹の陰に隠れて、木の根が張りだし、不意に尖った岩が突きだしたりして危険だった。だが、そこは「浮き身」を試みるにはふさわしい荒地だった。

待ちかまえる敵の間を駆け抜けざま、つぎつぎに突き倒していくその走法は、兵原草

廬での戦場を想定した実習に、十三歳で初めて参加した折に、平山塾の八傑のひとり、木村庄之助から教わったものだった。といっても手取り足取りという丁寧なものではなく、ひととおり形を示すと、木村は突き放すように、小柄な精一郎を筋骨逞しい武者達の中に放り込んだ。

両足を開き、腰を割った体勢で胸と顔を横に向け、正面ではなく胸の向いた方向に素早く移動していく歩様に戸惑い、踵を浮かせることすらできなかった精一郎は、幾度となく大男に突き上げられ、棘を持った藪に落された。

「おまえの身体は軽すぎる。よいか、一歩ごとに〝気〟を大地に送り込み、大地の塊を〝気〟でむんずとつかむのだ。さすれば顎があがることもなく、投げ飛ばされる懸念もなくなる」

痛みをこらえて起きあがった精一郎に、木村庄之助はそういって稽古着の背中についた泥を払ってくれた。

「身体を浮かせて走りたくば、大地から吸い上げた〝気〟を空に送り出せばよい。肉体の軽重は〝気〟でいかようにも操作することができるのだ」

つぎに木村庄之助はそういって「浮き身」の極意めいたものを教えてくれたが、彼のいう「気」がどういうものなのか、精一郎には分からなかった。それを考えるだけの余裕も体力もなかった。入塾後は、痩せていた身体がさらに細くなって、まるで棄てられた子猫のように軽くなっているのが自分でも感じられるだけだった。

「浮き身」を会得できずに喘いでいたのは他の塾生も同じだった。全員が敵という実習設定では誰もが容赦なくぶつかり合う。各藩から送り込まれた選りすぐりの強者でも骨折し失神した。ひと月と持たずに逃げ出す者もいた。その中で生き残るためには、与えられた休憩時間を削って練習に精を出す他なかった。

四谷にあった兵原草廬の周囲は、複雑に入り組んだ路地に、組屋敷が密集していたため、精一郎は大木戸を抜けた先につづく雑木林にひとり入ってその技を鍛錬した。

一歯だけの高下駄を履いて、上体にひねりを入れずに、木々を敵に見立て、その虚心をついて「気」を撃ち込むのだ。

強い葉を茂らせる夏には、足をとられてよく転んだ。もんどり打って頭を石に打ちつけ、目に入る世界が斜めに走る光の奔流になって見えたこともあった。それでも歯を食いしばって起きあがった。

上達の速度は遅かったが、気持の上では明るさが浸透していたのだろう。枯葉の舞う秋になると、自分が獣になって走り回っているように感じられるようになった。半年ほど後に入門してきた、遠江の儒者、細井広沢の子孫だという細井萱次郎も休みの時間を削り、精一郎のあとについて技を磨くことを希望した。

それからさらに二年近く、兵原草廬が幕府の命令によって閉鎖されるまで訓練は続け

られた。だが、「浮き身」の走法を会得したという実感は、精一郎にはまだ生まれてこなかった。今朝も霧の深い山中を半刻（時間）走り回ったが、自分の身体が熊笹の上を飛んでいくという感覚は得られずにいた。

——焦らず毎日続けることだ。そうすればある日突然、己れの身体が宙に浮き上がり、竜のように飛び出すのを感じることができるはずだ。

そういっていた木村庄之助の言葉を反芻しながら、精一郎は川縁に降りて手拭いを水につけ、固く絞ってから胸の汗を拭った。師を失った自分のような半端者に、そのような神の領域ともいえる技倆を得ることができるものなのだろうか、と心細く思っていた。

三

陽は昇っている時刻になっていたが、対岸にある宿はまだ霧に包まれたまま、薄ぼんやりとした黒っぽい影を滲ませていた。谷津川の川幅はここらあたりでは、四間程と狭い。跳びに修練した者ならば一跳びで越えてしまうことだろう。謙信と信玄の両方に自分を売り込んだため、その心底を怪しまれ、信玄に謀殺された跳びの加藤という兵法者は、壁を伝い、逆さまになって天井を走ることもできたという。そんなすごい武芸者なら、これくらいの川は助走をつけずに飛び越えてしまうだろうと嘆息しながら、精一郎は丸太をみっつ並べた橋に足をかけた。

刃音を聞いたのはそのときである。

それは鉦を打つようなささやかな音で、霧の海の中をいまにも消え入るような弱々しさで伝わってきた。精一郎は橋を渡るのをやめて、川下に向って走り出した。五町ほど下った山の裾に法雲寺があり、川に面して門前茶屋が建っている。そこは旅籠を兼ねている。不吉な予感に胸が侵されていた。そこには門前茶屋などに宿泊しているはずのない、母の面影も見え隠れしていた。

二合打ち合う刃音が響くと、霧のうねりの中から、みっつ、黒い影がにじみ出てきた。精一郎は走りを抑えて、小刀に左手を添えた。水の流れが、草を踏む精一郎の足音を消した。

「ぐえっ……」

喉を潰したような悲鳴が洩れた。灰色の霧の中で、重たさを感じさせる銀色の閃きが走った。霧が一瞬扉が開かれたように分かれ、すぐに細かい粒子で埋った。人が草の上に倒れる音が響いた。精一郎は身を伏せて、乱れた霧が収まるまで動かずにいた。

背後の雑木林の葉が擦れ合って、山の神が起こす不機嫌そうな声を運んできた。すると頭上の霧が渦巻いてその奥から微かな明かりがぼんやりと落ちてきた。草に身を埋めたまま額を上げると、二つの人影が門前茶屋に入って行く姿が目に映った。武芸の心得

のある者の足運びだった。建物の中は暗く静まりかえり、二人を飲み込んだ後も、物音は聞こえてこなかった。

精一郎は立ち上がると、川沿いに十数歩下った。足を止めたのは、霧の底から血の匂いが湧き上ってきたからである。そのあたりに目をとめていると、うねっていた霧がとぎれて、黒い物体が草に埋っているのが垣間見えた。斬り合いで倒された者であることは明らかだった。

男は俯せに、流れの速い川を泳いで横切るような形で倒れていた。右手に二尺足らずの抜き身を握っていたが、その出で立ちは侍のものではなく、旅姿の商人のようだった。だが、男の周辺には荷らしいものは落ちていない。

不意に精一郎の胸に隠密という言葉が浮かび上ってきた。それは一昨日、湯につかりながら助三という渡り大工の男が、お駒という名の若い女と話していたときに何気なく出た言葉だった。村の者が、隠密という、江戸の武士でも滅多に口にすることのない秘められた職務を、こともなげに言い放つので内心驚いたものだった。町奉行所には隠密回り同心が確かにいるが、それも北と南合わせてもたった四人しか任務についていない。彼らは町奉行から直接命令を受け、しかも変装して探索にあたるので、その四人の顔を知っている者は精一郎の周りにはだれもいなかった。だから話に出てくることはなかった。

――どうしたものか。

身動きしない男の、頭のほうに移動しながら、精一郎は迷っていた。斬り合うからには理由があるはずだ。だが、父が徳川家から禄を受けている以上、他藩の出来事には関与すべきではなかった。しかし、斬られた者をこのままうち棄てておくのは気がひけた。村役人に知らせるのがせめてもの義務だと思うのだが、時刻が早すぎる。

考えがまとまらないまま、精一郎は背を屈めて、男の頸に手を伸ばした。生死を確かめるつもりだった。

そのとき左目の隅で、白い扇が開くように閃くものがあった。とっさに後ろに跳びすさった。袴の先が音をたてた。男が横殴りに振った刀の切っ先が切り裂いたのだ。

男は俯せになったままだった。これまでと違うのは、背中がゆるやかにうねり、頬骨を覗かせた横顔から、呻き声が洩れていることだった。精一郎は小刀の柄に、右手の指を軽く添えて、男の次の動きを見定めようとしていた。胸の鼓動は早鐘のように打っていたが、気持は不思議に落ちついていた。

「私はあなたを斬った者ではありません。近くの宿に逗留している者です」

そう声をひそめていった。男の呻き声が大きくなった。

「どうしてほしいのかいって下さい。このまま立ち去れというのであればそうします」

荒い息づかいがつづいていたが、男は返事をしなかった。霧が落ちて削げた頬を濡ら

した。薄目を開けていたが、その目は暗い陰に塞がれていて、男が何を考えているのか、少しも感じ取れなかった。

精一郎は黙って男の前を離れようとした。

「待て……」

掠れた弱々しい声だったが、精一郎の耳には地の底から、怨霊が呼びかけてきたように不気味に響いた。

「肩を貸してくれ」

男は顔半分を草に埋めたまま、出ている方の目を剝きだしにして、立ち去りかけた者の様子を探ろうとしていた。

「分かりました。ではまず、指を刀からはずしますよ」

屈み込んで、柄を握っている指を開こうとしたが、硬直しているのか容易にはずせない。その間、男は喉の奥で、河面に水泡が浮き上って来たような音を何度かたてた。男の手から刀を外したときには、精一郎は額に汗をかいていた。

抜き身を男の腰の鞘に納めると、精一郎は男の上体を起こして左の肩を腋の下にいれた。右腕を引っ張って立ち上がろうとすると、男の身体がまるで死んだ馬のようにずしりと重くかかってきて、支えきれずによろめいた。片足がぬかった草地にずぶりとはまった。

引き抜こうとして下を見た精一郎の背中に戦慄が走った。男が倒れていた草地に人の形が残っていて、そこは血の池のようになっていた。それだけ大量の血を見たのは初めてのことだった。男は腹と足から血を流しつづけていた。

「川へ……」

やっと聞き取れる声で男は精一郎の耳元でいった。それは男を担いだまま川を横切れということなのだろうか、と不審に思いながら、ようやく一段高い川堤に泥だらけの草鞋をついたときだった。

ふいに精一郎の身体が川とは反対側に突き飛ばされた。まるで圧縮された空気の弾力にはじかれたようだった。

草の上に放り出された精一郎の耳に、どこか間延びした水音が聞こえた。いそいで起きあがり河面に目を向けたが、細かい綿のような靄とも霧ともつかぬ仄白いものに覆われた川は、飛び込んだ男を呑み込んだまま、急に勢いを増して流れていった。

精一郎はしばらくの間、ここで起ったばかりのことを、反芻することもできずに、ぼんやり佇んでいた。我に返ったのは、背後の門前茶屋から、人の声と物のぶつかり合う音が聞こえてきたからだった。精一郎は足早にその場を離れた。霧が霧雨に変っていることを知ったのは、丸太で組んだ橋を渡りだしたときだった。それでもまだ掌に、男の残した血がべったりと付着していることには気づかずにいた。

四

湯から上がると、背中と足に残っている傷痕に冷水をかける。地下から汲み上げられた水は氷を含んだように冷たかった。それを数回繰り返してから、息が整うのを待って脱衣場に出た。

身体から湯気が立ち、板の間に水が落ちていく。そこでも精一郎は山を覆う空に目を向けて、ゆっくりと呼吸をした。頭から足の指先まで冷気が浸透していく感じを得るまで、何度でも空気を押し込む。毛先ほどの血管の先頭に立った酸素の粒こそが、自分を生かすために戦ってくれている唯一の援軍のように思える。

乾いた下帯をつけて、洗い立ての小袖に腕を通した。胸騒ぎめいた思いが収まらないのは、川に身を投げた傷だらけの男が最後にみせた目つきが、まるで張り付いたように脳裏から離れないからだった。精一郎はもう一度深く息をして山から落ちてくる冷気を丹田に送り込み、少しの間そのまま静止していた。

二階の部屋に戻ると、朝の膳を運んできた下女が、こちらに丸めた背を向けた客に向って唇をとがらせて喋っていた。客は辰蔵で、宿に精一郎を訪ねてきたことは、風呂に入っているときに下男が知らせにきたので、部屋に上げるように伝えておいたのだ。

「二年めえにも、常楽寺の茶屋に浪人が何日も巣くって難儀したというだ。なんでこんだら貧しい村を襲うだか、さむれえのやることはわがんねえ」

下女は一息にそういうと、戻ってきた精一郎に気づいてあわてて頭を下げた。色黒で、未成熟のまま乾燥してしまった山芋のような女だったが、それほど早口で喋るのは初めて聞いた。

「土間におるといったのに、上って待つようにとしつこくいわれたもんで」

下女が出ていくのを待ってそう口を開いた辰蔵は、股引に両手を置いて肩をすぼめた。野良着のまま部屋に上げられたことを恥じているようだった。そのとき精一郎は、風呂場で感じていた胸騒ぎのもうひとつの理由が、不透明な形で浮き上ってくるのを感じた。

「母上になにかあったのですか」

膳の前に坐ると横にいる辰蔵に顔を向けた。

いえ、そうじゃねえんでございます、と辰蔵は肩をすくめたまま濁った声でいった。

精一郎は箸をとり、辰蔵が次の言葉をいうのを待った。

「若様のご様子を伺いにきましたのは、わっしの一存でございまして」

辰蔵はいきなりそう切り出した。その言い様に不可解なものを抱いたが、精一郎はあえて聞き流して汁で舌を湿らせた。

「それで、ご様子はどんな具合で」

「見ての通りです。辰蔵、私がまだこの宿に滞在していると、どうして知っていたのですか」

「えっ、それは……」

言い淀んだ辰蔵の額に、もう汗が蚕の卵のようにびっしりと浮き出ている。江戸で生まれた辰蔵が、父の言いつけを守って、十三年間も秩父の田舎で母に従って暮している実直さが、その狼狽振りに表われていた。いい人なのだ、と精一郎は思った。口の中では冬の間、樽に糠漬けにされていた大根が音をたてている。鍋の蓋に重しを置いて炊き込んだ玄米も、程良く麦と混ざり合っている。

「時折、辰蔵がこのあたりに潜んでいるのではないかと感じることがありました。どうして声をかけてくれなかったのです」

精一郎は椀を伏せて膳に置いた。

「ご養生しているお邪魔をしてはいけないと……」

そういって懐から抜いた手拭いで顔を拭った辰蔵は、隠れて精一郎の様子を窺っていたことを白状してしまったことにも気が回らないようだった。手拭いをしまってから、ちょっとあっけにとられたように口を半開きにしたのは、精一郎の飯を食う速さが尋常ではなかったからだろう。戦場を想定しての兵原草廬での飯は、塾生が全員雪原で立ったまま済ますこともあった。いつでも食った気はしなかった。

「それでは今朝は早くからどうしたのですか」

いたぶるつもりはなかったが、精一郎の口調が厳しくなったのは、かたくなまでに母の名を出すまいとしている辰蔵の姿勢に、情をつぶしてまでも貫こうとする頑迷さを感じたからだった。

「噂を聞きまして、ちょいと心配になったもんでござえますから」

一刻前に霧の中で垣間見た、浪人たちの後ろ姿が胸に浮き上ってきた。隙のない背中は尋常な鍛錬で培ったものでないことは、容易に窺えた。精一郎はこの小さな旅の間に起った出来事を思い出しながら、言葉にできない不条理なものにぶつかり、巻き込まれてしまう自分の境遇を不思議に思った。心にできた傷が少し癒されると、まるで待ち伏せしていたように出現してくる人物に再びえぐられる。ここ五日間の平穏が嘘のようだった。

「あの、若様はなにも聞いておられないので？」

精一郎の質問を受けた辰蔵は、反対に探るように首を伸ばしてきた。血塗れた男に肩を貸したときの、背中をはい上ってきた薄気味の悪い悪寒の感触を思い起こしながら、どんな噂なのかと精一郎はソラを遣った。母に余計な心配をかけたくないという思いがそうさせた。今朝起きたことを話せば、辰蔵は、巴川の仮宅にいる母にことの次第を伝えるはずだった。

「実は、わっしも昨夜聞いたばかりでなにがどういうことなんだかよくわからねえんでござえますが……」

二日前の晩、法雲寺の門前茶屋に十名近い浪人者が押し入った。宿泊客の巡礼の多くは老人で、なすすべもなく監禁同然になった。その知らせを翌朝村の組頭のところにもたらしたのは、茶屋で下働きをしていた安吉という男だった。隙をみて逃げ出してきたものの、怪我の状態がひどく、額と背中から出血していて、下女の手当てを受けている最中に絶命した。知らせを受けて二人の村役人が出張ったが、ひとりが片腕を斬り落されると、もうひとりは四つん這いになって逃げ出し、家の仏間に閉じこもったまま今も念仏を唱えているという。

「村役人つっても、もともとは百姓で、作物のできを調べるのが仕事で、やっとうの稽古などほとんどしたことがねえんですから、しかたねえことなんでございますがね」

昨日の昼までには、年寄り連中のほとんどは宿から解放されたが、まだ人質になっている者も数名いるようだった。

「その連中の目的は何なのですか」

霧の中を去っていったふたつの黒い影が再び胸に射した。斬られた男の呻き声が蘇り、ずしりと重い身体の感触が肩に乗ってきた。

「名主さまのところへはなんかいってきたらしいんですが、まだわっしはきいてねえです。腹すかしている連中だども、飯だけ食ったら出ていくっつうこともあるめえし、おおかた銭が目当てだろうとみなはいっとります」

「さっき下女が二年前にも常楽寺の茶屋を襲った集団があるといっていたようですが、そのときはどう解決がついたのですか」

「やっぱ銭を渡したと聞いてます。郡奉行配下の代官と小役人がやってきたときには、浪人の集団はみないなくなっていたようです」

「昨日はどうだったんです？　代官はどうしたんです」

さあ、と呟いて辰蔵は首を傾げた。それからぶ厚い唇を震わせたが声にはならず、鼻に指をあてて上目遣いにおどおどと精一郎をみつめた。辰蔵の心配は別にあるようだった。

「おまえは私の無事を確かめにきたのですか」

へえ、と呟いた辰蔵は畳に目を落して懐からまた手拭いを取り出して首筋にあてた。先ほどは自分の一存でやってきたといっていたが、辰蔵にそれほどの機転がきくとも思えなかった。

「母上にいわれてきたのではないのですか」

「そうではございません。お縫様はまだ、浪人たちが法雲寺の門前茶屋を襲って立てこもっているということも、ご存じないはずです」

目は伏せたままだったが、嘘をいっているようにも感じられなかった。
「それなら心配には及びません。辰蔵はこのまま帰ればよい。傷が癒えたら私はここを出る」
そういったが辰蔵は動こうとはしなかった。畳にこびりついたこげ飯のように背を丸めて坐っている。精一郎は膳をもって立ち上った。空になった椀を台所に戻すつもりだった。すると辰蔵は肩を震わせて、すがるような目でみつめてきた。
「わっしが気がかりなのは、若様がこの一件に巻き込まれやしないかということでして、その、人を集めているとちょっと聞いたもんで……頼りねえ役人に代って、浪人どもを成敗してやろうという人がでてきたとかいうもんがいて……もし若様が……」
「これを下に戻してくる」
精一郎が部屋を出ると、丁度下女が上ってくるところだった。狭い階段を上がりきる手前でおもいがけなく精一郎と出くわした下女は、それはわだすがかたづけるだに、といって目を震わせて両腕を伸ばしてきた。いつも客が素っ気ないほど早く飯を食って、空になった膳を下まで自ら戻してくるので、今朝こそは下女の仕事を奪われまいと、急いで戻って来たのだろう。だが客が膳を離そうとしないので、下女は呆けたような顔で精一郎をみつめた。その口から思いがけない言葉が出た。
「あの、お客さんのようですが」

両腕を宙に浮かせた下女はそういって、今度は野兎のように目を見開いて精一郎をじっと見つめた。
客ときいて精一郎の胸は唐突に沸騰した。
——母上だ。
頭の中で急激に鐘の音が響き出し、周囲のものが滝の流れに落されるように上から下へと消滅していく。目に映るすべてのものから色が消えると、気が遠くなりかけた。
膳を持ったまま階段を下りたことにも気がつかなかった。音がしたのでそちらを見ると、床に下女が転んでいた。どうしてそうなったのか、よく分からなかった。
「やっぱりお侍さんでしたか」
戸口から入ってくる白っぽい光を受けて、土間に黒い影が立っていた。肩幅が広く、剣術の修業を積んだ者特有の油断のない佇まいだった。小刀を差していたが、その身体から漂ってくる気配は、穏やかな山の春の香りをそのまま運んできていた。
「あなたは、あのときの……」
膳を下に置き、あわてて板の間に膝をついた。見上げた男の双眸から、懐しさを含んだやわらかい眼差しがおくられてくる。
「命を助けていただきながら、お礼も申し上げず今日まで安閑と過ごしてしまいました。申し開きもできません」

「いやいや、お助けしたのはあっしではございません。師範の秋山でございます」
「秋山様。……はい、秋山要助様とお伺いしてございます」
ふたつの流れが胸のなかでぶつかりあい、飛沫をたてるのを感じながら、どうにかそうこたえていた。流れのひとつは母への思いが突如断ち切られた失意であり、もうひとつは恥辱に満ちた戸惑いだった。
「あっしはただお侍さんを背負っただけでして」
「ありがとうございます。あの折は気を失ってしまい恥しい次第です」
精一郎は頭を下げた。一歩前に出てくる男の草鞋が目に入った。胸の動悸がこめかみまで響いている。白刃を閃かせた練武館道場の門弟に取り巻かれた自分が、奇跡的に生きながらえたのは、救いに入ってくれた剣客がいたからこそだった。その恩人を折々に思い出すことはあっても、すぐに探し出してその人を訪ね、礼を尽そうとしなかった自分の軽佻浮薄さがうらめしかった。
「なんの、あれだけの人数を相手に、おひとりで立ち向かわれたのはたいしたものだと師範は感心しておりました。まったくやつらときたらごろつきより質が悪い。同じお侍でも心魂が違います。命を削って剣の修業をされたお方はさすがだと、あっしも伝六もずっとあなたさまのことを噂していたんでございます」
男は精一郎の当惑には頓着なく、快活にいった。

「伝六というのはあんとき一緒にいた半端もんでして、あっしは弥市と申します」
弥市と名乗った男は土間に片膝をついた。頭を下げた様子が窺えたので、精一郎はさらに額を低くした。
「男谷精一郎と申します」
「これは恐れ入ります。あの、すみませんが、お顔を上げてくださいますか」
いわれて肩を戻すと、弥市の顎の張った日焼けした顔が視線を下げたところに浮いていた。乾いて厚みのある上唇から丈夫そうな歯が覗いている。母がやってきてくれたのだ、と舞い上って階段を下りてきた自分の心が見透かされたような気がして、精一郎は再び腹の中で赤面した。
「そんなにかしこまらないで下さい。あっしはこんなものを差してはおりますが、もとは絹問屋の下働きをしていた者ですんで。ま、剣術がやりたくって秋山さまの道場に入門した次第でして、男谷さまのような立派なお侍さまとは本来お話もできない身分なんです」
弥市は小刀の柄を軽く叩きながらはにかんだ様子でいった。武州らしい訛りはあるが口調はまるで江戸者のようだった。こういう人を俠客と呼ぶのだろうかと思いながら、医者への治療代まで支払ってくれたという恩人への、感謝の言葉がなめらかに出てこないもどかしさにいらだっていた。

「川越に戻りました際には、秋山様をお訪ねしてお礼を申し上げようと考えておりました」

額と胸に汗が噴き出してくるのを感じながらどうにかそういった。弥市は精一郎が引け目を感じている非礼についてはもはや関心が向いていないようだった。口元には微笑が浮かんでいる。

「師範は川越には道場を設けておりません。藩士を教えるのは性に合わないのでしょう。それに禄取りなど似合わないお人ですから。三年前に箱田村に道場を開きまして、おっつけ飯能にもつくるはずです。箱田は師範の郷里なんです」

その技、岡田十松をしのぐといった妻木弁之進の言葉が蘇った。

「神道無念流を修められたと聞いております」

「そうです。江戸の戸賀崎熊太郎先生より免許皆伝を授かりました。もっとも、もう二十年も前の二十二歳の頃のことですがね。箱田の道場では扶桑念流と称しております。この頃では箱田にいるより武州のあちこちを旅している方が多いくらいです。師範の名をしたって弟子入りを願う村の者が増えてきましてね。秩父に参りやしたのも、名主さまの家の庭さきで近在のもんに稽古をつけるためでして」

弥市は絹問屋で働いていた者らしい如才のなさで淀みなく喋る。どうぞお上がり下さいというと、じゃあここに坐らせていただきます、といって上がり框に腰を下ろした。

そうすると精一郎には半身で向かう形になった。そこで初めて精一郎はさっきから胸につかえている疑問を投げかけることができた。

「ご恩のあるお方にぶしつけなことをお訊きするようですが、私がここに逗留していることをどうしてお知りになったのですか」

「お名前が分っていたわけではありません。師範が村人の話を聞いて、それは川越で会った若いお侍ではないかと申したのです。武者修行の旅に出る若いお武家様は昨今では珍しいようです。あっしも師範のお供をするようになって二年になりますが、修業の旅に出ている方にお会いしたのは男谷様が初めてです。御用の旅でなければ仕官を求めてあちこち行き来する方ばかりのようで」

「はあ」

「男谷様を見た村の者は、鷹のように飛び、天狗のように山を疾走していたといっておりました。師範は膝を打つなりすぐに会ってお連れしてこいといわれました。あっしは師範にいわれてきた次第でして」

弥市は見開いた目を精一郎の額に置いた。

「その傷はどうされました？　あのとき月代にはそんな傷はなかったはずですが」

「粥新田峠で山犬に襲われまして、不覚をとりました」

「粥新田峠で……あのあたりじゃまだ雪が残っているんじゃないんですか」

「はい。それで道を誤りました」
それは難渋しましたな、と呟いてから弥市は上体を精一郎に正対させた。急に道場に巣くう汗と腋臭の入り混った臭いを嗅いだような気がした。弥市の顎の張った顔がすっと寄せてきた。
「この下の門前茶屋に、浪人どもが押し込んだ話はお聞き及びですか？」
「はあ、先ほど、あの者が知らせてくれました」
精一郎は後ろを振り向いてこたえた。いましがた、足音を忍ばせて階段を下りてきた者が辰蔵であることは分っていた。下女は奥に引っ込んでいたが、辰蔵は古ぼけた狸の置物のように暗がりにくすぶって坐っていた。
「まだ人質になっている者がいます。役人はあてにならないので、わしらで浪人どもを討ち果たしてしまおうと師範はいわれています。もし傷が癒えているのでしたら、お力を貸していただきたい。師範にはなにか考えることがあるようで、もしあのときのお侍であったら、是非に頼みたいと仰せです」
辰蔵の方に視線をやってから、弥市は声を落していった。
「ここにも門弟はいるのですが、始めて一、二年の者ばかりでして、力はあるがとても使いものになりません。それに人質がいては闇雲に討ち込むこともできません。まずは人質を救い出すことが先決です」

「それには私が役に立つと秋山様はいわれるのですか？」
「へえ、師範の考えていることは分からねえんですが、なにか思案があるようで」
「そうですか。ですが、私の父は……」
徳川家に仕える身、と胸の中でいいかけたとき、床を這うようにして辰蔵が進み出てきた。
「お願いでござりまする」
辰蔵は額を床に擦りつけて呻くようにいった。
「村が大変なことは重々承知でございますが、若様をお仲間に取り込むのはご無用に願います」
「おまえは？」
弥市の声は急に冷たく響いた。辰蔵は肩を縮めたまま、顔を床から二寸ほど浮かせて弥市を下から直視した。愚鈍な表情から血を滲ませたような必死の目が光った。
「江戸で男谷家に仕えていた者でございます。若様は男谷家の総領でございます。いずれお家を継がれるお方です。そのお方が他藩で起きた騒動に加担したとなると、お家はどのような処罰を受けることになるか分かりません。お願いでござります。どうぞ、どうぞ、このままお引き取りくださいますよう」
辰蔵の顔が赤銅色に燃え上っていた。その目がみるみる涙で溢れだした。鬼が泣いて

いる、そう精一郎は思った。殺気だった壮絶な表情に息が止った。

老爺がなにをいいだしたのか、とうさんくさげに見ていた弥市の頬に、突然細かい痙攣が走った。ぶあつい下唇が開き、歯の間から音が洩れた。

辰蔵に向ってなにかいいかけた弥市の顔に、一瞬途方にくれたような虚ろな色が浮かんだ。それから顎を落して頷き、立ち上って腰を折った。

「申し訳ないことをいたしました。お武家様にはわっしどもには分からないしきたりがあるんでございましたね。ご無理をいってすみませんでした。師範には男谷様がお礼を申していたとお伝えします。お騒がせしたことを重々お詫びいたします」

弥市はそういって深く頭を下げると、素早く身を翻して出ていった。礼をいう間も与えられない程のあっけなさだった。

薄く日の射しはじめた戸口の外には、風に押された雑草が子守歌でもうたうように、ふわふわとなびいている。なにか取り返しのつかないことをしてしまったような、不安な思いで精一郎はぼんやりと雑草を眺めていた。

「さしでがましいことをしてしまいました」

いつのまにか土間に降りていた辰蔵が、背中を丸めて手をついた。その意固地にへりくだった態度を目にした精一郎の腹に、唐突に怒りの粒が放り込まれた。

――おまえのおかげで命の恩人に礼を尽すどころか、泥を浴びせてしまったのだぞ。

怒声が胸に湧きあがってこだました。土間に額をこすりつけて詫びる辰蔵の忠義の様子がさらに精一郎をいらだたせた。胸の内側が怒りでいっせいに泡立つのが感じられた。だが、精一郎の口から出た言葉は自分でも意外なものだった。

「いいんだ」

と精一郎はいった。それから手を伸ばして固く張った辰蔵の肩に触れた。

「私も同じことを考えていた。だが、私ではあんなふうに断ることはできなかった。よくいってくれた。ありがとう」

すすり泣く声が老爺の口から洩れてきた。まるでいぼ蛙がしゃっくりをしているような不細工な声だったが、聞いている精一郎の心が、それまでに味わったことのない温かいもので満たされてきた。この人の背に幼かった自分は背負われていたのだと思った。温かさが熱いものに変った。

「辰蔵、武士というのは窮屈なものだなあ。父上は数え切れないくらいのお金をお持ちだ。なのにわざわざ御家人株を買ってまで武士になられた。その父上の百俵高十人扶持を守るために、私は恩人を裏切ってしまった……かなしいな武士は……」

呟きが嘆息になると、待ちかまえていたように辰蔵の泣き声が響いてきた。そこまで大きな声で泣くことはないのではないかとあきれた思いが浮かぶのを感じながら、周囲をはばかることなく泣ける無骨者の辰蔵を、精一郎は羨しく、そしてとてつもなくあ

りがたく思っていた。

五

老爺だとあなどっていたわけではない。だが普段は曲った膝で、肩を揺らすように歩いている辰蔵が、いざ急ぐとなるとまるで飛脚のように速いのには驚いた。決して小気味のよい調子ではなく、やはりその体型どおり、沢蟹が湯でもかけられて大慌てしているような歩み方なのだがとにかく速い。充分に修業をしたはずの精一郎が汗ばむほどだった。

辰蔵が今日、再び鹿の湯の旅籠にやってきたのは八ツ（午後二時）を少し過ぎた頃だった。目を血走らせ、口から泡を吹きだしていた辰蔵に水を飲ませると、今度はぜーぜーと息を吐いた。

何事だと訊くと、これから若様をさるところにお連れしなくてはなりませんという。まだ息も整わないのに、すぐに戸口から飛び出そうとする辰蔵の様子に不吉なものを感じて、母上の身に異変でも起きたのか、と訊くとそうではないという。だが用向きの理由はいわず、とにかく一緒にきてくれと赤い目を向けて哀願するばかりだった。

ただならない辰蔵の様子にすぐに支度をして、小刀を腰に差して部屋をでた。戸口の前で腰を割って待っていた辰蔵は、笠を被る精一郎を待つのももどかしげに、先に立って歩き出した。

途中、川を挟んで法雲寺の門前茶屋を見た。白い空から薄日が覗いて、茅葺きの屋根から蒸気のようなものが立ち昇っていたが、それは台所から洩れてきた炊事の煙であったかもしれない。

浪人と、とらわれている巡礼を合わせれば相当な人数になると思われるのに、茶屋の中は静まりかえっている。霧の向こうに姿を消していったふたつの影を胸に浮かべて割り切れないものを感じていると、そんな精一郎の感傷を断ち切るように、辰蔵は横を向いて精一郎をじろりと睨む。その間も歩みを緩めることはない。

いったいどこへ行くのだ、と訊いても反応せず、不機嫌そうにおし黙ってずんずん進んでいく。別の人格が乗り移ったのではないか、と思わせるような辰蔵の傲慢ともみえる態度に、精一郎はあきらめて引っ張られるようについていった。

荒川の急流を渡し船で渡り、崖を這って上ると今度は断崖絶壁を見下ろす道を北東に向った。左手には峰から続いた雑木林があり、空にはトンビが舞っている。梢を突き抜けて、里には似つかわしくない仰々しい甍が聳えている寺院の周囲では、青い葉桜が日を照り返して風になびいていて、そこから清々とした空気が流れてくる。釈然としない思いで辰蔵の後に従っている精一郎だが、おもいがけなく迎えられた穏やかな春の陽光

に、ふと浮かれた気分になっていた。

「この里にずっと住むのもいいかもしれないな」

すでに一刻近く歩いているのに辰蔵は何も言おうとしない。そのときも辰蔵の反応を期待したわけではなかった。

「ここにいればその内、母上にお会いできるかもしれないからな」

そう呟くと思いがけなく辰蔵が足を止めて振り返った。

「こちらでお待ちのお方がございます」

そこは普段は小間物などを売っている店らしいが、その日、店は閉ざされていて、店の半分ほどに板戸が被されていて、半分には麻の布が屋根から垂れ下っている。脇に柴折戸があり、辰蔵はその戸を卑屈なほど背中をまるめて入ると、こちらでございますと燃えるように光る目を向けていった。

辰蔵が膝を地面について頭を下げた離れは、小間物屋らしい小さな店の意外に広い庭の隅に建っていて、渡り廊下ともつながっていない。

山から流れてきた風が、麓のゆるやかなぬるみと渦のように交わったのかもしれない。離れの小部屋を目にとめた瞬間、精一郎はそれまでに感じたことのない陶酔感に突きあげられていた。ここにくるまで、「もしや……」と緊張するものがあった精一郎の心に、隙のようなものが生じ、微熱を帯びたようにぼんやりしてしまった。どうしてそうなったのか分からなかった。なんだか空中にぽっかり空いた洞窟に、吸い込まれていくようだった。

「精一郎殿」

その声は涼しげにのびてきて、無防備に佇んでいる精一郎を縛り付けた。なにかとてつもなく尊い方、たとえば聖観音菩薩の声を聞いたように瞬間的に感じて身がすくんだ。精一郎は目だけ動かして小部屋を見た。たしかに声は閉ざされた障子の向こうから聞こえてきた。

「精一郎殿でございますね」

再び聞こえた澄んだやわらかい声が、精一郎の胸をたやすく貫通した。今の自分は隙だらけだと思った。

「はい」

「突然お呼び立てして申し訳ございません。縫でございます」

その名を耳にしたとたん、精一郎は気が遠くなった。頭上の青い明るみの広がりに、縦横から暴れ狂う春雷のような閃光が走り、精一郎の眼を撃ち抜いた。覚えず地面に膝をついた。立ちくらみのせいなのか、股を支えている力が抜けてしまったからなのか、自分では判断できずにいた。知らずに母上と口の中で呟いていた。それから気力を振り絞って、母上様と声に出した。掠れた声が出た。

「母上様でございますか」
「こちらにきてはなりません。わたしは精一郎殿とお会いすることは叶いませぬ」
「なぜでございますか。精一郎は、精一郎は母上にお会いしたい一心で、秩父までやってきたのでございます。そのことは父上もご存じのことでございます」
涙声になっているのを承知でいった。それを恥しいとも思わなかった。必死で声を出した。
「二度と申しません。わたしはおまえさまとはお会いできないのです」
「なぜでございますか、なぜ母上様は精一郎に会って下さらないのですか。精一郎がそれほど憎うございますのか」
少しの間があって、鈴の音のようなすずしげに響く声が伝わってきた。
「男谷家の嫡男ともあろう方が、情ないことを申されますな。精一郎殿を憎むなどあろうはずがありません」
「それでは何故障子を開けては下さらないのです。何故私をお呼びになったのですか」
そういうと障子と精一郎の間に風がたって、障子の桟が乾いた音をたてた。静まると母の息が聞こえた。あたたかくて悲痛なものが胸に忍び込んできたようだった。
「精一郎殿にお詫びとお願いがございまして、ご足労願いました」
母の言葉は耳に入ったが、咀嚼する余裕がなかった。ただ片方の膝を冷たく湿った土

につけてじっとしていた。
「先程は辰蔵がぶしつけなことを申しました。お詫びいたします」
「辰蔵が……」
辰蔵のことなどどうでもよかった。精一郎には母がなにをいいだしたのかまったく分からなかった。
「門前茶屋に狼藉者が乱入して、罪のない人がとらわれていると聞いております。お役人がなぜ救いにゆかぬのか合点がゆきませぬが、お願いしたいのは、お役人の助けを待つことなく、精一郎殿に、とらわれている方々を救い出す手助けをしてほしいということなのです。聞き届けていただけまいか」
急には答えられなかった。頭の中を濁流が激しくぶつかり合っている。何かを考えようにも思考が浮かばなかった。
――母上は、私に会いたくて呼び出したのではない。母上はここに、二歳のときに別れたきりの息子がいるのに、障子を開けようとはなさらぬ。母上にとって私はなんなのだ。母上は一体なにを喋っておられるのだ。私にどうせよといわれるのだ。
「精一郎殿、そこにおられますか」
「はい」
「縫の願いをお聞き届け下さらぬか」

「狼藉者にとらわれている人たちを救い出せと……」

「はい。難儀に遭われている方々を救い出そうとしている、旅の剣術遣いの方がおられることも聞きました。その方が力を貸して欲しいと、精一郎殿を訪ねてきたそうではありませんか。そんな嬉しいことはありません。感謝こそすれ、無下にお引き取り願うなど下男のすることではありません。出過ぎた真似をしてくれたと、辰蔵にはきつく叱っておきました」

「母上……」

身体を駆けめぐる得体のしれない影のようなものが、身を縮めるように収まるのを待って、精一郎は口を開いた。

「父上は百俵高十人扶持の御小十人組とはいえ、お城では檜の間に勤めております。お目見の武士の倅が他藩の騒動に加担しては、どのような迷惑が父上にかかるやもしれません。まして相手は浪人者の集団、かかわりあってはならないことです」

「精一郎殿、臆したのですか」

「なにをいわれます。臆してなどおりませぬ。私は父上にご迷惑が……」

「お黙りなさい。しらじらしい言い訳をなされますな。臆したのでなければ、いずれ譲られる御小十人組の家督に目がくらまれましたか。それほど御家人株が欲しいのですか」

「母上、ま、待って下さい」

「あなたの魂胆はよく分かりました。人々が難渋していれば、その方たちを命を賭して救おうとするのが武士というもの。父上に迷惑がかかるなどと、こざかしいことを申して逃げようとする臆病者だとは思いもよりませなんだ。そのような卑怯な者から、母上などと呼ばれるのは薄気味の悪いこと。早々とお立ち去りくだされ」

強い言葉が障子紙を震わせて庭に響いた。空から伸びてきた巨大な手で、身体ごとはたかれたような思いがした。畳をする衣擦れの音が微かに聞こえた。すると母の姿がふいに遠のいた。

精一郎は茫然と蹲っていた。こんなことがあってたまるかと思った。だが、すぐには何もいえなかった。ただ、もう駄目だと分った。

立ち上って踵を返した。そこから先へは動けなかった。悔しかった。その悔しさの理由がどこにあるのか落ちついて考えることもできなかった。もう一度振り返り、障子に向って呟いた。

「精一郎はこの身がおしくて申し出をお断りしたのではありません。でも、臆病者だとそしられたら、その通りだったと思います。これから戻って、門前茶屋から出られずにいる方々を救いに参ります」

精一郎は深く頭を下げた。戸惑いと共に出てきた言葉があった。

「ひとつだけ申し上げておきたいことがございます。私は父上のあとを継ぎません。男谷家の家督は忠次郎殿に継いでもらいます。これはずっと考えていたことです。私は自分の道は自分で切り拓きます。母上のことをお恨みしているのではありません。私は、きっといつか母上をお迎えに参ります。それまでどうぞお達者でいてください」

障子がまた乾いた音をたてた。それは風のせいで母の気配はすでに消えていた。たぶん奥にも部屋があるのだろう。精一郎はもう一度頭を下げて、小部屋の前を離れた。目が燃えるように熱かった。その目を斬るように、風がもんどり打って斜めに吹き下ろしてきた。

第十二章　勇猛

一

連れて行かれたのは、法雲寺の門前茶屋の前を流れる、谷津川を渡って五町程下った民家だった。神社脇の小道を入るとお堂があり、それを守るようにして柴垣で囲った杉皮葺きの屋根の家が建っていた。表間口七間半、横四間の簡素な造りだが一見して農家のようには見えなかった。そこは秩父一帯を管轄する名主の別邸として使われているらしいと、弥市が来る途中で話してくれた。

弥市の師範の秋山要助は、武甲山山頂の御岳神社に参詣のため箱田を出てきたのだが、途中で武州中川に住む門人から事件を知らされ、急遽参詣を取りやめて昨夜遅くに荒川村に入ったという。弥市と伝六もずっと一緒だった。

「まず男谷様をお連れした事情を申し上げてきますんで、しばらくこちらでお待ちにな

って下さい」

戸口の前まで来るとそういって弥市が先に入っていき、精一郎は伝六と共に表に立っていた。夕方の風が、北西側に続いている椚の多い雑木林の葉を揺らした。昼の風とは違って、雪でも含んでいるように冷たかった。

「男谷様が来てくださって師範は大喜びです。どうぞお入りになってください」

弥市が戻ってきて精一郎を中に招じた。そこは十坪程の土間で竈には薪がくべられていた。筵敷の床板には囲炉裏があって、そこにも火の色が揺れていた。奥にも座敷があるらしく、粗末な襖で仕切られていた。筵には十名近い男たちが坐っていて、底光りする眼で入ってきた精一郎を見た。その中から中肉中背の、ほの紅い輪郭をした影が立ち上った。中では一番年かさだったが、動きは機敏だった。その人こそ、忘れもしない命の恩人だった。

「弥市から聞いた。随分無茶をしたものだ」

どのようにこれまでの非礼を詫びたらよいのか、と考えていた精一郎の機先を制するように、秋山要助は丸い頬をゆるませて白い歯を覗かせた。

「いえ、まだ何もしていません」

「しかし、こいつらが止めなくては、ひとりで突入する覚悟だったんではないのか」

「は、や、いえ」

母の声を聞いたあと、精一郎は急いで法雲寺の門前茶屋に行き、中の様子を大雑把に窺っただけで、腰に差した小刀の鯉口に親指をかけた。勝算もなく、平山子龍先生から教わった兵法の原理、戦略もその時には頭の中から消えていた。敵の情勢をまず探ることが兵法の第一なのに、全ての道筋を忘れていた。ただ、早朝目にしたふたりの浪人の喉を突くことしか考えていなかった。

偵察に来ていた弥市が精一郎を見つけ、身を挺して精一郎の腰を引いたのでようやく思いとどまったが、そうでなければ、今頃は闇雲に討ち込んだあげく、腕の立つ浪人達から斬り刻まれていたかもしれなかった。ここに連れてこられる途中で、幾分か冷静さを取り戻した精一郎は、己れの短慮な行為を思い知って顔を赤らめた。母の願いとはらわれている人たちを救い出すことで、自暴自棄になることではなかった。

「朝、弥市が伺ったときに断ったのは、ひとりで片をつけようという魂胆があったからだね」

「とんでもありません。あのときは弥市さんに申し上げた通り、徳川の禄を食む者が、他藩の揉め事に……」

「なんにしても来てくれたのだから、大助かりだ。さ、とにかく上ってくれ」

秋山要助は微笑を浮かべて片手を差し出した。弁解がましいことを口にしかけた精一郎だったが、恩人の笑みに勢いが削がれてただはあと頷いた。なんだか呼吸が盗まれた

感じだった。

「改めてご挨拶申し上げます。秋山要助様とお伺いしました。私は男谷精一郎と申します。このような形でお会いするとは、思いもよらないことでございました。命を助けて頂いたご恩は、決して忘れてはおりません」

座敷にあがった精一郎はそういって両手をついた。それから正式にお礼と詫びを述べる心持で緊張して息を整えようとすると、いいんだ、いいんだという声と共に肩を叩かれた。棒のようになりかけていた背筋が、それで湯でもかけられたようにぐったりとした。不意をうたれてまた言葉がつげなくなった。秋山要助の大きな黒眼が脹れあがって精一郎をとらえていた。

「儂らと違って、城に仕える武家には不都合なことが色々ある。承知しているから、あのときのことはもういいっこなしだ。ただね、ひとつだけ気になっていたことがある。男谷殿はどこの道場で修業されたのかということなんだが、さぞかし荒行を積まれたのではないかな」

「は、私は……」

平山子龍先生の兵原草廬、という言葉が喉元まで迫り上ってきた。だが口に出すことは出来なかった。歯を食いしばると、破門の二文字が胸の中で燃え上った。

「いや、答えられない事情もあるだろう。儂の訊いたことは忘れてくれ。こいつらは助

勢させてくれといってやってきた連中だ」

要助はそういって、筵に坐ってじっと精一郎の様子を窺っている男たちを見回した。肩幅の広い者、厚い胸を持つ者と色々いたがみな侍ではなかった。普段は畑や山仕事をしている者たちで、要助を師と仰いで剣術を習っているのだと弥市が説明した。

「こっちは弟子にしたつもりはなくても、どこからか集ってくる。こいつらはみな力は強いが気力がない。稽古をつけてもすぐに音をあげてしまう。事情は聞いておるだろうが、熟達した浪人どもが相手だ。人数頼みにはできん。それに茶屋に討ち込むにしても、使えるのはせいぜい弥市くらいのもので、こいつらではかえって足手まといになる。そういったが帰ろうとしない。今朝、川下で男の死体がひとつ上ったが、斬った者は並の腕ではない。たいした太刀筋だった。死体は代官所の小役人が運んでいって吟味中だが、斬殺体など見るのは初めてでこいつらは震え上っている。無愛想なツラをしているのは、臆病風を見透かされまいと気張っているからでな。許してやってくれ」

要助はそういって軽く頭を下げた。男達はみな青錆を塗られた卒塔婆のように、無表情に押し黙ったままだった。要助は上体を起こして彼らを見据えた。濃い眉毛だった。

「茶屋を占領している浪人は最低でも七名、逃げ出した下男が見た数だからそれ以上いると見た方がいい。加勢するのは勝手だが、てめえらが叩っ斬られても助けることはできない。足手まといというのはそういうことだ。ことに総領は死なすわけにはいかん。

すぐにここを出ていくことだ」

要助は注意深く弟子たちを見据えた。右端にいた男が俯いた。要助は軽く顎を振った。弥市が立ち上がり男の袖を引いた。男は抗い、村のためにやる、と唾を吹き飛ばして叫んだ。

「おまえは帰れ。第一、人質になっている者の中に村人はおらん。みな巡礼だ。それもいつ死んでもいいような老人ばかりだ。精一郎さん」

要助は急にくだけた口調になって、精一郎に顔を向けた。

「巡礼は、仏のいるあの世を旅するつもりで札所巡りをしている。口では仏を敬っても、腹の中では現世での幸せを願っている。年寄りになるほど欲張って長生きをしたがる。儂はそんな強欲な連中など助けるつもりはない。ただね、ひとり子供が混っている。その子はいわば年寄りの犠牲者だ。この子だけは助けなくてはならない。そう思っておせっかいを買って出たんだ」

子供と聞いて精一郎の脳裏に浮かび上った男の子がいた。長太といった。母の名は民。あの方にも助けられたと精一郎は思った。民のしとやかな細面の横顔は精一郎の胸を苦しくさせた。

弥市に引き立てられて、農家の総領だという男が土間に降りた。家でおとなしくしているんだぞと弥市がいうと、男は秋山要助に黙って一礼して、暗くなりだした外に転がり出ていった。要助は精一郎に目を向けた。落ちついた眼差しだった。

「浪人どもが要求している合力は百五十両。田舎では大金だが集められない金ではない。秩父領十九ヶ村でおよそ一万石の惣高がある。百姓の数は一万六千、この村にも八百七十人がいる。今、名主と村の組頭があちこちに金を集めに行っているのだが、さあて、どれくらい持ってくるか」

伝六が土瓶から茶碗に茶を注いでくれた。

「茶の葉でなくて、山に生えている木からむしった葉だども、茶みてえな味がするだ」

そう耳元でいってにっと笑った。川越で練武館の者たちに襲われたときに、弥市と共に助けてくれた人だったが、熟した柿のようなその顔を精一郎は覚えていなかった。礼をいって飲んだ。渋い茶の味がした。

「村役人が斬られたと聞きましたが、どうして代官が出てこないのですか」

ずっと疑問に思っていることだった。取締りをしようとしない代官に対して、誰も不平をいわないのが不思議だった。要助の反応もあっさりしたものだった。

「秩父代官所から人はこない。やつらにとっては、この村では何も起こらなかったことになっている」

「それはどういうことですか」

「下手に騒ぎを起こせば忍藩十万石が揺らぐ。ま、揺らがなくとも、罅くらいは入るか

もしれんな。こいつらには申していなかったが、今朝の死体は幕府隠密だと儂は睨んでいる。こいつらは知らなくとも名主には分っている」

そういった後で、要助は囲炉裏の火に照らされた精一郎の顔を、いぶかしそうに見つめた。初めて要助の表情が動くのを見た気がした。

「精一郎さん、今朝何か見たかね」

要助の視線が強く射してきた。もう知らない振りをする必要はなかった。

「はい。霧の中で、ふたりの浪人と旅姿の男が斬り合うのを目にしました」

要助は頷き腕組みをした。

「隠密に命を下したのが老中か大目付か分からないが、いずれにしろ忍藩を内偵する必要が生じたのだ。指令を受けた隠密は、門前茶屋のひとつが浪人どもに占領されていると聞きつけて探りを入れたのだろうが、それは忍藩を潰す材料を仕込もうと企んだわけではない。いわば隠密の習性がそうさせたのだ。もっとも代官にしてみれば、人質をとられる事件は大変なことで、ここは一番頬被りするしかない。秩父代官所の役人が浪人集団にやられたら、藩ではさすがに見過ごすことはできん。今度は軍勢を出して鎮圧に向かうだろう。そうなってはおおごとだ。だから代官所では初めから知らんぷりをして、村で金を集めて、浪人が引き取るまで待っておることにしているのだ」

要助は淡々と語ったが、聞いている精一郎は驚きと憤りで胸が破裂しそうだった。そ

んな姑息な手段で事件が解決されていいわけがない、代官所が役目を放棄してよいものか、と叫びたいのを必死でこらえていた。平山子龍先生が知れば、八角の鉄棒を振り回して、すぐにでも代官を成敗しに行くことだろう。

「隠密は予期せぬことで命を落すことになったな。そういえば今朝役人から面白い話を聞いた。やつの懐中にあった書き付けに正之助、登勢という名があって、この者たちは川越から熊谷宿一帯を荒らし回っていた夫婦盗人だそうだ。なんの因果か隠密の手にかかって殺されたらしい。人殺しなどは十年来なかったことで、代官所では大騒ぎだったらしいが、内心は隠密のおかげでとんだ掃除ができたと喜んでおる。ここの役人どもでは目端のきいた盗賊を捕えることはできぬからな」

要助の口からふたりの名前が出たことは意外だったが、精一郎の胸には格別の感慨は浮かんでこなかった。ただ、あの美しい顔の裏側に邪心を潜ませてしまったのは、男のせいではなく、本人がそれに見合った性格を持っていたせいだろうと思っただけだった。

「隠密にとっては思わぬことで正体を明かすはめになってあわてたことだろう。無論やつが阿部領に潜入したのは民情を探るためではない。他に理由がある」

要助は煙管を取り出して煙草をつめた。その口元から煙が吐き出されるのを一同は息を詰めてみていた。精一郎も注意深く耳を傾けていた。それと同時に自分が別のことに気を向けているのを知った。いつのまにか要助の息をそっと計っているのに気づいたの

だ。さらに妙なことに、視線でしきりに相手の隙を見いだして、そこに打ち込もうとしていた。

「大名家の内情はどこも苦しいが、阿部家も例外ではない。歴代藩主の多くは、老中や大坂城代、京都所司代などの要職についたが、大坂、京都の遠国に勤めるとなると物入りが嵩む。それに浅間山の噴火や洪水などの被害で、藩の財政は窮乏していた。だが、ここまではよくある話で、隠密が活躍する舞台は整わない」

煙管の灰を囲炉裏に落してから要助は湯呑みの中のものを口に含み、それを飲まずに土間に吐いた。すかさず弥市が手拭いを差し出した。その一連の動きを精一郎は瞬きを惜しんで見つめていた。要助の仕種は鷹揚なようで、打ち込む隙が見いだせなかった。何か仕掛けようとすると、脹らんだ空気が圧力となって押し返してくる息苦しさを感じるのだ。

「今の藩主正権様は御年九歳。前藩主播磨守正由様が亡くなったのは、五年前の文化五年十一月で、年の瀬には当時鉄丸様といわれた正権様が襲封されたのだが、そのときわずか三歳であった。鉄丸様は御正室のお子、当主となられるのに何の支障もなかったように映るのだが、播磨守様には実はもうひとり男のお子がおられた。ご妾腹の福松様だ。播磨守様にはこのあと、ご妾腹に女子四名を授かられて、そのあと鉄丸様がお生まれになったという経緯がある。藩財政が豊かなときは何の問題も起こらぬものだが、窮乏となると色々と仕掛けをする者が出てくる。幼い藩主の後ろ盾になって、政権を握ろうとする輩たちが暗躍するのだ」

要助の喋りを、みなは身じろぎせずに聞いている。藩の政争には無縁の者たちだったが、その表情には驚愕の色が貼り付いている。政治はいつも、藩主の許で公正に執り行われていると信じているのだ。だが精一郎はそうではないことを知っている。蝦夷地での海防の重要性を建白した平山子龍先生を、幕府の重職にある人たちは初めは煩わしく思い、次に子龍先生が大砲など全ての砲術に長じ、実弾での演習も重ねていると知ると狼狽して、兵原草廬を閉鎖するよう命令を下した。幕閣の重臣たちは、その居心地のいい地位にただぬくぬくと坐っていたいだけで、国のことも、外敵から漁場を奪われて難渋している民衆のことも少しも気にかけていない。このまま放っておいてはいずれこの国は外敵に蹂躙される。そうなったとき、いったい誰が天子様をお守りするというのか。

「政権争いは福松様が生まれたときから生じていた。それが鉄丸様が生まれ、播磨守様がみまかられた直後から露骨になった。藩は二派に分かれ、その派閥争いは江戸表を巻き込んで今も続いている。茶屋を占領している浪人達は、取潰しに遭った他藩の元陪臣ばかりではない。重臣どもの派閥争いの犠牲になって、弾き出された元忍藩藩士が混っている。いや、むしろ指揮をとっているのは元藩士、だと儂は睨んでいる。以前同じよ

うなことがあったが、その後、妙な噂を儂は耳にして成程そういうことかと確信するようになった。精一郎さん、分かるかい？」

それは、といいかけて、精一郎は口をつぐんで頭を振った。要助は口元に不敵な笑みを浮かべた。要助を見る男たちは、重苦しい空気の下で岩のように沈黙して固っていた。

「浪人狩りをするのは代官所の役目だから当然として、そのずっと上にいる奴らが、浪人どもを扇動しているとしたらどうかな。全て辻褄が合う。派閥争いとはそういうものだ。一方の勢力を蹴落して政権を握るためには、藩の存亡をも危険にさらす事など平気でしでかすということだ。隠密はその餌に食いついたというわけだ。こいつらにはなんのことかさっぱり分からないから、ただぶったまげているだけだが、実際の政治とはそういうものだ。藩財政がどんなに窮乏していても政商は儲けているし、そいつらに取り込まれた重職連中は、藩の借財を先送りして甘い汁を吸い続ける。それが執政にある者の特権なのだ。おっと、帰ってきたようだ」

要助はふとそういって顔を土間に振った。みなの目は戸口に向けられた。だが、人の気配はなかった。提灯を吹き消した下男が戸を開いたのは、それから大分経ってからだった。

二

入ってきたのは髪の白い小柄な老人と厚い胸を持った中年の男ふたりだった。筵に坐っていた者たちが腰を屈め、慇懃におじぎをした。それでふたりが名主と組頭だということが精一郎にも分った。

秋山要助はふたりを伴って奥の部屋に入っていった。しばらくして襖が開かれ、要助が顔を出して弥市に来るようにいった。それから精一郎に視線を向けてきた。

「精一郎さん、あんたも入ってくれ」

いわれて精一郎は男たちの間を抜けて、座敷に入った。背後から飯の炊けるいい匂いがしてきて、刺激を受けた腹がきゅっと鳴った。朝飯を食べたきりで腹が減るのは仕方なかったが、やはり赤面した。

十畳の部屋は畳敷だった。隅の灯りの届かないところに人が寝ていて、黒い衣を着た尼僧が傍らで背中を丸めて坐っていた。寝ているのは老婆で、額を手拭いで冷やしているようだった。

要助は腕を組み、眉間に皺を寄せて薄く両目を閉じていた。その前に名主と組頭がそろってうなだれていた。精一郎が組頭の後ろに坐ろうとすると、弥市が要助の隣にいく

ように促した。戸惑ったが、遠慮して弥市の手を押し返すのも変なことなので、要助から二尺程下ったところに坐った。弥市は組頭の傍らに影のように控えている。精一郎の耳に、寝ている老婆の喉から洩れる掠れた寝息が聞こえてくる。

「それでお手前方はどうしようというのだ。このまま巡礼たちをうち捨てておくつもりか」

腕を解いた要助が行灯の灯りを映した黒眼をふたりに向けた。名主が何か呟いたが精一郎にははっきり聞き取れなかった。要助は名主を直視した。

「善右エ門さん、あんたが百五十両用意するというから儂らは待っておった。あそこにおられる星布尼さまもそうだ。まさかこの二十五両だけを星布尼さまに持たせて、法雲寺門前茶屋にいかせるつもりではあるまいな」

要助の前には袱紗が置かれている。それで名主と組頭が用意した金子は、浪人の要求からはほど遠い、二十五両だということが精一郎にも察せられた。

「そういわれましても、このあたりの村では、どう工面してもこれだけしかできませんでしただ」

善右エ門は皺の重なった目蓋から灰色の目を覗かせて、前にいる要助を用心深げに見つめた。顔色はうち捨てられた紙のように黄ばんで乾いている。喉にはノミで刻まれたような縦皺が数十本走っていて、喉仏がそのまま仏像の形になって盛り上っていた。

「百五十両と引き替えに、人質を解き放つことになっている。その金が用意できないとなると、巡礼たちの身に危険が及ぶ。あそこで寝ている老婆は、熱を出したのが幸いして放り出されたが、中にはまだ十名ほどの巡礼がいるのだ」

「だども秋山さま、これはわしらにとってはとんだ災難でして、本来はかかずらう事ではないものですだに」

「その気持も分からないものではない。だが、やつらが襲った茶屋はこの村にある。目星をつけられたのは災難だが、棄てておけるものではないだろう」

「じゃが、もともとお役人さまにやってもらうことだで、わしらにできることはここまでだに」

「代官所からは人は出ない。代官が来るのは全てが片づいてからだ。名主のそなたなら、とうに存じておることではないのか」

前にいる枯れた老人に対して、ふと要助の眼差しは春の花を見るようにやさしくなった。老人は油断しまいというように、年輪を経て目尻の下った細い目を要助の胸元に向けてじっとしている。組頭の巨大なが蛙のように盛り上った上体が、微かに前後に揺れている。額と鼻の周りには、蚕の卵のような小粒の汗がびっしりと浮いてきていた。

「それとも儂らがじれて斬り込むのを待とうというのか。なるほど、儂は武士ではなく元々は紺屋の倅、斬り刻まれたとて忍藩の恥にはならん。あわよくば騒ぎを鎮めるため

に、郡奉行が出陣してくるやもしれん。だがな、善右エ門、武器をとっての戦さは、いかなるときでも避けるのが軍略というものなのだ。それは最後の最後、まずは交渉によって勝ちを得る道を探るのが最善の策、善右エ門の善じゃ、善は急げの百五十両、それで戦さはしないで済む」

善右エ門は眉毛をつり上げて、訝しげに要助を見上げた。

「なんといわれても、これ以上の銭は出てきませんだに。百姓は銭なんか持ってねえですだ」

「巡礼などどうなってもよいということなのか」

「こげな災難を、わしらの村だけでやり過ごすのは無理でごぜえますよ」

「茶屋で働くのはこの村の者たちなのだぞ。それでも勝手にしろというのか」

「そうはいってねえだ。んだども、銭はこれだけしかねえんだがら、すかたなかろうが」

そうか、と呟いた要助は軽く目を閉じて腕を組んだ。部屋には、隅で寝ている老婆のたてる苦しげな寝息のほかは、何も聞こえてこない。隣室からは低い呟きが洩れてくる。台所には下働きの女がきたようで、どうやら握り飯を用意する段取りになっているらしいと精一郎は見当をつけた。だが、秋山要助が何を考え、どんな計略を立てているのか、推察するのは困難だった。この間にも人質たちは、心細い思いで過ごしていることだろう。場合によっては、乱暴されて傷を負った者もいるかもしれない。なのに討ち込みを押し止められた自分は、途方にくれたようにここに坐っている。

精一郎は、名主や組頭と同じ部屋にいるのがだんだん苦痛に思えてきた。自分は何をすればいいのだろう。いったい十五歳の自分に何ができるのだろう。そういう思いがとりとめなく胸の中を右往左往しだした。

そのとき、うむーッという唸り声が落ちてきて、悄然とし始めた精一郎の心を揺さぶった。なんだか大砲の音にいきなり元気づけられた気がした。

両腕を上げて大きく伸びをした要助は、達磨さんのように目玉を剝き出しにして名主を喰い入るようにみつめた。善右エ門と呼んだ声は、地底から響いてきた程に冷え冷えとしていた。

「昼間、この家を探索させてもらった。その折、妙な物を見つけた。おぬし、知っておったか」

なにをでございますか、と善右エ門はいって剣呑な目付きをした。おそれいった様子はまるでなかった。田舎の穏やかな名主という顔の裏から、野狐のようなしたたかなものが現われた気がした。

秋山要助殿は何を見つけたというのだろうと精一郎が思っていると、立ち上った要助が無造作に善右エ門の襟首を引き上げて、横の板戸を開けた。そこは三畳の仏間で、こ

ぢんまりとした仏壇がひとつ置かれていた。

「弥市、行灯をくれ」

弥市は素早く行灯を仏間に置いた。要助は仏壇の厨子を開き、経を唱えながら中に手を入れた。取り出したのはありきたりの古ぼけた仏像だった。

「これと背中合わせにこんなものが出てきた」

仏像を仏壇に戻し、代りに石像を手にした。一尺足らずの石に菩薩の姿が浮き出ている。

「善右エ門さん、こいつは何だね」

「観音菩薩でございます」

善右エ門の声が震えている。薄い頬肉が痙攣して、瞬時に背中に震えが伝わってきた。要助は石面に刻まれた菩薩を指でなぞった。そうしてみると少し妙な姿をしていた。菩薩は顔を斜めにして何かを抱いていた。

「赤子を抱いているようだが、あまりうまい彫り師が彫ったものではないな。赤子が猿のようだし、観音様の目が片方消えかけている。こいつは子育ての観音様だな」

「はい」

「マリア観音と耶蘇教ではいうのだろう」

とたんに善右エ門の肩が大きく上下した。獣じみた喘ぎ声を吐き出し、両手を前につ

いた。その鼻先に要助は石像を突きだした。

「儂は先祖を敬うが神を頼みにはしない。だが、何を信ずるにせよ、信心する者を分け隔てはしない。延暦寺の門徒には真剣で斬りつけ、高野山の門徒には木刀で打つということはしない。善右エ門、耶蘇教では信者以外の者は人ではないと教えているのか、命など、どうなってもよいと」

「お許しください」

善右エ門は畳に額を擦りつけた。丸めた身体はススキが倒れたようだった。そう見えたのは、精一郎の気持が、穂先のようにとりとめなく風の中で揺らいでいたからかもしれない。隠れキリシタンの里、その呟きが胸の内で反響した。

「武士であろうが百姓であろうが、命だけは等しいものだ。そうではないのか、善右エ門」

「も、申し訳ございません」

泣き声をたてて善右エ門は石像にすがった。

「秋山様」

組頭が膝を進めて仏間との敷居ににじり寄った。蟹の甲羅を張り付けたような頑丈な顔は茹だって赤くなっている。

「銭は集めますだ。なんとしても集めますだ、だから許してくだせい」

「組頭、顔を上げろ」
要助は刀を手元に引き寄せ、腰を落して片膝を立てた。組頭の頬にも涙が伝っていた。素直に改悛を表わした組頭に、しかし秋山要助はそれまで見せなかった厳しい視線を向けた。
「儂に許しを乞うても無駄だ。儂は代官ではない。それにだ、おぬしらは本心から悔いてはおらん。おぬしらの涙は偽物だ。金など集めなくとも、床下に隠してあるのは分っておる。人質になっているのが耶蘇教の信者であれば、すぐにでも救いだそうとしたであろう。もはや一刻の猶予もならん。許しを乞うのであれば、おぬしらふたりが二十五両の金を持って茶屋に行け。これしか集まらなかったといって首を差し出せ。阿部領に生きていることを怨め。儂らを騙そうとしたことを恥じろ。おい」
いきなり要助はそう怒鳴って、隣部屋との境の襖を睨みつけた。
「おまえらは手出しはするなよ。そこから動くな。おまえらがいたずらに助勢をすれば、人質の命がなくなる」
要助の言葉に応える者はいなかった。十名の者たちは不気味に静まり返っている。老人の嗄れた泣き声と、組頭の啜り泣きが床を低く這っている。
「いけませんよ」
不意になまめいた女の声が響いた。精一郎はとっさに後ろを見た。要助は行灯を手にして敷居を跨いだ。尼僧が、暗い中で白い頬をこちらに向けていた。なにがです？　といって要助は尼僧の傍らまで行って行灯を置いた。微笑みを浮かべた尼僧の頬は、つきたての餅のようにふっくらとしていた。

「初めにお話ししたように、私が参りますよ。それでね、今思いついたのですけど、私を人質にしてくれと頼んでみますよ。私には浪人の方たちも乱暴はなさらないでしょう。これからすぐに参ります」
「いや、星布尼様ひとりを行かせるわけにはいきません」
要助はそういってから、精一郎を振り返った。星布尼も、要助の視線に沿って顔を向けた。目が合うと星布尼は口許を緩めて頷いた。日陰に押し込まれていた身体を、日差しが撫でてきたような慈愛に溢れた表情だった。
「私がお供します」
秋山要助に向き直って、精一郎はいった。
「そうしてくれ。いや、最初からそのつもりで精一郎さんを呼んだんだ。あれを」
といって要助は部屋の隅に置いてある笈を指差した。星布尼の温かみが感染したのか、急にやさしげな眼差しになった。
「弟さんが供をして来たんだが、浪人どものところへ向かうと星布尼様がいいだしたら、笈を置いてどこかへいってしまったのだ」

「逃げたんですよ。佐吉は臆病ですから」

星布尼は胸を揺すって笑った。凍りついていた部屋が、その控えめな笑い声でほのぼのとしてきた。春の風が吹き込んできた錯覚に陥ったほどだった。いつのまにか老人と組頭の泣き声も途絶えていた。

「精一郎さんについてもらえれば、色々と助かる。中から手引きする者がおれば作戦もたてられる」

秋山要助がそういったとき、奥の壁に映った頭の影がむっくりと起きあがった。とっさに弥市が身構えた。影は大蛇が鎌首をもたげているように、怪しく揺らいだ。

「嫁が、孫が、あんた、はやく」

寝床から半身を起こした老婆が、熱にうかされて騒々しくわめいた。その肩を星布尼が抱きかかえた。その老婆をみて精一郎はびっくりした。老婆のところに寄るなり、枯木のようにか細い腕を取ってかまわずに声を振り絞った。

「長太があそこにいるんですか。おばあさん、いるんですか、長太が」

木の枝を振り回していた、長太のきかん気な眼差しが思い出された。そして、その向こうでつつましく佇んでいる、美しい人の顔に浮かんだ微笑みを、精一郎は見ていた。

「がふっ」

老婆は喘ぎ声をたてて白眼を剝き出した。星布尼が老婆の腕を振り続ける精一郎にあ

わてふためいていたが、精一郎は頓着しなかった。こういういじわるな婆アは蜥蜴のようにしぶとい、どんなことがあっても生き延びてしまう、と憤慨しながら寝床に横にされた老婆の肩を揺すった。

「娘だ。精一郎さん、あんたには娘に化けてもらおう」

そう秋山要助が精一郎の横顔をしげしげと眺めて呟いた。

要助のその呟きを確かに聞いていたと、精一郎が反芻するのは四半刻後のことだった。元結を切られた髷が、童女の前髪に似せて、狼の爪痕の残る月代を覆い隠して、十五歳の若武者を娘に変身させていた。

三

「古より英雄は女装して敵地に潜入し、敵をひとりで討ち果たしておる。日本武尊は仇敵川上梟帥の宴会に女に化けて潜り込み、その気をひきつけるや、隠し持っていた剣で豪傑と名高かった川上梟帥を一撃の下に斬り殺した。川上梟帥の女好きが災いしたという者もおるが、これは日本武尊の美女変身ぶりを誉めるべきだ。日本書紀にも容姿端正と記されているほどだ」

星布尼から化粧をほどこされている精一郎の横に端座した要助は、自分の計略が単な

る思いつきでないことを強調するためか、握り飯を片手にそんなことを喋りだした。名主と組頭を金策に放り出した後で、横には弥市と伝六が控えていた。弥市は神妙な顔で女に変っていく精一郎をみつめ、伝六は呆然と眺めていた。精一郎は村の女が持ってきた小袖に着換えさせられていた。

「義経が美少年であったことは有名で、女装すれば楊貴妃にも擬せられた程だ。小袖を通し遊女に化けた義経が、盗賊どもの中に躍り込んでさんざんに斬り捨てたという話もあるし、女房装束に被衣をかぶった義経には、さしもの弁慶もたぶらかされたと聞いている。おまえたちも知っているな」

自分の語り口のあまりのなめらかさにきまりが悪くなったのか、要助は傍らの弥市と伝六に相槌を求めた。ふたりは、へ、へい、と不明瞭な返事をして握り飯を齧っていた。義経の話は『義経記』に書かれていることで、それは遮那王を主人公にした物語だった。兵聖閣では人気の本で、講義に疲れた塾生が隠れてよく読んでいた。

「精一郎さんも美男子だから女装が似合う。羨しいものだ。あんたと同じ年の頃、儂も女に化けて甲源一刀流の逸見太四郎を打ちのめしてやろうと思ったこともあったが、このご面相では女になっても猪も逃げ出すだろうと悟ってな、あきらめた次第だ」

要助がそう話すのを、ふたりの門弟は忍び笑いを洩らして聞き流した。小袖が村の女によって持ち込まれるまでの間、要助はこれまでに会得した武道の原理といったものを、

さり気なく精一郎に話して聞かせてくれた。それは一子相伝という肩肘張ったものや、気骨の折れる精神論ではなく、剣術よもやま話といったものだった。見えない相手の陣地に潜入していく精一郎を、勇気づけるために話してくれたことなのだろうが、不思議な説得力を持っていた。

「武道は奇襲にある」

と要助はいった。同じ力の持ち主が、真っ正直に対峙したところで勝負はつかない。どちらかが止めない限り、両者とも死ぬ、といったあとでこんなことを話した。

「そういうときは、女を連れて行く。あらかじめ場所が決められているときは、藪か木の陰に隠れさす。男が刀を抜き合わせるや、女は飛び出し着物の裾を下腹までまくり上げる。ここで平然としているやつはいない。大抵度肝を抜かれて目を凝らす。その隙に打ち込んで勝ちを得るのだ。死んだやつからは文句は出ない」

そんな奇策は平山塾では御法度だ。思いついただけでも叱られる。だが、精一郎は秋山要助の話を聞いて、求道精神でびっしり埋った自分の脳に、一陣の涼風が吹き込んできたような爽やかさを感じた。

またこんなこともいった。

「戦わずして勝つ、というのは孫子の兵法の大前提だが、これは何も敵の戦力を分析して戦略を練るということだけではない」

といってから香取神道流の始祖、飯篠伊賀守家直の名前を出した。

「飯篠伊賀守家直の元へは真伝を求めて、あるいはあわよくば家直に勝って武名をあげんと、諸国から武芸者がひっきりなしにやってくる。この者たちにいちいち立ち合っていては面倒なので、家直は庭に繁茂する熊笹の上に茣蓙を敷いて、そこに坐って武芸者と応対した。家直が坐っても熊笹は折れないし曲がりもしない。相手にすれば家直が空中に浮いているように見える」

そして家直は相手にも茣蓙に坐るようにすすめ、もし熊笹を折ることなく坐ることができたら望み通り対戦しようと語りかける。そんな仙人みたいなことができるわけがなく、いわれた相手は畏れ入って逃げ出してしまう。

「ここまではよく知られた話だ。家直が会得したのは、浮き身の術ではないかともいわれている。精一郎さんも聞いたことがあるだろう」

そう訊かれて精一郎は頷いた。浮き身は兵原草廬では必修であったが、そのことは黙っていた。いえば全てを説明しなくてはならなくなる。

「名人といわれる武術家に、神話じみた伝説があるのは当然としても、人は人だ。空中に浮かぶことはできない。そこには神話を作り出す仕掛けがある。家直の場合は茣蓙だ。茣蓙にはふたつの穴を開けておく。客が来ると、熊笹の上に置いた茣蓙の穴に両足を突っ込んで待機している。それだけのことだ。尻の下には作り物の足を敷いておき、本物

は熊笹の中に立っている。相手からはいかにも浮いているようにみえる。これは下が熊笹だから出来る仕掛けだ。実際に空中に浮かべるのなら、そこらに浮いていればいい。しかし、武芸者は仕掛けなど考えることがないから、ただただ感服する。戦わずして勝つというのはこういうことをいう」

まさかそんなことが、と思ったが、修業をすれば人間が空中に漂うことが可能になるというのは、浅草奥山の見せ物小屋にかかる出し物興行のことで、武芸者の目指すことではない。しかしやはり家直の興した香取神道流は、太刀、槍、棒術、居合い術の根幹をなすもので、その門からは塚原卜伝、諸岡一羽というその後独自の流派を開く武人が出ている。家直の唱えた「兵法は平法なり」という兵法観は、没後三百余年経った今でも修業の心得として語り継がれている。家直の話は兵聖閣での講義で精一郎が下斗米秀之進から聞いたことだ。その兵法の始祖の霊力を、いとも簡単に仕掛けとして片づけて悪びれることのない秋山要助に、精一郎はそれまで出会った人にはない魅力を感じたものだった。

村の女が持ってきた黴臭い小袖に腕を通していると、要助は剣の極意といわれる三殺法について講釈しだした。

「これは相手の剣先を殺す、技を殺す、気を殺すというもので、やられた相手は攻め手がなくなる。その中でも気を殺すという極意を習得するには、数十年かかる」

三殺法は一刀流の極意であるというだけでなく、剣をとる者ならみな到達を志す境地だった。ところが要助はそこまでいうといきなり大あくびをした。着換えを手伝っていた村の女が、腰を抜かしかけた程の大声を出した。

「まあ、そういって剣術道場の先生は門弟を長く居つかせるわけだ。ところが、こうやって剣先を殺す、技は後の先だ、いや、先の先だ、などとご託宣を述べているのは技以前のことでな、理屈で技を押し込めようとしても無駄だ。儂はな、あ、こんなことができちゃった、というのが技だと思っている。つまり偶然が重なっているから、他の者には説明がつかないものなのだよ」

秋山要助の話を聞きながら、精一郎は十一歳まで習った一刀流の道場のことを思い出していた。精一郎らの少年組を指導してくれたのは、御家人の次男という師範代の人で、まさしく相手の技を殺す方法をあれやこれや教えてくれた。殺している内に相手に隙が生じるとも聞いた。それは間違いではないと精一郎はずっと思っていた。無駄なことだとは考えもしなかった。秋山要助の話はどんどん変転するが、内容は軽いようでそうではなかった。

「相手の気を殺す術を習得するのに何十年もかかるというが、それは形になって証明するものがないからで、それ自体たいしたことではない。相手の面のなかに自分を入れていってしまえばいいだけのことだ」

要助はこともなげにいったが、精一郎は稲妻に身体を射抜かれた程の衝撃を受けた。肉体が木っ端微塵になった気がして、しばらく息ができなかった。やっと呼吸をしだすと、吐き出した息がすかさず凍りついていく感覚に侵された。剣の神髄を目に留めた驚きは、星布尼に化粧をされている今も、丹田の周囲を落ちつきなく旋回している。

仕上がりを見た星布尼はため息をついた。こんなに美しい娘さんは見たことがないと呟いた。

「師範、こんなに美しくっては、かえって浪人どもにからまれるようなことになるんじゃないんですか」

弥市の言葉に要助は薄笑いを浮かべた。

「それは思う壺だ。精一郎さんなら難なく相手の武器を奪って反撃できる。おまえらとは器が違う」

そういって、星布尼から鏡を向けられて照れている精一郎を眩しげにみつめた。鏡に行灯の灯りが反射したようだった。

「そんなことになっても、決して打ち据えようとしないことだ。場数を踏んでいる浪人を甘く見てはならん」

「はい、承知しています」

そう答えながら、精一郎はちらと鏡を見た。そこに映っているのは全然知らない女の顔だった。

「子供を取り返すだけだ。それができない場合は戻ってくることだ。情勢が少しでも分かればそれでいい」

精一郎は頷いた。そのときになって急に気持が高ぶってきた。早朝の霧の中で垣間見たふたつの人影が脳裏に蘇った。女の格好をした自分が生きて返ってくるには、最後まで女でいることだと言い聞かせた。星布尼の指示で、村の女が精一郎の髪に手拭いをかぶせた。

「不思議なんだども、どうして尼さんが化粧道具を持っているんだ？」

化粧品を荷にしまう星布尼を見て、伝六が誰にともなく尋ねた。すると湧き水のような音が聞こえた。星布尼が白い歯を覗かせていた。

「こんなりをしていますが、私は尼僧ではありません」

「尼さんでねえ？　それじゃなんだべ？」

伝六は、墨染めの衣の背中を向けている星布尼にそう尋ねた。星布尼は脚絆を直しているらしい。その肩が小刻みに震えている。まだ笑っている。尼さんにしては随分さばけた楽しい人だと精一郎も思っていたので、伝六と同じように、それでは何だろうと興味を持った。

「儂もついさっき知ったのだが、星布尼さまは俳諧師なのだ」

要助がいった。困ったことを訊く奴だという目で伝六を見ていた。伝六はまだ理解できずにぼんやりしている。

「俳句をつくって旅をしておられるのですか」

そう精一郎が訊くと、星布尼は首を回して「そうなのよ」といって婉然と笑った。その口許から赤い舌が覗いた。不意に精一郎は、旅籠の露天風呂で一緒になったお駒と呼ばれていた女を思いだした。

「儂も俳席には何度か顔を覗かせたことがあるが、女宗匠さんに出会ったのは初めてだ。色々と苦労がおありでしょう」

「いいえ、好きなときにどこへでも行かれますから楽しいのです。あ、お金はここへまとめて入れておきますよ」

化粧品を入れた荷の中に、袱紗で包んだ小判を入れた。名主が集めてきた二十五両に秋山要助が三十両足し、精一郎も二十両出したので全部で七十五両になった。それで要求額の半分になった。それを差し出して、星布尼が巡礼に代って人質になることを申し入れることになっている。だがそれは星布尼が尼僧だと思っていたからで、俳諧師と分った今は、そんな危険な目にさらしていいものだろうかと精一郎は心配になった。自分の役割がずっと大きくなったようだった。

「それじゃあ、参りましょうか」

襖の前で星布尼はそう言って精一郎を振り返った。弥市が襖を開けて先に立った。精一郎は星布尼の肌着や雨合羽、薬、ちり紙、筆と紙などの入った笈を持ってあとに続いた。初めて締めた帯はきつく、身体は荒縄で縛られたように窮屈で、足が思うように前に出ていかない。つまずきそうになると、筵敷の台所にいる男たちの好奇な視線が身体に刺さった。土間に降り立つと、男たちが背後に立った。彼らは要助と共にあとからついてくる手はずになっている。刀の代りに棒や丸太を得物として持つという。

精一郎は足元の草履を見た。そこには目にも鮮やかな紅緒がついている。

星布尼は頭から肩まで包み込む頭巾を被った。それから竹の杖を取り、提灯を持つ弥市の後から戸口を出た。精一郎も杖を手にした。

外には闇が広がっていた。星が見えるところもあるが、大方は雲に覆われていた。風が少し出ていて、椚の葉がさわさわとざわめくのが聞こえた。精一郎は弥市と星布尼のあとについて、闇の中に女となった足を踏み出した。

四

時刻は五ツ半（午後九時）になっていた。浪人たちの人数ははっきり分からなかったが、夜食の前に呑みだした酒をまだ呑み続けている者もいて、用意してきた眠り薬を酒に混入させるのが最初の仕事となった。小さく折り畳んだ紙に入れたその薬を、そっと差し出した秋山要助は、これは絶対にそうしろというものではない、と噛んで含めるように精一郎に言い聞かせた。強引に役目を果たそうとして、人質救出の目的に支障が出てはならないといいたかったようだった。

その薬を、要助がいつから用意していたのか分からなかった。元々は女が月のものの痛みをやわらげるために服用したもので、その薬草にもうひとつ野草を加えることで眠り薬の効果を表わしたという。その薬を浪人たちが呑む酒に仕込む機会を、西向きに並んだ部屋のひとつに押し込められた精一郎は、秘かに窺っていた。

「半分だけでもお金が入ったので、ご満悦なんでしょう。このあとさらに盛り上がるでしょう」

星布尼は小声でいった。浪人達は土間を入ってすぐの、勝手の板の間に続く茶の間と広間に陣取っている。笑い声はせず、話し声も高くないが、ここからは廊下とその向こうにある座敷を隔てているので、普通に話しても聞こえる気遣いはなかった。それでも、精一郎は星布尼にあわせて囁くようにいった。

「酒に薬を入れられるかどうか見てきます」

「あわててはだめですよ。あの人たちだって、そうたやすく人殺しをするものではない

でしょう。まず、お金が目当てなんですから、今夜中にあと半金入れば引き上げるはずです」

いまや星布尼も人質のひとりになっている。それなのにおっとりしていられるのは、旅から旅にあけくれて、多くの人を見てきた経験が余裕を生み出すのだろう。

しかし、精一郎は浪人たちによって、ふたりの男が命を落としているのを知っている。茶屋の下男は弾みで斬られたとしても、隠密を斬った浪人の太刀さばきは、真剣の扱いに長じている者の凄みと冷徹さを備えていた。

「捕われている巡礼の人の中に、私を救ってくれた人がいます。子供というのは、その方の子です」

不安におののいている親子を、一刻も早く救い出したかった。傷のせいで熱を出した苦しい夜の渇きを、癒してくれたのはあの人なのだと強く精一郎は思った。

「名主が金を持ってくるのを、待っているわけにはいかないのです。それに私にはあの老人が、あと七十五両も持ってくるとは思えないのです」

浪人どものいうがままになってたまるかという執念が、老人の顔に貼り付いていた。今年やりくりをつけても、来年また来られたのでは地獄から逃れることができない。それならば他国からきた仏教徒の巡礼など見捨てた方がよいという、ふてぶてしい割り切りを宿しているように思えた。石像に手を当てて嗚咽したとき、老人はこの上ない快楽

を抱いているようにさえ精一郎には感じられた。

「たとえそうだとしても、あわてて動くのはよくありません。怪しまれれば全てが水泡に帰すばかりではなく、巡礼の人たちにも災難が及ぶのですよ」

「もうすでに災難を受けています。この上なにを恐れるのですか」

「もっとひどい災難をです」

星布尼はあやすようにそういって、精一郎の手の甲に掌をあてた。そのやわらかい温もりが、泡立った心を鎮めてくれた。星布尼には尖っている人の思いを、丸めてしまう魔力があるのかもしれない。ここにきたときも星布尼の口上を聞いた浪人のひとりは、怒るでもなく、いらだつ様子もなく、そうかといってふたりを三和土に待たせて広間に消えた。そのあと現われた首謀者らしい男が、ふたりを奥の部屋に閉じこめるよう別の者に命じた。首謀者は糸のような細い目を持った体格のよい男で、浪人にありがちな荒んだ感じはしなかった。その男に向って星布尼は臆することなく、巡礼の身代りに置いてくれといったのである。

意外なことに星布尼の願いの半分はすぐに聞き入れられ、三人の巡礼が二階から下ろされた。三人とも白装束の老婆だった。茶屋から逃れられたとすれば、取り巻いている要助の門弟たちが介抱してくれたはずだ。だが、そこまでは確かめられなかった。

「この臭いはなんですか」

星布尼がそう呟いて白い額に細かい皺を立てた。

腋臭の臭いが部屋の前を塞いでいた。襖は閉められているのに、強烈な悪臭が素通りして部屋に侵入してくる。誰かが様子を窺っているのだ、と思ったとき、乱暴に襖が開かれた。わっと悪臭がなだれ込んできた。

「ほう、いい娘だ。おい、こっちへこい、酌をさせてやる」

頬の削げた浪人が部屋に足を踏み入れた。青ざめた顔から、酒の臭いが強く漂ってきた。

「この子はまだ子供ですから」

星布尼が浪人の袴にとりすがった。その手を足で払って浪人は精一郎の腕を取った。精一郎は逆らわずに立ち上った。星布尼の動転した目が精一郎をとらえていた。心配しないように目配せをしたが、それが星布尼に伝わったかどうか分からなかった。

廊下に出ると浪人は獅子鼻を寄せてきて、いい匂いだといった。男の口から吐き出される口臭と腋臭の臭いで目が痛くなる程だった。

「待て、そこから酒を持ってこい」

浪人が命令口調でいったのは、そこが台所で、干し魚を焼いている女と、もうひとり燗酒をつけている若い女がいたからである。男は精一郎を台所に押し出した。上体が伸び上がり、精一郎はたたらを踏んで蹲った。まだ膝を縛り付けてくる着物に足の動きが制限されてしまい、上体までぎこちなくなる。

「あんた大丈夫？」

燗酒をつけていた女が、足の指を足袋の上から押さえていた精一郎を覗き込んできた。女の胸許が肩に触れた。その顔を見返して、思わずアッと声を出しそうになった。女はお駒だった。どうしてこの人がここにいるのだろうと思ったが声に出して訊くわけにはいかない。お駒は浪人たちの仲間なのだろうか。

「あんた、お金を持ってきてくれた尼さんのお供の子だろう。馬鹿だね、なんで断らなかったんだよ。どんな目に遭うか分からないよ。酒が入ると人が変っちゃう奴もいるんだから。それになんだって女の子なんかつけて寄越したんだろうね。年寄りなら村にたくさんいるのにさ」

旅籠の風呂場で響かせていたのと同じ、心地よい江戸弁が耳元で聞こえた。その口調から、少なくともお駒が浪人たちの仲間でないことが分った。厚ぼったい唇に薄く溶かした紅を差したお駒は、江戸の料理屋で働く仲居のような印象があった。

精一郎は立ち上って銅壺に入れられているお銚子を二本抜いた。それから、袂から取り出した薬を素早く入れて軽く振った。それで最初にすべき仕事はうまくいったはずだった。

あんた、いったい、という呟きが洩れた。お駒の戸惑った目が精一郎を横から見つめ

ている。

「おい、貴様、見たぞ、何を入れた？　酒に何を入れたんだ」

今度は焼き魚の臭いに、腋臭が乱入してきた。部屋に戻ったと思っていた男は意外にも台所の外にいて、一部始終を見ていたらしい。うかつだった。

「貴様、何を入れたのだ」

浪人は無防備に腕を突き出してきた。精一郎は半歩踏み込んで、男の顎を手の甲で打った。倒れるところを押さえて、後頭部に手刀を叩き込んだ。それで男はだらしなく床に伸びたが、再び気づくまでに一刻の猶予もなさそうだった。

「あんたいったい、だれ？」

お駒も下女も目を丸くして呆然と佇んでいる。精一郎は銚子の一本を手にして、浪人の口をこじ開け流し込んだ。そうしておけば、朝まで起きることはないだろう。酔いつぶれて寝ていると誰もが思うはずだった。

台所の手前に小部屋があった。精一郎は浪人を引きずって小部屋の襖を開いた。中には行灯や飾り棚、小屏風などが雑多に入れられていた。隙間をつくり、浪人の身体を横たえた。縛らなかったのは、男を偶然見つける者がいた場合は騒ぎになると考えたからだった。

台所ではふたりの女がさっきと同じように立ちつくしていた。精一郎は唇に指をたて

た。そういう仕種をしたのは、恐らく子供のとき以来だったろう。覚えているのは、隣の高木喜三右衛門の家でかくれんぼをしていると、一番下の遊びに加わっていなかった四歳の娘が、突然納屋の戸を開けたのであわてて唇に指を立てたときのことだった。素読の塾に通いだした頃で、精一郎は七歳だった。同い歳に力弥という高木の嫡男（ちゃくなん）がいてよく遊んだ。力弥はふたりの姉と二歳下の妹に挟まれて育った。そのせいかいつも女の子の格好をしていて、言葉遣いも姉の口調を真似ていた。その内、力弥と呼ぶと嫌がるようになった。精一郎が兵原草廬に入塾するときに挨拶にいくと、前髪を垂らして女の着物を着た力弥が出てきて涙を浮かべた。その涙が唇に流れ込むと、紅の色に染った。後ろから現われた姉が、志乃、さみしくなるねといって弟の肩に手を置いた。その姉より弟の方がずっと美しかったことも記憶に残っている。

「これを持っていってくれますか」

新たに二本の銚子に薬をいれて、お駒を振り返った。声を聞いてお駒は下女と顔を見合わせた。

「あんた、女なの？　それとも男？」

真剣な眼差しで目を覗き込んできた。

「お駒さんですね」

そういうとお駒は跳び上がるほど驚いた。肩を縮め、まるで幽霊を見るような目付き

で精一郎を斜めに見た。口を大きく開いたのは人物に思い当ったからだろう。精一郎はまた唇に指を立てた。

「鹿の湯に逗留していたお侍さん？」

恐る恐る尋ねた。精一郎が頷くと声を上げそうになった。

「浪人は何人いますか」

「八人」

お駒は精一郎に合わせて声を潜めた。

「捕われている人の数は？」

「十一人」

そんなにいるのかと、心が濡れ雑巾で塞がれたように重くなった。

「三人逃されたはずですが」

「それが今から出されても、泊まるところがないからといってすぐに戻ってきたの」

お駒は白い部分の多い目をさらに広げた。老婆のこころもとない気持も理解できるが、それでは人質を救出しようと苦心している要助たちの負担は少しも軽減されない。欲深で我儘な年寄り、といった要助の言葉が思い出された。

「怪我人は」

「古手物の商いをしている人がひとり。でもかわいそうなのは若い後家さんね。子供の

前で浪人たちに……」

お駒はハッとしたように口をつぐんだ。広間の方から人を呼ぶ声がした。ちょっと、といってお駒は下女から焼き魚をもらって盆に三本の銚子と一緒に載せた。客商売に慣れているらしいお駒は、追いつめられた状況になっていても、何をすべきか瞬時に判断できるようだった。精一郎は賄いの下女に訊いた。

「あんたはどうして逃げなかったんだ？」

下女は首を振った。それがどういう意味なのか精一郎には判然としなかった。下女はうすら寒そうに肩を縮めて、時折女装した精一郎を気味悪げにみた。

お駒はすぐに戻ってきた。

「あいつらはお金を取るまで出る気はないわ。役人は明後日にならないと来ないって話していたよ」

「明後日か」

それまで民さんをここに閉じこめておくわけにはいかないと思った。

「その子供を連れた女の人はどこにいるのですか」

「二階。西の一番奥。手前ふたつの部屋に他の人たちがいるよ。みんな寝ている。お経を読む人もいるけど、大抵ずっと寝ている」

「分かりました」

精一郎は台所にあった包丁を手にした。お駒の白眼が女姿の精一郎を映した。
「どうする気」
「子供を助けます」
「だめだよ、あの部屋には誰か必ず入っている。殺されるよ」
お駒は精一郎の着物の袖を引いた。
「外には助勢してくれる人たちが待機しています」
「それでもだめだよ。絶対だめ。あたしがどんどんお酒を呑まして酔わせてやるから、それまでいっちゃだめ」
ここにも自分よりずっと冷静な人がいると精一郎は思った。暴虎馮河という孔子の言葉が胸に浮いた。冷や汗が出た。
「さっきの薬はなんの薬？」
「眠り薬と聞いています」
「まだ、ある？」
袖を探って残っていた一服を取り出した。
「お侍さまは尼さんと部屋にいて。あたしが知らせるまで出てはだめ。あの親子を助け出せばあとは心配ない。だから待って、絶対待っていて」
精一郎は頷いた。お駒のいう通りだと思った。

星布尼と共に部屋にいる精一郎のところへ、お駒が忍び足で知らせにきたのは、二刻もあとのことだった。

五

足音を消して進んだ。窮屈な足袋に包まれた踵をそっと廊下に置いて滑らしながら、身体の中の臓腑の塊のようなものを、頭上を越えて吊り上げる。すると両足が羽毛のように軽くなり、床板には体重がかからなくなる。
兵原草廬で夜ごと修練したことだった。盗賊になるために入塾したのではないと怪しむ者もいたが、精一郎は教えられるままに、漆黒の中、冷ややかな演武場の床を踏みしめながら、体内を空にするのだと自分に諭し続けた。それが、「気」を、夜空に送ることだと気づきだしたのは、破門を申し渡される直前のことのようだった。
精一郎は、二階の奥の部屋の手前まで来ると、身体ごと暗い空気に同化させて膝をついた。
部屋からは、濃密な人の気配が漂ってくる。障子には灰色の灯りがぼんやりと映っている。その、雲に塞がれた月のような淡い灯りの底で、男の影が動いている。秘めやかな、肌を擦り合う気配に、女姿の精一郎の鼓動は乱れて大きく打った。

隣の部屋では老人たちが眠りをむさぼっている。そこにいったん潜り込んで、ことを終えた男をやり過ごすこともできた。だが、精一郎はそうしなかった。廊下に映る淡い自分の影に沈み込んで、ざわめく夜気がおさまるのを待った。

四半刻、無になって蹲っていた。部屋の中の動きが鎮まり、代って隅に身を潜めていた闇の粒子がうごめく気配が伝わってきた。精一郎は包丁を軽く握って立ち上った。

それが何という名の包丁なのか、何をさばくために使うのか、精一郎には分からなかった。包丁を手にするのも今日が初めてのことだった。刃渡り七寸（二十センチ）ほどの身の細い包丁は、男達は酔いつぶれて寝ていると知らせにきたお駒が、用意して携えてきたものだった。お駒は二階の最西端の部屋に、女体を梢（こずえ）のごとく酷薄に折り潰す獣がのたうっていることに気づかなかったようである。精一郎は静かに立ち上った。

障子を開けると、黒い頭がむっくりと起き上った。

そこに現われたのが娘の姿であることを知って、一瞬戸惑いの乱れが影に浮き上った。それも包丁の刃が鈍い光を反射させると、緊迫した空間に影は屹立（きつりつ）した。

「おまえは尼僧の供をしてきた小娘だな。なんの真似だ」

男は落ちついた声をだした。精一郎は無言で包丁を男の喉元に向けた。

「愚かなことだ。どういうつもりかしらんが命を粗末にするな」

男はそう言いながらゆっくりと袴をつけた。間合いの内に相手が入るのを誘うような緩慢（かんまん）な動きだった。

行灯が蒲団から露出した女の細い肩を白く照らし出していた。手前の半身は立っている男の影になって暗く沈み、女の表情は見えなかった。それが民であることは、直感で分った。廊下で蹲っているときに部屋から洩れてきた女の押し殺した声に、数日前、熱に喘いでいた自分の口元に寄せてきた吐息と同じ、つつましい震えを感じていた。

――あの方はここに立っている女姿の者が、救出に来た者であることに勘付いてくれるだろうか。

そのとき、頼りなげな煙のようなものが蒲団から起き上った。暗い中に消え入ってしまう程にはかなげなそれは、煙ではなく生身の女だった。それが、全身を半行灯に照らされて金色に輝いた。素肌が燃えるのを初めて見たと精一郎は思った。民は全裸だった。

「そうか。おまえはこの女に嫉妬（しっと）しておるのだな。おれに抱かれたくてずっと待っておったが、きてくれないので焦れておったのだな」

汗の臭いが部屋に充満していた。吐き気を催す臭いだった。それが男の身体だけから排出されたものでないことを精一郎は感じていた。吐き気がしたのは、それが自分の恥辱のようにも思えたからである。

男は口の端を歪（ゆが）めて悠然と身を屈めた。無造作に畳に転がされていた刀を取ろうとしていた。その動きを目にとめると、精一郎は手にした包丁を放った。

「ツ！」

男が頸を押さえた。精一郎は反転して枕元にある男の脇差を手にした。つぎに身を戻すと、脱ぎ捨てられた浴衣を指先ですくって裸の民に突きだした。

民は浴衣には目もくれずに押し入れを開けた。そこに眠っている男の子がいた。長太だ、と思った。声に出して呼びかけたわけではなかった。そのとき異様なものを感じたらしく、民が一瞬立ちすくんで精一郎を凝視した。何をどう感じたのか分からない。精一郎は視線をはずし、もう一度浴衣を差し出した。

「外に助ける人がいます」

民は目を見張った。瞳に炎がたった。無言で押し入れから子供を引きずり出すと、浴衣を子供と自分の胸の間に挟んだ。細い身体についた豊かなふくらみが、日差しをいっぱいに浴びた果実のように甘く輝き、それは瞬時に浴衣で隠された。

長太を抱いた民が廊下を走り去るのを待って、精一郎は男から奪った脇差の鯉口に、左手の親指をあてた。一連の動きを見ていた男の眼差しが変った。刀を取ると腰に差して身構えた。

「昨日、怪しいやつを討ったが、おまえはやつの仲間か」

男は高い処から精一郎を見下ろしていた。細い目が吊り上がり、口の両端が割れた。

男は浪人たちの首謀者だった。酒の臭いはしなかった。粗暴な振る舞いの中に冷厳たる佇まいがあるのは、かつては藩士のなかでも将来を嘱望された存在であったからかもしれない。

「愚かな女だ。だが、望み通り仲間のところへ送ってやろう」

暗い中で男の目が爛々と輝いた。その双眸の中心から稲妻のような青い光が走ってきた。男の周囲を覆う妖気は、人間がつくり出したものとは思えなかった。

精一郎の投げた包丁が頸をかすめた。出血もあったはずだ。だが、致命傷を与えることはできなかった。

――奇襲戦法に失敗して、闇からつつきだしたのは狼侍だった。

精一郎はこの場でそんな自虐的な呟きが自分の胸に浮かぶのを不思議に思いながら、男が太刀を抜き放つのに合わせて、小刀を抜いた。一尺の刀身で相手と対峙する戦法は演武場で馴染んでいた。だが、それは木刀であり、相手は精一郎の頭を西瓜のように叩き割ってやろうと、爬虫類じみた細い舌を蠢かせて笑ったりはしなかった。

――自分のやっていることはこの男がいう通り愚かだ。殺すだけなら、廊下で潜んでおらずに奇襲をかけて打ち込めばよかったのだ。油断している敵に構えをつくる余裕を与える必要がどこにあるのだ。包丁で急所を当てなかったのは、民さんをこわがらせたくなかったからだとでもいうのか。愚かだ。すごく愚かだ。だがもっと愚かなのは村人

を脅して金を強要するこの者たちだ。侍の誇りを失ったそんな不埒者に負けるはずがない。

精一郎は相手の眉間に向けて切っ先を構えた。その切っ先を刀身の重みのまま下ろして正眼に置いた。相手の正中線をとらえて意識を向けた。

先程お駒が知らせてくるまで待っていた小部屋では、相手の面の中に自分を入れる、と教えてくれた秋山要助の言葉を幾度となく反芻していた。それは気合いもろとも敵の胸に身体ごと打ち込む胆力とは、全く異なる意識の世界のようだと思っていた。だが、それも今は忘れて一本の雑草になった感じで佇んでいた。

殺気がじわじわと押し寄せてきた。押し返すことなく、精一郎はやわらかく受け止めた。

そのまま待った。攻撃を仕掛けてくる相手に隙が生じるのを待つつもりなのか、自分の中にあらたな変化が生まれるのを待つつもりなのか分からなかった。剣先が相手の中心を指し、柄を自分の手が軽く握っていて、身体の芯から細かい泡のようなものが吹き出ていて、肉体の隅々まで転がっていく心地よさを感じていた。

「くえっ！」

低い気合いが発せられた。鋭く胸に伸びてきたものがあったが、精一郎は動かずにいた。相手も踏み込んできたのではなく、切っ先を突き出しただけのようだった。そのあ

とで荒い息を吐いた。

「おまえは何者だ。女ではないな」

男は腰を低く落した。敵の切っ先が向けてはずさない正中線に、得体のしれない不安と奇妙な苦しさを感じだしたのかもしれない。

精一郎はまだ動かずにいた。隙を窺っていたのではない。身体の中でざわめいていた泡の集団が鎮まり、それがいくつかの流れに乗って指先に集まると、今度は冷たい小刀の刀身に、蒸気となって吸い込まれていくような陶酔感に浸されていたのだった。

それからさらに不思議な感覚に襲われた。自分の身体の中心を走っていた確かな自覚が、蠕動するようにうねりだしたのだ。それはまるで一本の太い神経の筋が、大蛇に変身したようにも思えた。そのうち蛇ではなく、身体を流れていた河が蛇行しているのだと感知するようになった。その思いは一瞬のことで、感覚は刹那から刹那へ跳んでいく。それでいて、精一郎の体内の河はゆっくりと流れていく。

あたかも大地を流れる河が陸地と空との出会いを楽しむかのように、河面に細かい飛沫をたてて草を舐め風を見上げる。精一郎は河を感じると、自分がその波の上に佇んでいるような軽やかな気持になった。身体の中に河を持っている自分がいて、大陸を流れる大河に佇むもうひとりの自分がいるようだった。

そのうち自分の中の河が、相手の身体の中にゆっくりと流れ込んでいくのを見た。煙

でもなく霧でもない。研ぎ澄まされた意識が透明な霊気となって河を包み込み、時には乱れるように舞い、最後にぽっかりと開いた宇宙の空洞に向かう流星群のように、すさまじい光芒を発して相手の身体の中に飛びすさっていった。

どれほどのときが経っただろうか。

荒い息が部屋の隅から出ていた。半行灯の灯りの届かないところに潜り込んだ男は、銀色に底光りする眼を暗がりに置いて、ぼろ屑のように身を縮めていた。

精一郎は小刀の切っ先を男の喉に向けて、注意深く様子を窺った。なぜ男が腰を抜かしたようになった上に、ぐったりと蹲っているのか分からなかった。男が持病の発作を起こしたのではないかと思っただけである。

「ぐ、ぐ、……」

男の顔は噴きだした汗で油まみれのようにぎらついて光っていた。目は開いているが、焦点ははしゃぎ回る虫を追いかけているかのように落ち着きがなかった。言葉は不明瞭で、近づくにつれ、その姿が人間のものではなく、熱湯を浴びた巨大な蠍の断末魔のあがきであるように見えた。

精一郎は男の手から真剣を取って自分の後ろに回した。それから手にしている小刀の切っ先を男の喉元に向けた。

「おやめなさい」

凛と響く冷たい声が精一郎の背中を打った。しかし、精一郎は振り返らずに、後ろに引いた小刀を握ったまま、ただ動かずにいた。動けなかった。声と共に走った閃光で身体を貫かれたように感じていたからである。

「相手はもう廃人です。止めをさす必要はありますまい」

傍らに膝をついた星布尼は、そういって精一郎の手から脇差を取った。春の花を集めたようないい香りが、暗い中で萌え立つように匂った。星布尼さまの匂いだと思った。なぜだか、助かった、と心の底から思った。

「子供を連れた女は秋山さまが保護されています。男谷さまに宿に連れていっていただくよう仰せです。身体を洗うためです。ほかの巡礼の方がたも無事ですよ。さ、先においきなさい」

星布尼に促されるまま、精一郎は立ちあがった。そのあとで耳にした、星布尼の湯気のようにほのぼのと立ちのぼってきた声に、精一郎は初めて自分が闘いの場にいたことを知った。

「あなたも着物を着換えなさい。それからこの地から一刻も早くお発ちなさい。どのような難儀が降りかかるか分かりませんからね。それにしてもこのお侍は、化け物でもみたのでしょうかしら。おこりのような震えが私にも伝わってきますよ。一体あなたは何をされたんですか。きれいな顔をして。あ、そうそう、紅を落すことを忘れてはいけま

せんよ」

夜明け前に名主の別邸を出た。上空では相当強い風が吹いているらしく、暗い空を鞭打つ音が雷神の叫喚のように響き渡った。精一郎は、今は息子とともに全てを洗い流した身体を、あたたかい蒲団にくるんで眠っているはずの民を思って、しきりに頬を拭った。なぜ、涙が出てくるのか分からなかった。嬉しいはずなのに、やっと安心できたはずなのに、涙は止まらず、それは時折気まぐれのように、天から吹き下ろしてくる烈風に翻弄され、凍りついた。

谷津川沿いの堤を半刻ほど下ると、雑木林から広い桑畑の続く一帯が、墨の中に落された青い塗料のように浮かび上ってきた。歩きながら見上げた空には、巨大な眼のような黒雲が渦を巻き、白い波を怒濤の如く立たせ、神々の戦さの先陣を切るかのように奮い立って流れていった。

荒川沿いの野原に出ると、畑の上を動く人影が薄明かりの中に滲んできた。背中の曲った老人の振り上げる鍬は、風にあおられて、しばしば戸惑ったように空中に置いてきぼりにされた。精一郎は小脇に抱えた菅笠をさらに身に引き寄せた。

前日、辰蔵の後について歩いた対岸の道の背後に続く樹林群は、逃げまどうように移動していく重層の雲の下で、深海の海藻のようにあちこちへとあてもなくなびいていた。

その強風が、天に開いた穴に吸い込まれたように止んだのは、ふたつの山村を過ぎて、対岸に鯨が寝そべったような山が現われるのを見たときだった。陽の昇る時刻になっていたが、空は厚い雲で覆われていて、まるで氷の浮いた海で気持よく潮を吹いているような、すがすがしくておおらかな山の様子に気持がなごんだ。自然の造りだした大きな光景は、これまでの旅に起った様々な出来事に対して、恨みや後悔ではなく、感謝し畏敬の念を持つよう精一郎に呼びかけているようだった。

しばらく立ち止って、対岸の崖の上に展開する山と空の雄大な巡り合いを陶然と眺めた。そのうち、果てしない上空に生まれた突風が、何層にも覆っていた雲に乱入し、濁流となり、北東からの重い風と合流して黒雲をどんどん西に押しやりだした。すると、黒いばかりだった雲の中央に、陽を含んだ明るい雲が一筋東南から伸び上って走ってきた。その雲の一点が引き裂かれたように破れた。雲の裏で力を溜めていた光が、鮮血のようにほとばしり出て、山を射した。その瞬間、樹木が悲鳴を上げて、火花を放つのを精一郎は見た。

――あの浪人者と同じだ。

そう思った。二刻前の死闘が脳裏に蘇った。男は不意に身体を伸び上がらせて空中でもんどり打つと、天井から突き落されたように膝をついたのだ。精一郎が手にした脇差を突き立てたのではなかった。殺してはいないと思い起こしたことが、民と息子を宿に

送る途中の救いになった。理由はどうであれ、血塗れた手で、理不尽につらい目に遭わされた親子を平穏な場所に導くことはできなかった。

ではあの浪人に対したとき、自分の体内から、人体を焼き尽してしまうほど強烈な熱が発せられたのかというと、そうは思えなかった。ただ、相手の身体に小さく開いた穴に、最初は針を刺したように、やがては空洞のように広がった中心点に、泡のような、或いは光の粒のようなものが集って、どんどん侵入していくのを感じただけだった。それが何だったのか、まだ精一郎には判然としなかった。

再び歩き出すと、山が朝陽に撃たれて悲鳴を上げたと感じたとき、なぜあの浪人と同じだと思ったのか、それも分からなくなっていた。考えていると、風の音が耳をつんざいてきた。首を竦めずに、吹きつけてきた方角に視線をやって眼を無理矢理に開いた。それから風に向って息をふーふーと吹き付けた。なぜそんな子供じみたことをしているのか、なぜ愚図愚図と堂々巡りの考えをしているのか、鯨のような山に目をとめたときから精一郎には分っていた。昨日、母の声を聞いた小間物屋が、その山の麓にあったことに気づいていたからだ。でも、対岸のそのあたりには、目もくれずにさっさと桑畑に続く道に潜り込んでしまえと叱責する声と、いくじがないなあ、とそそのかす声の狭間で心の調和がとれずにいたのだった。

目を対岸の絶壁の方に転じたのは、トンビの鳥影が目の隅をかすめたからだった。昨日見たトンビかもしれないと思って見上げると、トンビは両翼を風に乗せて、悠然と深い断崖を持つ川を越えていった。そのトンビが鯨の山に向かいかけて急に平衡感覚を失ったようにふらふらと翼を揺らして、いったんは谷に落下する危うさを見せた。それが心配する精一郎をあざ笑うかのように一転して急上昇すると、置いてきぼりを喰った視界の隅に、ひとりの女を映しだした。

精一郎は目をしばたたいて、山の陰に佇む米粒のような女の姿を凝視した。そこだけが色彩が鮮やかに閃いた。そのとき風の音に遠雷が加わった。身体が雷にうたれたように痺れた。精一郎は倒れまいと必死で両足を踏ん張った。菅笠が脇から離れ、薄く青みを滲ませ始めた空に舞い上った。

「母上ーッ！」

精一郎は力の限り叫んだ。声は山に木霊する前に、風に呑まれて消えていった。

――母上が、あそこで待っていてくださった。いつ通るかしれない私を待って、ずっと佇んでおられたのだ。……母上……。

小さな家の前で風をようやく避けながら、地面にこびりつくように立っている女の姿はつましく、わびしかった。精一郎の目にうっすらと涙が浮くと、それはたちまち湧き水となり、嵐となった。

その吹き荒れる風と洪水の中で、母が腰を折り、深々と頭を下げる姿を、十五歳の息

子は、感謝の祈りを込めて見つめ直した。歯が音を立てて鳴った。少年は歯を食いしばり、烈風に逆らって胸をそらし、夢で見たきりだった母親に生まれて初めて礼を返した。

粥新田峠を越えたのは三日後の夕方だった。さらに足を進めて、新井という村に着く頃には、あたりは漆黒の闇となった。村に宿はなく、精一郎は灯りの灯っていた百姓家に訪いをいれて、一晩土間の隅を借りたいと申し出た。怪しまずに寝間に通してくれた老夫婦に精一郎は銀の粒を差し出した。はじめは畏れ入って拒んだ老人だったが、受け取った後は雑炊に野菜を加えて馳走してくれた。空き腹だったのでとびきりうまかった。

板の間に敷かれた藁に横になり、二刻ほど寝た。草鞋をつけていると、起きてきた老人が飯を用意させるから待てという。精一郎は笑って断ってから、老人の手に一分金を握らせた。

空に星は出ていたが、低いところには霧が湧き出ていた。歩きにくいと思ったが、今更引き返せないので礼をいって出てきた。少し行って振り返ると、霧の中に立った老夫婦が、両手を合わせて精一郎の背中に向って拝んでいた。精一郎は笠で顔を隠し、急ぎ足で村を出た。

安戸宿には心当たりの宿屋があった。そこなら足もすすがせてくれるし、飯もつくってくれるはずだった。安戸まで四里の道だった。安戸から川越に入り、宮沢助左殿にだけそっと挨拶をしてから、川越には泊まらずに江戸に向かおうと精一郎は思っていた。そこから先は宿を探すのに不自由することはない。

安戸に入る頃には陽が薄い雲を通して射してきた。朝靄にも陽があたり、やわらかい春の匂いが里の底から立ちこめていた。人の姿がところどころの畑にあって、見覚えのある宿からは、雨戸を開ける音が響いてきた。その威勢のいい音を聞いただけで、精一郎の腹は鳴った。

宿の戸口を開けて出てきたのは、宿の娘だった。手に洗い物をいれた籠を抱いていた。娘は靄を蹴散らすように近づいてくる黒い影に、野兎のような怯えた目を上げた。精一郎は驚かせまいと笠をとって挨拶をしようとした。しかし娘のとった行動は意外なものだった。

「きゃっ」

娘は小さくそう叫ぶと、籠を抱いたまま宿に戻ってしまった。なにやら奥に向って大声を出している。精一郎は茫然と立ちつくした。これは朝飯はだめかもしれないと思っていた。

その情ない思いでいる精一郎の前に、細面の整った少女の顔が現われてきた。深い奥行きを感じさせる黒眼をもった少女は、肩をすぼめて恐る恐る精一郎を見上げた。精一郎の胸が複雑な痛みで弾けた。

「菊、菊ではないか。江戸に参ったのではないのか」
「は、はい。ここにおりました」
菊はまっすぐに視線を向けてそういってから、あわてたように深々と頭を下げた。
「どういうことだ。紹介状は書いておいたはずだが」
「いただきました。ですが、あの、ここで、男谷さまをお待ちしようと……」
そこまでいうと菊は急に恥しくなったのか、顔を素早く俯けた。その頬が驚くほど紅潮した。あの、といって顔を覗かせたのは宿の娘だった。こちらはいつでも紅く脹らんだ頬をしていた。
「菊ちゃんに待っているようにいったのはおらだす。身体を治しながらここでしばらく待っていれば、またお侍さまが寄ってくださるだろうっていっただ。銭もたくさんいただいているし、気兼ねなく待っていろっていっただ。そしたら……」
そこで娘は言葉を切って、宿の裏手から出てきた男に目を向けた。山に入って山菜でも採るつもりでいるのか、男は竹籠を背にしようとしていた。その斜め上に振った顔の中の口が激しく歪んだ。
「若様！」
千蔵は竹籠を放り出して精一郎の前に飛び出すと、自らの身体を叩きつけるようにして地面につっ伏した。その背中が無惨に震えている。

「おまえは江戸に戻らずに、ここまで私をつけてきていたのか」
精一郎は落ちついた声でいった。父のいいつけで江戸から付いてきた千蔵は、精一郎に叱られて白子村に入る前に帰ったはずだった。戻った振りをして実はずっとつけてきたのかと精一郎は訊いたのだった。千蔵はぺったりと膝をついたまま頭を振った。
「違います。お屋敷に戻りましたら、若様に平山先生から木刀が届けられておりました。それで急いで追いかけてきました。そんで、ここまできましたら宿の者から……」
「平山子龍先生が私に木刀を授けてくださったというのか！」
精一郎は膝を折って千蔵の肩を摑んだ。
「はい。平山先生がご自身で彫られたものだと伺っています」
「ここに持ってきているのか」
「はい。部屋に置いてございます」
「早く持ってきてくれ」
千蔵は蛙のように跳び上って暗い土間に飛び込んでいった。宿の娘はけげんな顔をしていたが、菊は興奮している精一郎の心情をとっさに読み取ったのか、その目に精一郎の嬉しさを映し取っている。丸二日間寝ずに看病してくれたこの娘には、何でも見通しなのかもしれないと思って、精一郎は頬を指で引っ掻いた。
「草鞋のままでは部屋に上がれないですから。あ、平山子龍先生というのは私のかつて

の師で大変な兵学者でもあるのです。私の最も尊敬する方で、まさか、先生自ら私のために、木刀を彫ってくださるとは、いや、どうも、これは、畏れ入ったことだ」

話している内に、精一郎はしどろもどろになった。宿の娘はまるで恋人の事を語るように照れている若い侍を、変な人だという目つきで見つめている。

菊は含み笑いをしてから、たまりかねたというように、桜の花弁のような唇を横に向けて吹き出した。あわてて手で口を覆う菊を見て、精一郎は自分の狼狽ぶりに気づいた。

「遅いな。千蔵のやつ、何をしているのかな」

深呼吸をして空を見上げた。朝靄を吹き払った陽光は、空を真っ青に染め上げ始めていた。そのさらに奥に続く深遠な道を見つめるかのように、若い侍は眩しげに目を細めて、千蔵のやつ、遅いな、ともう一度、今度は途方にくれたように呟いた。

主な参考文献

平山行蔵 江戸の剣豪　青柳武明著　学習社

夢酔独言　勝小吉著　勝部真長編　平凡社

直心影流極意伝開 鹿島神伝　石垣安造著　新樹社

川越・城と町まちの歴史　小泉功／斎藤貞夫著　聚海書林

川越歴史小話　岡村一郎著　川越地方史研究会

日本の剣豪 四　旺文社

江戸の少年　氏家幹人著　平凡社

江戸物売図聚　三谷一馬著　立風書房

夢想神伝流居合道　山鳶重吉著　愛隆堂

新編武術叢書　武道書刊行会編　新人物往来社

創造する知・武道　坪井香譲著　ＢＡＢジャパン出版局

中里介山全集 第18巻　筑摩書房

街道をゆく36　本所深川散歩・神田界隈　司馬遼太郎著　朝日新聞社

冒頭の辞世句は子母澤　寛『ふところ手帖』（中公文庫）より引用

解説

細谷正充

幕末の幕臣に、男谷下総守信友という人物がいる。幼名、新太郎。通称、精一郎。御小十人組を振り出しに、天保二年に書院番、嘉永三年に御徒頭。そして安政二年には、彼の提言が幕府に受け入れられ、講武所が設けられる。以後、講武所の運営に尽力し、文久二年には講武所奉行となった。動乱の時代に幕臣としての勤めを立派に果たした、有為の人だ。

だが彼の名前は、幕臣としての功績以上に、剣客としてよく知られている。なにしろ、直心影流第十三代当主なのだ。しかも彼は他流試合を拒むことなく、自ら道場に立った。そして独自の試合運びを実践していたのだ。三本勝負の最初の一本は、相手に取らせるというものである。逆にいえば、残り二本は必ず自分が取る。つまり負けなしであり、そのような試合運びが誰に対してもできるほど、隔絶した技量の持ち主だったのだ。しかも、これほどの腕前がありながら、性格は温和で円満。まさに〝剣聖〟と呼ばれるに相応しい男であった。

ところが、これほどの人物でありながら、男谷精一郎を主人公にした剣豪小説はほとんどない。あっても歴史読物風の短篇だ。純然たる小説に登場するときは、いつも脇役なのだ。なぜであろうか。

本書の「序」で、作者が言を尽くしているので、詳しくは繰り返さないが、理由はふたつ。資料の少なさと、優等生すぎる彼の人生に、作家の食指が動かなかったからである。男谷精一郎に興味をもった作家がいなかったわけではないが、今まで小説の主人公に選ばれなかったのは、やはりふたつのポイントに集約されるであろう。

その男谷精一郎を、高橋三千綱は、あえて剣豪小説の主人公に選んだ。これには驚かされたが、内容を読んでみると、なるほどこのような手法があったかと、感嘆しきり。しかも作者でなければ書けない、独自の作品となっている。その意味を説明するためにも、まずは作者の経歴に触れておきたい。

高橋三千綱は、一九四八年一月、大阪に生まれる。父親は作家の高野三郎。中学生になって剣道を始めたが、アメリカ留学が長引き、残念ながら剣の道は八年で断念した。サンフランシスコ州立大学、早稲田大学中退。一九七一年十一月に『シスコで語ろう』を自費出版しているが、本格的な作家活動は、七四年に「退屈しのぎ」で第十七回群像新人文学賞を受賞してからである。以後、次々と作品を発表し七八年には、十五歳の剣道少年・小林勇の青春を描いた「九月の空」で、第七十九回芥川賞を受賞した。現在流

布している著書『九月の空』は、この「九月の空」に、やはり勇を主人公にした「五月の傾斜」「二月の行方」を加えたものである。なお小林勇は、『少年期 「九月の空」その後』でも主人公を務めている。青春小説、恋愛小説からゴルフ小説まで、作風は幅広い。九三年六月に講談社から『平成のさぶらい』（後に『お江戸は爽快』と改題）を刊行してからは、これをシリーズ化したり、自由奔放な謎の剣客・中村一心斎を主人公にした『剣聖一心斎』『暗闇一心斎』を上梓して、時代小説にも積極的に取り組んでいる。本書も、その一冊といえよう。

『空の剣 男谷精一郎の孤独』は「小説すばる」一九九六年六月号から九九年一月号にかけて、断続的に連載された長篇である。二〇〇四年八月に集英社から、ハードカバーが刊行されたが、この際、大幅な加筆修正がなされた。作品の重大なポイントとして注目すべきは、主人公の男谷精一郎の年齢を、十五歳にしたことが挙げられよう。〝剣客〟と呼ばれる遥か以前の、少年期に焦点を合わせているのだ。これならば男谷精一郎の円満な人格も、剣豪としてのエピソードも関係ない。新たな視点で、この人物の肖像を創ることができるのである。

男谷精一郎、十五歳。実戦並みの稽古をすることで知られる、平山子龍（行蔵）の「兵原草廬」に住み込み、少年は厳しくも張りのある修行生活を送っていた。しかし精一郎の日常は、突然崩れる。生涯の師と仰ぐ平山子龍から破門を申しわたされたのだ。

率直な政策提言で幕府に睨まれている子龍が、愛すべき弟子を気づかってのことだった。だが、その裏に父の思惑があるのではないかと疑う精一郎は、市井の事件に巻き込まれるような、荒れた生活をおくる。

やがて、二歳に満たないうちに家を出た生母が、秩父にいることを知った彼は、母を慕い旅に出る。盗賊騒ぎ、道場試合の遺恨、師の平山子龍とはまったく違ったタイプの剣客・秋山要助との出会い、山中での狼との死闘……。さまざまな事件と、人間との出会いが、精一郎を成長させていくのだった。

本書には「男谷精一郎の孤独」というサブタイトルが付されている。この、青春の〝孤独〟が、物語のテーマといっていい。突然「兵原草廬」という居場所を失った少年は、自分の裡に無頼の蠢きを感じながら、孤独な魂を抱えて母親を求める。その結果は、彼が夢想したようなものではなかった。しかし、そこに至る彷徨が、孤独を自立へと変えていく。見た目では容易に判断できない、人間の在り方。はからずも人を殺してしまった、己の腕に対する懊悩。世間の広さと、怖さ。さまざまな体験が、精一郎の実となり糧となる。作者は、後に〝剣聖〟となる男谷精一郎の孤独を通じて、まだ何者でもない少年の成長を描破した。そこに、作品の読みどころが屹立しているのだ。

さらに本書に登場する男谷精一郎の年齢が、十五歳であることにも留意したい。そう、芥川賞受賞作『九月の空』の主人公・小林勇も、十五歳の少年ではないか。自分勝手な

父親や、そんな父親を許す家族に苛立ち、剣道をしているときの緊張感を、何よりも大切なものだと思っている勇。しかし一方で、衝動に突き動かされ、剣道の合宿を放棄して、旅に出たりもする。剣の道を進みながら、さまざまなことに悩み惑い、彷徨する勇の姿は、そのまま精一郎の姿と重なり合う。

もちろんこれは、作者が意識的に行ったことである。同じ年齢の主人公。『空の剣』と『九月の空』という、どちらにも〝空〟の入ったタイトル。さらに付け加えれば、男谷精一郎が山狼に襲われるように、旅に出た小林勇は熊に襲われている。このようにエピソードにも、共通点を見出すことができるのだ。かつての自己の作品を投影させながら、十五歳の少年の青春を、新たに活写する。男谷精一郎の見た〝空〟は、小林勇の見た〝空〟に、つながっているのだ。まさに高橋三千綱という作家でなければ書けなかった、作品になっているのである。

さらに剣豪小説としての読みどころも見逃せない。木内左内という狂剣の遣い手との対決を手始めに、剣戟シーンは盛りだくさんだ。終盤では、神道無念流の秋山要助と一緒に、浪人退治に乗り出すというのだから嬉しくなる。しかも描かれている剣戟場面は、どれも非常にリアルに感じられるのだ。これはやはり作者が剣道をやっていたからであろう。

本書の「序」に、作者が剣道を始めた切っかけが書かれている。そして『九月の空』

の主人公が剣道を始める切っかけが、この作者自身の体験を踏襲したものとなっているのだ。当然であるが『九月の空』には、剣道に関する描写が多い。先の例を見ても分かるように、作者本人の剣道体験が、ふんだんに盛り込まれていると思っていい。ならば『九月の空』収録の「五月の傾斜」にある、

「道場でも、また高校の春の合宿でも、勇は毎日、メン一本に絞って稽古を続けてきた。そのうち、奇妙な経験を持つようになった。相手と対峙していて、ふと、相手の呼吸が見える瞬間があるのだ。いつでもそうだというのではなく、張り詰めた神経の中におだやかな気合いが広がり始め、相手の視線の中に自分の姿を見るような思いを持っているとき、何の前ぶれもなく相手の吐く息をつかまえることがある。その息が、ほんの少量吐き出された瞬間をとらえて、勇の足は前に踏み出している」

といった文章も、自己の剣道の体験から会得したものであろう。別に洒落ではないが、その呼吸が、本書の剣戟シーンにも生かされている。たとえば精一郎が初めて真剣と対峙したときの描写はどうだ。

「落ちついていられる理由は分からなかったが、木内の目に噴き出した憎悪の色を見

つめていると、相手の呼吸が手に取るように感じられるのだった。その呼吸の調子を盗んでしまえば、相手は打ち込むきっかけを失ってしまうことを精一郎は知っていた」

剣道と剣術は違うとよくいわれるが、そもそも剣道は剣術から発展した武道だ。通底する部分があることは、自明の理である。その剣道を作者は八年間、続けてきた。だから相手の呼吸という、何気ない描写の中にすら、剣のリアルが息づいている。それが伝わってくるからこそ、剣戟シーンに心が震えるのだ。

少年は、いつか大人になる。私達は〝剣聖〟と呼ばれた、男谷精一郎の人生を知っている。だが、だからこそ本書で描かれた、十五歳の彼がいとおしい。作者は青春の悩みと輝きを、この歴史上の剣豪に、しっかりと刻みつけたのである。

この作品は二〇〇四年八月、集英社より刊行されました。

集英社文庫

空の剣 男谷精一郎の孤独

2007年11月25日　第１刷　　定価はカバーに表示してあります。

著　者　高橋三千綱
発行者　加藤　潤
発行所　株式会社 集英社
東京都千代田区一ツ橋2-5-10　〒101-8050
電話　03-3230-6095（編集）
03-3230-6393（販売）
03-3230-6080（読者係）
印　刷　凸版印刷株式会社
製　本　凸版印刷株式会社

フォーマットデザイン　アリヤマデザインストア　　マークデザイン　居山浩二

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社読者係宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。

© M. Takahashi 2007　Printed in Japan
ISBN978-4-08-746235-7 C0193